

沖縄市の伝承をたずねて

広域伝説編Ⅰ



沖縄市文化財調査報告書第41集

沖縄市の伝承をたずねて 広域伝説編Ⅰ

ごあいさつ

このたび、沖縄市文化財調査報告書第四十一集『沖縄市の伝承をたずねて 広域伝説編Ⅰ』を発刊するにあたり、一言ごあいさつ申し上げます。

沖縄市教育委員会では、地域の民話伝承の保存・継承を図るため、昭和五十五年度より沖縄国際大学口承文芸研究会の協力を仰ぎ、民話伝承調査を実施して参りました。この調査によつて聞き取りを得た民話は全体で四千を数え、その中から平成十六年度に報告書『池原の伝承をたずねて』の発刊にはじまり、平成二十二年度『沖縄市の伝承をたずねて 笑い話編』まで五冊、あわせて千九百話弱を集録した報告書を刊行して参りました。本書は、広域伝説編として、沖縄市外の地域に関して伝えられたさまざまな伝承をまとめています。沖縄各地の伝説として語られた民話は九百話を超える数量となっており、紙幅の都合によりますは人物についての伝承、そのうちでも知恵や才、機知で名を遺した人びとのことを語る伝説に絞つて、「広域伝説編Ⅰ」と題して刊行のはこびとなりました。

本書が、家庭や学校のみならず、広く生涯学習の場で活用されることを期待します。また、末尾となりましたが、調査にご協力いただきました地域の皆様ならびに関係者の皆様に、深く感謝申し上げます。

二〇一六（平成二十八）年三月

沖縄市教育委員会

教育長 狩 侯 智

凡例

一 沖縄市の民話調査と構成

① 沖縄市の民話調査は昭和五十五年「沖縄国際大学口承文芸学術調査団」（遠藤庄治団長）によつて、沖縄市字池原と登川で初めて行なわれた。その後、昭和六十年から昭和六十二年度は編集事務局が調査を行ない、その調査資料を基礎に、平成二年度に沖縄国際大学口承文芸研究会及び沖縄民話の会で「沖縄市口承文芸学術調査団」を結成し、また一度も調査を行なつてない地区を優先して予備調査を行ない、沖縄市全字の組織的調査（第一次本調査・第二次本調査・補足調査）をし、さうに平成二年一度に数回の個別調査まで及んだ。

② 本報告書には、昭和五十五年から平成三年にかけて行われた調査で聴取した話と、わらべ歌調査・文化財調査等で聴取された話のなかから、「広城伝説」の「人物伝」の一部を収録した。

二 本書掲載話の選定

① 民話調査で聴取した話について、沖縄国際大学文学部国文学科の学生七名が沖縄市の民話を研究し、翻字して卒業論文として提出した。
平成二年度 旧コザ地区 上門博之・山城綾子・宜保勝
平成三年度 香村夏子・照屋京子・石川小百合
大川清子

この翻字話の中から、広城伝説の人物伝に分類される話型のものを選び、さらに紙面の制限から「僧」「博識・学者」「知恵者」「盗賊」「名工・名人」に絞つて本報告書の掲載話として選定した。

② 調査によって聞き取りを得た話のうち、①で翻字されてない話で、広城伝説の人物伝「僧」「博識・学者」「知恵者」「盗賊」「名工・名人」に分類される話型のものも、編集事務局で追加翻字して本報告書に掲載した。

③ 本報告書では、後世に學術的資料として参照される可能性を鑑み、できるだけ多くの話、多くの話者の語りをできるかぎり語られたかたちのまま文字化し、公刊することを目指して掲載話を選定した。よつて、掲載話のなかには、語りとしては断片的なもの、代表的な話型とはほ同じた。

- ④ 前巻にある「沖縄市の伝承をたずねて 笑い話編」（二〇一—（平成二十三）年発刊）において、編集の都合により掲載から外していた「モイ親方」「渡嘉敷ベーカー」「勝連バーマ」は、本来は笑い話のうち頗る話の話型に属するものであるが、本報告書において人物伝のうちの「知恵者」として掲載している。
- ⑤ 方言での語りについては、漢字表記が可能な語句については意味がわかりやすいようできるだけ漢字をあて、話者の発音通りにひらがなでルビをつけた。
- ⑥ 日本語共通語での語りの場合、難解な漢字のみひらがなでルビをつけた。ただし、方言の語りに日本語や日本語的な發音が入り混じる場合は、日本語の影響をうけた發音も判別できるよう、方言の發音だけではなく日本語的な發音にもひらがなルビをつけたものがある。
- ⑦ 漢字の表記をあてることが困難な固有名詞、一部の擬声語、擬態語などは、カタカナで表記した。

(8) 語りの中の会話部分や文脈上、会話と判断される部分は改行して「」でくくり、地の文を続いている。

(9) 流歌、民謡、節などの韻文は二字下げで記し、定型の韻律がある場合はそれに沿つて適宜、空白や改行を入れている。

(10) 人名、地名、民俗語彙については、できるだけ注記をつけるようにした。

右記の条件に従つて文章の整備をしたが、語りの雰囲気によつては、適宜条件を外れて表記した部分もある。

四 本文について

① 話型名は、調査時に付された題名を基本とし、話型の内容に応じて一部を変更した。主人公やテーマが同じで、登場するモチーフが異なる場合は題名の下に（）でくくり、モチーフを示した。

② 話の始めに題名・話者名・生年を記し、その下に所属していた行政区を示した。

③ 対訳・共通語翻字において、方言をそのまま用いたほうが良いと判断した場合は方言を用い（）内に訳を入れるか、注記にした。

④ 差別的である、また偏見を助長する不適切な表現であるとの懸念により、現在では一般的に使用を控えられている語について、そのような語を話者が発話している場合があるが、話者発話の歴史的資料としての性質を重視し、発話のとおり翻字を行なつた。本報告書にこれらの語を記載するにあたり、特定の個人、団体、またその属性を侮蔑したり、差別や偏見を肯定するものではない。

五 注記について

① 民俗語彙についてはできるだけ注記した。なお、文献などを参考にした場合には（）で文献名などを記した。

② 雜解語句、意味のとりにくい部分については注記で説明するようにした。

(3) 前述の「四 本文について」④に記載した差別的な語について、注においてその語について解説を付し、また差別語である旨の説明を行なつている場合がある。この処置については、本文と同様、本報告書の資料としての性質を重視したものであり、特定の個人、団体、またその属性を侮蔑したり、差別や偏見を肯定するものではない。

六 本文掲載話の順序

① 掲載話の順序は、話型の小分類にしたがつて「僧」、「博識・学者」、「知恵者」、「盜賊」、「名工・名人」の順に並べた。

② ①の小分類より下位では、おもに主人公となつてゐるキャラクターによってグループごとに分類し、主人公や舞台となつてゐる時代がより古いほうが先行するようにした。

③ 同一の主人公、または同一のテーマの話型群のうち、一つの語りに複数のモチーフを含む話は、話型群の冒頭にくらべるように配置した。

④ 同一の主人公、同一のテーマの話型群のなかでは、できるかぎり、方言で語られているもの、語りの良いものが先行するように並べた。

⑤ 同一の話型群にあつて内容も語りの質も同等な語りについては、話者の所属する行政地区によつて、おおむね北よりの集落の話者の語りが先に来るよう配位置を決定した。

七 イラスト

① 表紙のイラストは八田夕香氏に描いていた。

② 木文中のイラストは長浜益美氏、八田夕香氏に描いていた。

調査にあたり、各自治会長、各老人会長の方々に調査への便宜を図つていただきました。記して感謝の意を表します。

目 次

ごあいさつ

凡例
目次
.....

一 僧

| | | |
|---------------------|-------|----|
| [1] 北谷長老 | | 9 |
| (1) 北谷長老の事績（モチーフ複合） | | 9 |
| (2) 唐の寺の火消し | | 15 |
| (3) 十五夜のまんじゅう | | 15 |
| (4) 肉を食べる知恵 | | 16 |
| (5) 北谷長老と黒金座主 | | 16 |
| (6) その他、北谷長老にまつわる話 | | 18 |
| [2] 僧 補遺 | | 18 |
| | | 23 |
| | | 21 |
| | | 20 |

三 知恵者

[1] モーイ親方

(1) モーイ親方の事績（モチーフ複合）
(2) スブシの玉
(3) 優れもの
(4) 床下勉強
(5) 借りた本
(6) 書き損じ
(7) 下駄と草履
(8) 箱と門
(9) 母の御願好き
(10) 一吹き煙草
(11) 根はどうか
(12) 許嫁と鶏
(13) 掛けた縁
(14) 立ち小便
(15) 難題
(16) 一日殿様
.....

134 107 98 88 87 84 80 79 76 71 69 68 65 63 59 24 24

二 博識・学者

| | | |
|---------------|-------|-------|
| [1] 木田大時 | | |
| [2] その他の博識・学者 | | |
| [3] 博識・学者 補遺 | | |

| | |
|------------------------|-----|
| (17) 薩摩武士との立ち合い | 149 |
| (18) 鶴の噂話 | 159 |
| (19) とんち比べ | 159 |
| (20) その他、モトイ親方にまつわる話 | 159 |
| [2] 渡嘉敷ベーカー | 164 |
| (1) 渡嘉敷ベーカーの事績（モチーフ複合） | 164 |
| (2) 辻通い | 170 |
| (3) 低頭門 | 172 |
| (4) 基打ち | 177 |
| (5) 鳩の汁 | 182 |
| (6) 月影の吸物 | 182 |
| (7) 味噌と花鉢 | 184 |
| (8) 尻吸い | 185 |
| (9) 褒美の片荷 | 186 |
| (10) 布団着物 | 189 |
| (11) 木の名前 | 191 |
| (12) 木釜 | 192 |
| (13) 後生の年 | 193 |
| (14) 根はどこか | 194 |
| (15) 馬勝負 | 195 |

194 193 192 191 191 189 186 185 184 182 182 177 170 172 164 164 160 159 159 149

| | |
|------------------------|-----|
| (16) 下馬せず | 195 |
| (17) 二頭の馬に鞍一つ | 196 |
| (18) とんち比べ | 196 |
| (19) 書と歌の名人 | 196 |
| (20) その他、渡嘉敷ベーカーにまつわる話 | 196 |
| [3] 勝連バーマー | 203 |
| (1) 勝連バーマーの事績（モチーフ複合） | 203 |
| (2) 十日月 | 211 |
| (3) かね持ち | 214 |
| (4) 山の魚 | 214 |
| (5) 松の植え時 | 214 |
| (6) 長雨と薪 | 214 |
| (7) とんち比べ | 214 |
| (8) かたつむり | 214 |
| (9) 勝連バーマーの死 | 214 |
| (10) その他、勝連バーマーにまつわる話 | 214 |

| | |
|----------------------|-----|
| [4] 盜賊 | 236 |
| (1) 運玉義留の事績（モチーフ複合） | 236 |
| (1) 運玉義留 | 239 |
| (1) その他、勝連バーマーにまつわる話 | 239 |
| (1) その他、知恵者 | 238 |
| (1) その他、勝連バーマーにまつわる話 | 238 |
| (1) その他、勝連バーマーにまつわる話 | 235 |
| (1) その他、勝連バーマーにまつわる話 | 235 |
| (1) その他、勝連バーマーにまつわる話 | 232 |
| (1) その他、勝連バーマーにまつわる話 | 232 |
| (1) その他、勝連バーマーにまつわる話 | 229 |
| (1) その他、勝連バーマーにまつわる話 | 229 |
| (1) その他、勝連バーマーにまつわる話 | 227 |
| (1) その他、勝連バーマーにまつわる話 | 227 |
| (1) その他、勝連バーマーにまつわる話 | 225 |
| (1) その他、勝連バーマーにまつわる話 | 225 |
| (1) その他、勝連バーマーにまつわる話 | 214 |
| (1) その他、勝連バーマーにまつわる話 | 214 |
| (1) その他、勝連バーマーにまつわる話 | 211 |
| (1) その他、勝連バーマーにまつわる話 | 211 |
| (1) その他、勝連バーマーにまつわる話 | 203 |
| (1) その他、勝連バーマーにまつわる話 | 198 |
| (1) その他、勝連バーマーにまつわる話 | 196 |
| (1) その他、勝連バーマーにまつわる話 | 195 |

242 242 239 238 236 235 232 230 229 227 225 214 211 211 203 200 198 196 195

| | |
|------------------|-----|
| [2] 油喰坊主 | 253 |
| [3] 北谷シベー | 254 |
| [4] 金城三郎 | 254 |
| [5] 多幸山のフェーレー | 256 |
| [6] その他、盜賊にまつわる話 | 256 |

五 名工・名人

| | |
|--------------------|-----|
| [1] 田場大工 | 261 |
| (1) 濡れない櫻 | 261 |
| (2) その他、田場大工にまつわる話 | 264 |
| [2] その他の名工・名人 | 267 |

〔資料〕

| | |
|------------|-----|
| 掲載話一覧 | 273 |
| 調査日誌と調査協力者 | 280 |
| 編集協力者 | 288 |
| 参考文献 | 288 |

一 僧

【一】 北谷長老

(1) 北谷長老の事績 (モチーフ複合)

① 蟻踏まず・不思議な力・沖縄攻め・赤犬子との出会い

島袋次郎 (明治三十四年生) 知花

〈方言原話〉

昔えー神の国なでいや。あんし、くぬ北谷長老んでい
しめんしえーたんでいしえーやー、話ー聞ちー。

ありやたんでい。なー一週間にる首里ゲシクんか
いめんしえーたんでい。蝶こーちやていん、けー

踏みらんよーいめんしえーたんでい。うれー話や
くとう。ちやーしん一週間のーかからんようによめん
しえーたるはじやしがてー、一日うていん。うぬあた
いぬ人やみしえーたんでい、北谷長老んでい。北谷

玉代勢んでいがらー、うぬ人が村や。あまなかい墓ん、
うまぬはたなかいあんでいる話やさ。

あんそーしが、うぬ人がよー、ありやたんでい。

御主加那志がや、くぬ後門ぬチンマーサーなかい鳥
作でい、立派んかんし鳥作でいいしやーにや、あんし
かんしいし、長老呼ばらーに。

「えー、長老。あまなかなー、来えーならん鳥ぬいー
ちよーしが、ちやーさらーしむさがーんでい言みそー
立つちやーにや、あんしままかい走いみそーちやく

ちゃくとうてー、五寸釘。あぬチンマーサーんで
る石んけーかん五寸釘し、ていー入りやーに打つち
しえーみしがよー。んじ、うぬ北谷長老がうまんかい
向かでい。あれー唐んじうりしちめんそーちやる。あ
んさくどう、うりやたんでい。うぬ五寸釘、うり、あ
ぬ、落ちどーるぐとーん。うりがうまんかいお経読み
さりーぐどう。

なー一回のーや、御城ぬ庭ぬ下なかい横穴掘やー
に、人間寄してい太鼓打たち、三繩かぢみてい、うま
うてーいガーラちょーるふーじーやん。あんさーに、ま
たん北谷長老呼びみそーやーに、
「えー、長老。なー、うまうとーてー朝夕さなーむる
あんし騒じならん、ガーていならんしが、うりちやー
さらーじうきーが」んち、
「うりじうきてーとうらし」んぢい。

「あー、うれー上んかいゆん上ぎーるさびーるい、地
んかいゆみんちーるさびーるい」でいちゃくとうや。
あい、人間どうやしえーや、本当や。
「うーなーい、かしまさる。ゆみんちけー」でいし。
うまんかい向かでい、続でいさくとう、むるうらんけー
ない、地ぬみーかいゆみんちねーらん。

「とーなー、くりんでーくまなかい置ちよーちーねー
なー、私までいんゆみんちゅん」でいやーに、
「いやーや、くまー私地々どうやくとう、いやーなー
まーがら別んかい走り」んでい言やたくとう、

「えー、あんやいびーみーんち、板切りしーちなかい
立つちやーにや、あんしままかい走いみそーちやく

第一首里城グシク 首里城 第一商店
二商氏の王統において琉球国王が居住
する城であり、琉球國の行政と文化の
中心でもあった。一九七九(明治十二)
年、琉球歴史に伴って土の住居と行政建
物としての両方の機能を失い、荒廃した
一九四五(昭和二十一年)、沖縄戦で落城
的な被害を受け、数々の国を主導したと
んどの建築物が破壊された。のち復興工事
と復元が実施され、現在は国際記念物公認と
して県内でも人気の観光地のひとつと
なっている。

※2 北谷 岩瀬本島中南の地図名。また、
現在の北谷町にある子の名前。ちやん。
方言でチャタン。地図名。行政地名など
しては、近世は北谷村。近代は北谷町。
現在は北谷町。第二次世界大戦後、北
部は分離して嘉手納町となる。字として
は、北谷分屯地が古く村落として
近接する山道連絡。五代男爵源三とあわせ
て北谷三園(チャタタンサンカ)と呼ばれて
いた。

※3 五代勢 北谷町に存在した集落
谷クスクの南東側。現在の郵便番号300号
線の南側。米軍キャンプ瑞慶閣内にあつ
た。

※4 御主加那志 王城 加那志は尊称を
示す後継者。

※5 後門 首里城の守門。中山門の俗
称。よく使はれた美しい門の意。

※6 チンマーサー 土や石を積みめぐら
せて円形に盛り上げたもの。

※7 御城 王城である首里城のこと。

※8 地図 未詳。領地を指すか。

どう、摩伊千瀬や。

「くまんちやーやいびーが」んち、あまんちー立つ
くどうる陸けーなどーるどうくまー慶伊千瀬、あぬ人
がむしやしやんで。わかいさに。那覇ぬあまから見
じーねー、慶伊千瀬んちあんдиしえー。
「うまん、私が見ーるどうくまー私地々でーくーどう、
うまにんならん」でい言ちやくどうや、太和ん走いみ
そーち。

あんざーに、

「沖縄落とすんちやしが、ちやーされーゆたさがー
んら、あまぬ島津公が言ちえーるばー。
沖縄や神ぬ大きみしおーびーくどう」本当ぬ神ぬ大
きや、世ぬ始まいや沖縄どうやたんでい。

「あまー弱いねー戰寄してーしえー」。

陸から船走いたんでいるむん。沖縄や來ねー、たつ
ちかち、遠くから見しがてー、沖縄ぬ國たつちかい
ねーよー、海けーなでいよー、神ぬ力さーに。陸から
船走いはつちや、まーが沖縄やらわからん、見らんた
んでい。うぬあたいぬ神ぬ國やたんでい、沖縄や。あ
んしる、あまや、

「あまやなー、あまぬ袖様むるくまんかいうんちけー
しわるや、沖縄や戰寄してい落ていやびーんどーん
でい」。

「いえー、あんやみ。あんしやーすがーでい」。

「馬ぬ利作くで、あんさーに、金つし、黄金さーに、
黄金敷うすていや、沖縄んけー向かーち、あんし、私
があまんけー向かーちお経読みーねーや、那覇港んか

い船一着きとーてい、夜、船一着きとーてい、あんし、
何時頃、私がお経読むくどう、うんにんねー皆神ー
うまんかいめんしょーくどう、船んかい乗いくみー
しえーねーや、うにぬ船出じやししーるんしえー、あ
まぬ神ーむるくまんかいはちめんしょーくどう、うん
にんから戰寄していなびーさーんでい。

「いえー、あんやみ」んでい。
あんざーによー、くぬ首里ぬスナファン御嶽ぬ神様
よ、うぬ人がや、

「大和んかいえー」んでいち合図ぬかかとーびーしが、
行じゆたさいびーがやー」んでい御主んけーありやた
んでい、うぬスナファン御嶽ぬ御神ぬめんそーちよー
たんでい。

「ぬー、行かわん行かんだれーいやー勝手どうやる」
んでい。なーうんにんからー沖縄王ううりやてーる
ばーー、徳ーはんでいとーーるばーーー。
「あんやいびーみ。あんしはいびらうー」んでいち。
道ぬちゅなーぎ提灯ぐわーちかとーたんでい、神ぬ
門。

あんぞーしがや、漢那ぬ御神ーよー。あま、山原
漢那でー。あまぬあれーべーに者やみしえーたんでい
よー、うぬ話やさ。あんざーににつかなでいや、船一
出じてはちねーらん、うりー一人ー残ていめんしえーん
でい。

うぬあたいぬ、北谷長老んでいらりーる人よーうぬ
あたいぬうりやみしえーたんでい、シジ持つちめん
しえーたんでい、お経持つちめんしえーたんでい、北
山原、ナガヌマ原、タエフ色、からなる
環礁の總称。那覇の西北約一キロメートルの地点にある。

※1 慶伊千瀬 渡嘉敷村に属し、三島神
山原、ナガヌマ原、タエフ色、からなる
環礁の總称。那覇の西北約一キロメートルの地点にある。
※2 島津公 島津氏のこと。薩摩藩の藩
主。

※3 クラスナファン御嶽 沖縄本島北部、宜野座村の字。
※4 沖那ぬ御神ーよー。あま、山原
漢那でー。あまぬあれーべーに者やみしえーたんでい
よー、うぬ話やさ。あんざーににつかなでいや、船一
出じてはちねーらん、うりー一人ー残ていめんしえーん
でい。

※5 山原 沖縄本島北部一帯を示す語。
現在山原郡や、名護市などがある地域。
山が多いということで山原と呼ばれた。

※6 フシジ 人や土地が有する靈力。

谷長老。

あぬ人よーよー、くーさいによ、赤犬子や、三味線
ぬ始まい。うぬ人が國々歩ちらりさいみそーちょー、
うまんかいめんそーちょーたんでい。あんざくどう
や、

「あ、茶んうさがいみそーり、ぬーんうさがいみそー
りーんちょ。」

「くぬ子ややー、ふどういーねーちゃんぐどーる人ん
かいがないわからんどーーんでい、うぬ人が、赤犬
子ぬ言やつてーる人やたんでい、うぬつ人よー。」

〈共通語訳〉

昔は（沖縄は）神の国でね。そして、この北谷長老
という方がいらっしゃつたということは、話には聞いて
あれだつたつて。もう一週間もかけて首里城におい
でになつたそうだ。蟻、蟻こを一匹でも踏んづけて
しまわないようにおいてになつたつて。それはただの
話だけど。どうやつても一週間はかかるないでいらっしゃつたと
思うけどね、一日でも（行かれたと思う
が）。それほどの（徳の高い）人であられたそうだが、
北谷長老つて。北谷玉代勢とか、この方の村は。あ
そこに墓も、その（村の）そばにあるという話だよ。
こんな方であられたそうだが、北谷長老がね、あれ
だつたつて。

王様がね、この守門の土盛りに鳥の作り物を作つ
て、立派にこうして鳥の作り物を作つて据えてね、あ

れこれやつて据えてね、長老を呼んで、

「なあ、長老。あそこには、来てはいけない鳥が居座つ
ているが、どうしたらいいかねえ」とおっしゃつたの
で、五寸釘を、あのチムマーサーという石にこう五

寸釘で、手を加えて打つたそんなんだけどね。ほら、
この北谷長老がそこに向かつて。あの人は唐に行つて
そういうことをなさつて。それで、こうだつたそ
うだ。この五寸釘（これ、あの、（鳥の作り物は）落
ちているみたい。この人がお経を読みなさつたから。
もう一回はな、お城の庭の下に横穴を掘つて、人間
を集め太鼓を打たせ、三味線を弾かせて、そこで騒
がしくさせていたようだ。そして、またも北谷長老
をお呼びになつて、

「なあ、長老。もう、ここで朝晩ずつとああして騒い
でならない、大声をあげてどうにもならないが、これ
はどうしたら除けることができるよか」と、
「これを除けてくれ」と（王様が言った）。

「ああ、あの連中は上に押し上げてやりますか、地に
押し込みてやりますか」と言つたらね。ほら、（集まつ
て騒いでいるのはただの）人間なんだからね、本当は。
「ああもう、めんどくさい。押し込みておけ」といつ
た。（騒いでいる）そこに向かつて（北谷長老がお経を）
読んだら、皆いなくなつてしまつて、地の中に（お経
で）押し込められてしまつた。

「さあもう、こいつをここに置いておけば、私までも
やられてしまう」と（王は）言つて、
「おまえね、ここは私の土地であるから、おまえはど

著者 村山未詳 伝説的なおも
る歌唱者 琉球山都御の出身 古典
音楽の世界では三昧線歌謡を始めた人と
して傳記されている。

こか別の場所に行け」と言われたので、「ああ、そうですか」と、板切れを敷いて立ってね、それであちらに行かれたので、慶伊千瀬ね。「ここはどうですか」と、(北谷長老が) あそこに立つたために(海が) 陸になってしまったところが慶伊千瀬、あの人気が持ち上げたつて。わかるでしょ。那覇のあちらから見たら、慶伊千瀬というのがあるよね。「そもそも、私が見えるところは私の土地だから、そこもためだ」と(王が) 言つたのでね。(北谷長老は) 日本においてになつて。

そうして、

「沖縄を攻め落とすと思うが、どうすればいいのか」と、あちらの島津公が言つたわけ。

「沖縄は神が偉大でいらっしゃるので」。本当は神が偉大なのは(沖縄のほうで)、世の始まりは沖縄であつたつて。

「沖縄が弱れば戦をしかけることが(できる)」。

「陸を船が走つたつていうのに、沖縄に来ると、近づいて、遠くからは見えるんだけどね、沖縄の国に近くどね、海になつてしまつてね、神の力で。陸を船が走つて、どこが沖縄だかわからない、見えなかつたんだつて。そのくらいの神の国だつたつて、沖縄は。だから、あちら(島津公側)では、『沖縄はもう、あちらの神様を皆ここにお迎えすればね、沖縄に攻め寄せて落とせますよ』と(北谷長老が提案した)。

「ああ、そうか。それでどうするんだ」

「馬の模型を作つて、そして、金で、黄金で、黄金の鞍を乗せてね、沖縄に向けて、そうして、私があちらに向かつてお経を読むとね、那覇港に船を着けておいて、夜、船をつけておいて、それで、何時頃、私がお経を読むから、そのときにはみんな神様が港においてになるから、船に乗りこみなさつたらね、そのとき船を出してしまいますれば、あちらの神はみんなここにおいてになつてしましますから、それからは戦をしかけることができますよ」と。

「ああ、そうか」と。

「そうしてね、この首里のスナファン御嶽の神様ですよ、その人がね、

「日本に來い」と呼びかけがかかっていますが、行つてもよろしいですかねえ」と王様に言つたつて、このスナファン御嶽の神様がいらっしゃつたつて。

「なに、行くのも行かないのもおまえの勝手だ」と。もうそのときからは沖縄工はそういうことだつたわけだよね、徳を失つていたわけだよ。

「そうですか。それでは行きますね」といつて。道にひと並びにずっと提灯がついていたつて、神の門。そういうことだがね、漢那の神様がね。あっち、山原の漢那だよ。あちらの神様は足が悪くていらっしゃつたつてね、その話だよ。それで(港に来るのが)遅くなつてね、船は出てしまつて、この神一人だけは残つていらっしゃるつて。

そのくらいの、北谷長老という人はそれほどの人でいらっしゃつたつて、靈力を持つていらっしゃつたつて



て、(強力な)お経を持つていらっしゃつたって、北谷長老は。

あのはね、小さいときにだよ、赤犬子ね、三線の始まりの。赤犬子が国々を歩いていらっしゃつてね、そこにいらつしやつたって。そうしたら、「ああ、茶もおあがりください、これもお召しあがりください」とすすめてね。「この子はね、成長したらどのようにならうものかわからないよ」と、その人が、赤犬子が予言された人だったって、この人(北谷長老)は。

(2) 十五夜の餅・蠅踏まず・豆腐の禁・葬り方・唐の寺の火消し

島袋吉盛(大正十三年生) 南桃原

*南陽禪師ですか、南陽禪師という方が、たぶん、南という字とね、太陽の陽でしよう。あの、太陽の陽と、禪は禅宗の禪。そして、師は師匠の師。とにかくこれは、仏教の、あの、坊主の名前。

*北谷長老といふのも、あの、坊主の位の名前じゃないかね。大師とか、弘法大師とかね、坊主の位の名前があるさ。とにかく、徳の高い坊さんさ。

今、長老山つて言うて残っているよ、北谷長老がおられた。お寺こそないんだがね、その跡はあるつて。あなたたちあつちわかる? 瑞慶覧から石平下りて、石平じゃない、あれは五代勢だが、部隊名わからんさ、瑞慶覧部隊でいぢよーる(瑞慶覧部隊と言つている)、あの一掛全部。

北谷グスク、あんただちわからん? 国道にこう下りる、その左側にある。こう、下りる場合。左側に、長老山といつて残つてあるよ。今、だから、北谷長老はね、徳の高い坊さんでね。そんで、まあ、弟子もおつたはず。

もとから、八月十五夜と言ひうると月見で、昔はこういう坊さんは餅を食べるか、団子を食べるかだつたらしい。そこで、この弟子の坊主よ、たぶん。あるいは、うちらの親父がヤクミーとかなんとか言いよつたが。ヤクミーというは、この長老、坊さんのお世話をするにかんじやなかつたかね。それが、その餅を、十五夜でね、八月十五夜に餅を半分出したら、してこの弟子坊主がなんか知らんが、ヤクミか知らんが、とにかく長老の徳行、才能を試すためか、あるいは、この人の知恵とかいろんなものを勉強するためにやつたか、いたずら半分に、「餅を」半分出したらね、これをだから、その北谷長老は、

「十五夜ぬ月ぬ、十五夜のお月様がね、三日月の上がつて」というけど、方言さ。

「十五夜のお月様だが、今日は本当は三日月が上がつているねえ」というふうに、差し出した餅のことをこう言つたらしい。それで、この長老はね、こういうことを言つたんだから、その、たぶん坊主の弟子からうんが、また、もう、半分はふところに入れてあったらしい。だから、

「雲に隠りやい、なまどう出じやびる(雲に隠れて、こう、お出たところです)」という。雲に隠れて、こう、お

第一回開闢傳 十谷長老の法事。

*北谷長老 (生年未詳) (一六五二)

藤原氏の傳。法号は南陽紹聖禪師。北谷開闢五代勢の生まれ。十三歳で出家。十九歳で日本へ渡り、十六年間各地を遍歴したのち、東北地方の瑞慶覧を五年間修業。法嗣となり、ゆきの寺の傳宗を承継した。その後、建業寺住持となるが、数年後に故郷に還郷した。

*弘法大師 平安時代の高僧。至海(七七四~八三五)の別稱。空海は平安初期の僧で、釋迦宗の開祖。弘法大師が旅の僧として訪れて、瑞慶覧を示すといつて詔請が日本各地で多数伝えられる。

*北谷町字北谷にある。現在はキャンプ瑞慶覧内。北谷長老がおられた跡と伝えられ、現在は跡所がある。

*瑞慶覧 神奈川県中郡、北中城村の字。すぐ近く方言で「キン」。現在キャンプ瑞慶覧内。

*北谷グスク 沼津市金田郡、北中城村の字。油津金田郡、北中城村の字。いじひ。方言で「インシダ」。馬車に搭乗された現地キャンプ瑞慶覧内。

*ア北谷グスク 北谷町字北谷にある丘陵。おお茶畠のすそ野に現存する。地形はほぼそのまま残る。

*ヤクミー 只見さんの意であるが、古くは役人の稱號。

月様は雲が半分おしてしまつて、ふところのことさーねー、今はもう三日月になりますよー、二つ合わせて二つ、(流歌で)返したわけ。この弟子、返したつて。だから、この弟子も、長老も、徳は高かつたわけさーね。

長老はだから、あれらしい。首里まで行くにもね、一週間かかるって行きよつたというのは、その、蟻一匹でも踏まんで。生き物をたいへん憐れみ、大事にするというこれがあつて、そういう話が。だから、徳の高い坊さんであれば、そういうこともできたというし。

また、あの、おんなしことだが、この、食べ物においてもね、豆腐類は食べなかつたつて。豆腐はね、豆一升からね、おから、かすね、豆腐の。これも一升出るし、豆腐も一箱であるさーねー。して、また、これから、食べたところの豆腐汁といいうのも出よつた。これ、豚の餌にもなるわけよ、芋と一緒に混ぜて豚に与えた。して、三倍ものが出るさーねー。で、「これ、欲な物(これは欲張りな食べもの)」と言つて、豆腐を食べなかつたつて。欲な物と言つて、欲のある食べ物と言つて、食べなかつたといふ。

それとまたね、北谷長老は最後、亡くなる場合ね、

「私が死んだら、この木ぬ股に私はこう、はめてね、そのまま置いておくように」予報しようとしたらしい。で、一応、あのへん北谷の人は、木ぬ股にこう、北谷長老置いたといふんだが、こう、どうみても見苦しいさーねー。こういう徳の高い坊さんを木ぬ股に置いて、そのまま風化させるというのは、見苦しいさーねー、当

時から。忍びないといつて、この長老ガマを作つて、埋葬したそですよ。その埋葬したら、で、結局、この方はね、生まつて、神というのは、キリスト教にしても徳の高い神というは遺骨ないとか言うつて。で、あとで、埋葬したのを洗骨しようと、掘つたと

いうんだがね、遺骨がなかつたという話があるわざー。これも、しかし、あんまり褒め称えた話じやないかねーんで、思ひるばーてーやーさい(と思うわけなんですね)。徳ぬ高さる神はね(徳の高い神はね)、遺骨ないと。キリストでもないらしいよ。で、他の王様系統とか、中近東とかのアラブ系統のそういうつの、ドーソク(ろうそく)でこう巻いたりしてしまつたが、ドーソクで王様の格好を作つてね、これを燃やして、この王様はもう、遺骨もなにもないよ、全部、燃え尽きたんといいやーなかい(燃え尽きたといつてね)。こついう、だから、信じ、結局、長老の徳を称えるために。これもう、本当か嘘かわからないんだが、そういう話があるわけ。

そして、この埋めたもんだからね、埋葬。もう、北谷には、徳の高い偉い人はでないというふうに話したというんだが。

戦前よ、伊礼筆^{イリカヒ}といつて、衆議院で^{セイイケイ}参与官^{ヨウスイカン}さーねー。

幸一伊礼筆 一九二四年、内閣各務に服務された政務官。大蔵の命をうけ、帝国దのち、一九二〇年、北谷村長に当選。一九二八年、衆議院議員に当選し、第一回の参政官一九二四年、内閣各務に服務された政務官。大蔵の命をうけ、帝国議会との交渉などに関わった。一九四八年に廃止。次回内閣の招請參官を務めた。

後世、歴史が示すところであつて、今、なんとも言え

ないさーね。いくら北谷のことをよくしたか、ようわからん。

また、あれもあつたやーさい。(北谷長老が「唐の」、自分が修行したお寺が火事にあってね、やーさい(ですよね)。たぶん、行くつもりが、唐で修行したとい

う話もあるし、戻ってきてね、向こうのお寺が火事にあつたのをね、とにかく、夢のように、こういうなかやって、千里眼みたいに察したのか。そして、自分のお寺にこうポンポン水をかけたら、

「なんで、このお寺は火事も出ないのに」といつて、一応、弟子たちは不思議に思ったはず。だが、あとでまた、「火薙ち」と言つてね、

「火事のお手伝いをしてありがとう」という、お札のこれがきていたつて、北谷長老に。これだけ徳の高いというの。

(1) 唐の寺の火消し

山内盛福(大正二年生) 南桃原

(2) 唐の寺の火消し

あの人(北谷長老)は当時のシナ、唐に行つて修業されてるでしょ。その修業した、自分の修業したお寺が火事だからね、靈感を感じたんでしょうね。自分、今、北谷長老。北谷にあるお寺の坊さんたちに、「水掛けなさい」と言つて(北谷の寺に)水掛けさせたつて。

「ぬーがさい(なんですか)」つて言つてなにしたらね、

「どうしてですか、長老さま」と言つてね、

「いや、実は自分が唐に行つて修業したお寺がね、火事で焼けておった」そういうことを言つておられた

という。そういう言い伝えもあるよね。

それくらい徳が高かつたというあれなんだろうけどね。結局、それがあのう、幾分それは消えた、まあ、全焼せずに消えた効果はあつたんですよ、確かにね。だから、向こうから、今のように、お札のなにがきたと

いうことを言うたらしい。

(3) 十五夜のまんじゅう

山内盛福(大正二年生) 南桃原

① 唐の寺の火消し

北谷長老は小さいのにね、修業中にね、住職のもので修行中にも非常にとんちがあつて、なんだつたと言ふことば、その話、島袋さんがいたら、その話出ししゃなかつたですか。

それで坊主の、小坊主の長老はね、まんじゅうを一個もらう。よそから「住職にあげてください」と持つてきたまんじゅうで

しような。そうすると、欲しいもんだから、半分割つて自分のふところに入れてね、半分しか住職の前に持つていかなかつた。それで、この住職、坊さんはね、

東一庸 現在の中国のこと。唐王朝から来た名流。西暦九〇七年に唐が滅んで宋(宋朝)が立つた。清などといくつも主張が変わつても、方言で一般的には唐(と)と呼ばれた。

東一庸 現在の中国を指す。方言では唐(と)ともいふ。近代日本では清(と)と呼んでいた。日本が植民地主義を押し進めた時代を想起させ、かつ現在でも中國の人ひとに対する差別的な意味合ひを含んで用いられることがある語であるが、これは文脈より差別的な意味を含んで用いられたものではない。判断しなうえで、発話の歴史的實在としての性質を重視し、そのまま翻字して複製した。なお本報告書の複数話のなかには、ここに註を付した個所以外でもしばしば同じ語が登場するが、それらについても右と同じ判断に基づき、複数話のまま複載してある。



「これまだ、この小僧はどんちまた、なにかたくらみやつてゐるな」と思つたんだが、

「よし、これ、おまえ、半分しか本当に持つてこなかつたか」と聞くよりは、歌で、なにしたといふことでしょ。その住職がね、

「十五夜ぬ月やまん丸るやしが（十五夜の月はまん丸なものだけど）」と言つたらね、そうしたらもう、小坊主の北谷長老も、「ああ、もう、それわかられたな」と思つたでしょ。半分はね、ふところから出して、「白雲にかかるてい今出る（白雲にかかるて今出たのだ）」とかなんとか、そういう言い方ね、琉歌、歌みたいに返したとか、下句で返した。今る（今こそ）なんとか。まあ、そういう意味合いのことだつたと。

半分は小僧、小坊主、その北谷長老がね、なにして、ふところに、自分のふところに、半分は、これは、お隣から、あれまあ、どつかりましたといふんでしょ。これあげると、こう、それで半分差し出したと。そんなのが、そういう意味あいのことを言つていた、島袋さん。その話だったように思うよ。

(4) 肉を食べる知恵

① 肉を食べる知恵

比嘉弘（大正十一年生）山内

昔はね、坊さんは、お肉を食べてはいけないといふことだつたらしいですね。それで、北谷長老はお肉を食べたらしいですね。それで、

「なんで、あんた、肉を食べるか」そう言つたら、ぬぬ句んだが（なんの句といつたか）、木は木でしか継ぎたしはできないですね。だから、人間も、この、不足するぶんは肉で補なわんといかんというふうな、もう、これも、なんか昔ん人よー（昔の人は）、才知、これに才知と言つうですがね、そういうこと言つたらしいんですけどね。だから、頭が良かつたんでしようね、たしかに。（本来は肉は）食べてはいけないということだとだつたらしい、坊さんは、坊主は。

(5) 北谷長老と黒金座主

① 黒金座主退治

与那嶺松栄（明治三十七年生）池原

奉一謹啟　おもに春美や沖縄で伝承される短詩系歌謡の総称。和歌に対する開一般的に琉歌という場合、八・八・八・六の四句体三十音の定型で、個人の體験を叙情的に詠むものを指す。祝賀、四季、恋などの題材にするほか、教訓歌や、憲法にまつわる歌などがある。

奉2島袋さん　民謡調査に参加いたいたいていた他の話者、島袋吉盛さんのこと。島袋さんは、山内善福さんと同じ南橋原老人クラブに所属。島袋さんは、井手田身で、北谷長老など北谷に伝わる伝承に詳しい。

お気を知りたいのかと思われるが、



あと一敵なやーによー、敵なやーに、うりし。

北谷長老んかい、ありが、黒金座主えー、鼻、鼻うすがつてーしえーやー。鼻うちゅ取らつてーるばーてー。あんさーに、あんしーねー約束、うれーなー約束ぬどうーい守やーに、「私がうりしーねー、あんしーねー、いやーや私勝手に、いやーどうーやさくーぬ、ちゃーしやはーんさつていしむらやー」りちやぐどう、「あー、あんししむん」り。また、あぬ、北谷長老が、「あんしーねー、いやーが言しえー私ねー絶対服従す」しがやー、また私が言しん、いやー絶対服従するなー」んり言ちやぐどう、

「なー、あんししむん。うれー互ーなーうちあわせやくとうやー、あんししむん」でい言ち。あとうから、とうとう、うりしさーに、あとー北谷長老が、えーりんなー、やなくどうしえーるばーやてー。あんしさくとう、

「どー、かんしえー合点のーあらんぐどう、いやーや私が言くるくどうしうりさーに、いやーや私意見ぬんかい反対そーぐどうや、うりさーに、なー約束どうーい、いやー興、いやー興ー私がうするくどう、あんしんしむんなー」りちやぐどう、

「あんししししむん」り。あんさーに、うぬ意見ぬくとうからうりしさーに、ありが黒金座主ぬ鼻ーけー取らつたんりち詰めあるばーてー。

〈共通語訳〉

北谷長老と、また、あの黒金座主とはね、たいへん仲良しの友達だつたつてよ。そうだけど、黒金座主と言う人は精神が少し悪かつたわけだよ、精神が悪かつた。また、北谷長老という人は、もう心も眞面目で。そして友達同士だつたんだといふんだけど。毎日、朝も晩も集まつて、語り合いながら碁をたしなむ友達であつたんだつてよ、友達。そうして仲良くつきあつていたんだが。これなんたよね、どどのつまりは、そこでどうしてもこの疑問が食いちがつたわけだね。意見が合わなかつたわけだろうね。それで、そういうことで、つい意見の衝突からはじまつて、そうしてこの北谷長老と黒金座主とはしまいには敵になつてね、敵になつて、このことで。

北谷長老に、あいつが、黒金座主が、鼻、鼻をそぎ落とされたんだよね。鼻をひつ取られたわけ。それで、そうしたら約束、これは約束の通りに守つて(したことであつて)、

「私が勝つたら、そうしたら、おまえは私が好きなよう、おまえを好きなように、どんなことをしてもいいんだな」と言うと、

「ああ、それでかまわない」と。また、あの、北谷長老が、「そうしたら、おまえが言うことには私は絶対服従するけどな、かわりに私が言うことにも、おまえは絶対服従するか」と言つたら、

「もう、それでかまわない。これは互いに決めたことだから、それでかまわない」と言って。のちに、どう

どう、そうとりきめて、しまいには、北谷長老が、たぶんね、(黒金座主が)悪いことをしたわけだよね、そういうことなので。

「さあ、これでは合点がいかないから、おまえは私が言つたようにして、おまえは私の意見に反対したからね、こうして、もう約束どおり、おまえの鼻、おまえの鼻は私がそぎ落とすから、それしてもかまわんか」と言つたら、

「それでかまわん」と。それで、この意見の対立からこのようなことになつて、北谷長老が黒金座主の鼻を取つてしまわれたという話があるわけだよ。

(6) その他、北谷長老にまつわる話

① 長老祭

島袋次郎 (大正十三年生) 南原

北谷長老といふのはね、長老祭といつて、北谷区域

は毎年、村アシビぐわーがありましたよ、北谷長老の徳をたたえるために。場所はですね、瑞應院からこう

下に下がつてね、国道五十八号線に下がる左側にね、長老山といつてありますよ。これが部隊内に今もありますよ、長老祭り。北谷グシクのあつち、反対側、斜め反対側よ。長老祭りですね、そこを洋んでですね、

村アシビぐわーといふのが、北玉小学校でやりよつたんですよ、村アシビぐわー。だから、軍はですね、そこだけは残してあるんですね。

戦前はですね。村アシビでは、この部落の得意のも

のをやつしていました。北谷部落と桑江あたりね、二ヶ所の部落が、だいたい九月頃です、新の九月頃、長老祭りは、今は、今もそうじゃないかねえと思うんだが。

[2] 僧 補遺

① 良弁和尚

島袋次郎 (明治三十四年生) 知花

方言原話

良弁和尚がよ、くぬ、ぬーんち良弁杉んちちきてーがんでい。

ずつとなー、七、八十里ん、四、五、六十里ん離り

どーるとうくまなー、お母さんが、赤ちゃん傍なかい寝してい仕事する中に、驚ぬ引っ掛けていねーらん、くぬ赤ちゃんのー。あんさーに良弁杉ぬ枝の股んじ寝ん

してい。あんしきくどう、お母さーなー、ちゃーんじやがやーんち、ぬんでいん言やらんしえーやー。

うまから良弁和尚が通らつていふ。くぬ良弁和尚や、天皇陛下ぬ、ちょーどう政府ぬ、勤みおそわいみしえーたんだい。あんさくどう、赤ちゃんが泣ちゅしえーやー。家来ぬ武士が下るしよー。あんしうりがふどうわーさつていー人よー、じこーぬ出来物なつて、あんさーに、どうーぬなー、うりんかいかな

てーるばー。

あんしえーくどう、ありやたんだい、良弁和尚が、「いやーが赤ちゃんほーいにや、着ちちえーる着物のーくりやくどう、うり持つちよーきよー。いやーお

東一長老祭 北谷、伝道、玉代勢の三葉落祭前祭をおこなつていた。「九三年に碑が建立されたことか」、北谷が主体となって西日本第一回の九月十五日に行なうようになったが、のちに日曆九月十五日に変更された。現在も北谷町主催で毎年旧暦九月十五日に供養の行事が行なわれている。

*2 村アシビぐわー 墓落のアシビナ、トウンなどの葬所の前の広場で演じられる奉納舞踏。長者の大太、若狭踊、二才踊、女踊、狂言、組踊などが演目を選ばれる。集落によつて時期は異なるが、旧暦六月末の農祭、旧暦八月十日頃、八月十五日などに行なわれることが多い。

東北玉小学校

ここで話題に上った北

玉小学校は、北玉尋常高等小学校(昭和

十五年からは北玉国民学校)を指してい

ると思われる。現在の北谷町立北玉小学

校は北谷町吉原に所在するが、一九四五

年の沖繩以前は北谷寺落の北端にあた

る場所にあった。現在の北谷町交差点のす

ぐ南東、国道五号線とキャンプ場跡

の一部。

*4 良弁杉

奈良東大寺一月堂の下にあ

る一本の杉と高僧にまつわる話。この話

話として分類すべき話型であるが、ある

人物の伝承についての琉球語での語りな

おしそうことで、人物伝の補遺として

本報告書に掲載した。

母さのーちゃーしんいやー探めーてい来ゆーくどう
んでいち、うり遺言やたんだい。あんしそーなー、く
ぬ良井和尚ん、先ぬ良井和尚ぬうりとうやーに、なー、
天皇陛下ぬ傍、政治家ぬ傍なー、じこーぬ出来物ぬ、
和尚さんないみそーち。あんさくとう、ある行列ぬば
すによー、白髪んバーバーそーるおばあさんが、
「鷺の喰い残し和尚、鷺の喰い残しの人をわからな
か、わからなーか」なーすぐ來やくとう、
「あー、うまから歩ちゅしみしおーしょー、うれー
良井和尚んち、良井杉から驚ぬくい残し和尚でーん
どー」でーいち言ちえーるぶーじやん。あん言ちやくとう
や、行ぢんじやくとう、うぬ和尚さんが持つちよーる
赤ちゃんにほーいに着らえーるうりとう、お母さんが
持つちよーるうぬ、うりが着してーてーぐどう、かい
見したくどう、さらまー似ーやたんでい。あんしるや、
くぬ杉えー、大切にさつとーしがあんよ。

〔共通語訳〕

良井和尚がね、どうして良井杉とつけられたのかつ
て話。

「ああ、そこを歩いてらっしゃる方は、その人が良井
和尚といつて、良井杉から拾われた鷺の食べ残した和
尚なんだよ」と言つたようだ。そう言われたので、行つ
てみたら、その和尚さんが持つてゐる赤ちゃんのとき
に着ていた着物と、お母さんが持つてゐるその、お母
さんが着せてあつた着物と、たがいに見せたら、まつ
たくそつくりだつたそうだ。それでね、この杉が、大
切にされているのがあるんだよ。

そこに良井和尚が通られてね。この良井和尚は、天
皇陛下の、ちょうど政府の勤めを引き継ぎなさつた
て。そうしたら、赤ちゃんが泣くよね。家来の武士が
下ろしてね。そしてこの赤子が（和尚に育てられて）
成長した人は、たいそう立派な武士になって、そうし
て、自分で、和尚に仕えたようだ。

「そうしていたら、あれだつたつて、良井和尚が、
「あなたが赤ちゃんでいらした時にね、着ていた着物
はこれから、これを持つておきなさいね。あなたの
お母さんはどうやつてもあなたを探しに来るはずだか
ら」といつて、それが遺言だつたそだ。するとこの
良井和尚は、先の良井和尚のあとを継ぎ、天皇陛下の
傍、政治家の傍につくくらいの、たいそうできのいい
和尚さんになられた。すると、ある行列のときにね、
白髪もぼうぼうに乱れたおばあさんが、

「鷺の喰い残し和尚、鷺の喰い残しの人をわからな
か、わからなーか」と来たので、

「ああ、そこを歩いてらっしゃる方は、その人が良井
和尚といつて、良井杉から拾われた鷺の食べ残した和
尚なんだよ」と言つたようだ。そう言われたので、行つ
てみたら、その和尚さんが持つてゐる赤ちゃんのとき
に着ていた着物と、お母さんが持つてゐるその、お母
さんが着せてあつた着物と、たがいに見せたら、まつ
たくそつくりだつたそだ。それでね、この杉が、大
切にされているのがあるんだよ。

二 博識・学者

【一】木田大時

① 箱の中の鼠

西平マツ（明治三十四年生）久保田

木田大時。この人はよ、聞得大君御殿言うてね、くり拜まやつたつ
首里ぬ王様ぬ、聞く御殿ぬよ、くり拜まやつたつ
て、男の人。聞得大君御殿ぬよ、これ。

医者がよ。昔、医者がね、この人、密告やつている
わけよ。木田大時や、あんまりこの王様のね、御殿の
信用して、もう、いつもこの、この人はもう、ひーち（ひ
いき）でしよう、ね、信用やつたら。医者がよ、密告
しているわけよ、王様に。

「この人はね、喰者、うそ言うてね、この人はからね、
お金聞得大君御殿からね。」
聞得大君御殿、王様ぬ家よ。私は中城御殿でしよう、
向こうは、聞得大君御殿、中城御殿より上よ、ね。だ
から、あれやつたらね、王様んかい（王様に）密告やつ
てよ。

この王様がよ、三司官表十五人にね、
「この木田がこんな神様のね、上手やつたら、この人
ね、箱によ、鼠入れてね、一つの箱にね、いくつも鼠
が入つてゐるか」。それでよ、一つはまた空、やつた
ら、
「はい、大時や、木田大時、いやーがや（おまえがね）、

こんなに神様のことやられたらね、あの箱にね、鼠い
くつ入つてゐるかってね、計算してごらん」といち（と
いつて）、開けたつて。向こうの、この人が開けらん、
三司官表十五人ぬ、やー。
したらよー、ありで、なー（もう）一つよ、二つ入つ
ているもんがね、一つしか入つてないでしょ。
「木田、いやーやや（おまえはね）、うそ言うてね、いやー
ややー（おまえはね）、聞得大君御殿ね、だましてや、
あんたはね、死刑」言うてよ、うん。小濱浜、これ
あま、牧港、那覇に行くところの牧港がある、橋が。
行かん手前の浜、海。あそこは昔えー（昔は）死刑す
るどうくる（死刑するところ）やつたつて、小濱浜。
小濱浜によ、
「死刑。あんたはね、うそ言うてね、人だましてね、
するから」つて、
「死刑に、死刑しなさい」つて、小濱浜に死刑しなさ
りつて。御主加那志前、王様が。したら、もう、この
鼠によ、雌鼠なつて、鼠。二つよ、鼠が（この鼠がね、
雌の鼠であつて、鼠。妊娠して、二つ、鼠が）。子ど
もで入つてよ。

「とー、木田大時が言ゆるむんはね、もう本當やから
ね、中に入つたもんが二つ、子ども。三つ入つてゐる
からね、親しくてー。とー、早くや、もう死刑やみでい
(さあ、木田大時が言つたことはね、もう本當だから
ね、箱の中に入つたものは二匹が子孫も、全部で三匹
入つてゐるからね、親も數えたら。さあ、早くね、も
う死刑をやめにしてー」。もう一生懸命走つていつたつ

卷1 木田大時 沖縄本島南端、玉城岬切
にじたといわれれる古い面。

第2聞得大君御殿 開得大君を敬つた言
い方。琉球の堅苦で、代々、王の
妃、王妃などが持つた。

卷3書簡 琉球國の都。王が誕生日を記
里城を中心とした、宮殿主殿、中臣一族の居
住地があり、琉球國の政治と文化の中心
となっていた。
卷4中城御殿 王の世襲である中城玉
子、またその一家、家臣、邸宅などを指す。
卷5司官表 琉球王室において、国王に
王室が務める政務を掌管し、最も下位に
ある役職。大臣、宰相に相当する。
卷6十五人 琉球王宮の高位の役職
で、三司官表に次ぐ、合計で十五人いた。
卷7口那馬 沖縄本島南端、西海岸の港町。
現在の那覇市の一隅。琉球國のうちでも
最大の港湾をそなえた都市で、近世から
現代を通じて商業、経済の中心として顧
わづ。

卷8牧港 沖縄本島中端、東シナ海に注
ぐ牧港川の下流域に位置する集落。

卷9那志前 国土機、琉球國主を
指す敬称。

てやー、小湾浜に。行った、きつさ（ついさつき）死刑なつてよ。

[2] その他の博識・学者

① ヤブという医者

新城安平（大正1年生） 畠川

八重山、唐船

だから、船の遭難と言つたでしょ。昔は中国と貿易しようつたって言うから。中國の船が遭難してね、名護湾の近くで遭難して、ただ一人、そのうちから助かつた人がおる。その人は姓は「ヤブ」と言つた。その人が名護湾に入つて。

ヤブと言うたらね、シナでは、今でも、まあ、お医者さんね。今でも、へたなお医者さんは「ヤブ医者」と言つてしょ。というのは、なにも医学も行つてこんど、今やつて、ちゃんとこく開業してゐるんだから、これこの邊にもおるわけさ。隠れてこんなヤブ医者が。男看護婦あがり、そういう連中がおるさ。そういう人にヤブ医者と言うわけさ。

このヤブと言う人は名護にたどり着いてよ、この人

一人が助かつてゐるから。だからあれば、名護の屋部に着いたから、この、今でも、名護の方は、屋部と言ふ部落があるつて。その人が、この魚なんか、針なんか、みんなこの医者の仕事できよつたわけさ。で、知らんまに、もうあつちこつちに聞こえて、人気あつて、

方々行つて、あの中頭まで入つてね、よくまた、効果があつたと。

それが首里王の耳に入つて、首里王に呼ばれてね、呼ばれて、どうするかつたらね。そして、糸引つ張つて王様の脈取つたわけさ。そうして、王様の額見らんとよ、下の連中をそこに置いといて。そして、この糸、このヤブがこう捕まえたらね、王様のこれずつとやつてるんですよ。これやつておるけど、

「やなひやー、猫 やな猫ぐわー」（このやろう、猫め、いやな猫めが）と言つ、王様に、やな猫という。だから、ここに見振りしている連中が、

「王に向かつて猫ぐわーって言うか」言つてね。今、切つてやるうとするときには、王様が、

「待て」と言つて止めたら、このヤボー（ヤブは）命助かつたわけさ。ほんと、このヤブが言つたのがほんと。猫に（脈を取るための糸）くくつたる、王様にはでない。だから、「やな猫ぐわー」と言つて。糸でこうして、猫の足で、マヤーしにいくさー。王様のこれまででない、だから「やな猫ぐわー」といつたつて。王様にそんなこと言つたか」言つて怒つたるよ、

「打ち首ぬ咎（打ち首の刑だ）」と言つてさー。そしたら、王様が、

「待て」と言つ、

「これが言つうことあつてゐるから」。そのあとから、王様の近くでずっと王様の看護婦か、つきそい、うてお医者さんなつたつて。これをあの、ヤブと言つて。だが、今でもこの名がなにしてる。

この人の名前が「ヤブ」という名前だから、今でもあつちにいたところが名護の屋部やから、屋部に着い

た一八重山 八重山諸島のこと。やえやまい方言でエーマ。琉球列島の南端にあり、石垣島などをはじめとする大小三十一の島々なる。

※2 唐船 現在の中國を方言で唐（と）といい、田舎使など、中國へ往来することを唐旅という。

※3 名護湾 冲縄本島北西部、名護市の東南部に位置する湾。本部半島の南側、東シナ海に面する。本部半島の南側、東シナ海に面する。

※5 猫にくくつたる 王が医者を試すために、脈を見るための糸をこつそり猫の足にくくりつけた。医者は見ないで糸を通して脈を取つただけで、この糸が王のではなく猫に結ばれていたことを感知していた。

て。だから名護は、あの人の「ヤブ」という名前が、今でも屋部と言つて、この人の名前さ、ヤブという。

② 伊波文学士と三十六姓

〈方言原話〉

十四になるか、十五なるかのあたりだつたんだよ。

あい、講演会しーが来やーがしーねー、鬼大城ぬ墓ー見らつたんでいよー、うぬつ人よー。伊波文学士んち

よ。
あぬ人たーんや、唐ぬぢやー子孫どうやらりーん
でーい、どうーくる言やらりーたん。また、唐からや、
なまぬ中国から、三十六家族、くぬ察度王ぬ時代よ、
うんにーに、松山町よ、久米村マーチュー、うまんか
い三十六家族來やーに、あんん、かんし流りてい、
たん、伊波文学士えー。

むる技術しんかよ。技術しんか、唐からよ、察度王
が、
「くまんかい、沖縄んかい、ぬーんくうい習ーしーが
やらきつとーさり」んぢや、唐ぬ王どうかんし話さー
らーによ、あんし、唐からもーちぶーたんでい。焼ち
物習たい、ぬーさいよ、うんねーるー、あぬー、くぬ
運勢届てー、あんねーるー、曆んぬんでーん、久米村
スーチエーんぢよ。安慶名原ーすべて久米村ぬ子孫や
んでい。三十六家族やんでいるむん。察度王の時代。

島袋次郎（明治三十四年生）知花

あの方の家系もね、唐から來た人たちの子孫である
と、自分でおっしゃっていた。また、唐からね、今
中国から、三十六家族が、この察度王の時代にね、そ
のときに、松山町ね、久米村の松林の、そこに三十六
家族が来て、そして、こうして流れ、

〈共通語訳〉

十四になるか、十五なるかのあたりだつたんだよ。
えつと、講演会をしに来たときに、鬼大城の墓をごり
んになつたつてよ、その方は、伊波文学士といつてね。

あの方の家系もね、唐から來た人たちの子孫である
と、自分でおっしゃっていた。また、唐からね、今

中国から、三十六家族が、この察度王の時代にね、そ
のときに、松山町ね、久米村の松林の、そこに三十六
家族が来て、そして、こうして流れ、
「沖縄人にも似つかない、唐の人にも似つかない、私
たちはそういうふうなんだよ」と、自分でお笑いになつ
てらした、伊波文学士は。

（久米村の人たちは）みんな技術持ちの一族だよ。

技術を持ちの一族、唐からね、察度王が

「ここに、沖縄に、なにもかも教えてくれる人を派遣
してください」といつてね、唐の王どころ話をなさつ

てね、そして、唐からいらつしやつたそだ。焼き物
を習つたり、なにしたらね、そういうもの、あのう、

この、運勢とか、ああいうもの、曆もなんでも、久
米村スーチエーといつて。安慶名原はすべて久米村の
子孫であるそうだ。三十六家族だったというんだ。察
度王の時代。

率々鬼大城 生没年未詳。本名は大城貴
勇。唐名鬼居路。尚泰王に仕え、阿麻
和利を攻め滅ぼす。沖縄市の中石垣
クに鬼大城の墓と伝わる古跡が
残る。

※2 伊波文學士 伊波波麻（いは すみ
う）のこと。一八七六年生（一九四七年
没）。沖縄研究の創始者。東京帝国大学在
学中におもろ研究に取り組みはじめめる。
明治末期から大正期にかけて、沖縄各地で
講演を行ない、民衆の啓蒙に勤んだ。

※3 三十六家族 久米村の祖とされる
三十六姓のこと。三十六姓は、一四世
紀（五世紀）にかけて沖縄に移住した中
國人の統称。

※4 察度王（しりどおう）（三三二—一三九六）、中
山王。蘭語を教えたる察度王の初代。
母は天女である伝承がある。

※5 松山町 沖縄本島南部、那覇市松山
町のこと。

率々久米村マーチュー 久米村毛小に
くめむら。方言でクニンダ。十六歳の
明人が中國福建から渡来し、居を定め
たのが村の始まりと云い伝承がある。

率々久米村マーチュー 久米村の男子は
十五歳になるとスーチエー（秀才）とい
う称を与えられた。

率々安慶名原 未詳。うるま市安慶名
あるは沖縄市安慶田な。

〔三〕 博識・学者 補遺

① 塙保己一

島袋次郎（明治三十四年生）知花

〈方言原話〉

ハナワホクイチんちよ、むぬ見だん、字一ちん書ち
さらんしがて。五ちぬ年にミックワーケーなやーに
ほーしが、人なかい本読まさーにや、大學すぐなたん。
うぬ人よー大学生などーたんでい。
「塙保己一」。

あんくどう、字んでいしえー學問一部どうやる
や、人ぬ読みやつさる字どうくぬ世ぬ宝やる。いかな
むちかはぬ、ちやーし書ちやーたんてーまん、人ぬ読み
まんあれー。どうーぬ思いいやーんかいちよーどう
知らすんでいやしーや、いやーがわからん字や
れー、ぬー、ぬーん入用ねーんしえー。あんすくどう、
手紙書ちーにや、立派な字書ち持たすしどうやるや、
読みやつさるぐどうし、うりどう宝やる。

「はー、私ねーぬーん上手やしーんち、やな字書ち
持たちゃんとー、や、くれーぬー意味ーねーらん。あん
どうやんどー。」

〈共通語訳〉

ハナワホクイチといつてね、ものが見えない、字一
つも書くことができなかつたっていふんだけどね。五
歳の年齢で目が不自由になつてしまいなさつたんだ
が、人に本を読ませてね。大学生になつた。その方は
大学生になつていたつて、塙保己一。

だから、字というものは学問の一部なんだよね、人
が読みやすい字こそこの世の宝なんだ。どんなにむず
かしいことを、どのように書かれてあつたとしても、
人が読まなければ（なんにも役にならない）。自分の
思いをあなたにそのまま伝えようということだから
ね、あなたがわからない字であれば「なに、なにも意
味がないよね。だから、手紙を書いてね、立派な字を
書いて持たすんだよ、読みやすいようにして、それが
大切なんだよ。」

「ははあ、私はなんでも上手だよ」といつて、きたな
い字を書いて持たせててもね、これはなんの意味もな
い。そういうことだよ。

塙保己一について 江戸時代の大文
豪、塙保己一についての語り。この語の
前に名前の方について語っているが、そ
こで江戸時代の学者、新井白石について
語者が触れており、そこから派生して語
られたものか。本来世間話として分類す
べき語彙であるが、ある人物の伝承につ
いての語彙語での語りなおしがいと
て、人物伝の補遺として本報告書に掲載
した。

三 知患者

1 モーイ親方

(1) モーイ親方の事績（モチーフ複合）

① ヌブシの玉・母の御願好き・下駄と草履

國吉キヨ（大正元年生）中の町

(モーリーは) 生まりーんから人と一変わとーるむん。
変なあかんたれ、あかんたれな格好つしやー。半分
ふらーぐわーしてーなー、半分ふらー格好ぐわーさー^あ
にや。どうしぐわーたーとーむるまじゆの一歩かん
ばー。まるどうー^ち人走い。

田んぼんかい行じやーにや、アタビーぐわーがおー
いしばかー見ちやー。ある時によー、このアタビチャヤー
がてー、ヌブシの玉んでいやーに、変な玉。アタビ
チャヤーが一人なー一人なー、一人ばーけーばーけーす
し眺みやーにやー。

「あい、くぬひやーたー！ やぬーはーけーそーがやー」
んでい言やーにやー、二人、むるアタビチャヤーがばー
けーばーけーし、玉ぐわーばーけーしよ、
うつたー、えー、ばーけーばーけーし玉ぐわーとう
遊どーさーでい、うぬ玉ぐわーや取やーに、持つち家
かい帰いがちーよー、

あんさーに、むるうんぐどうしやー、むる鶏ぐわー
持つちおーらち遊だいや。あんさーにやー、親ー、お
母さんもお父さんも心配やるばーでーなー。
「うりー。人しかいないうが、男ねわらばーがやー、なー
うんぐどうないねー、あとーくぬ跡継じえーちやーなー
いがやー。んち、もうターリーー心配やしえーやー。ターリーー
やーなー親方部やみえーくどう、城内ぬ。親方部やみえー
やみえーくどう、どうーぬ男ん子ぬうんぐどうふー
らーやいねーなー、心配やしえーやー。なーいっべー

「えーひやー、モーヤー、モーヤー、いやー、ちやー、どうーーん走いなーひやー」言うしぬよー。むる、どうーーちゅいばーぐわーさーに。アタピーとうか田んどうーかやー、遊ばー遊ばーしょー。うぬばーにうり御玉一食べたんでい話あんぶー。

あんし、アタビチャーヤが「二ち玉ぐわーばーけーすし、
むる友だちとーどうー一人走いし、もう、友だちとー
歩かんたんで。あんさーにどう、伊野波ぬふらーモー^ム
イー、モーイー言うてね、むるふうーモーイー、モー^ム
イーして、友だちがほ。

「あい、私ね一玉持つちよーし、なーうち飲でーむんなー。しむさなー」でいやー、うぬままやしが、なー。わうりからがやー、あぬつ人よー優りたらーになー。わ

「うぬ、まーんかい入らんむんぬなー」「んかいくろ一けーなー」でいやくどう、うち飲でいねーんたんでい、くぬ玉ぐわー。言たんどー。うち飲まーに

表5 親方型
親方は位階名。王子、即司
に次ぐ高位の位階。また、間切の緑地頭
にたいする尊称。

第3ヌブジの玉 不思議な力を持った宝の玉 幸運をもたらすという。

一七〇〇)、本名伊野波盛平。毛氏八世。唐名モク盛。三司官を務めた上流士族。一六八八年、父の後をついで本部間引領地頭となる。一六九四年三司官に就任。沖縄の笑い話の代表的な主人公、頃智者として有名。

心配し、アヤー毎日よー、昔えー、ぬーやんでいが、ウカマンかいむる願事すしそー、なまやでいん。もう朝ん晩めん、うぬお母さの願事ばかーじやたんでい。

「なー、どうか、なーうぬ男ん子ぬ、うれーやー、人並みに真人間なちくいみそーり」んち念願さぐとうや、「またん、またんそーるむんなー」んでい言やーにや、後んかいみぐやーによ、ウカマぬだんかーきてー、親、親が拌るーるたんかー後んかいみぐやーに、ありやたんでい。なー、モーイがてー、神の神様ーゆんがしまさしみしそーんごーでいちあびーたんでい言やーによ。

「あ、くぬひやーやまた私にんかいあん言さやー」でいやーに、なーあとー拌まんないたんでいがらーやー。なんにんから拌まんたんでいるばーてー。

「えー、うんじゅがふいつちーいちうんぐどうしーねー、火ぬ神の神様ゆんがしまさぬ。なー入れーみそーらんどー」でい言ちあびーんたんでいやーにやー。うんじゅがいる御龍磯（ごりゆうせき）んでいやーによ、王のうさがいる御龍磯（ごりゆうせき）、龍ぬ口からぬ水ぬ走いたんよー。なーくぬ世（よの）なでいからるうまとたづくーちねーんなたる。出じーたさ、私たーが行ちーまでい。

「うぬ御龍磯（ごりゆうせき）ぬ前んじえーや、誰んうぬ近くんじえー小便やしそーならん」でい立札（たてふだ）ー立ていたくとう、小便すしー五貫（ごせん）でいがらやートウナーんでいがらーぬ罰金（ばっきん）ち書ちえーてんてー。あんさくとう、うり見じやーによ、モーイやー、

「はー、安物でーむんなー。なー、あんしそー五貫出じやしえーやー、私小便王様んかいうさがらりーるむ

アヤー 母 母上 おかさん 士族の身分で用いられる呼び方

東北カマ かまび、ここではかまどのいころにあるピタカン（かまど津）の校かいや。あんさくとう、

「えー、ふらー、ふらー、えー。モーイーふらー、あね。ていーちえー草履（くさり）、ていーちえー足駄（あしまた）、ぬーがい やー、えー」。あんさー先生が、ぬーがモーイー、いやーうんぐどうしそーん ちよーん。

「うれーアヤーが言付（いづけ）きやみしそーん。くれーたーりー言付（いづけ）き。たとくろんかいや、たとくろんぬ親ぬ言ちみしそーぐどーるやいびーる」。

「あはーつ」。なー、先生がつかりやるばーてー、これ。どつちも親、二人ぬ親かいや孝行（こうぎょう）やさやーでい、もーがつくりしそーみしそーるばーてー。うんぐどうやたんでい話しそーるばーとー。

あんさーに、御龍磯（ごりゆうせき）んでいやーによ、王のうさ

※4御龍磯 首里城瑞泉門の左下方に傍く島。石頭の龍頭の口から水が出来るので祀られる。かまどを模した三個の石をよりましとし、ウミチム（御三つもの）といふ。

※5五貫 昔の貨幣の単位。十錢（五十文分のお金）

※6トウナー 十貫（二十錢分のお金）六間き錢（一貫（一錢一千円）分を一本の繩にまとめ、その繩一本を十綱（トウナー）と呼ぶ。

んぬ。んだ、あんしえーさん」でい言やーに、小便す
しやー、お巡りんかい見らつてーんてー、うまぬ、城
ぬまーやーんかい。
「えー、えー、いやー、モーザー、いやーひやー、うまー
いやー見らんどうあるい。うぬ立札一見らんどうある
いーち、しぐかちみたくどうやー。
「うんやし見ちよーいびんどう。安物やいびーしょー。
私小便王様んかいうさぎらーるむんぬやー、うんぐ
どーる安物ぬあいびんなー、嘘ーるする」んちやく
とー、
「あんしえーひやー、ぬーんち書ちゅがー
「はー、うんじゆなーや、うまんかい小便し、打ち首
ぬ答んち書ちーねー、誰んうまねーすしょーうらん
さ。打ち首んでなー、五貫、トウナー、はー安物。皆
すんぞーー」でいぢよー、ならーさつたんでいぬ話んあ
んどー。これもモーイーやは、うんぐどうあいん。
あんざーに、モーインでいしょー、あぬ、前は小さ
いときから許嫁すしぇーやー、わらびそーんから。あ
の許嫁しぇーる女ぐわーとうや、うれーふらーやは
どう、なー女ぬ家から断てーんてー。
「もうこんなぶらーねーうちの娘はやらない」んでい
やーに。断たくどうや、断いがんち、モーイぬ家ん
かい、あまぬお父さのー、ターリーが断いが来やく
とー、きつさ断いが来よーんでいくとーなー、ビン
どうわかとーるばー、くぬ男、モーイーがるー。『は
はあ、今日や私ぬー断いが来よーつさやー』んでい思
やーに、きつさ門ぬ、門ぬ上んかいいちよーていやー、

ガキジユーしょーいて待つちや、門ぬ側ぐわーんか
い、上んかいし待つちよーるばーー。あんざーに、
出じーしや、ターリーーカタカシラ引つ掛けていよー、
許さんたんでい。見ちやくどううりがいやーに引つ掛
きてーたんでいがやー。
「ぬーがひやー、ふらー、いやーひやー、私力タカシ
ラーうんぐうどうーすん」と。
「掛きてーる縁のーなー、絶対はんでいやびらんどー」
でい言ゆうたつて。なーうり縁組さつてていどうう
しえーやーなー、夫婦ねー。
「掛けたる縁のーはんでいやびらんどー」でい
言やーにや、もう仕方ならんでいやー、はんちやーん
などーさやー。
「なーしむさひやーなー、いやーんかいくいーさ
ひやーー」んでい言やーに帰いみしぇーたんでい、ター
リーや。

「もう仕方がない、もうそのままやるさ」って言つたつ
て。こんな話もあつたさーねー、モーイーなどは。
それで、最後にまた、あんしえー言やーや、薩摩ぬ

国渡いしょーやー、三つの御用んでいや。あの、なま
あしょーやー、あの奥武山の東んかいガーナームイン
ちあいやー、ガーナムイぬ、ガーナームイとう、灰編
ぬ御用とう、また、雄鳥ぬ卵んでいし、三ちぬ御用さー
にや、くりが切りほんさーに。薩摩ぬ國から三ちぬ
御用でーなー、沖縄ぬ國んかいや。むりな願がたしょー
るばーー、あまから。なー、うりどうが考やーには
んでいてい。

ガキジユーしょーいて待つちや、門ぬ側ぐわーんか
い、上んかいし待つちよーるばーー。あんざーに、
出じーしや、ターリーーカタカシラ引つ掛けていよー、
許さんたんでい。見ちやくどううりがいやーに引つ掛
きてーたんでいがやー。
「ぬーがひやー、ふらー、いやーひやー、私力タカシ
ラーうんぐうどうーすん」と。
「掛けたる縁のーなー、絶対はんでいやびらんどー」
でい言ゆうたつて。なーうり縁組さつてていどうう
しえーやーなー、夫婦ねー。
「掛けたる縁のーはんでいやびらんどー」でい
言やーにや、もう仕方ならんでいやー、はんちやーん
などーさやー。
「なーしむさひやーなー、いやーんかいくいーさ
ひやーー」んでい言やーに帰いみしぇーたんでい、ター
リーや。

「もう仕方がない、もうそのままやるさ」って言つたつ
て。こんな話もあつたさーねー、モーイーなどは。
それで、最後にまた、あんしえー言やーや、薩摩ぬ
国渡いしょーやー、三つの御用んでいや。あの、なま
あしょーやー、あの奥武山の東んかいガーナームイン
ちあいやー、ガーナムイぬ、ガーナームイとう、灰編
ぬ御用とう、また、雄鳥ぬ卵んでいし、三ちぬ御用さー
にや、くりが切りほんさーに。薩摩ぬ國から三ちぬ
御用でーなー、沖縄ぬ國んかいや。むりな願がたしょー
るばーー、あまから。なー、うりどうが考やーには
んでいてい。

第三章 近世琉球の成人男性
の髪型。沖縄風の髪。

第三章 薩摩 薩摩藩のこと。現在の鹿児島県西部にあった薩摩島津氏を藩主とする。一六〇九年に筑前国に侵攻し、以降支配下に置く。

あまーなー、御城ぬ内えーなー、みんな前まぎーたー

が、揃りみそーやに、

一薩摩ぬ国から三ちぬ御用ぬあるむんなー、うれー

ちやーしはんちやらーしむがやーんち、みんな揃り

てー別い、別いしみそーちやーんでい、親方部ぬちやー

や。 「ちやーしはんちやらーしむがやーんでい。あんさー

に、モーイーややー、お父さのーなーめんそーらん。

あん人だーん親方部ぬくどう揃りーしょーやー、

「今日」ターリーさい、今日やうんじゅぬむのー私が

行いちやびーさーでい、言やーにや、

「親ぬ御用どうやんむん、いやーが行けーひやー

ちやーすがー、

「あんしおー、うんじょーな一心配しどうるばてい

どめんしおーるむんぬ、私がる行ちゅるーんでい

言やーにや。行じやーにみ、

「ぬーがひやー、モーイー。いやーやあらん、ターリー

るやんどーーでい、ちよーん、

「私つたーターリーや産催しそーいびーん」でいたん

でい。しぐちゅけーんなかてーやー。

「ぬーひやー。男ぬんひやー産催しんちあみーんちよー

ん。あんでいるくどう、

「やるい、やくどううんじゅなーたー、あんしおー

男ぬ、雄鳥ぬ卵、やくどう、とー、うまやいびーさーでい

やーにやー。一ちえーなどーしょー。

また、灰綱ぬ御用でい、しょー、

「灰さーに綱のーでいくー」んでいいしおーなー、ま

た、むちかしえーやー。だてーんぬ大綱のーやーにや、

しゆく強ぐのーやーに、焼ぢやーにてーなー、燃ーさー

に、うぬまま。燃ーちえるまま持つちちやーに、

「うり、うねー綱のーらつとーいびーさー」んでい持つ

ちちえーたんでいやーに、

「あはあ、んちや、んちやー」もう、綱燃やしてうぬま

ま綱などーしょーやー。

あんさー、また、あのガーナムイ、なまんムイグワー

あんよーやー、昔から。

「うぬ、うぬムイ持つちくー」んでい、言たんでー、薩

摩の國んかい。うんすとー、

「あはあ、あんどうやいびーるい。とー、あんしおー、

ムエー、ムイややー、ちやんどううまんじ準備しおー

びーしが、乗しーる船ぬねーくんどう、うんじゅなー

から船持たしみそーれー。乗しちちやーびーさーん

でい、言うて、はすしたつてよー。だー、うぬムイ乗しー

る船ぬーあまからー持つちえーくららんしょーやー。だ

から三ちぬ御用、うりどうーーんさーにはんちやんち

よー。もう、これもう、頭の偉いもんになたるばー

てー。

「モーイよーやー、なー、いやーやや、沖縄ぬ国ねー

なーい、やーぐとーる頭持つちよーしょーうらんぐ

とう、なーあまんかい御用さーにてー、いやーが望み

ぬむのー、ぬーやでいんなー、いやーが褒美ーくいー

さーでい、言ちやぐどう、

前まぎーたー木幹直視すると前
が大きい人たち」。背などを大きく結ぶ
上古階級のことを指したものか。



一日だけ、うんじゅなー薩摩ぬやー、王様ないふさんでー。

「うぬ、うり裏美いーびさーんちやくどう、

「いー、なー、うれーしむんどー。とー、一日だけーいやー王様なさんち、いしたくどう、うねひやー、なー書類出じやちくーわ」んでいやーに。沖縄ぬ上納物書類むる、むる取い上ぎさーに、沖縄や助かどーるばーてーやー。

だから人間ぬ知恵んでいしえー、うつびぐわー

んでい言らんやー。知恵というものは大事なむんどー、やー。いつたー勉強ゆーさんでいから。勉強ゆーしよー。たつた今からぬ世ぬ中よー、知恵ぬ世ぬ中がどんどん出でていちゅーぐどうてー、出でていちゅーぐどう、うんと勉強さーに、うつびんでい言らん知恵うくくりよー。うん、いつペーちゅくりよー、しづ。

（共通語訳）

（モーイは）生まれたときから人とは変わっていたのに。変なあかんたれ、あかんたれな格好してね。半分たわけ者みたいな、半分氣のふれた格好をしてね。友だちはまったく一緒に行動しないわけ。なにもかも自分一人での行動。

田んぼに行ってね、カエルが喧嘩しているのばかり見てね。ある時によ、この蛙がだよ、ヌブシの玉といつてね、変な玉。カエルたちが一人ずつ、一人ずつ取り合いっこするのを眺めてね、

「あれ、こいつらはなにを取り合っているのかな」と言つてね、「四、カエルが取り合いつこして、玉を奪い合つていてのをよ、

「こいつら、取り合いつこして玉と遊んでいるな」と、

その玉を取つてね、持つて家に帰りながらね、「この、どこにもしまえないものは、もう口に含んでおこう」といつて（そうしたら）、飲みこんでしまつたんだって、この玉を。言つていたよ。飲み込んでしまつてね。

「あれ、私は玉を持つていたものを、もう飲みこんでしまつたのか。まあいいや」とそのままにしたけど、もう、それからがね、あのは優れ者になつたつてよ。子どもの時つてよ、これは。田んぼで、田んぼで。そう、それで、カエルが二匹玉を取り合つてのを、またたく友だちは（つきあわないで）、一人で行動してもう、友だちは行動しなかつたそうだ。そういうわけで、伊野波のばかたれモーイー、モーイー言つてね、みんなばかたれモーイー、モーイーと呼んで、友だちは。

「おい、モーヤー、モーヤー、おまえ、いつも一人で行動するのかよ」言つんだがね。いつも、一人で行動してね。カエルとか田んぼとかね、遊びあるいはね。そのときにその飼玉を食べたという話があるよ。

それで、なにもかもそんなふうにしてね、いつも飼玉を抱えて喧嘩させて遊んだりね。そうしてね、親は、お母さんもお父さんも心配であるわけだよね。

「この一人しかいない男の子がねえ、もうこんなになつてしまつたら、あとはこの跡継ぎはどうなるのかなあ」と、もう、お父さんは心配だよね。お父さんは親方の位でいらっしゃるから、城内の、親方の位でいらっしゃるから。自分の息子がこのようにたわけ者であつたら、心配だよね。もうたいそう、心配して、お母さんは毎日ね、昔は、なんだつたか、かまび（火の神）になにもかも願い事をするから、いまでも。もう朝も晩も、そのお母さんは願い事ばかりしていただつて。「もう、どうか、もうこの息子を、この子を、人並みに真人にしてくれださいませ」とお祈りしたら、「またも、またもお祈りしているの」といつてね。（かまび）の後ろにまわって、かまびの火の神の真向かいにだよ、親、親が拝んでいる真向いの後ろ側にまわつて、こうだつたつて。もう、モーイがだよ。

「一日中ね、あなたが一日中いてお願ひごとしたらね、それはもう、あの、その火の神の神様はうるさがつてしまわれますよ」とわめいたんだつて言つてね。

「あ、こいつはまた私にそういうね」といつて、もう、ついに拝まないようになつたんだとかね。

「ねえ、あなたが一日中そのように（拝んでばかり）していたら、火の神の神様はわざらわしいよ。もう（願いを）聞き入れなさらないよ」と言つて騒いだつていつてね。それから拝まなかつたというわけだよ。

そしてね、なんというか、お父さんがだよ、履いていけ」とおっしゃつたので、

「はい」。また、お母さんは、「そうではないよ。今日は天気は晴れるのに、草履を履いていきなさい」とおっしゃられたのでね、「はい」。またお母さんにも「はい」お父さんにも「はい」と答えてね。それで、片方は草履、片方は下駄を履いてこちらにおいでになつたつて、学校に。そしたら、

「やい、ばかたれ、ばかたれ、やーい。ばかたれモーイー、そら、かたつぼは草履、かたつぼは下駄、なんだおまえは、やーい」。それで先生が、「なんでモーイよ、おまえはそのようにしているのか」と聞くと、

「そっち（草履）は母上の言い付けです。こっち（下駄）は父上の言い付け。一親にね、二親のおっしゃつるようになります」と。

「あはーつ」。もう、先生はがつかりしているわけだよ、これ。

「どつちも親、二人の親への孝行なんだね」と、もうがつくりなさつてらつしやるわけさ。そうだつたつて話しているわけだよ。

それから、御龍橋といつてね、王の召しあがる御龍橋といつて、龍の口から水が流れていたんだよね。もう今の時代になつてからそこは壊してしまつてなくなつたんだ。（水が）出ていたよ、私たちが行つたときまでは。

「この御龍橋の前ではね、誰もこの近くでは小便はしてはならない」と立札を立てたから、小便する者は五

貴だかトウナーダかの罰金と書いてあつたんだって。

「そうしたら、それを見てね、モーイはね、
「ほん、安いもんだね。もう、それなら五貫出したら

ね、私の小便を王様に召し上がつただけるんだ。
どれ、それならしてみよう」小便するのをね、おまわ

りに見られたんだろうねえ、その、城の護衛に。
「おい、おい、おまえ、モーイ、おまえってやつは、
おまえはそこにあるものが見えないのか。

おまえはそこにあるものが見えないのか。この立札が
見えないのか」と、すぐつかまえたらね、
「それは見てますよ。安いものですから。私の小便

を王様に差し上げるというのに、こんなに安いものがあ
りますか、嘘なんじよ」と言うと、

「そしたら、なんて書くのか」

「あーあ、あなたがたは、そこに小便する者、打ち首

の刑だと書いたら、誰もそこにする者はいないよ。打
ち首といえば、五貫、トウナーハはなんとまあ安いもの。

皆（小便を）するよ」といつて、教えられたという話
もあるよ。これもモーイーはね、そんなぐあいだ。

そして、モーイというのは、あの、昔は小さい時か
ら許嫁にするよね、子どものときから。あの許嫁の約

束をしてある娘どね、モーイは馬鹿者だから、もう女
の家から断つたんだって。

「もうこんな馬鹿者にはうちの娘はやらない」といつ
て、断つたのでね、断わりに行くといつて、モーイの

家に、あちら（娘の家）のお父さんが断わりに來たの
を、さつき断りに來ているということをね、ヒンヒンとわ
かったわけ、この男、モーイーがだよ。

「ははあ、今日は私に断わりに來てあるんだな」と思つ
て、すぐに門の、門の上に座つておいてね、鉤を準備
して待つてね、門の側に、上に、座つて待つているわ
け。そして、（娘の父親がモーイの家から）出たらね、

お父さんの鬚を引っ掛けたね、はなきなかつたそ
うだ。見たらモーイが髪に引っ掛けたというのを、

「なんだこの、ばかやろう、おまえは、私の髪をこの
ようにするのか」

「掛けた縄ははずれませんよ」と言う
たって。もうこれは縄組されているんだからね、夫婦
というのは。

「掛けた縄ははずれませんよ」と言ってね、もう仕方
がないといって、はずさないとなつていてるよね、
「もういいよ、おまえにくれてやるよ」と言ってお帰
りになつたそうだ、お父さんは。

「もうしかたがない、もうそのままやるよ」って言つ
たつて。こんな話もあつたよね、モーイーなどは。

それで、最後にまた、それでいわばね、モーイが薩
摩の国に渡る話だからね、三つの御用、御用といつて
ね。あの、いまもあるよね、あの奥武山の東にガーナー
ムイつてあるし、ガーナムイの、ガーナームイと、灰
綿の御用と、また、雄鳥の卵というものと、三つの御

用でね、モーイが解決して。薩摩の国から三つの御用つ
てね、沖縄の国にね。むりな願い事をしているわけだ
よ、薩摩から。もう、モーイが考えて解決して。

あそこは、御城の内に、みんな偉い方々がお揃いに
なつて、

「薩摩の国から三つの御用があるんだが、これはどのようにして答えるべきのかな」と、みんな集まつては別れたり、別れたりなさつていたそうだ、親方のみなさんは。

「どのようにして答えるべきのかな」と。そうして、モーアはね、お父さんは（御城の会議）いらっしゃらない。もう、あの人たちも親方なので、会議にいらっしゃるからね。

「今日、父上、今日はあなたのかわりに私が行きます」と言つてね。

「親への御用だというのを、おまえが行つてどうするんだ」

「それなら、お父さんはもう心配してぐつたりなさつていて、私が行きます」といつてね。行つてね、「なんだ、モーア。おまえではない。（会議に呼ばれたのは）父上だよ」というと、「わたくしの父上は産氣づいてらっしゃいます」といつたんだって、すぐ一言でもつてね。

「なんだ。男が産氣づくというのがあるものか」といつたようだ。そうしたら、「そうですが、だからあなたがたは、それなら男の、雄鳥の卵というのは、だから、ほら、そういうことですよ」といつてね。一つは解決しているよね。

また、灰綱の御用のことはね、

「灰で綱をなつてこい」というのはね、また、むずかしいよね。たいそうな大綱をなつてね、そのまましつかりなつてね、焼いたんだってね、燃やして、そのま

ま、燃やしたまま持つていつて、

「ほら、このように綱がなわれていますよ」と持つてきていたといつて、

「ああ、ほんとだ、ほんとだ」、もう、綱燃やしてそのまま綱になつているからね。

そして、また、あのガーナムイ、今も丘があるんだよね、昔から。

「その、その丘を持つてきなさい」と言つたんだって、（丘を）薩摩の国に。そしたら、「あはあ、そういうことですか。さあ、それなら、丘は、丘はね、ちゃんとここに準備してあります、乗せられる船がないので、そちらから（わたくしども）船をお持たせください。乗せてきますので」と言つて、（この問題も）解いたつて。ほら、この丘を乗せられる船は薩摩から持つてはこられないよね。だから三つの御用、モーア一人で解決したつてよ。もう、これもう、頭の偉いもんになつたわけ。

そしてね、

「モーアよ、もう、おまえは、沖縄の国にはおまえのような頭脳を持つている者はいないから、もう薩摩への御用をしたということで（その功に対し）、おまえの望むものを、なんであつても、おまえに褒美をやろう」というと、

「私はなんの褒美もほしくありませんが、ただ一日だけ、あなたがた薩摩のね、王様になりたいです」と。

「その、それを褒美にもらいたいです」といつたら、「うん、もう、それはできるよ。そら、一日だけはお

まえを王様にしよう」と、(王様の座に)据えたら、あれまあ、もう、

「書類を出してこい」といつて。沖縄の上納品の書類をみんな、みんな取り上げてね、沖縄は助かっているわけだよ。

だから人間の頭の知恵というものは、これっぽつと言えないね。知恵というものは大事なものだよ、ね。あなたたちは勉強をよくしないとね。勉強しつかりしなさいね。だんだん今からの世の中はね、知恵の世の中がどんどんどんどん出てくるからね、出てくるから、うんと勉強して、こればっちと言えないほどの知恵を養きなさいね。うん、たくさん養きなさいね。

② 床下勉強・墓の恩・難題・一日殿様

島袋ウシ (明治四十二年生) 池原

〔方言原語〕

モーイ親方一、やつぱしな一、学校歩き一ね一むる人ぬね一びしち歩ち。あんさーに、うんぐどう一しちな一学問の一あんしょーはんでーさん。夜なーないに、人ぬ寝どーるばーや、またどう一や床下んけ一入人ぬね一びしち歩ち。あんさーに、うんぐどう一しち使たい、学問さい。また屋とうどうまー、むる人ぬね一びしち歩ち。ヒーッヤー殺さーが見じーねー、うぬヒーッヤー殺さー、博労んしち。またウーフー殺さーが見じーねー、ウーフー殺さーんしち。またあの、ぬんでいが、うんぐどうーしち、しーしーしち、「とー」んでい言ちなふーじーでーくどう、うりモー

イ親方んでいしそー。

あんさーにまた、洗骨、人ぬ、夫婦おじーんおばーん二人がどう一ぬ子ぬ洗骨しーがんでーいち、骨ぎれー

しーがてー。あんじーぬ轟きけーありさくとう、ランブぐわーちきてー、昔ぬランブぐわーちきてー、あんし、うんぐどうーし骨タマイ取いんでーちさくとう、うぬモーイ親方ぬ来やーに、

「ぬーが、おばーさん、おじーさん、うんじゅなーやあんし夜からうんぐどうーすが」んぢやくとう、私つた一や産しむぬ子んうらん、貧乏者なでーい、人ぬ手んかかいうーさんたきなつてーいるかんし、なー、人手かかいかーありやくとう」んでい言ち。

「なーかんがんしやんどーやー。私つた一やかんし骨ぎれー、夜トゥールーぐわーちきてーふんどーやー」

んでい言ぢやくとう、「とーとー、あんしょー、んだ、私水汲いでーちやーに、まじゅん加勢さびら」でーい。うぬモーイ親方ぬまじゅん加勢ちー、あんしら、「どー」んでい言ちさくとう。

また、ぬんでいがなー、親んけー、男親んけー、う

りがフルフルなでーからー。なー、くーはんえーかなーむる人ぬねーびびかーんしちふたんでーいむんぬー、フルフルなたくとう、ふりたねーびーしち、あんしちそーんでーいむんぬ

男親んけー唐から手紙ぬ來よーるばーてー。卵どう、雄雞ぬ卵どう、また、ぬんでいが、葉灰どう、またうりから、なーちぬーやたがやー、三種類。

セーヒージャー 山羊。おもに食肉用途

で飼育される家畜。

セーヒージャー 山羊。おもに食肉用途の家畜。

セーヒージャー 山羊。墓地である開墾經過した遺骨を取り出し、洗い清める改葬儀式のこと。

セーヒージャー 死体を墓に入れて腐らせ、きれいにするということをいふ。

セーヒージャー 死体を墓に入れて腐らせ、きれいにすることをいふ。

「三種類持つちくー」んでい言ちさくとう、あんさく

と、モーイ親方ぬ

「行ちゅんーでい言ちさくとう、親ぬ

「いやーが行きーねーなー」大事ないくどう、やらさ

ん

「なー、うぬよーぬ、うりんけーあんし心配かきみそー

ち、枕かきんでいんあんなー。いかなしんあんしえー

ならん。私が行じはんすん」でい。

「いやーがほんしーさぬ」んでい言ちさくとう、

「大丈夫。私がーはんすん」でい。あんさくとうな、

今度ーなーうりやらちよーるばー。

やらちさくとう、あぬ、なんち言ーてーなー、

「薑綱灰ん、綱灰てー、綱のーーる灰綱、灰綱ん。ま

たうりから雄鶏め卵でいいしん、むるはんちよーる

ばーてー、三ち組みーな。あんはんちさくとう、

「うりんなーしむん」んでい。あん、うれーん、始りてい

約束、

「むしか私がうりはんしーねーや、私にんけー王様

なふるやーーんでい、モーイ親方ぬ言ちよーるばー。

あんさくとう、

「いやーがうりむるはんち、持つちえーるむんやい

ねー、いやーや、いやーまましみーんどー。今日一日

や、いやー規則守いんどー」んでい言ちさくとう、あ

れーむる明かちよーしょーやー。薑灰ん、また、雄鶏

ぬ卵ん。

「だー、雄鶏ぬ卵ー」あんちくとう、

「私つたータンメー」、男ぬ親一てー。

「ぬーんでーい、いやーや、男ん親呼べーるむんぬや、男ん親ー来ーんぶーい、いやーが来えーが」んでい。

あぬ返答せーるばー。

「私つたーターリーーや、産むゆーそーん」でい。

「産備しち来ーさぬ」でい言ちさくとう、またうわー

らぬ人ぬ、

「男ぬんひやー、子産ふんなー」んでい言ちえーるふー

じー。あんさくとう、

「ぬーが、男ぬん子産はんむんぬ、雄鶏ぬん卵産さびー

がやーーんでい、またうりんけー、たつけーはつとー

てーるばー、言葉ー。あんさくとう、うんぐとうー

しさくとう、うりんなー、また負きてい。

「いつたーや、薑灰ん持つちやんなー」んちやくとう、

「薑灰ーちゃんとう持つちえーびーん」んでい。薑ー

ちやつぶいんのーやーに、塙はんさーに焼ち、うぬま

ま、のーいまま、薑灰ーあるばーてー、綱なぎーな。

あんさくとう

「かんし持つちえーん」んでい、うりんかい。また、

「国まーらち持つちやんなー」でい言ちやくとう、

「綱ぬあいねーや、国まーらちゆる綱ぬあいねー寄

ていちゅーひが、うりん綱ーねーらん。寄してーくー

ららん」。うり、むる負きどーるばー、モーイ親方に。

あんさくとう、

「今ねー、私願ー通しー」んでい、モーイ親方ぬ言ちえー

るばー。あんさくとう、

第一タシメー 相談。おじいさん。土産の身分にある人に對して用いる呼び方。後述の文書から、ターリー（2歳）の胎り達いと思われ。記された年月「販売」

なー、うぬ頭ぬ前んけー。地頭下るさーに、うわーらぬ人下るさーにじうーがいーちょーるばーでー。あんしきくとう、うんぐどうーしさくとう、うまんけーちやつさん、うぬ弟子ぐわーぬちやーがうしぇーやー。

「あんしぇーならぬ」でい言ちやくとう、「ぬーが、約束ーあんしるやたる」んでい言ちやくとう、なー、うりんけー負きとーしぇーやー。あんしきとう、沖縄ぬ、くぬ上納物出じやしめーぬ証書でー、むるひつ切つち、けー燃ちえーるばー、前なちよーい、うりが、あんさー、沖縄や税金ぬんむるぬがーとーたんでー。モーイ親方ぬじやーに。

あんしきくとう、なーしまましまはらんなくとう、うまんけーちりん子ぬちやーがちやつさん居しえーや。親ふんでーい、うりーんけーかなーんばー、また、武ん頭丈がるあくとう。あんしきくとう、かなーんなたくとう、やっぱしなー、うれーうんぐとうーしさくとう、なーうんぐどうーし、うりが負かさーに。なー家けー帰てーいじやくとう、だてーんぬ祝儀やたんでーい。なー、うれー「國ー負かちぢやん」でい言やーに、

「いーばーなー、うりやーんち。

あんしぇーくとう、なー、うりがまた王勤めーそーでーるばー。はじめーぶりたねーびーつし、ぶりむんふーじーそーひが、後ぬ、なーいつべー出来物なやー

に、王様などーーるばーでー。うぬ話えー、うつさやさ。

〈共通語訳〉

モーイ親方は、やはりもう、学校に通つてゐる頃はいつも人の真似してすごして。それで、そういうことばかりしていて勉強はしようともせずにいた。夜になると、人の寝ているときに、今度は自分は床下に入つて勉強して。また、武もまた、人が見ていないあいだに梯の練習をしたり、勉強したり。また星は終日、人の真似ばかりしてすごして。山羊を屠殺する人を見れば、その山羊をつぶす仕事を、博労もして。また豚を殺す人を見れば、豚を屠殺して。またの、なんといふのか、このようなくやいにして人の真似をしたりして、「よし(私もやる)」と言つて、気がふれた者のようだつたから、このモーイ親方という方は。

それで今度は、洗骨、人の、夫婦、おじいさんとおばあさんの一人が自分の子供の洗骨をすると言つて、骨を清めるといつてだよ。そしてこの墓に洗骨に来て、ランプをともして、昔のランプをつけて、そして、このようにして骨をきれいにしようとしていたら、このモーイ親方が来て、

「なんで、おばあさん、おじいさん、あなたがたはこんな夜にこのようにするのですか」と聞くと、「うちは実の子どももない、貧乏者で、人の手を借りるものかなわないようなほどなので、もう、よそに迷惑がかかつてはいけないので」と言つて、「もうかくかくしかじか」ということなんですよ。私はこうして洗骨を、夜灯籠を灯してするんだよ」と言うので、

第一 地頭 地方に知行を与えられていた貴族。首里に住まい領地の統治・経営行政事務などは、その領地に住む平民の有力者のなかから任命された地頭代が担う。

「さあさあ、それじゃあ、ほら、私が水を汲んできて、一緒に手伝いをします」と。このモーア親方が一緒に手伝つて、

「やあ」と言って、手伝つて。

また、なんだったかね、親方に、父親に、モーアが年頃になつてからだよ。もう、小さい頃はいつも人の真似ばかりしていたというのに、年頃になつたら、気がふれた者のようにふるまつて、そんなふうにしていたというが。

(モーア) 父親に唐から手紙が来たわけね。卵と、

雄鶏の卵と、また、なんだったか、灰で綿わたした繩と、

またそれから、もう一つなんだったかねえ、三種類。

「三種類持つてこい」と言わされたので、それで、モーア親方が、

「行く」と言うので、親が、

「おまえが行くともう一大事になるから、行かせない」

「もう、このような、こんなことにそんなん心配なさつて、寝込むことがあるか。どうあってもこれはいけない。私が行って(難題を)解いてみせる」と。

「おまえには解くことはできない」と(お父さんが)

言つたら、

「大丈夫。私が解いてみせる」と。そういうことで、

今度はもうモーアを行かせたわけ。

(モーアを) 行かせたら、あの、なんとか言うものだよ、藁編灰も、綿灰だよ、綿を綿つてある灰編、灰綿も。またそれから雄鶏の卵というものも、すべて解いたわけね、三つの難題を。そうやつて答えたので、

「これでよし」と。そう、モーアも、始めて約束したのは、

「もしも私がこの問題を解くことができたらね、私を王様にするか」と、モーア親方が言つてゐるわけ。そうしたら、

「おまえがその難題をみな解いて、持つてくるのであれば、おまえの望むままにさせてやるぞ。今日一日は、おまえの規則を守るよ」と約束したら、モーアはみんな解き明かしたんだよね。藁灰も、また、雄鶏の卵も、「どれ、雄鶏の卵は」と言え、

「うちのタンメー」、男の親のことだよ。

「なんで、おまえは、父親を呼んだというのに、父親は来ないで、お前が来ているのか」と。その返答をしているわけ。

「うちの父は差気づいてらっしゃいます」と。

「産気づいて来られない」と答えた後、またえらいお方が、

「男というやつが、子を産むものか」と言つたみたい。

そうしたら、

「なんで、男も子を産まないというのに、雄鶏も卵を産むのですかねえ」と、またモーアに、やり返されたわけだね、言葉を。そうやつて答えたので、それもまた負けて。

「おまえたちは、藁灰繩も持つてきましたか」と言つたので、

「藁灰繩はちゃんと持つてきました」と。藁は大きくて、綿つて、塩をふりかけて焼いて、そのまま、綿つたま

ま、薙ぎ綱であるわけだよ、綱のまま。そして、「こうして持つてきつてある」と、それに(回答した)。

「國をまるごと持つてきたか」と聞かれたので、また、

「綱があればね、國をまるごと巻ける綱があれば引き寄せてくるけど、その綱がない。(だから)引き寄せはこられない」。これ、すべて負けているわけ、モーイ親方に。そこで、

「今度は、私の願いをかなえてくれ」と、※モーイ親方が言つてゐるわけ。すると、

「さあ(願いを言え)」と言つたので、そのとおりにして、言つたとたん、モーイは座つてゐるわけだよ、そ

の地頭の前に。地頭を下ろして、えらい人を下ろして自分が座つてゐるわけ。そうしたら、約束通りにした

ら、そこにはたくさん、その(地頭の)弟子の人たちがいるよね。

「そうはいかない」と言つたので、

「なんで、約束はこうだつたはずだ」と言うと、もう、モーイに負けていたんだよね。そうしたら、沖縄の、この上納品、出すべきお金の証書をだよ、すべて引き裂いて、燃やしてしまつてゐるわけ、目の前で、これ(地頭の)。それで、沖縄は税金もすべてまぬがれられたんだつて。モーイ親方がだまして。

すると、もう見るに見かねて、そこに(地頭の)連れのものたちがたくさんいるよね。(モーイを)やつづけるといつて、モーイ一人にかなわないわけ、また。(モーイは)武にも長けてゐるから。それで、か

なわないとなつて、やつぱりもう、これは約束のとおりにしたので、もうそのようにして、モーイが負かして。家に帰つていつたら、盛大なお祝いになつたんだつて。モーイが「國を負かしてきた」と言つて、

「よいときにもモーイに行つてもらつた、これは」と。

そういうことを成し遂げたので、もう、モーイは王府に勤めなさつてゐるわけ。はじめは狂つたまね、狂人のふるまいをしていたが、しまいには、もうたいてう傑物になられて、工様になつてゐるわけよね。

この話は、これだけだよ。

③ 書き損じ・夜勉強・難題

佐渡山ゴセイ(大正三年生) 城前

〈方言原語〉

(モーイは)いつもは遊んでゐるから、これもうなにもできないと思つたんでしょう。で、たまにこれが勉強して、習字書いてあるもの、そこに散らしてあつたつて。してこれをあの、そのお父さんが見て、

「はつきよー、この字は誰が書いたかねー。これ、あんし上手ぬ字書ちえーる、これ誰が」

「あぎじやびよー、くぬさくぐわーな、くれー私が書ち捨てていーしどうやる」と言うて、これからが、もう、お父さんがわかつたつて。これ、自分が捨ててあるもの、お父さん、また、

「こんな字よく書いてある、誰が書いたかねー」言うたら、

「あきしやびよー、これ、私が書ち捨てていてーしどう

「やんごと。やなしし捨ててしどうやんごと」言う
たから、

「あ、これどこで勉強したかねー」と、これからが、
お父さんが認めていたつて。それは床下ぬみーにして
いたつて。人が見ないところで勉強してたつていう
のに。夜したか、どうしてかわからん。人が一わ
からなかつたつて、これは。

「モーイやふらーモーイーるやる」と言いよつたつて。
それからね、内地からの、あれがあつたつて。
薩摩からぬの使者が来たさー! 沖縄から、琉球から
の、灰綿御用、恩納森しち御用とか、また雄鶏の卵ぬ
あれとか。これ、モーイ親方が、

「もう、お父さんたちは心配しているね。これはも
う、あっちから、こんなにあれしているけど、どんな
するか」と言って苦労しているときに、モーイーが、
「あ、うんじゅなーがーうりならんあらー私が行
ちゅさ。私が返答すさ」と言って、うん、こんな言い
よつたつて。

「いやー、あんし、うりないみ」言ゆうたら、
「大丈夫、うんさくぐわーぬーんあらん」と言つて行
きよつたつて。
で、それで、あれやつたつて。灰綿御用言ゆうたら、
綿綱ぬつて、焼いたからそのままあつたつて。
「とー、くりやさ、灰綿御用と言つたらこれだ」
「うり、でーじやつさー」言つて、これも、あの、承
諾しているわけさ、内地も。また雄鶏の卵御用言ゆー
たら、あれやつたつて。

（共通語訳）

（モーイは）いつもは遊んでいるから、（親は）モー
イはもうなにもできないと思つたんだしそう。で、た
まにモーイが勉強して、習字を書いたものをそこに散
らしてあつたつて。そしてこれをそのお父さんが見

「ぬーがやー」あぬー、お父さんはなんと言つたか、
モーイ、モーイ親方、お父さんの名前はなんと言つた
かわからうんなー、

「その人の御用やるむんぬ、いやーが来やる」言ゆう
たら、

「お父さんは産婦して来られなかつた」つて。して、
あの、

「ぬーが、男ぬん産むゆーすみ。男ぬん子なすみ」
言ゆうたら、

「ぬーが、うんじゅなーや、雄鶏ぬ、男ぬん子生すぐとう
る、雄鶏ぬ卵ぬありするさい」つて言つてから、それ
で負けていたつて。とつても切れよつたつて。

して、あの、恩納森しち御用言ゆうたらよ、
「恩納森ひいて持てきなさい」言ゆうたら、恩納森
しち御用と言つたら、

「恩納森やしちゅしが、うり乗せーる船持つちくーわ」
言つたら、だー、船がないから、もう、これも負けたつ
て。恩納森しち御用はこれだつたつて。

「恩納森はしちゅしが、うぬ船持つちくーわ」言ゆう
たら、もう、船はないから、これも負けだつたつて。
で、それで、あれやつたつて。灰綿御用言ゆうたら、
綿綱ぬつて、焼いたからそのままあつたつて。

* 内地 沖縄西城から見て日本本土を指す。近代の日本語共通語において、本國、あるいは国内という意味で用いられる言葉。

「なんとまあ、この字は誰が書いたかねえ。これ、こんなに上手な字を書いてある、これは誰が」（と言う）のでモーイが

「おやまあ、これくらいのもの、これは私が書き捨てたものなんだ」と言って、これからは、もう、お父さんは（モーイの実力を）わかつたって。これ、自分が捨てるもの、お父さん、また、「こんな字をよく書いてある、誰が書いたかねえ」と

言つたら、「あれまあ、これ、私が書き捨てたものなんだよ。下手なものを捨てたものだよ」と言つたから、「ああ、この子はどこで勉強したかねえ」と、これらがお父さんが認めていたって。それ（勉強）は床下でして、いたつて。人が見ないところで勉強していたつていうのに。夜したか、どうしていたかわからん。人はわからなかつたつて、モーイが勉強していることは。

「モーイはたわけ者モーイだよ」と言いよつたつて。

それからね、内地からの、あれ難題があつたでしょ。薩摩からの使者が来たさーねー。沖縄から、琉球からの、灰綱御用、恩納森引き御用とか、また、雄鶏の卵のあれとか。これ、モーイ親方が、「もう、お父さんたちは心配しているね。これはもう、あつちから、こんなにあれしているけど、どう対応するか」と言つて苦労しているときに、モーイーが、「ああ、あなたがたにこれができないのであれば、私が行くよ。私が返答するよ」と言つて、うん、こんな

言いつたつて。「おまえ、それで、それ（問題を解くこと）ができるか」と言つたら、「大丈夫、これくらいのことなんでもない」と言つて行きよつたつて。

「それで、あれやつたつて。灰綱御用言うたら、綱、綱を掏つて、焼いたからそのままあつたつて。

「さあ、これです、灰綱御用と言つたらこれだ」「これは大変だ」と言つてこれも、あの、承諾しているわけさ、内地も。また雄鶏の卵御用と言つたか、モーイ親方、お父さんの名前はなんと言つたかわからんなあ、

「なんでね」、あのう、お父さんはなんと言つたか、モーイ親方、お父さんの名前はなんと言つたかわからんなあ、

「その人への御用だというのに、おまえが来たのか」言つたら、「お父さんは産気づいて来られなかつた」つて。して、あの、

「なんだ、男でも産気づくのか。男でも子どもを産むか」と言つたら、「なんですか、あなたがたは、雄鶏の、男が子を産むよう、雄鶏の卵も持つてこいと言つたのですよね」つて言つてから、それで負けいたつて。どつても（卵が）切れよつたつて。そして、恩納森引き御用と言つたらね、

「恩納森を引いて持つてきなさい」と言つたら、「恩納森は引くが、それを乗せられる船を持つてこい」

と言つたら、ほら、船がないから、もう、これも負けたつて。恩納森引き御用はこれだつたつ。

「恩納森は引くけど、その（恩納森を乗せる）船を持つてこい」と言つたら、もう、船はないから、これも負けだつたつて。

④ 下駄と草履・床下勉強・難題

久場カメ（大正三年生）園田

〈方言原話〉
アヤーがんタリーーがんや、また、あぬ、ぬーんでい

がむぬ言ーちきしーねーよー、あんしー

〔アヤー話ん聞きわる、アヤーが言みしえーしん聞き

わる、タリーが言みしえーしん聞きわるやくどう〕でい

やーいや、足駄どうや、下駄と草履どうくむたんでい。

〔さばーんでいねー、草履てー、草履。〕

〔ぬーんち、いやー、うろー、うりあんしくどーが〕でい

言ーねー。

〔アヤーが言みしえーしん聞きかねーならんや、タリーーが言みしえーしん聞きかねーならん〕ちよ、あん

言ーたんでい。

あれーまたよ、あぬ人よーや、学問のーしえーねー

んふーじーやしがよ、夜なー人ぬ見だんあいにすたん

でい。床下ぬみーなかい、力ーサぬ莫よー、力ーさん

かいてー、うりんかい墨し書ちみしえーたんでい。床下

ぬーんかいうつちやんぎてーたしよー、うんぐどうー

しーるばーー、あの、隠つきどーいて書ちゅたん

でい。勉強そーみしえーたんでいどー。

あんー、親のー、

「うんぐどーるふりむんぬ、ぬーんないんなー」でい

言ちそーしがてー。大和からぬ難題ぐどうんでーや、

「薔絹のーでいくー」とうかや、

「雄鶏ぬ卵」とうかでー。また、ぬーやたが、なー

ちえー。雄鶏ぬ卵どうか、灰絹どうか言ーちきらつどー

るばー。

タリーーがーわかみそーらんしが、うぬ子のーや、

うりやしまー。爛ん焼ちやーに、焼ちーねー、型持つ

ちんちゅんとうーねーや、焼ちやーなーうぬまましー

ねー灰なーとーしんや、爛うまんかいのーらつとー型

ぬあしえーや、灰絹などーんよ。

雄鶏ぬ卵んでいねー、また、

「ぬーが、タリーーやめんそーらんたる」でいちやぐ

とうや、

「私つたータリーーや産催そーみしえーる」言たん

でい。

「ぬーが、男ぬん産催すんなー」でい言ちやぐどうや、

「ぬーが、あんし、うんじゅなーや雄鶏ぬ卵持つちくー

でい言たのーあらにーでいちょー、言ちよーるばー

てー。

〈共通語訳〉

お母さんもお父さんも（両方が）ね、また、あの、

なんだかものを言いつけたらね、すると、

「母上の話も聞かないと、母上がおつしやることも聞かないといけないし、父上がおつしやることも聞かな



いといけないから」といつてね、下駄とね、下駄と草履とを（両方）履いたんだって。（方言の）「さば」と

いうのは、草履だよ、草履。「なんで、おまえは、これをそなやつて履いているのか」と言うと、

「母上がおつしやることも聞かないといけない」とね、父上がおつしやることも聞かないといけない」とね、そ

う言つたんだって。あの人はまたね、あの方はね、学問はじでないよう

に見えるけどね、夜に人が見ていないあいだにしていたんだって。床下で、カーサの葉ね、カーサにだよ、

それに墨でお書きになつたつて。床の下に放り投げてあつたのでね、そのように（勉強を）なさつていたわ

けだよ、あの、隠れて書いたつて。勉強なさつていた

ね、

それで、親は、「こんな馬鹿者が、なにができるものか」と言つておられたんだけどね。大和からの難題ごとというのが

「藁編を編つてきなさい」とかね、「雄鶏の卵」とかつて。また、なんだつたか、もう一つは、「雄鶏の卵とか、灰綿とか（持つてこい）」言いつけられているわけ。

お父さんはおわかりにならないが、その子にはね、わかるんだよ。綿を焼いて、焼いたら、型を持つておいておくあいだは、焼いたのをそのままにしたら灰になつているものをね、綿がそこに馴われていてるまま型

があるからね、灰綿になつているんだよ。

雄鶏の卵というのは、また、

「なんだ、お父上はいらっしゃなかつたのか」と聞かれたのでね、

「私もの父上は産気づいてらつしやいます」と言つたつて。

「なんだ、男が産気づくのか」と言われたのでね、「なんで、それなら、あなたがたは雄鶏の卵を持って

こいと言つたではありませんか」つてね、言つてゐるわけだよ。

⑤ 一吹き煙草・床下勉強・難題

星宣ハル（大正三年生）安藤田

（方言原話）
芝居で見ただけどね。

雄鶏の卵んでいしょーてー、うぬ親ぬるあまんかい、うり、行ちびちやしが、うぬつ子、「モーヤー、モーヤー」しじ、芝居なかいあたしがよー。

ひつちーなー、

「煙草ん一吹き吹きーんでい言ーるんしおー、しぐ、皿ぬいつぱいなー入りやーに、しぐなー吹ち、

「一ふくら吹きーんでい、ぬんぬんでいやーに、むる人どー反対しょーうたんでい、うぬ子、

また、床下ぬみーんじ勉強すたんでい、うれー。あんさくとうや、うりがよー、

「うんじょーめんしきーぎざーあらん。私が行ぢやびーざ」でい言ち、あまんかいぬ、内地んかいぬ、う

幸運した中綱方言による演説。奈良県後・土産の芸能家が生活のために始めたといわれ、那劇を中心とした演じられることになり、地方漫遊も行なわれた。地方でも、地元の八月十五夜の遊び（ムラシジ）の出で物として、那劇の役者などからセリフや所作、語りを教わった素人たちが演ずるムラシバイも盛んに行なわれた。

れ
し

「うぬ灰綱でいしえー、どうやるやしむんどうやる」でい

茶一ヒーラ へら。農具の一つ。苗を植えたり抜いたりするもの。

「いやー、ふらーひやー。あんし、ぬーん勉強べんきょうなんざんそーてい、いやーがうんなむんないみんでい言ちそーんが、うれーまた行いるばーやんてー、えーりん、どうーやわかいくとー。

行じやくどうよー、内地うていよー、雄鶏ぬ卵あまー
注文そーしえーやー。

「私つたーターリーや産催しし、来ゆーさびらん。私
が死やうとしないで、うや、ほんうで、

「男ぬん産催しすみ」 んちやぐどう、

「あんし、うんじゅなー や雄鶏め卵また持つちくーん
でいしが、雄鶏め卵産さびーんなー」んでい言ちや

「土寺つちへー」ふう、うつ、まあえーもー。

「うんじゅなーが、船とう、うり壊するヒーラ、鍬、ヒー

「貸すヨー 壱セセヤーひーんとー ハルバーヒー
りーる船ぬあらー貸らしみそーり」でいちゃぐとう、

うりん、うぬまま、けーしまちょーんでい言し聞ちや
んどー。

これは芝居にあつたさー。この二つは芝居で見たの
が最もいい。

また、この灰綱ホシナガんでいしえーよ、あまなかいうしが、

アムトウめ下んがしうしか
「皆うんぐどうーし、ぬーんくいなー、ならーんぬー

ん言いちきらつていち な一頭うしと「んど！」で
ぢやぐどう、

共通語訳

老居で見かけられ

行くべきだけど、その子が（行つた）。

「モーヤー、モーヤー」といつて、芝居にあつたけ

卷之三

「煙草も」ふかし

血いぢはいに(煙草を)詰めてさざと吸て

人は反対のことをしていたって、この子（モーア）

は。

「あなたがおいでになるようなことではありません。

種が行きますよ』と言つて、あせりの内地への「

「私が行きます」と言ったので

「おまえ、この馬鹿者か。あんな、なにも勉強もしないでいて、おまえがそんな難問を解けるか」とおつ

しゃつたけど、この人（モーイ）がまた行つたわけなんだよ、たぶん、モーイ自身は（咎めが）わかつてるので。

（モーイが）行つたらね、内地でね、雄鶏の卵をあ

ちらは注文なさつてゐるよね。

「うちのお父さんは産氣づいて、來ることができませ

ん。（代わりに）私が來ました」といつたのでね、「男でも産氣づくのか」というので。

「それで、あなたがたは雄鶏の卵を持つてこい」というが、雄鶏でも卵を産みますか」と言つたので、それは、

それで済ませて。また、丘ね、「丘を持つてこい」って、これもあるよね。

「あなたがたが、船と、丘を壊すへラ、鍼を、ヘラを貸してくれれば、壊してきますよ。それを乗せられる

船があればお貸しください」と言つたので、それも、そのまま、済んでしまつたと言うのを聞いたよ。

これは芝居にあつたさー。この二つは芝居で見たのを覚えている。

また、この灰綱というのはね、あそこにいる人が、

土手の下にいるんだけど、皆このようにして、なにもかもできそうもないことを言つつけられて、もう頭をかかえているんですよ」と言われたので、

「その灰綱というのは、たやすいことだ」と言つて、教えたので、

「ああして解決できたのは、年寄りがいてこそだ」と言つて、みんな家に戻つたという話は聞いたよ。その

時に皆、土手の下から來たつていう話を聞いた。

⑥ 立小便・難題・一日殿様・立ち合い

瑞慶賀好子（大正十年生）城前

方言風俗

夜勉強しようつた。屋はもう仕事。魚ぐわ一釣やーして。わざつとうふらーふーじつし、ゲッターゲッターし。わざつとうふらーふーじーして、頭があんまり良

くて、あんぐどうーんかい「ミツチアマヤー」んでいしえー。

あんさーに、うれー魚ぐわー釣つち遊だい、また、魚ぐわーおーらしえーさいぬーさいつし、うんぐどうーし、いっべーありさーに、なー、男ぬ親のー、ふりむんちよ、

「さつこーぬ私つたーモーイー、なー、ちゃーすぐやーー」んちなー、ちゃー心配やてーるばー。お母さのーなー、ちやーうりがしぐありつしなー、よーよーしてー。ちやーなー、くーさるうつべー大事に育てていてーるばーてー。

うりがすぐ、あとーよー、首里ぬよーひー、墓標ぬ側じんじ側いんじ側しーるばーてー。墓標ぬ側んじや、うまんかい侍ぬちやーがや、うまんかい小便しふしがらん

なやーに、「うれー、うまんかい小便しみてーならん」でいやーに、

「うまんかいや小便する者のーや、ちやつさ罰金すん」でいち書書ぢやーたくどー、んちや、うぬモーイやよー、

「あはー、くれー小便、うま錢錢ぬあしが、あんしそー

東シナシチアマヤー 未詳。満ち足りずきてあまる。知恵がありすぎて常識外れまで至り奇遇に見えるということを言つたものか。

来3首里 瑞慶王国の都。王が居住する首里城を中心に、高士族、中位士族の居住区があり、瑞慶王国の政治と文化の中心となっていた。現在の那覇市首里地区。

うまんかい小便しんしむるばーなー」でいやー、あんさーにしぐ親んかいや、侍んかい見らつとーいてい小便しーるばー。あんさーとう、

「ぬーがさい、うまーや錢ぬあれー小便しんしむんち書かちえーるむん、錢出じゃしーしむるばーどうやいびーしーーやー」でい言やーに、錢ありしぬがーつて、

「あんしぇー、くれーなー、あんしぇーなーらん。合点なーん」でいやーに、しぐ首里グスクンかい連ていんじやーに、吟味しぇーるばー。あんさー、うまうどー

てい、うぬモーイーやなー、男ぬ親んいつペーぬらーてーるばーてー。

「いつたーモーイーやうんぐどうーしみてーなーんどーやー」んち。あんさーにうぬモーイーがまた出じてーいんじやーに親ぬかたちち、

「ぬーがさい、うまーやあんしうんぐどうし貼ーるむんや、錢ぬあしがー小便ししむるばーどうやいびーさに」んちやくどうや、

「とー、くぬひやーや、くれーんちやくんなーでーじなどーん」でいやーに、あんさーに親ぬかちやーがうりやーんばー、しぐ

「あんしぇーなーん」でいやーによ、いつべーなー、親ぬかちやー困らちえーるばーてー、うぬモーイーや。

あんさーに、あとうぬうしゆみねーよー、大和からや、九州からや、吟味さーが来、

「沖縄からや、綱次なち持つちくー」とうかや、

「沖縄ぬ国や、うまんかい持つちくー」とうかし、むくどう、

るあまから請求さつたくどう、すぐなー、

「雄鶏ぬ卵持つちくー」んち、

「綱、灰なち持つちくー」焼ぢやーに、灰なち。あん

しまだ、「雄鶏ぬ卵持つちくー」んち、あまかい請求さく

どう、また「雄鶏ぬ卵持つちくー」んち、あまかい請求さく

「沖縄ぬ國ぬ、船んかい乗してい持つちくー」んでい

さくどう、「うれーやーさい、私が行ぢやびーさ」んち、吟味す

る前ぬかちやーに、

「私が行ぢやびーさ」んち、

「いやーがんないんないやー。うんぐどーるくとー

いやーがーなーんしがーち、男ぬ親ぬ言ちよーしがる、

「あーさい、私が行ぢやびーさ」でいやーに、

あんさー、うぬモーイーやらちゃんで、あまかい、

大和ぬかい。あんさーとう、うりが、すぐ、あまぬ王様ぬ前ぬんじや、

「あんし、うれーやーさい、綱ぬん灰なち、うぬ灰ぬ

ちゃーし持つちくーらりーびーがでいちゃぐどう、

持つちえーびーん、私がーでいやーにし、

「とー、あんしぇー、うまんかい出じやーんちーでー

んちやくどうや、綱よ、燃ーさーに灰なち置つち、

きさみよー、はつきよーなこと同じ。あ

まのあっさ
驚きをあらわす感動詞。あ
きさみよー、はつきよーなこと同じ。
まうシムラン 知恵 分別 才能

※の意味 沟通。話し合い。

「うふいな——ぬ島乗し——る船ぬね——びらん」でいち言
ちえ——るば——て、あまんじ。

「うれ——んちやて——げ——ぬ人よ——あらんむん」でい
やーに、

「あんし、いや——や雄鶏ぬ卵——持つちち——んちやぐ
どうや、

「え——さい、雄鶏ぬ卵なさび——んな——でいで——あ
んし、うりんありさーに。あんさく——どうあま——驚ち、
うれ——、て——げ——ぬ人よ——あらんむん——でいやーに、
「と——な——、いや——やや、いや——が望むるぐ——とう、裏美
い——らすく——とう、ぬ——望むが——でいやぐ——とう、

「私ね——王様ぬ席んかい座ち、いちんにぶさいび——ん
でい——やぐ——どうや、

「ど——、あんしえ——、いし——。な——、うれ——、くりが
望むれ——やるむん——ちよ、いし——んちざぐ——どう、侍ぬ、
また下方ぬ人んちや——が、

「絶対ならん——ちよ、ありさく——とう、

「あ、うれ——や——王様が、

「くれ——な——あんいちいち——どう、うりが望む——まましみ
り——んでいいや——に。あまんかい——や——に、あんさ——

に、あまう——と——い琴ひぢやがち——な——、すばから太
刀入——て——いちゅ——しや、太刀入——て——いちゅ——しはんさ——

に、とうつかみ——や——に、

「あ、うり、私殺すんで——するば——い」でいやーに、
とうつかちありさーに、沖縄ぬ税金の——ぬが——たん
でい。沖縄ぬかい税金ぬんうほ——くや請求さつと——

し、うり——よ——はんち、むる焼きよ、ん——ちやくな

てい、証拠て、証拠。うまぬ殿様ぬ前なちよ——てい、
「証文箱——出じやしえ——」でいやーに、出じやさーに、
さくどう、うりよ、また、

「私ね——殿様やく——どう、ちや——しんしまび——らや——」
でい——言や——に、うぬうつさぬすぐ証拠むる引ちやや——

に、沖縄や、税金ぬが——て——るば——。
「あんさ——に、で——じな、な——、うれ——、しぐモ——イ
親方でいや——なかい——、しぐ、皆んかいあがみらつ
て——たんだい。

（共通語訳）

（モーアイは）夜勉強しようとした。昼はもう仕事。魚釣りして。わざと氣のふれたようなるまいをして、がたがたと左右の合わない歩き方をして。わざと氣のふれたようなるまいをして、頭があんまり良くて。あんなような者に「才走った者」というんだ。

そうして、モーアイは、魚を釣つて遊んだり、また闘鷄したりなんなりして、そのようにして、たいそう気ままに過ごして、もう、父親は、（モーアイのことを）馬鹿者だと、

「こんなにひどいうちのモーアイは、もう、どうするかなあ」と言つてね、いつも心配していたわけ。お母さんはもう、いつもモーアイがなにかするたび、もう、心配してなだめてね。いつも、小さいころは大事に育てていたわけだよ。

こいつがまた、のちにね、首里のだよ、墓標のそばで小便をしたわけね。墓標のそばでは侍の方々がね、

そこに小便してたまらないので、

「これは、ここに小便させてはならん」と言つて、「ここに小便する者は、これこれの額の罰金をする」と書いておいたら、すると、このモーイはね、

「ははん、これは小便、ここにお金があるけど、それならそこに小便してもいいというわけだな」と言つて、ね、そしてすぐ親にね、侍に見られながら小便しているわけ。そうしたら、

「なんですか、ここはお金があれば小便してもいいと書いてあるんだもの、お金を出せばいいということなんですね」と言つて、お金を出して免れて。

「それで、これはもう、そうはいかない。承知できない」といつて、たちまち首里城に連れていくて、尋問しているわけ。それで、そこで、このモーイはもう、お父さんもたいそう怒られているわけだよ。

「あなたのところのモーイーはこんなことをさせてはいけないよ」と。するどこのモーイーがまた出ていくて親の肩を持つて、「なんですか、そこにはああしてあるように（お金を）貼つてあるのに、お金のある人は小便してもいいということではないのですか」と言つたら、「なんと、このやううは、これにはまったくもう大変なことだ」といつて、それで親たちも心配しているわけ。「これではいけない」といつてね、たいそう、親たちを困らせているわけだよ、このモーイーは。

それで、ついには、大和からね、九州からね、調査する人が来て、

「沖縄からね、綱を灰にして持つてこい」とかね、

「沖縄の国を、ここに持つてこい」といつて、みんなちらから請求されて、すぐに、「雄鶏の卵を持ってこい」と。

綱ね、

「綱を灰にして持つてこい」、焼いて、灰にして。それからまた、

「雄鶏の卵も持つてこい」と、薩摩から請求されて、また

「沖縄の国を船に乗せて持つてこい」というので、（モーイが）

「これはですね、私が行きますよ」と、調査にきた人の前に行って、

「私が行つてきますよ」といつて、

「おまえにできるものか。こんなようなことはおまえにはできやしない」と、父親が言つたけども、「ああ、私が行つてまいりますよ」と言つて。それで、このモーイーを遣わしたそうだ、あちらに、日本に。

すると、モーイが、すぐ、あちらの王様の前に出てね、「それで、これにですね、綱も灰となして、その灰をいかにして持つてこられましょうかとおっしゃるの

で、持つてきました、私が」といつたら、「さあ、それなら、ここに出してみよ」と言われたので、綱ね、燃やして灰にして置いて、

「なんと、おまえは、そんなに知恵があるのか」と言つて、あちらがね、驚いてね、

「それで、おまえは、沖縄の国は持つてきたか」と聞

45

かれたので、「あらだけの島を乗せおおす船がございません」と答えたようなんだね、あちらで。

「こいつはどうもふつうの人ではないな」といつて、「それで、おまえは雄鶏の卵は持ってきたか」と言う

「これはまた、雄鶏でも卵を産みますかね」と。そうやって、この問題も解いて。すると、あちらは驚いて、「この者は、ふつうの人ではないんだな」といつて、「さあ、おまえにな、おまえが望みのままに褒美をやるから、なにを望むか」と聞かれたので、「私は王様の席に座つて、座つてみたいです」と答え

たので、「さあ、それなら、座らせよう。もう、これは、この者のお望みであるから」といつてね、すわらせようとする。侍が、また部下の人たちが、「絶対だめだ」と反対すると、「ああ、これは」王様が、「この者がそう言つているので、こやつが望むとおりにさせよ」と言われて。王の座にすわって、そうして、そこで琴をひきながら、そばから太刀を入れてくるので、太刀入れてくるのを逸らして、とつかまえて、「ああ、これは、私を殺すというわけか」と、とつかまえてやつけて、沖縄の税金は免れたんだつて。沖縄に税金もたくさん請求されているのを、それを解決して、ぜんぶ焼いてね、灰になつて、証拠つてね、証拠。その殿様を前にして、

「かれたので、あれだけの島を乗せおおす船がございません」と答えたようなんだね、あちらで。

「こいつはどうもふつうの人ではないな」といつて、「それで、おまえは雄鶏の卵は持ってきたか」と言う

「これはまた、雄鶏でも卵を産みますかね」と。そうやって、この問題も解いて。すると、あちらは驚いて、「この者は、ふつうの人ではないんだな」といつて、「さあ、おまえにな、おまえが望みのままに褒美をやるから、なにを望むか」と聞かれたので、「私は王様の席に座つて、座つてみたいです」と答え

たので、「さあ、それなら、座らせよう。もう、これは、この者のお望みであるから」といつてね、すわらせようとする。侍が、また部下の人たちが、「絶対だめだ」と反対すると、「ああ、これは」王様が、「この者がそう言つているので、こやつが望むとおりにさせよ」と言われて。王の座にすわって、そうして、そこで琴をひきながら、そばから太刀を入れてくるので、太刀入れてくるのを逸らして、とつかまえて、「ああ、これは、私を殺すというわけか」と、とつかまえてやつけて、沖縄の税金は免れたんだつて。沖縄に税金もたくさん請求されているのを、それを解決して、ぜんぶ焼いてね、灰になつて、証拠つてね、証拠。その殿様を前にして、

「証文箱を出せ」といつて、出させて、そして、それをね、また、

「私は殿様だから、どのようにしてもいいですよね」といつて、そのたくさんの証拠をみんな引き破つて、沖縄は税金を免れたわけ。

そうして、たいそう、もう、これは、モーイー親方といつて、それはもう、皆にあがめられていたんだつて。

⑦ 掛けた縁・龜と門・手の中の鳥・チューカー

金城良（明治四十年生）古謝

（方言原語）シエーモーでいしえーや、ありや、シエーモーでい

ち。
「縁組しえーる妻えーしみらん」でいちやくとうや、

門ぬんかい行じやーなかい、カンブーんかいカクガニ
かきーしえーやー、うぬ女ぬ親んかい、親んかいてー。
掛けーる針金ぬはんりらん」でいち。あんさーになー、

「妻しみんどー」んでい、言ちやくとう、うんにんねー
はんするばーやしえー。

ちょーどううりとーいぬむん モーイ親方でい
しえーや十一どうないたんでいしがや、親ぬ門開きー
んでいち、門造いたんでい。門んで、門てー、門。
門造たくどうや、どうしんちやーあびやーにや、龜か
たみていや、龜かたみていっち、

「なーが死にーねーくぬ門や壊ちる入りーるい。」龜

華一シェーモー モーイ親方のこと。本名の盛平のうち、名乗り字の盛せい)からいたあだ名と思われる。

来2カシマ カタカシラともいう。近世琉球の成人男性の髪型。沖縄風の髪。

来3カクガニ 掛け金。戸を開けたための用具。

来4龜 遺体を納めた棺桶を墓まで運ぶ未達の奥。

の「みぐらち」。仕方ならん、造いけ——しえ——たんだい。

十一「どうないだんでいんど——十一ないに。

「私^{わたくし}つた——ターリー——や門遁^{もんとん}やき——しが、うぬ龜^{かめ}の——みぐらんしがな——んでい言^{こと}や——に、すぐ、どうしんちや——むる集み^{あつみ}や——に。だ——うれ——龜^{かめ}、四人しか

たみぐらむんどうやくどう、どうしんちや——うほ——こ——うれ——持ちはつちゆしえ——や。持つちちや——に、「な——が死に——ね——くま——壊^{おち}る入り——るい。くれ——みぐらんしが——んち、龜^{かめ}見^みしたくとう、測^{はか}や——に、みぐらんなたくとう、また造^{つくる}つけ——ちえ——たんだい。うぬあたいの能力やたんだい。

あれ——わらびそ——いにから^{かわ}わと——たんだい。変わ——と——しえ——ちや——しやがれ——、鳥^{とり}ぐわ——やちかま——に、「くぬ鳥^{とり}ぐわ——や、生^{なま}ちちうるうるい、死^しじどううるい」んでい言^{こと}やくとう、戸^戸口^{くち}んかい——とん立^{たて}ちや——に、「あんし私^{わたくし}ね——出^だじ——るするい、入^い——るするい」。「入^い——ん」でいね——出^だじ——はいん、「出^だじ——ん」でいね——内^{うち}んかい——つ^づは^はいるは——しえ——。鳥^{とり}ぐわ——ん「生^{なま}ちちよ——ん」んでい——ね——、う^う飛^とばすしえ——や——、え——、「死^しじよ——ん」でい言^{こと}——ね——う^う飛^とばすい、「生^{なま}ちちよ——ん」でい言^{こと}——ね——、あぬ、むん殺^{ころ}すん。うりんちよ——どう理屈^{りく}え——むるあたと——ん。
「私^{わたくし}ね——出^だじ——るするい、入^い——るするい」ち。あんさ——に、仕方^{せいがう}ならん、ちや——うりね——負^ふき——るすんだい。またや、茶瓶^{ぢやうひん}でいしがあしえ——や、チユーカー——カーンでい

しがあしえ——や。

「あちだん茶^{ぢや}ふかん」でい言^{こと}やくどうで——、

「茶^{ぢや}ぬふちゅるえ——か——チユーカー——んかい入^い——つちよ——かな——んでい、かん言^{こと}うえ——るぐと——んや。言^{こと}やくとう、

「いや——や、確かチユーカー——んかい入^い——るするい」んち、蓋^{ふた}を開^あけて——るぐと——んよ——い。蓋^{ふた}開^あき——たんでいこう、言^{こと}たんでい。外^{ほか}——かんしけ——見^みじゅたんでいわんぬ、出して——はいたんでい。出して——はちやくどうや、うまんかいエド^{エド}でいるカ——ぬあしえ——や——、エド^{エド}でいる力^力。うぬカ——んかい入^い——つち、かんし、

「湯^ゆや沸^{わか}いて——るか——」んちあび——たんだい。「湯^ゆや沸^{わか}いて——るか——」んちあび——たんだい。

「ぬ——が、いや——、あまんかい入^い——つちよ——る」んちやくどう、

「ぬ——、私^{わたくし}ね——、今日^{きのう}、カ——んかい入^い——んでいる言^{こと}ちよ——る明日^{あさひ}入^い——んで——言^{こと}やんむん」んち、負^ふきて——るぐと——ん。

「チユ^チ——、カ——んかい入^い——ん」でい。や——、で——じど^ど、人ぬうれ——。うぬふ——じがあたんでい。

（共通語訳）
(モイー親方の呼び名は) シエーモー——というんだよね、あの人は、シエーモーと。『縁組していたが妻にはさせない』と言ったのでね、門に行つて、髪に掛け金をかけるよね、その(妻になるという) 女の親に、親にだよ。

水^{みず}2刀^二 井戸^{いど}。自然に湧いている湧き水^{みず}にもう。

※の上^{じょう}未詳^{みよ}

※1チユーカー 魚須のこぶ

「妻にさせるよ」と言つたから、そのときには必ずわけだよ。

ちよつとそれとは同じ（頃智を働いた逸話）で、モーイ親方という方は、十一歳になつてゐたそうだが、親方が門を開けるといって、門を造つたそうだ。門といふのは、門だよ、門。門を造つたのでね、友だちを呼んで、爺をかついで、爺をかついで、その、「あなたが死んだらこの門は壊してでも（爺を）入れるのか」。爺を回して。仕方がない、造りかえたそうだ。十一歳であつたそうだよ、十一歳で。

きている」と答えるは、勢いよく飛ばしてしまうんだよね。いや、「死んでいる」といえばね。「死んでいる」と答えるは勢いよく飛ばすし、「生きている」と答えるは、あの、にぎり殺す。これもちよど理屈はみんなあつてある。

「私は出ようとしているのか、入ろうとしているのか」と。そんなふうであつたから、仕方がない、いつもこれには負けていたそうだ。

またね、茶瓶つていうのがあるよね、急須というものがあるよね。

「なかなかお茶が沸かない」と言つたらね、「お茶が沸くまでチューカー（急須）に入つておこう」

ほら、これは、龜は四人で担ぐものだから、友だちがたくさんいれば（頼んで）持つてくことができるよね。持ってきて、

「あなたが死んだら、ここは壊してでも入れるのか。これは通ることができないけど」と、龜を見せたので、測つて、通らないとなつたので、また造りかえたそだ。そのくらいの能力だつたつ。

あの人（モーイ）は子どものころから変わっていた
そうだ。変わっているのはどのようにかと言うと、鳥

「湯は沸いているか」と、叫んだそうだ。

「なんだ、おまえ、そんなところに入つて」と聞くと、「なにつて、私は、今日、井戸に入ると言つたんだ。明日入るとは言つっていないのに」と(言われて)、負けたそうだ。「チュー、カーに入る」。なあ、たいへんなものだよ、人のこれ(知恵)は。このようなことがあつたって。

と答えれば、内に入つていくわけだよね。鳥も、『生

(8) 床下勉強・一吹き煙草・ヌブシの玉・許嫁と薬・掛けた縄・難題・一日殿様

島袋吉盛（大正十三年生）南橋原

那霸の県庁あたりの人とか、企業の大物とかやりよるさーねー、毎年、名士劇。あれでやっているが、またあれより詳しい。あれはおおざっぱなところして、また、ずっとあれの前にもあるさー、話が。これ、あんただち聞いてね、首里でもいいさー、本場が首里だから。

名前が瀬名波だから、瀬名波盛親とも言いつたはずだが。はつきりわからん、瀬名波盛親かなにか。えー、これはつきりわからんね。当て字よ。私、はつきりは、モーイ親方しか知らんが。この人ね、これ芝居見て、あれよりはちょっとあのう、前の方があるさーねー、私の話。

モーイ親方はね、子ども、小さい時分ね、モーイと、髪がこのモーイーなつていてるからね、カンターモーイーから、だからモーイ親方と言いつたつて。モーイー、この人は、モーイー、モーイー、カンター。とにかく瀬名波のモーイーと言ゆうて、カンターモーイーのあじやな（あだ名）とつたんじやないかねー。

この人は、学生時代、あんまり勉強しているような格好見せなかつたつて。床下で勉強したりね、それから、もうそくで勉強したか、昔の螢火でやつたのか、床下で勉強したりして。人がもう、勉強しているのはわからなかつたつて、この人は、結局、人よりは目立つようなことはしないで、いつも馬鹿みたいに、ふ

らー、気持ちがいみたいになつてやつてね。

煙草もね、しょっちゅう親父の煙草パクパク、パクパク吸うて、もう煙草代がはげしいと言うて、昔、刻みだから。で、これ、ある時期になつて、もう、だから親父は、

「あんたは、もう、煙草は一服しか吸うていかんよ」と言うてやつたら、大きい煙管作つてね、「階にのぼつて、大きい煙管で一日分をいつべんに吸いよつたつて。大きい煙管に入れて。して親父もまた、親父もそこでやられて、

「もう、あんたはそんないつべんに吸うより、少しずつでもいいから、もう、少しづつ吸え」と言ゆうて。もう、そんな煙草、文句も言えないさーねー、この人には。だから、これもどんち者さー、このモーイーは。で、親父、もう手に負えんし、いつも親父もやり込まれられて、

それで、ある日ね、もう馬鹿みたいに、ふらーみたまにして、先生にね、師匠、先生に、蛙、アタピーさーねー。方言でアタピーさー、蛙。

「アタピーに、この目の頭の上にね、こういうふうに変なえみいたいものをかぶつたアタピーがいるよ、先生」と言うたら、で、この先生はね、

「じや、これ、ヌブシの玉というんだからね、モーイ。明日取ってきて、先生に見せるようだ」言つたらしい。そしたら、このモーイ親方はね、このアタピーのこつちから、ヌブシの玉というのを取つて、で、こ

※一部編　沖縄本島南部・西海岸の港町。現在の那霸市の一帯。琉球國のうちでも最大の港湾をもつた都市で、近世から現代を通じて商業、経済の中心として脈

わづ。

※2瀬名波盛親　伊野波盛平（モーイ親

方のこと）。おかづば。髪を結つてないということから、ここでは髪が乱れている様子も指しているな。

※3カントー　おかづば。髪を結つてない。精神的な病気や障害を持つ人の指す。差別的な意味を含むことのある表現であるが、ここでは文脈より差別的な意味を含んで発言されたものではないと判断したうえで、発語の歴史的資料としての性質を重視し、そのまま翻訳して掲載した。なお、本報官語の掲載語のなかには、ここで記付した個所以外でもしばしば同じ語が登場するが、それらについても右と同じ判断に基づき、冗談のまま掲載している。

※5アタピー　蛙のこと。アタピーチヤーともいう。

ね。して、アタピーはだいたいこう溝ぐわーにいるさーねー、鞋の下。田畠があつて、鞋道があつて。して、「こつちからこつちに上がるうと跳ぶときには、あんまり気合入れ過ぎて飲んでしまった」というふうに、先生に言うらしい。

「こう、手に持つていたんだが、鞋ぐわーに飛び越えるときに落としたら困るというて口にくわえたら、そのまま飲みこんでしまっているよ、先生。もう飲みこんでしまって見せられないよ、先生」と言つたらね。先生は、それからばね。「これは普通の人じやない。もう、これは、やはり大変な知能のある人だから」。

この弟子にね、「もうモーイーからね、なんでも習いなさい」と言いよつたつて。先生はね、このヌブシの玉飲む人は偉いつて。結局、これ、もう、本当か嘘か知らんが、モーイー親方のヌブシの玉を飲んだといふことは、それだけこの人はもう徳が高いということを、先生は、もうすでに飲みこんでいたんじやない。ヌブシの玉、結局、徳行の高い、この玉を飲んだり持つたりする人はね、昔から、これだけ徳を積んだ人、神に近いような人じやない、これはあたらんといふ意味じやないかねえ、ヌブシの玉。

これと前後して、後先なるか知らんがね、あれ、芝居からまたしつた。モーイ親方と縁組。縁組というのはわかるでしょ、縁結び。昔は、ある良家のいい家庭の家、これは、許嫁、縁組しようつたというさーねー。で、この、モーイ親方と縁組した女は、

「あんなカンターモーイー、ふらーの妻なるか」と言うて、もう、嫌がつていたってね。(親同士が)決めたものを。だから、嫌がつていたのは、モーイ親方は、ウーマークー(わんぱく)みたいなもんだから。あの、昔、タウチーとかファートウヤーとか、いろんな鞋ぐわーがいるさーねー。あれを持つていて、『自分の許嫁、これを見たい』といって、そこの屋敷内に放してね、大騒ぎとして、で、この許嫁は、

「なにかねえ」と言つて、見にきよつたつて。昔の鶴、タウチーといつて、開鶴鳥がいるさーね。あれ放してね、大騒ぎとして、それから自分の許嫁を見たもんだから、

「見ちゃん、見ちゃん(見た、見た)」してね、これ騒ぎして、喜んで行きよつたつて。これもあるし、また、それ以後、この許嫁の女の方の親父は、

「こんな、モーイふらー、気持ちがいみたいな人に自分の娘をくれるか」と言つて嫌がつて、あれ芝居にあつた。で、この許嫁の女の方の親父はね、その家に断りに行つて、なにする時分に、門の入口から、イユシュー(釣り針)、釣竿引つ掛けるの見た、あれ引つ掛けて、どんなしてもはずさなかつたさーねー。で、はじめ、

「そいや、あんたにやるからね、もう、これだけははずしてくれ」と言つて、それで、はじめて許嫁のこれを、親も許したといつ芝居しようつたさーねー。あれは、向こう側の許嫁の女の方のこれ(父)が、断りにくるのを、引っ掛けでおるわけよ。

※1タウチー 開鶴に用いられる鶴のこと。
※2ファートウヤー 鶴の一種 タウチーを小型にした体型で、脚が長く、羽毛は灰白色のものが多い。カラハートウ

一四三〇年、尚田志王がジャワに使者を派遣したさいに持ち帰ったといわれるトイドレ、カラハ(ジャワのことの魔

「結んだ、結んだ縁がはずれるか」と言つて、はずさなかつたつて。これも、条件づけてね、「そいじや、あんたの許婚をそのままくれるか」と言つて。それでまたくれたわけさーねー、モーアイ親方に。許婚をそのまま元通り。これから芝居は始まるんだが、だから、その後、芝居やるさー。

薩摩がいろいろ琉球征伐してね、で、やはりモーアイ親方の親の方も親方だったんでしょうね。首里のいろんな難題を、もう、政治的にやつたりする親方だから。だから、薩摩の方からね、あれ見たらね、難題というの、於茂登岳^{おもとだけ}というのは、八重山にあるさー、きれいなモリだから、於茂登岳御用^{おもとだけごよう}というのは。だからこれを薩摩の方に持つてくるように、於茂登岳^{おもとだけ}。それから「雄鶏の羽を持つてくるように」。これも難しい難題さーねー。それから灰綱御用^{あいのなみごよう}。これを薩摩に三つ納めるように言われたもんだから、これ難題と言われてるさーねー。どつても不可能な問題。で、モーアイ親父は、これ心配して、「もう、大変なことになった」と言うて、もう、熱出して苦労している時代に、このモーアイ親方は、「こんなたやすいものは、できないことがあるか、親父」と言つて、

「自分がそいじや鹿児島に行つて、ちゃんと、これはきれいにねやつてあげる」と言うて。皆が不安に思つていたというんだが、向こうに行つてやるさーねー。あれ、芝居ではね、於茂登岳^{おもとだけ}というのはね、結局あれ

さ、「八重山の方で、根っこからね、取つて、ちゃんと準備しているんだが、これを乗せて薩摩まで持つてくる船がないから、船を貸してくれんか」と言つたら、もちろん、於茂登岳^{おもとだけ}をこう乗せるだけの船がないさーねー。

「向こうが船を貸せないから、私たちも運べないよ」といつて。そこでまたこの難題を、もう、ちゃんと解決してあるさー。それからまた、あれらしい。雄鶏の卵^{おと}というのはね、

「なんであんたの親父が来るべきものを、あんたが来たか」と言うたら、

「うちの親父は産^{うぶ}もようさーねー、お産^{うぶ}もよう、お産もようで来られないから、私がちゃんと参上^{さんじょう}していますよ」と言つたら、

「男の人がも産もようするか」と言つてやつたら、

「そいじやあ、雄鶏がも卵産むか」と言つて、またもそれを返したつて。それから、灰綱御用^{あいのなみごよう}、アケ^{あけ}というの^は「灰^{あい}」のことをアケ^{あけ}というさ。灰でぬつた綱、綱のこと。そのまま崩れんで残るらしいよ。塩で、結局塩つけてぬつていくんじやないか、あれ、綱、繩^{くさ}は。で、これを、もう静かに燃やしたら、そのまま崩れんで残るつて。結局、塩が綱^{くさ}を崩さない役目を果たすんでしょうね。これできるつて。で、難題、もう、

率1親方 位階名、王子、按司に次ぐ高位の位階。また、間切の總地頭にたいする尊称。

さ3八重山 八重山諸島のこと。やえやま。方言でエーマ。琉球列島の南端にあり、石垣島などをはじめとする大小三十の島々からなる。

率1於茂登岳 石垣島北部よりある群峰の主峰。海拔五・五、八メートルで沖縄県内最高峰。

率1親方 位階名、王子、按司に次ぐ高位の位階。また、間切の總地頭にたいする尊称。

三間解決したから、薩摩の方は、薩摩は殿様さーねー、「あんたに褒美をあげんといかんが、あんたの褒美はなにが欲しいか」と言うたら、

「私は褒美なんかというよりか、結局、一時間でもいい、一日でもいい。薩摩の殿様になつてみたい」と言つてやりよるさーね、芝居では。そうすると、部下、向こうの重臣だちはね、

「もう、たいへんな、おそれ多い話じやないか。こんなペークー、沖縄の親方ぐらゐの人が、薩摩の殿様になるといふのはたいへんじやないか」と言つて、もう、殺そうとするんだが、殿様が止めるさーねー。

「あんた、自分からこんなして不作法なことしてはいけん」と言う。そこで、薩摩の殿様は、

「それじゃあ、いいから、一時間でも何時間でもいいから、私の代わりに、『一日』、よくあるさーね、『一日市長』とか、『一日消防』とか、ああいうみたいて代わつて、一応座らしたわけさー。座らしたら、モーイ親方は、沖縄から、沖縄と薩摩のこう契約みたいなもの、誓約書みたいなものね、沖縄が、琉球が薩摩に服従する、薩摩に対してもどん問題でも、どんな物も、献上物でもちろんとしてあげるといふ、あれがあつたといふさ。砂糖は何石、要何石、それから反物、紅型、いろんな、紅型とか高級なものがあるさーねー。あれを、毎年いくら献上するという、

「こういう書類を全部持つてこい」と言つてね。部下に、部下さーねー、もう下にいる、これ全部、部下だから、全部持たきて、全部、破つてちぎつて捨て

たつて。だから、モーイ親方、これもモーイ親方、もう偉いやり方。モーイは偉かつたつて。

⑨ 難題・床下勉強・ヌプシの玉

モーイ親方がね、お父さん、お母さん、いるでしょ。その人がもう、公事公事つたら、昔の、公事つたら、今あの、公事勤めしていた、お父さんは。お母さんはもう、お嫁さんだから家にいる。その人の子がね、モーイ親方。

だからその人の、モーイ親方はね、親よりもね、頭は良かつたはず。だからその人が、向こうから難問題くるでしよう。昔ね、その話だった。

昔、鹿児島のほうから、こつちに難問あれして、あとの、お父さんのほうにこう、やつたらね、お父さんは、もう、こう、たまつて、わからなくて、

「ぬーんちあんしだまとーみしえーが、ぬーやがんちや。さくどう、うぬ人よー、お父さのー」(どうしてそうちまんこんでらつしやるのでですか、なんですか)。そしたら、その人は、お父さんは、モーイ親方つたらもう、とつてもふらーふーじー(たわけものじみた人)なつていて、みたいてやつてゐるわけでしょう。だから、頭よくて、あれですがね。そのお父さんが、

「いやーがん聞んわからんさ(おまえが聞いてもわからないよ)」といったから、

「わからんていんしむくどう、言ちんじみそーれー」

※1ペークー 位號名、称号。親雲上
ペーチンともい。親方よりは下位にある。あるいはモーイ親方を渡幕敷べ
クトと綴り兼えたもの。

※2公事 公儀とも。王府、官府。また
そこに勤める士族階級の役人のこと。
※3ある時はモーイ親方を渡幕敷べ
一

んちやくどうや「わからなくていいの」で、おっしゃつてみてください」と言つたね、「向こうから、こうこうやつてきてるけどね、難問題。綱縄、灰縄、灰縄つたら、灰、灰でしよう、灰の縄、それもこうから出しているわけ、問題出しているわけ。

「うりんわかみそーらにんち（それもわからないのですか）と、モーイ親方が、これ、こうして、縄をね、こうして火つけ、このまま焼いて、このままよつたというわけ。お父さんに、こうこうしたら、また、この縄こっちに置いて、こっちから火つけ、こっち縄、全部縄になるでしょう、縄に、焼けたのも同じじね、縄のかたちでしょ。だから、そう、それを見事言つたわけさ、鹿児島の人から。だから、それは、「これだよ」といつたわけ。

あの人（お父さん）は公勤勤め、その人（モーイ）は子どもだけどね、頭は上さ。

その人は、とつても、もう、勉強が好きで、自分一人、もう、この（床）下の方でね、ろうそくをこうつけて、もう、山のようになるまでつけておいて、自分で勉強したつて、モーイ親方。自分の家だけど、下の方でやつたわけ、隠れて。人にわからないように。だからそのドーソク（ろうそく）が、こう、山のようになつてたつて、これ毎晩、毎晩だから。その人ね、だから、その人が見込まれて。こう、ぶりた（ぶれた）ふうな、気持ちがみたいなふうしてね、先生に通つたみたいなわけさ。

だから、その、田んぼからこう通つていくときに、この人は、モーイ親方は、アタビー（カエル）すぐやー、アタビーって言うでしょ、カエルのこと。捕つてすぐやーして、持つてかえるでしょ。それをね、先生のところに、帰るときは、また、そこでやつたわけ。勉強して帰るときに。だからその人はね、このアタビー（かかる）の上にね、ヌーブルの玉つて、きれいな玉があるたつて。それも持つて帰ろうと思ってね、いたら、「どうして持つて行くかねー」と思つたら、その玉をね、口の中に入れたからね、飲んだという話。だから、偉くなつているわけさ。いっそう偉く。

だからその人は、もう、今のウエズーさ、ウエズ、あつちから難問題が、鹿児島から来て、来たら、まあ、その手紙解き明かすんですね。だから、一番初め、この、親のほうは公勤勤みだから、親の方に問題はくるわけ。それから、ぬームイ（丘）つてあつたかね。モリ、モリそのままね、欲しいといつてね、あつちから問題がきたから、それもね、子どもが、モーイ親方が解いてからに。

「これをじやあ、や、向こうにこうこう言いなさい」つてね、教えたわけて。モーイ親方が親に教えたわけさ。またあの、親も、向こうの人が、またあつちに帰つて、また難問題こっちからあげるわけさ。それ、「なに欲しい」と言つてね、あげたら、それも、こつちに負けたわけさ。そのまま、なにモリ、ぬームイでいたがやー、なにモリと言つたかね。

第一ウエズ 漢字を宛てるなら上江洲か。島津（しまづ）の贈り物と思われる。
※モリ 方言の「モリ」を日本語の「モリ」を日本語の「モリ」とは異なる、丘など小高い地形、山などを指す。

イ親方に、親のほうに問題きたでしょ、「そのモリは、すぐそのまま欲しい」といつたらや、それのお返しね。

「じゃあ、あれしなさい」って、むこうから。

(モーイガ) 「それ(丘)乗せる船持つて、持つちくー(持つてこい)。乗せられないさーねー、大きい船持つていいとも。モリ、大きいモリだから。だから負けたはずよ、返答したからね。

⑩ 下駄と草履・難題・一日殿様・根はどこか・ 一吹煙草

喜納兼優(大正七年生) 東

モーイ、カンターモーイーといつてね。カンターモーイー、昔はカンターモーイーといつて。これ、あまり学力、知恵持ちであるわけね。知恵持ちで、あまりあるから、これがなんかふらーふーじーぐわー(気がふれたように)してね、片一方は草履はいて、片一方は下駄履いて。こうしてちんばして歩くのを誰かが尋ねたんだから、ういう返事もあつたつて。

「なんでもあんた草履と下駄はいてるか」と言つたら、

「これ、片一方はお母さんの言いつけ、片一方はこれお父さんの言いつけて履いておる」と言つてねえ、そ

「恩納森(おんなむね)を鹿児島に運んでくれ」という、なにか、由

来記があるわけさーねー。それと、

「灰で龜ぬつて來い」。それと、竹かね、

「どこが先か、同じ太さだから、どこが根っこか、これ確かめてこい」と言つてなんだが。この首里の侍だ

ちが全部、協議するけども、これわかつた人がいない

から。うん、問題出してわからないもんだから、今度

はこのカンターモーイに親が話したのかねえ、はつきりはわからぬけども、

「私が、このたびは鹿児島に行かしてくれ」と言つて、カンターモーイが。そこで、公儀の侍がたは怖がつておるわけさ。

「いやーぐどーんカンターモーイーが、あがーとー薩摩かい、いやー、うりしーねー、一大事ない(おまえのようなボサボサ頭な馬鹿者)が、遠く薩摩に、おまえが行つたら大事になる」

「大丈夫やくどう、やらちきみそーり(大丈夫ですか)ら行かせてください」と言つて、そこで、親の代わりに行つたわけ。

あはー、雌鳥どう、雄鳥の卵だつたかや。

そこで向こうから、薩摩行つて、

「なんでもあんたのお父さんはよこさないか」でいちやくどう、(と言われたので)、

「お父さんの身代わりで私が来ました」。

「どうしてお父さんは来ないか」と言つたら、

「私つたーお父さんは産(うぶ)しておる」。お産のあれ、あんし(そして)向こうが、

「男がお産するか」と言わられたもんだからよ、

まーちんば 片足が不自由で引きずつて歩く様子。びつご。身体障害者に対する差別的な表現であるが、本報告書においては発話の歴史的資料としての性質を重視し語りをそのまま翻訳して掲載した。

※の言葉動め 首里城に勤務することだけの高い身分であることを示唆している。

※の公儀 王族、官府、またそこに勤める士族階級の役人のこと。

「あんせー（それなら）、雄鳥が卵産むか」んでい、返事。それで返し。一種目は返しているわけさーね。それから、

「恩納森^{おのな}は持つてきたか」んちやくとう（と言つたの

で）、

「恩納森^{おのな}は那覇港まで運んできあるけどね、これ乗せる船がない、船が。船がないから鹿児島からその船出してくれ」。また鹿児島、それ乗せる船はないからよ、またこれもやられておるわけさね。

今度また「灰で綱ぬつて来い」というのはね、これ細ぬつて行つて、むこうで火づけて燃やして、これが残つてゐるわけさ。灰の綱、綱の形が。これも返したものだから、

「もう、あんたにはどうもできない。あんたはなにが欲しいか。まあ宝物^{たからもの}もたくさんあるから、あんたの望み通りになんでもあげるから」と言つたら、「宝物は必要ない」んでい（と）。

「一日だけでいいから、私は鹿児島の、薩摩のこの王様の席に、なにしてくれ」と言つて

「いいよ」んでいやーんかい（と言つて）、うぬ鹿児島の王様が退いて、代わりにモーカンターが座つておる。これが、権利は、王様の権利は自分があるからよ、「なにしなさい、なにしなさい」、全部、むこうの偉い方々は、全部言うままにしておつたんだがね。

それどころじゃない、あれが話は、もう知恵^{じえ}が強いから、お家でも、隣近所の蜜蜂^{みつばち}がね、このモーカンターのおうちに枝が、あの垂れてくるさあねえ。これ、

カンターが取つて食べたら、むこう、隣が文句言うてきている。

「ぬーが、うり、私^わつた一家んかい枝がきておるから、私^わつた一むんと思って食べた」んでい（「なんで、それは、うちの敷地に枝が伸びてきているから、うちのものと思つて食べた」と）。

「いやーや、うり、私^わつた一むんどうやくとう、今から取^くて一ならんどー」んでい（おまえね、これ、うちのものなんだから、今から取つてはいけないよ」つて）、

「ほい、ほい」でい。

それで、今度は反対に、竹にね、腐つた猫くくつて、反対に向こうのお家にたらしてある。向こうから文句言うてきておる。

「なんで、根っこー私^わつた一むんどうやるむん。あまー、いつた一むんやざ（なんで、根っこはうちのものだというのに。あつちが、あんたたちのものだよ）と言つてね。取いんちかみんならんたんでい（つかみどころがなかつたって）。ジンブン強い（知恵がある）からよ。

だから、煙管^{たばこ}の話もあるんだが。お父さんが、「いやー煙草^{たばこ}びかーうさきーなー吹ち、今から一吹ちなー吹き」んでい言ちやくとうよー（（おまえは煙草ばかりこんなに吸つて、今からは一吸いずつ吸いなさい」と言つたらね）、

「あ、そうします」んでいやーかい（と言つて）、わざう一個入る煙管作つて、これにいっぱいに吸つてお

るんだよ。

だからあれー（あの人は）、モーカンターはもう、あまりジンパン過ぎている（知恵がまわりすぎる）からよ、なんとも言えないよ、あれー（あの人は）。

⑪ 下駄と草履・床下勉強・難題・一日殿様

新屋ヨシ子（大正八年生）
越来越

偉い人の子どもだけ、いつも裸足して歩いてね。そしたら、

「あんたはね、王様の子どもなのに、こんな裸足して歩かないよ。足駄、草履どうでいい歩ちゆんどー（下駄と草履を履いて歩くんだよ）」と教えられたからね。アヤーが、

「足駄、草履くでい（下駄と草履を履きなさい）」とおっしゃったからと言つて、片足は下駄、アシジャヤといつたら下駄さーね。サバといつたら草履さーね。片

足は下駄、片足は草履。履いて歩いたから、もう、みつとないさーね。また叱られたから、

「親のおつしやるのを聞いて私は、足駄、草履（下駄、草履）履いて、ひとつ履いたらいけないから」といって、こんなにしていつたつて。こういうふうに親にもう、しょつちゅう親を困らしていたつて。

そのうちに薩摩の国から、沖縄の、琉球の国に質問が来てね。そしたら、もう、琉球の国はもう、薩摩の国に、昔は作物を、米、粟、麦、もうみんな税金とし納めていたつて。そしたら、とても貧しい生活もしていたつて。そしたら、あっちから、もうこの返答が

きたからね。王様もどつても、その（困つた）。みんな集まつて、幹部なんか集まつてしまつても、もう、灰綿（グミン）と今言つてゐるさーね。灰でぬつた綿。あれど、また西森（ノシマ）といつてね、大きな森があつたつて、これど、また、雄鳥（ハシブト）の羽。雄鳥は卵生まないさーね。雄鳥の卵、

「この三つを持つてきなさい」と言つて、あつちから来たね。そしたらもう、たいへんな心配してね、もう、これできなかつたら、もっともつと税金は上がる一方で、とつても、もう、みんな苦しむんだからといつてね、心配しているときに、このモーケイ親方（モケイ）子どもがね、すぐ聞いて、聞いて、

「それぐらいはや、お父さんの代わりに私が行つてきますから」と言つたから、「あんたのような人が、いやー（おまえは）、すぐもう、罰だよ」と言つたら、「大丈夫です」と言つてね。そしたら、その後からもう、あの、その人はね、床下に入つておいてね、勉強して。ホタルあるさーね。あれをビンぐわーに入れて、あれで勉強してね。してからもう、

「あんたは王様の子どもといつて勉強もしないといけないよ」と言つてもや、誰がも分からぬようないつて、床下に入つておいて勉強していただつて。

そつてあっちからも声をかけられたら、

「私が行く」と言つて引き受けたね。お父さんもお母さんもどつてもみんな心配して、

「もう、この人はもう、帰つて来られないはずよー」つ

*1琉球　琉球のこと。りゅうきゅう。
う。方言でルーチュ。あるいはドウチュー。中国、日本などの外國に対する
國名として称した。

*2西森　那覇市首里保町にある丘。意で、首里城からみて北側に位置する。神霊の御守、丘の大きが削り取られ、現在では住宅地となっており、末吉公園のすぐ南に北森御嶽の跡所としてわずかに残る。

て心配して。この人が行つてね、行つたから、あつちの王様の前でもう、鹿児島かね、あの、ぬーがんでいがらー（なんだつか）、あつちでも、あの、調べたからね、そこに座つてね、質問。そしたら、「雄鶏の卵持つてきたか」と一番言われたからね、「はい、雄鶏ぬ卵は、お父さんは、私のお父さんは、お産して来られないで私が代わりに来ました。持つてきました」と言つたからね。

「なんで、男がもお産するか」と、すぐどうても大きな声で叱られたからね。

「はい。こつちのあれはね、雄鳥の卵持つてきなさい、雄鳥ぬ卵持つてきなさいとおっしゃるけど、こつちの雄鶏は卵も生みますか」と言つたから、もうあつちは答えきれないでね、もうやられた。そしたらまた、「西森を持つてきたか」と言わされたらね、もー一つ、

「西森を持ってきたか」と言われたら、

「はい。通販まで」と言つたら、船着きのさ、

「港までは持つてきてありますけど、これを乗せる船が沖縄にはまだ造れないで、貧しくて、造れないから、こつちから船貸してください、持つてきますから」と言つたから、もう、あつちでもまたこれできなさいーねー。そしてもう、これもまた負けた。そしたら、「灰綱は持つてきたか」と言われたら、

「はい、これは持つてきました」と言つてね、綱をこうぬつて、これだけずつ持つて行つたあるわけさ。それにもまた、マツチで火をつけたら、その綱はそのまま燃えて、綱は灰となつて、綱はそのまま残るつて。こ

れはまた、あげたから、もう、これも、もう三つも」

それが成功してね。そしたら、

「沖縄にもね、こんなにして頭がいい人もいるか。そしたらもう、あんたが好い、褒美に、あんたが好きなものなんでもあげるから、なにか言いなさい。お土産にね、好きな物持たすから」と言われたから、こつちはもう、『どつても宝物、金銀かねえ』と思つたらね、「私はなにも、お金なものも欲しくないけど、ただ一時でいいから、こつちの王の位にね、座らしてくれ」と言つてね、そしたら、もう、「いいよー」と言つて。みんなもう、この家来たちは、「これはできない。王の位には絶対できない」と言つて、家来たちは言うけど、こつちの王様はもうしかたがないから、もう負けているんだから、

「いいですよ」と、

「どうせ一時だ、一時だから。私がまた勤め終わつたら、私は王にはならないから」と言つてしたから、こつちの王様も、もう、

「いいよー」と言われたから、もう、家来たちも、「もういい」と言つて、そつてあつちに座つてね。王様は下がつて、この人（モーイ）が座つて、そしたら、「書類出しなさい」と言つてね。沖縄の税金、沖縄の米、麦、粟をちようど何月何日には出すようにしてあるつて。そしたらね、これを全部焼いてね、全部焼いて、今後は沖縄とても苦しんでるから、この税金はや、出させないようにする」と言つてね。王だから、もう、できるさーねー。そしたら、これを、沖縄の税金を出

*一通鑑 沖縄本島中間、那覇市通愛町。
那覇市に面する。
那覇市に面する。

させないようにして帰つてきたら、もう、沖縄はそれからね、自分で作るもの自分で食べて、また沖縄だけの税金、あつちには出さないで、できて、あれから少しは裕福になつて、というのは芝居で見た。

⑫ 下駄と草履・難題・一日殿様・立ち合い

新崎カマド（明治四十二年生）中の町

薩摩から問題持つてきたら、わかる人はしないで、モーイ親方が、その親にあつたもんで、それが、う

たつたから。

「お父さんは、それだけもわからないねー、わしはわかつています」と言って、床下で話したわけ、お父さ

んに。あれが心配しているわけね、その問題解かすと

いつて、親は心配したから。

「そのぐらいは心配はしてはいけない。私がちゃんとわかつている」と、床下で話したそ�だ。

「じやあ、おまえ、そんなものわかるか」と、

「大丈夫」と言って。

今度は、今帰仁の方からおいでになつて、

「おまえの子どもは、タキナラン（とても優れている）子どもだから、おまえより上だから、よく怒らないで、するままやりなさい」と言つたら、あんなにわがままにして。

「お父さんが、また、
足駄、草履くみ」んちやくどう、足駄ん草履ぐわん

（下駄、草履を履きなさい）と言つたら、下駄も草履も、片一方は下駄、片一方は草履履いているさー

ねー。あれ親の言いつけだから、よく履いているから。だから人が馬鹿にして、気持ちがいになつていると言つて話したけど。

今度、鹿児島から問題が出たら、これが今帰仁親方ぬ、

「これしかできないから、おまえ行け」と言つたから、

「大丈夫、はい、私が行つてきます」と行くね、し

たら問題解かささ。

灰綱、綱わかる、綱、

「綱で灰の縄、どうして作る」と言つたら、

「これはやすいもんだ。綱を持つてお膳の上で燃やしたら、ちゃんと、これは灰綱になつています」という

でしょ。だからまた、次の問題は、

グシク御嶽、首里の御嶽持つてきなさい」と言つた

から、

「沖縄は島が小さいもんで、あれくびる（ぐぐる）綱がないから、鹿児島にならできるでしょ。大きな島だから、鹿児島の人ならできるでしょ。船を持ってきて乗せて行きなさい」と言つたら。だから、これも解かしてからに負けているさーね。今度はまた、

「家来のところに座りたいから、一時間でもいいから座らせてください」と言つたら、それも、あつちはまた負けて、

（はい、はい。そうしたら座りなさい）と言つて交代するさーねー、モーイ親方と家来と。そのときにもう、すぐに、向こうは、あんなに恨んでいるもんだから、太刀を出して殺そうとするさーねー、護佐丸。そこに

モーイ親方の語り違いか。
著者注：中城按司護佐丸盛春（生年未詳）一四五〇のこと。山田城、鹿喜味城の城主を経て、一四四〇年頃に中城城を築いて移り住んだ。阿麻利和に謀叛の罪をさせられて自害する。

東一今帰仁 沖縄本島の北端、本部半島の東北端に位置する地域。なまじん。方言でなまじん。現在の今帰仁村。

いるの、家来のところに座らしてからに、落ち着かし、落ち着いた時は、向こうの人は、両方から、太刀を四名でもって、みんな、これも取り押さえて負けるわけ。それで、負けたわけでしょう。向こう、薩摩の人。

(13) 床下勉強・証文破り・立ち合い

高江瀬昌保（大正二年生）センター

モーサーは、と言つても少年時代で、昔の少年時代はカズラを結つて、カタカシラはまだ結つてないわけです。十五歳いかない。そして女子の子みたいだつたらしくね。そこで、毎日勉強もやらん。もう、モーサーにして寝つたりなんか、屋はやつて。

「あれーふらーどうやる。モーサー やふらーどうやる」

んち（あいつは馬鹿だ。モーサーは馬鹿だ」と）。そのあとは、どうしているかと、床下に潜つて、床下で夜は勉強しておる。その人が、三司官までなつたという、偉い人になつとる。

薩摩まで行つて、薩摩に証文があるからね、

「琉球のこの国王はなになにを毎年持つてくるようにする」というその証文を見せつけられて、薩摩の。そして見せられたもんだから、

「それは、そんのはいらない」と言つて、モーサー言つて。その伊野波親方（親父の代わりに代表で行つた、向こう行つているから、そこはもう、なにもかもわかつておるんだからね、すぐ引き破つてしまふわけさ。引き破つたら、薩摩の殿様は怒つてよ。島津公は怒つて、家来たちが槍で突こうとするんだがね、武芸

は達者だから、モーサーも。琴を弾きながら、弾いてるところを後ろから槍で二人でやる場面があるんです。捕まえて押さえてしまふ、琴で押さえてしまう。そして、「見事」と言つて、殿様に褒められて、そのまま帰る。

そして、証文もそのまま、「琉球王、こんな偉いのがいるから取らんでいい」と。そうして有名になつたさ、モーサーといつのは、モーサー親方といつさ。それはね、チヨーモーといつ。伊野波チヨーモー。

(2) ヌブシの玉

① 夜勉強・ヌブシの玉

久場政三（明治四十三年生）園田

〈方言原語〉

モーサー親方。あぬ人よーいつべー学問ぬんすぐりとーみしえーい、じこーえんらさんあみしえーたんでい。あんさーい、学校かい行じーねーうぬ人よー、むる夜なーや勉強しみそーやーなかい、星、皆が学校かい行ちーねー、川ぐわーぬ側なーうて、蛙ぐわーすぐえーし歩つちみしえーたんでい。うれー皆聞ちよーるはじやしが。

あんさーい、

「また今日モーサー や、うまうて、蛙取えーどうすさやー」でいち、うりつし。あんしそい、うりから、ある日にモーサー や学校かい、じこーにつか学校かい

行じやぐどう、

「ぬーが、モーイー、いやーや今日やぬーんちあんし
遅りてい来やが」んでい先生が言みそーちゃんくどう

よ、「あーさり、先生、今日や学校かい来やーがなー、いつ
べー珍らしい物見じやびたくどう、うり見じゆんどう

遅りやびたつさーでいくどう、
「あい、ちやぬふーじー見ちやが」でいねー、

「蛙どう蛙、うぬ玉ぐわーやーいびーしが、うりーんくー
いくーいそーでいうりがすし見ち、長うり見じやーな

かい遅やびたんーでいじやくどう、
「あんしえー、明日、うぬ玉ぐわー取ていくーよー」

んでいみそーちゃんくどう、
「うーーんりち。あんさー、うぬ蛙ぬ毎日うんぐどう

し、うりすし見みそーやーなかい、うぬモーイー
や、明日がら、まあ、「三日後がやらーわからんし
が、うぬ玉ぐわー取やーなかい持つちめーんしえーん

ちそーしが、
手なき持つちーねーならんくどう」でい言やーなか

い口んかいくーでいみそーちゃんでい。口んかい
くーいしみそーちゃんくどう、飛ん越ーりーぐわーん
かい、

「だー、あんし、うぬいやー玉ぐわーや」でいちゃぐ
とう、あんされー、

「先生、私が飛ん越ーんいでいさーなかい、うぬ玉ぐわー
や私が喉んかいけー落ちねーびらん」りちさくどう、

「えー、あねー。どー、あんしえー、いやーやなー
かー、

明日からー学校や來んていんしむさーんでい言みそー
ちゃんでい。

「来ーでいんしむさーんでいしえー、うぬ玉んでい
しえー、でーじなヌブシぬ玉んでいしが、ぬーやがやー
やー、うりのやでーぬふーじやしが、言じうんしえー、

位ぬあみしえーる人ぬるうれー飲みうーするんでいる
ふーじーぬ、うりやたなはじばー、うぬ玉ぐわーでい
し。あんさーい、

「なー、いやー学校かいや明日からー來んていんし
むさーんでい、ありし。あんしんうぶいなー学校
かいめんしえーてーるふーじやしが。うぬ人よー夜
なーやむる勉強しみそーちしょー。あんさーい、うり
どうやたんでい。

（共通語訳）

モーイ親方ね。あのはたいそう学問も優れて
らつしやるし、たいへん優しい方でもいらっしゃった
んだつて。そうして、学校に通う時期にはモーイは、
ほとんどの夜に勉強なさつて、昼、皆が学校に行くと、
川原なんかにいてカエル捕りをしてまわっていたん
だつて。これは皆聞いているはずなんだが。
そして、

「また今日もモーイは、ここで蛙捕りをしているね」
と（言われる通り）、そうしていた。そして、それから、ある日にモーイは学校に、たいへん遅れて学校
に行つたので、

「なんだ、モーイ、おまえは今日はなんでそんなに遅

けるときなどに男性が発する敵語。



「これではこれは、先生、今日は学校に来る途中でとても珍しい物を見ましたので、それを見るといつて遅れました」というと

「おや、どんなふうなものを見たのか」と聞くので、「蛙と蛙が、その玉なんですが、それを一匹がくわえてはまたもう一匹がくわえるということをしているの見て、長いこと見ていたので遅れました」といつたら、「それなら、明日、その玉を取つてきなさいね」とおっしゃったので、

「はい」と返事して。そして、その蛙が毎日そんなようなことをしているのをご覧になつていて、このモーアは、明日だか、まあ、二、三日後だわからぬが、その玉を取つて、持つていこうとなさるんだが、

「手に持つのはできないから」といつて、口にくわえなさつたんだつて。口にくわえなさつていたら、飛び越えないといけない所で、

「どれ、それで、その玉はどうしたか」と（先生が）聞くと、そうしたら（モーアが）、

「先生、私が飛び越えようとしたら、その玉は私の喉に落つてしましました」と言うと

「ふむ、そうか。じゃあ、それなら、おまえはもう明日からは学校は来なくても大丈夫だよ」とおっしゃつたつて。

「来なくていい」というのは、この玉というの、たいへんなヌブンの玉というものなんだが、なんだろうかねえ、まさにそれであつたようなんだが、言つて、

みれば、位のあられる人だけが飲むことができるとう、そうであつたみたいだよ、その玉というのは。それで、「もう、おまえは学校には明日からは来なくていいよ」と、あれして。そういうわれても多少は学校へもいらっしゃつたようなんだけど。この人は夜にいつも勉強なさつていたよ。そして、優れていたそうだ。

② ヌブシの玉

神里マカト（大正元年生）安藤田

〈方言原話〉
ヌブシの玉。あんすくどう、どんなしてつたかなあ。頭の上に、頭の上に、すぐあの、取つていちゃーにすぐ

「あい、うれー、だー、持つておこう」んでい、口んかい入つたくどう、ちやー、ちやー飲みさーに、うんにんからあれー上等などーたん、あぬヌブシの玉。アタビチャヤーが、アタビチャヤーが頭ぬ上んかいヌブシありそーたんでい。あんすくどう、取やーなかい、すぐなー、うりそーかんねー、口んかい入つーくどう、ちやー飲み、まん飲みーたんでい。うぬモーイ親方がてー。

金に光つているさーねー、ヌブシぬ玉、光つているから。あんそーる。

「ヌブシの玉やんてー」んでいやーに、取やーなかい、取やーに「んかい入つーくどう、ちやー飲みそーたんでい。うんにんから、モーイ親方でー、そーどうくる

など一たんでい。

あのアタビチャヤーがあまんかい、川、川ぬはたんかいうしえーやー。あんさーに、うりがありそーたんでい、上しとーたんでい、うまんかい、うまんかいかみとーたんでい。あんさーなかい、すぐ、うり、「アタビチャヤーぬ、ぬーやがやー」んでいやーに、取つたくどうてー、口んかいちゃー飲みそーたんでい。うにんから、あり、上等などーるばーてー。あぬー、なー、今ないねえ、ヌブシの玉が、なにもないねえ。金ぬぐどうしありそーしえーやー。このぐらいそーてんやー。「んかい入つたくどう、ちやー飲みそーたんでい。

から。それで、「ヌブシの玉だね」といつて、取つて、取つて口に入れたたら、まる飲みしてしまったそうだ。そのときからあのモーイ親方はね、賢い人になつたそつだ。
あの蛙があそこに、川、川のそばにいるよね。そうして、蛙があれしていたつて、上らせていたつて、ここに、頭に乗せていたつて。そうして、そのまま、それを、

「蛙の（上にあるものは）、なんだろうかね」といつて、取つたらね、口に（入れて）ぜんぶ飲み込んだつて。そのときから、モーイは賢い人になつてゐるわけだよ。あのう、もう、今はしないねえ、ヌブシの玉が、なにもないねえ。金のようにしていたんだよね。このぐらいしていただんだろうねえ。口に入れたら、ぜんぶ飲み込んでしまつたつて。

（共通語訳）
ヌブシの玉。あのう、あつち。それで、どんなしていたかなー。頭の上に、頭の上に、すぐあの、取つてきてすぐ、

「おや、これは、どれ、持つておこう」つて、口に入

れたら、そのまま飲みこんでしまい、このときからモーイは賢くなつたんだ。あのヌブシの玉（を飲んでから）。

蛙が、蛙が頭の上にヌブシ（の玉）を乗せていたつて。そうして、（モーイはヌブシの玉を）取つて、そのままもう、それをなんとかしなければ、口に入れたら、ぜんぶ飲んで、まる飲みしたんだつて。そのモーイ親方がね。

金に光つてゐるさあねえ、ヌブシの玉、光つてゐる

③ ヌブシの玉

普久原ワシ（大正二年生）嘉間良

もう、（学校に）朝早く行きよつたつてね、モーイはみんなが、友だちが行くときにはもう終わつてから帰つてきよつたつて。して、その行く途中に、ガーケガーケしてカエルが鳴きよつたつて。その中に一つ大きかつたつて。それが頭の上にあつたつてよ、ヌブシの玉というの。だから、そこを行つて、学校行つて、先生にその話したからね。

「だつたら、それは取つてきてね」と言つた。
「取つてきてね」と言つたから、取つたは取つたけれ

ど、あんまり小さくてね、落としてしまいそうだから
□に入れたって。□に入れて、もう落とさないで持つ
ていくといって、つもりだつたはずだが、飲んでしまっ

「そんなして、もう、私はもう飲んでしまつてあるよ」

「あんたはもうね、もう、なんと言おうかねえ。
『タケ上の人だからね、先生よりも。だから、あんた、
こっちにはもう勉強しには来なくていいよ』と言つ
て、言われてたよ、つて。その話はあつたけれどね。」

(3) 優れもの

① 優れもの

著久原カマド（明治四十三年生）安慶田

方言原話

ふらーふーじさーなかい、とつても頭が良かつたつて。鶏ぐわーおーらさーなかい、しぐ。あとはもう、王子なつたわけさ。ふらーふーじーつしょ。カントウー、ワーワーし、カントウーワーワーし、あとーなー、人間のバカに見られて、本当はもう。モーイ親方。

共通語訳

氣のふれた真似をしていたが、とつても頭が良かつたって。鶏を喧嘩させたりして。しまいにはもう、王子になつたわけさ。氣のふれた真似をしてね。髪の毛ボサボサにして、しまいにもボサボサにして、髪の毛ボサボサにして、しまいに

③ 下駄と草履・夜勉強・一番科

津彌ヨシ(大正元年生) 東川

| 方言原語 | 方言訳 |
|-------------------------|--------------------|
| 片足一草履。 | 片足一 下駄履ちやーにや、モーイ |
| 親方。片足一下駄履ちやーに、ふらーふーじーさー | 親方。片足一下駄履ちやーにや、モーイ |

② 優れもの

宮城次郎(大正三年生)園田

方言原話

同級生と一緒にかんたんでい、絶対、モーアイ親方は。あれ語学、あれーなー！^{うか}御みどうやてーんてー、うれー。先生から字習^{字習}ーんていん、あんしジンブンぬあたがやーんち、これが珍しいんだよ。(学校には) 行かんたんでいどー、あれー。

(学校に) 同級生とは行かなかつたそ�うだ、絶対モーイ親方は。モーイは語学、あれはもう神様であつたそ�うだ、モーイは。先生から勉強を習わなくとも、あんなに知恵があつたのかねえと、これが珍しいんだよ。学校には行かなかつたんだつてよ、あの人は。モーイという人は気がふれたまねをして、有名な人。

共通語訳

(学校に) 同級生とは行かなかつたそ�うだ、絶対モーイ親方は。モーイは語学、あれはもう神様であつたそ�うだ、モーイは。先生から勉強を習わなくとも、あんなに知恵があつたのかねえと、これが珍しいんだよ。学校には行かなかつたんだつてよ、あの人は。モーイという人は気がふれたまねをして、有名な人。

※1タケ上 身分、才質、天運などにおいて他の者よりすぐれた生まれつきであることを言う。

に、くまーでいきとーたしおー。あんさーに、あとー偉い人なーとーたしおーやー。

あんすくどう、くまージンブンまんびーとーるばーてー。あんさーに、皆が、うつとうでー、上上ぬ子でー思ーんや、したかたぬ人うしえーといやー、

「うりがーぬーんならんざ」ぬーぬーんでい言やーにや、

「勉強んならんざ、うりがー」でいやーない、あつたーや受験の一通らん。また、うぬモーイ親方、片足、うりがるむる裏美ー取つていやー、すぐ、だてーん。それで、成功したたつてね。これが成功したたつて。どつても頭が良かつたつて。

片一方は草履、片一方は下駄履いて、こんな、こんなして歩きよつた、ふらーふーじーぐわーして。お家で勉強、夜学してね。夜学してから学校にもあんまり行かないで。あぬ、また、よその人はや、学校行つて。この人お家で勉強して、一番番科、一番番科あつた。一番番科、一番番科あつたつて。わからぬいで、みんなは落ちてしまつたつて。この人が一番番科言ゆうてね、なんでも褒美があつたつて。

東一したかなぬ人 未詳 身分が低い人
という意味か。

が、年下の者でも、位の高い家の子とは思わないでね、知恵のある人を見くびつてね。

「こいつはなにもできないさ」とかなんとかと言つてね、

「勉強もできないさ、こいつは」といつて、その人はちは受験は合格しない。また、このモーイ親方は片足(はゲタをはいて)いるような人だが、その人がみんな裏美をもらつてね。たくさん。それで、成功したつてね。これ(モーイ)が成功したたつて。どつても頭が良かつたつて。

片一方は草履、片一方は下駄履いて、こんな、こんなして歩いていた、気のふれたようにして。お家で勉強、夜学してね。夜学して学校にもあんまり行かないで。あぬ、また、よその人はや、学校行つて。この人はお家で勉強して、首席、首席をとつた。首席なつて、一番番科があつたつて。(他の者はモーイが勉強をしているということを)気づかないで、みんなは落ちてしまつたつて。この人が首席だと言つてね、なんでも褒美があつたつて。

④ 草履と下駄・床下勉強・一番番科

宮里ツル(明治四十三年生) 胡屋

片足は草履、片足は下駄を履いてね、モーイ親方は。

片足は下駄を履いて、馬鹿者のようにふるまつて、ここの頭はすぐれていたわけさ。それで、しまいには偉い人になつていてからね。

だから、頭は知恵があつたわけさ。それで、みんな

アヤーが、
「草履履きなさい」これ、お父さんが下駄(を履きなさい)と言つた。
片一方は下駄、片一方は草履さーね。親から、こんなに言わされたもんだから。

著者一書科 「母」は士族男子のみ受験資格のある、琉球王府の役人の登用試験のこと。この試験を通過するものを「一番番科」といい、名譽をもつていた。

〔共通語訳〕

片足は草履、片足は下駄を履いてね、モーイ親方は。

片足は下駄を履いて、馬鹿者のようにふるまつて、ここの頭はすぐれていたわけさ。それで、しまいには偉い人になつていてからね。

だから、頭は知恵があつたわけさ。それで、みんな

「なんであんたは、こんなにして雇っているねー」つて言つたら、

「これ、アヤーが、これ、ターリーが」と言つたつて。

そう言つたもんで。

(モーイーは)なんでもわかりよつて、こんなに。

わからんみたいさーねー、人から、

「モーイふらー、ふらー、ふらー(モーイのばかたれ、ばかたれ、ばかたれ)」している。

⑤ 優れもの

佐久本トヨ (明治三十九年生) 泡瀬

モーイ親方。あれは芝居から。あれは芝居しーがる

(多居役者ならよくわかる)、モーイ親方。

モーイ親方や、あのとにかくね、普通の人間でね、

のモーイ親方が成功したつて、試験に、一番。

〈方言原話〉

与那瀬松栄 (明治三十七年生) 池原

① 床下勉強

くれー、頭ーなーでーじな、わらばー、学校時代
からなーでーじな優り者やたんでいよー、頭ー切り
てい。あんしーが、学校かい行き帰りぬばーやたん
てーかん、なー残いぬだうしんちやーや学校かいはー
いしぇー、うれーなーよー、田んぼなーりー歩ちやー

え話、それでひやー、頭がうん、頭がいい。頭がい
い子やる。他から見たらね、ぬき人の、気ちがいい男に
似ておるが、ようは、頭は上等やしが、あれ、かなわ
ん、皆、これには、考え方問題つて、丁度クイズ、今ク
イズあるでしよう。クイズあれしたらや、なんでも明
かしてや(言い当ててね)、しようたつて。

(モーイ親方の話は)これはね、歴史の本にあるか
らよ。あるよ、ちゃんとあるよ。

※3ぬき人 未詳。

※2首里十五人 表十五人のこと。琉球
王府の高位の役職で、三司官に次ぐ。國
政にかかる重要な評議を行なう。行政
各部署の長官次官に相当する者たちで、
合計で十五人いた。

※1摺政三司官 摺政は宰相のことで、
王族が任命され、三司官の上に立つ。三
司官は大臣に相当する役名で、三名より
なる。

に、アタビチャヤーすぐで、アタビチャヤーすぐやーに。

カエルでー、カエル。うり取たいぬーさいしなー、学
校んじえーむる勉強さんでーるふーじ。あんすしが
うりが行方ーわからんなやーに、うりが本當精神
のー、うりしが、ぬーうり聞ちゃんてーかん、

「ぬー、私ねーわかっているうくどう行かんでいんしむ
よー」でいやーに。あんさー、うりが勉強そーしえーわ
からんなー。家ぬ床ぬ下なーりー勉強し歩ち。うり
が燃ーちえーる蠟燭、山るかましまつとーたんでい
よー、床下んかい。あんそーたんでいしが、うれーなー
どうしんぢやーがんわからんばーてー。うりが、あん
し勉強そーんでいしえー。

また、あんさーに、なー断髪ん、今ぬ散髪てー。う
りん切りらんぐどう、なー髪えーちやーモーイクワ
ンクワンし、うーいわづくわち。なー、耳んうすたい、
また目うすたいし。あんし、なー、学校かいんうしば
ん。ふどういー今までいんなー、髪えー、断髪えー
モーイクワンクワンしよー。あんそーたんでいし
が、うれーでーじな優り者なー、博士やーるばー
てー。

あんそーしがなー、今ちきていうりが記念の一残

やーに、あんさーにうりが、うりそーしえー、今ぬあ
ぬ、北谷、北谷ぬよー、トンネルぬ側んかいシーむ
あしえーやー、ぬーんたが、あまぬ部隊の、北谷の。
石碑、建つちよーるはじやしがよ、とにかく墓んあま
かいあるばーよーやー。

（共通語訳）

これ（モーイ親方）は、頭がたいへんに、子ども時代、
学校時代からもうたいへんな優れ者だったそうだ、頭
が切れて、だけど、学校への行き帰りというときで
あつても、もう他の友達は学校に行くよね、モーイは
ね、田んぼに寄つていて、蛙をつかまえて、蛙をつ
かまえたたりしてね。（アタビチャヤーとは）蛙ね、カエル。
それを取つたりなんなりしてね、学校ではまつたく勉
強しなかったみたい、そういうようすだったので、モー
イの将来はわからなくなつて、モーイの本当の心持ち
は、立派なんだけど、モーイにそのこと（どうして学
校に行かないのかということ）を聞いたとしても、

「なーに、私は（学校で習うことは）わかつているんだ
から行かなくともいい」と言つて。それで、（他の人は）
モーイが勉強していることはわからない。家の床下で
勉強していく。この人が燃やした蠟燭が、山のよう
に積み上げられていたそだよ、床下に。そういうふう
にしていたんだけど、そのことは友達でさえわからなかつたわけだよ。モーイが、そうして勉強していくと
いうことは。

また、それで、もう断髪も、今の散髪ね。（モーイは）
髪を切らないので、もう髪はいつも乱れてボサボサに
して、頭を振つてぱらぱらにして。もう、耳にもかぶ
さつたり、また目にもかぶさつたりして。それで、も
う、学校に行くのも別に気にとめなかつた。大人になつ
ても、もう、髪の毛は、散髪は乱れてボサボサにして
ね。そういうふうにしていたけれども、モーイはたい

幸一モーイクワンクワン モーイは蓬
髪、結わずにぼさぼさのままにした髪のこと。
モーイクワンクワンで、髪を振り
みだしているさま。

※2 北谷 沖縄本島中部の地域名、また、
現在の北谷町にある字の名前ぢやなー。
方言でチャタン。ここでは北谷グスクと
そこから北側にかけての一部を指してい
ると思われる。

※3 西原 米軍キャンプ瑞慶賀、あるいは
キヤンブ桑江のことを指すと思われ
る。

※4 西原 北谷グスク（現在の北谷交差点
の北側にある丘陵）にある古い墓を指す
か。沖縄以前には、北谷グスクのすぐ
北に北谷トンネルがあった。

そうな優れ者で、博士であつたわけ。

そういうお方であつたが、今にいたるにモーイの記念は残つてね、それが、今北谷、北谷のね、トンネルの側に岩山があるよね、石碑も建つてはすだけどね。とにかく墓もあるそこにあるわけなんだよね。

② 床下勉強

新崎カマド（明治四十二年生）中町

〔方言原話〕
ふらーふーじーそーてい、床下ぬみーうてい勉強つ
し、学校かいやむるいかん。ふりむんぶーじーそーし
が、頭ーちつち。あんぐどうしやなうーまくやたん
でい。また、髪ーイクワンクワンし、髪ん立派な結
らん、床下にるうくどう。あんざくどうな、髪モー^イ
イクワンクワンさくどう、モーイ親方。
(住んでいたのは)首里ですよ。首里が多いはずよ、
あの新垣というのは。
うちらの子どもも、みんなモリチカにモリタダで
す。

〔共通語訳〕

(モーイ親方は)たわけ者ぶついていて、床下で勉強して、学校にはまったく行かなかつた。狂人じみたふるまいをしていてるが、頭は利いて。あのように困つたわんぱく者だつたつて。また、髪の毛もボサボサ振り乱して、髪も立派に結わない、床下にいるので。そういうことで、髪をボサボサ振り乱していたから、モー

イ親方（とあだ名された）。

(モーイ親方は)首里ですよ。首里が多いはずよ、あの新垣というのは。
うちら子どもも、みんなモリチカにモリタダで。

③ 床下勉強

当真つる（大正十五年生）泡瀬

〔方言原話〕
ぬーが、床ぬ下んじーるんち勉強さん、むる床ぬ下
どうやたんでいしえー、紙、人ぬ寝んじーねー勉強す
たんでい。人ぬ歩くちーねーモーイクワンクワンし遊
でいあつちゅたんでい。

〔共通語訳〕

なんだか、床の下でなら勉強した、なにもかも床の下であつたそうで、(勉強した)紙(があつた)。人が寝たら勉強していたつて。人が活動しているときは髪を振り乱して遊びまわつていたつて。

④ 床下勉強

島袋スミ（大正七年生）越前

床の下で勉強しよつたつて。「床下ぬみーうてい勉強すたんでいどー、あぬ人よー」。やつぱり、邪魔が入るといつてじやなかつたかねえ。

⑤ 床下勉強

太田俊雄（大正七年生）与儀

（モーイ親方は）屋は馬鹿げて遊んであるいて、隠れて床下で勉強した。いや、夜じゃないか、屋でようねえ。みんなには遊んでみえるけど、自分は誰も見られんように勉強している。

⑥ 床下勉強

知念真章（明治四十二年生）胡屋

モーイ親方は偉いさー。モーイ親方は床下で勉強したそうだよ。少年の頃、青年の頃。それがね、墨すつた、あの墨のきれよ、箱のいっぱいあつたつて。床下で勉強したという話もあるんだが。まあ、本当か嘘かは知らんが、こんなにさ。それから習字の名人になつたるわけ。

⑧ 床下勉強

町田宗男（大正六年生）中の町

あれ、モーイ親方のあざ名だよ。あれは、あざ名。モーイといふのは、いつもあればもう、ふらふらじー（ばかなまね）をしておつたでしょ、モーイ親方はね。勉強も床下ぬみー、床下で勉強しなかつたらな、隠れて。人が見ているときには勉強しなかつたつて。もう、アタビーグわーすぐたいや、鶏ぐわーおーらちやい、うり、うんなくどうしかしなかつて、屋は（蛙とりをしたり、關鶏をしたり、それ、そんなことしかしなかつたつて、屋は）。夜、皆が寝静まつてから、それで、勉強に取組みよつたつて。なんど、誰が見ないところで。それだけのジンパンあつてーるばーーー（知恵があつたわけだよ）。

(5) 借りた本

① 借りた本

普久原幸（大正五年生）泡瀬

（方言原語）
このモーイ親方はね、モーイクワソクワソしてよー、ふらーふーじーしているけどね。

きよつたつて。タウチーって、喧嘩する鶏。それで、また、とつてもね、仕事もないで遊び人だつたつて。これが、でも出来物であつたつてよ。勉強、床さぬみーでやりよつたつて。床下で、隠れて。モーイ親方つて。とつても頭はよかつたつてよ。頭は切れで、踊りも上手であつたつてさ。それにモーイ親方といふのは、踊りが上手であつたわけさ。で、この『録音不良』さーね。だから、とつても偉い人であつたつてよ。

*1 ~ 録音不良 ~ 録音にエラーがあり、聞き取れない部分。

「ぬーが、用事やしまちえーるむんなー、しめるする」でいたんでい。

（6）書き損じ

たつて。だからこの人はね、とっても優れてはいたつてよ。

「なーむる説でーるむんぬや、しめるする」んぢやくとうよ。

「むる説でーれー、くれー借でーどうちえーるむん、返しわるやさにーんぢやくどう、

「んだ、あんしぇー私書ちゅさ」と言つてねー、全部やつてたつて。書ちやーさ、また、そのままできていつたつて。だからこの人はね、とつても優れてはいたつてよ。

（共通語訳）

このモーイ親方はね、髪をぼさぼさに振り乱して、氣のふれたぶりをしているけどね。

兄さんがね、書物を借りてきたのでね、その書物を全部、自分も読んでね、燃やしたそうだ。

「もう大変なことになつた。借りてきたものだというのに、これを燃やして、もう大変なことになつた」と、モーイの家はたいへん、親たちも驚いたんだけどね、「なんで、用はませたんだから、かまわないじやない」と言つたそだ。

「もうみんな読んであるのに、かまわないでしょ」と言つたので、

「みんな読んだとはいえ、これは借りてきたものなのに、返さないといけないじゃないか」というと、

「じゃあ、そしたら私が書くよ」と言つてね、全部やつてたつて。書いたものは、また、もとのままできてい

① 書き損じ・夜勉強

屋宣ハル（大正三年生）安慶田

（方言原話）

自分で習字、習字。昔は習字で書くでしょ、字は。これで、習字、床下で自分し習やーによ、あんし、あぬ、うぬ習字書ちえーし、うつちゃんぎーし親ぬ見じやーによ、

「あい、くれー誰が書ちえーがやー、あん立派書ちえーる」んでい、親ぬ言ちやれー、

「うり、私が書ちえーびーさ。うれー悪さぬー私が捨ていてーびーさ」んでい言たんでい。このぐらいジンブン持ちやでーるばーてー。

星一雄鶴やー持つち、むるあまくま遊でー歩ちゆたんでい。あんさーに、うぬ、なーふらーんでいいち考とーるばーてー。あんさーに、勉強やまた、人ぬ見だんどうくまんじすたんでい。腰くいてーつし。

あんさーに、うぬ、うり習字、字書ちえーしん、まーがなんかい出すんちがやらー、うれーわからんしが、うぬ書ちやんじやーしえーし、うつちゃんぎーし親ぬ取いで見じやーに、

「あい、くれー、あんし、あん立派書ちえーる、誰が書ちえーがやー」んでい言ちやくどう、

（69）

「うれー私が書ちえーびーしが、やな書ちしるうつ
ちゃんぎてーびーる」でいたんだい。うんねーるーぬ
話を聞いた。

② 書き損じ

鶴田トミ（大正五年生）セントラル

〈方言原話〉

これ（モーイは）、隠れていて勉強はしているつて。
勉強はしているから、これが書ちやんじやーつし、書か

自分で習字、習字。昔は習字（筆で）書くでしよう、
字は。これで、習字、床下で自分で勉強してね、そし

て、あの、この習字を書いたものを、投げ捨ててある
のを親が見てね、

「おや、これは誰が書いたのかなあ、あんな立派に書
いてあるものは」と、親が言つたら、

「これ、私が書いたものですよ。これは不出来なもの
を私が捨てたんですよ」と言つたんだつて。このぐら

い賣かつたわけよね。

母は雄鶏を持って、一日中あつちこつち遊んでばかり
いたつて。それで、その、もう気がそれたものと（親

は）思つていたわけね。だけど、勉強はまた、人が見
ないところでして、隠れてやつて。

そして、その、モーイが習字で字を書いたものも、
どこかに出すといつたんだか、それはわからぬけれど、
この書き損ねたものを、投げ捨ててあるものを親
が取つて見て、

「あれ、これは、あんな、あも立派に書いてあるが、
誰が書いたのかなあ」と言うと、

「これは私が書いたのですが、不出来なので投げ捨
ててあるんです」といつたそつた。そんなくらいの話
を聞いた。

〈共通語訳〉

モーイは、隠れていて勉強はしているつて。勉強は
しているから、これが書き損ねて、書き捨ててあるの
をね、

「これ、誰が書いたか」と。これ、親が見てから、
「私が書いたものだ」というと、（親は）びっくりして。
これ、モーイが書き捨てたのがあるからね。そして、
これ、隠れていて、一応勉強はしていたつて。

「モーイ、モーイ」といわれ、人から気がふれて
いるように言われてゐるけど。

これ（モーイの話は）たくさんあるよ、もう。

(3) 書き損」

伊佐安弘（明治四十一年生）山里

〈方言原話〉

「親からなー、
「いやー、手墨学問ぬんはまらん、うんぐどうしる
やるいーでいち親の方からぬらーつたくどう、『あー、
ぬー、私ねー、自分ぬはんしえーそーるむん』でいる
ういじさ、書ちえーわじやどうむんなくなつちえー
うつちやんぎてーういし、こう、書いた本、あのう、
紙を座敷いっぱい広げたんだ。あんし、そうしたら、
あの、これを拾い、拾つて父が見たんだよ。男の親が

「これ誰がしえーが」んちやくどう、

「なー、私が書ちやんじやーつしうつちやんぎてーん」
でい、言ちやくどう、

「確かにいやーがしえーみ」ち。それから、あの達筆
といふことも親がわかつたという話もあるんだよ。こ
の人はやつぱり、苦学しておるなーということもわ
かつたという話もある。

〈共通語訳〉

親からね、

「おまえ、習字や読書にはげまないで、そんなふうに
して（遊んではばかり）いるのか」と、親の方から叱ら
れたので、「ああ、なんだ、私は、自分でちやんとで
きているのに」と思っているので、書いてはわざとも
みくちやにして投げ捨てておいて、こう、この書いた

本、あのう、紙を座敷いっぱい広げたんだ。そして、
そしたら、あの、これを拾つて父が見たんだよ。お
父さんがね、

「これは誰が書いたのか」と聞くと、

「もう、私が書き損じたものを放つてあるんですよ」

「確かにおまえがやつたのか」と。それから、あの達
筆といふことも親がわかつたという話もあるんだよ。
この人もやつぱり、苦学しておるなどいうこともわ
かつたという話もある。

(7) 下駄と草履

① 下駄と草履

白田（島袋）タケ（大正七年生）知花

〈方言原話〉

モーイ親方やまた、親孝行者んやてーんてーなー。
親ぬやー、

「今日や雨降いくどう、下駄くでい」んでい、男ぬ親
の一、

「足駄くでいいき」んでい、言らつたくとう、女ぬ親
の一、

「雨や降らん。いい天気どうやくどう、草履どうくでい
いちゅる」んでい、言ちさくどう。なー、

「片親のー下駄くみんでい、片親のー草履くみん
でい、やりー、くれーらやーあーしむがやーん
ち考ーたくどう、『はーつ、両方の親ぬ言ーちき聞か

んねーならんむん」ち、片足や下駄、片足一草履くでい
よ、あんざーに御城んけーなー字習ーがもーちえーる
ばーどうやはに。

あんざーに、モーイ親方やでーじな親孝行者やたん
で。なーすぐ、両方ぬ親ぬ言し聞かんねーならん
ぢやー、あんひやてーちさんぢ、私たー親ぬちやー話
聞かさりーたんよー。

〈共通語訳〉

モーイ親方はまた、親孝行者でもあつたつてね。

親がね、

「今日は雨が降るから、下駄を履け」と、父親は、
「下駄を履いていけ」と言わされたが、母親はまた、
「雨は降らない。いい天気なんだから、草履を履いて
いくんだよ」と言わされたそうだ。もう、「片方の親は

下駄を履けと言い、片方の親は草履を履けと言われて
は、これはどうしたらしいのかなあ」と考えた結果、
「ははあ、両方の親の言いつけを聞かなきやいけない
ものな」と、片足は下駄、片足は草履を履いてね、そ
うして御城に勉強にいらつしゃつたわけなんだろうね
え。

それで、モーイ親方はたいへんな親孝行者だつた
て。もう、すぐ、両方の親の言うのを聞かなきやいけ
ないといつてね、あんなことをしたんだと、うちの親
かういつも話を聞かされたんだよ。

② 下駄と草履

普久原幸（大正五年生）泡瀬

〈方言原語〉

学校んかい行ぢらんでいやーにや、親がや、女ぬ親
がや、
「今日やいー天氣やくとう草履履ちいけー」んでい。
また、男ぬ親ぬ、

「雨降いがすらーわからんくどう、下駄履ちいけー」ん
ちやくこううやー、「ち履ちゅーたんでい。」ちえー
下駄、「ちえー草履。あんしケツテーケツテーし行
じょーたんでい。」二人が言し聞ちゅんち。

また、このモーイ親方ーよ、あの、なんて言つたか
な、あれ。いろいろ、うぬ人がむのーまんどーんやー。

〈共通語訳〉

（モーイ親方が）学校に行くといつてね、親がね、
母親がね、

「今日はいい天気だから草履を履いていきなさい」と。
また、父親は、

「雨が降るかもしれないから、下駄を履いていけ」と
いつたのでね、両方履いていったんだつて。片足は下
駄、片足は草履。そらやつてがたがたして行つたんだつ
てよ。両親の言うことを聞くといつて。

また、このモーイ親方はね、あの、なんて言つたか
な、あれ。いろいろ、この人の話はたくさんあるんだ



(3) 下駄と草履

星宣ハル(大正三年生) 安藤田

〔方言原話〕

お父さんが、

「下駄履ちいき」んでい言一、お母さんが、
 「うまーなー石ぐじえーらーぬみーやくどー、下駄履
 ちーねー悪さくどー、草履履き」んちやくどーよー、
 親ぬぢやー「人が話聞ちやーに、片足ー下駄、片足ー
 草履くどーたんで。うんぐどうーしさーによ、
 「ぬーがいやーや、片足ー下駄、片足ー草履くどーる」
 んちやくどー、
 「あんし、お父さんが言しんお母さんが言しん聞か
 ねーならん。二人が言し聞ちよーん」でい言たんでい。
 うぬモーヤーんでいしがるやんでいどー。

〔共通語訳〕

お父さんは、「下駄を履いていけ」と言い、お母さんは、「ここはもう石ころだらけのところなので、下駄を履いたら良くないから、草履を履きなさい」とつていつたから、両親二人の話を聞いて、片足は下駄、片足は草履を履いていたって。そのようにして、していたのでね、「どうしておまえは、片足は下駄、片足は草履を履いているのか」と言つたから、「それは、お父さんが言うのもお母さんが言うのも聞かないといけない。一人が言うのを聞いてるので」

と言つたそだ。そのモーイという人がだよ。

(4) 下駄と草履

涌田トミ(大正五年生) センター

〔方言原話〕

「下駄履いてよー。片足は下駄履いて、かたはらは草履
 履いて歩きよつたさー。
 「なんでいやーや、足駄、草履んくでいる歩ちゆる」
 んちやくどーや、
 「親ぬ言一ちきやてーる歩ちゆる」
 「えー、モーイー、いやーや、歩ちーねー足駄、草履
 んくでいる歩ちゆる」んちやくどー、足駄とう草履どう
 くでい歩ちよーるばーてー、親ぬ言一ちきんち。
 芝居で見るだから、あんまり詳しくないよ。

〔共通語訳〕

(モーイは) 髪は乱れてね。片足は下駄を履いて、片足は草履を履いて歩いていたんだよ。
 「なんでおまえは、下駄、草履を履いて歩くのか」と言われたので、
 「親の言いつけであるから(下駄と草履を片足ずつ履いて)歩いている」と(モーイは答えた。)
 「おい、モーイ、おまえね、歩くときは下駄や草履を履いて歩くんだよ」と(親に)言われたので、下駄と草履を(両方いつぶんに)履いて歩いているわけね、親の言いつけといって。
 芝居で見るだけだから、あんまり詳しくないよ。

*1 藤原 ぞうら。皮、萬アダンの葉。

⑤ 下駄と草履

佐久間千代（大正七年生）室川

⑥ 下駄と草履

当真つる（大正十五年生）泡瀬

まづうんぐどううんぐどう
草履と下駄で高さがちくはいでおかしな歩き方になっている様子を指している

〈方言原話〉

草履とう下駄とうくだくとう、
「ぬーが、モーイー、いやーやうんぐどううしくろー
る」んちやくとうや。

「なー、空足ーつし歩ちえーうーし、ふしがらんなた
くどうよー、ターリーが下駄買ていつちくまちえーる
ばーてー、

「空足ーし歩くなよーやー」んち。

今度ーアヤーが、草履ー、

「空足ーし歩くなよーやー」んち買ーていつちくま
ちやくとう、片足ーターリー孝行、片足ーアヤー孝行
んち、「二ち、うんぐどううんぐどうーしくでい歩ちゅ
たんでい。

〈共通語訳〉

「なんど、モーイー、おまえはこんなふうに履いてい
るのか」と聞いたのでね。

もう、はだしで歩いて、どうしようもなかつたので、

お父さんが下駄を買ってきて履かせているわけだよ、
「はだしで歩くんじやないよー」って。

今度はお母さんが、草履を、

「はだしで歩かないでね」と買ってきて履かせたので、
片足はお父さん孝行、片足はお母さん孝行といって、
二つ、こんなこんなして履いて歩いていたそだ。

〈方言原話〉

あんし、アンマーがー「草履くみ」んでい、スー
がー「下駄くみ」んでいくどう、一いち、下駄とう草履
とう、ありとうくでい歩ちゅたんでい。二人が言ーし
聞ちよーんでいたんでい。

「ターリーが言ーしん聞ちよーい、アヤーが言ーしん
聞ちよーんどー」でい、あんさー、下駄とう草履とう
くでい歩ちゅたんでい。

〈共通語訳〉

それで、母ちゃんは「草履を履きなさい」、父ちゃん
は「下駄を履け」と言うので、二つ、下駄と草履と、
それをはいて歩いたつて。二人の言うことを聞くとい
うことだつたつて。

「父さまが言うのも聞いて、母さまが言うのも聞いて
いますよ」と、それで、下駄と草履とを履いて歩いて
たつて。

⑦ 下駄と草履

神里マカト（大正元年生）安慶田

〈方言原話〉

モーイが、片足ー草履くでい、片足ーまた下駄く
でい。あんすくどう、

「ぬーが、いやー、うんぐどうそーる」
「一ちえーアヤーがいーらちえー、一ちえーターリー

がいーらちえーし」。あんさーに、「あんし、いやーぐどーる者^者、うんぐどうーし、や、いかなうりさんてーん、うんぐどうーし、くむてーんなーでいよ、あんしゅらーつたんだい。

〈共通語訳〉

モーイが、片足は草履、片足はゲタをはいて。そうしたい、

「なんで、おまえ、そんなんふうにしているのか」

「一つは母^母上がくれたもので、一つは父^父上がくれたものなので」。そうして、「このよう」おまえってやつは、このように、いくら両親からもらったとはい、このようにはくのか」と、そうやつて怒られたそうだ。

⑧ 下駄と草履

知花ツル（大正五年生）嘉間良

あのね、どつか行く時にさ、お母さんは「草履履きなさい」って言うし、ターリー（お父さん）がは

「下駄履きなさい」って言うし、もう、下駄と草履と、こう履いて道歩いたらさ、

「なんていやーやうんぐどうーし履^はちよーが（なんでおまえはこのように履いているのか）」つたら、

「うれー親孝行^{おやぎ}ぬたみやいびーさい（これは親孝行のためです）」

お母さんは「草履履きなさい」、お父さんは「下駄履

きなさい」と言つて、一人の親孝行、一回にするには、こうするよりほかないさあねえ。で、これ、「親孝行^{おやぎ}すんでる、あんしそーびーん（親孝行する」ということで、こうしているのです」と言つて、言つたつてよ。だー、モーイの話はいろいろあるよ。

⑨ 下駄と草履

町田宗勇（大正六年生）中の町

（モーイが履き物を片方ずつ別のものを履いているのは）あれはなんでかつていうとね、お父さんが下駄買つてあげたから、また、お袋も草履を買つてあげたり、ね。あり、あんさくどう、

「あーつししゃびよー、せつかく親ぬくいてーみしえーるむん、履かわんれーならんさ（ああ、せつかく親がくださつたものを、履かないといふことはできないでしよう）」んでいやくどう、片一方や下駄履ちやーんかい、片一方、草履^{くつ}履^はちよーしえー（片一方は下駄を履いて、片一方、草履を履いているのは）、そういう意味らしい。

それが、これ、芝居^{しばゐ}どうやくとうてー、芝居^{しばゐ}どうやくどう（芝居だからね、芝居であるから）、これ作つたもんかもしれないよ。

「これ履かんから親不考なる」と言つてね、そじやー、ああいつたのが。あれー（モーイは）、頭も切れてる。

⑩ 下駄と草履

西平マツ（明治三十四年生）久保田

モーイ親方。アタビーね、蛙捕つてよ、ね。あんまり頭がきれるからね、ふりた（たわけた）、ぼけたふー

なーしてよ、やー、するわけよ。この人は、モーイ親方。

この人は、片はらー（片方は）、一つやね、下駄、一つや草履履いてよ。このモーイ親方でいっさ。モーイ親方、首里、豊見城、伊野波ぬ、これ、モーイ親方伊野波。伊野波殿内、首里ぬ（伊野波の、この人、モーイ親方は伊野波。伊野波殿内、首里の）。

⑪ 下駄と草履

稻嶺シズ（明治四十三年生）山里

あのね、このモーイ親方が、お父さんがはね、両下駄履きなさい」と言つたでしょ。またお母さんがは、「草履履きなさい」と言つて、したからね、もう、両方のこと聞かないとだめだからって、片方は下駄、片方は草履ね、履いて、もう一人ぬいぐるわば（いいつけを守つて）、孝行したって話ですよ。

「ぬーが、ぬーんち」でい、

「あー、また戻ていめんそーち、くりからーうんちけーさりみそーりんでいち、うぬ意味どうやいびんどー」でいぢやくどう、

「えー、あにーんちあいよー、うぬままうりつし。タリーが出じみそーちから、また、うれ一片付きていう

(8) 爰と門

① 爰と門・母の御願好き

久場政三（明治四十三年生）園田

方言原話

今度一ターリーがくぬ唐旅しみしこーるばーに、唐旅でいれーしなんかいぬ唐旅でいしぇーや、しなんかい。唐旅しみしこーるばーに、

「ターリーや出じみしスーんどー」し、なー、うぬ供ぬちやーからぬーから大騒じそーいに、供ぬちやー使やーなかい、爰でいぢわかいがすらやー、爰。爰、死に入つてい運ぶしや。とー、あり家ぬ庭んかい持つちつち、引ち立ていてー、うりしこーみしこーたんでい。

「ぬーが、モーイー、いやー。ターリーやあんしこー唐旅しみしこーんち、なま御しこーいそーみしこーるむんぬ、ぬーんちいやーうんぐとうーし爰うまんかい引ち立てーが」んじやくどう、あんされー、

「アヤーさい、くれターリーがめんしこーくどう、あまかい唐旅しみしこーくどう、かんししこーびーん」でいぢやくどう、

本1 豊見城　沖縄本島南西部の地域名
開切名：現在は豊見城市。とみぐすく。
方言ではトウミグスク、トウミグシク。
伊野波殿内の大宗室である豊見城殿内に
について言及したものか。

米の伊野波殿内　モーイ親方こと伊野波

糸の妻系。大宗室は毛氏豊見城殿内

米3唐旅　現在の中中国で唐とし
といい、冊封使など、中国へ往来すること
とを唐旅という。

りしえーん。

いよいよ、あの、ターリーが船出しみそーち、なー、
毎日、朝日晚、なー、御元祖ぬ前と一火ぬ神ぬ前と一
んかい、なーウートートウ、トートウー、チャーピー
トウーピーしみそーち、なー、今日ん明日ん。あんし
みそーちやくどう、あとー、うぬモーイーが聞ちみ
そーやーい、なー何ヶ月でいちんうり続らぐどう。
うぬアヤーがもーてい、ウートートウ、トートウうさ
ぎみしえーるばーに、
「アヤーさい」でいち、ちんくじてーし。
「ぬーが」でーねー知らんふーなーし、またウートー
トウでいち手持たんでいねー、また、
「アヤーさい」でいち、ちんくじてーーし。
「ぬーがひやー」んでいち、うふあびーしみしえーる、
また知らんふーなーし、またウートートウ、トートウー
しーじうんしえー、
「あつく、くぬひやー」ち、アヤーやはじこーざく出
じとーみしえーたんだい。
「あい、いやーや、ターリー御願しーるんしえー、
いやー、うまうとーていアヤー、アヤーびけーし、ぬー
さるむんが」でいちよー、ごーぐちしみそーちやぐ
とーか、
「アヤーさい、うんじょーくさみちうめーんしえー
るー」でいち、
「くさみちよーん」でい、

「えー、あねー、えー、あんやいびーみ。とーさい、
アヤー、くぬ御元祖やていん、ちょーどううんじゅどー
るー」でいち、
「なんの、モーイー、おまえは。お父様はああして
唐旅なさるといつて、いまお支度なさつてらつしやる
のに、なんでおまえはこのようにして龜をここに組み

しーねー、私がうんじゅかんし合図うんぬきーしんじ
ぬむんどうやいびーんどー。毎日うんぐどうーしウー
トートウ、トートウーーーねー、あとートートーメー
ん、御元祖でーしんくさみちうしみしえーる。まじ
一日、十五日、日かざてい、うんにーにうさぎみそー
れー。あんしえー、御元祖んウミチムヌン、神仏ん聞
ちみしえーしが。うぬ今日ん明日ん毎日ウートー、
トートウーーーねー、あとー、うんじゅがくさみちみ
しえーんねーし、御元祖ん神仏んくさみちうしみ
しえーくどう、一日、十五日に日かじやつていうさぎ
みそーり」でいちやぐどう、

「あんすがやー」でいち、うりしみそーちやん。

共通語訳

今度はお父さんがこの唐旅をなさるときに、唐旅と
いうのは中国に行くことを唐旅といふからね。中国
に、唐旅をなさるときに、

（共通語訳）

お父さんがお出かけになりますよ」と、もう、その
供のものたちからなにから大騒ぎしているときに、
(モーイーが)供のものたちを使って、龜つてわかる
かな、龜。死んだ人を入れて運ぶ物ね。そう、あれを
家庭に持ってきて、組み立て準備なさつたんだつ
て。

チムンはかまどの前のことで、ビスカソ
(火の神)と同じものだが一種の導体で
あり、かまどを表現した三つの石を渡へ
て(かわ)第三のもの)といふお祭になり
たと考えられる。

泰一御元祖めこの語りでは「火の神」

とお指して言つていい。

泰一御元祖めこの語りでは「火の神」
とお指して言つていい。

泰一御元祖めこの語りでは「火の神」
とお指して言つていい。

泰一御元祖めこの語りでは「火の神」
とお指して言つていい。

立てるの」と聞くと、そうしたら、

「母上様、これは父上がおいでになるので、あちらへ唐旅をなさるので、こうしているんですよ」と答えると、

「なんで、どうして」と、

「ああ、また戻つていらっしゃつて、これ（龜）ではお歸りになりませんようにという、そういう意味なんですよ」と言つて、

「まあ、そなうの」といつて、そのままにしておいて。お父さんがお出かけになつてから、また、これはお片付けになつた。

「よいよ、あの、お父さんが船出なさつて、（お母さんは）もう、毎日、朝晩、もう、仏壇と龜の神とを、もうウートートウ、トートウと、いつもお祈りなさつて、もう、今日も明日も、そななさつておられたので、しまいには、このモーイーがお聞きになつて、もう何ヶ月とお祈りが続いたので。お母さんが（仏壇などに）お参りしてウートートウ、トートウとお祈りを捧げているときに（モーイーが）、
「母上様」と、茶々を入れて、（お母さんが）
「なあに」というと知らんふりをして、またウートートウしようとして手を合わせたら、また、
すれば（モーイーが茶々を入れて）、

「母上様」と茶々を入れたりして。

「いつたいなんなの」と、大声をお出しになると、また知らんふりをした。またウートートウ、トートウすれば（モーイーが茶々を入れて）、

「もうう、この子は」と、お母さんはとても憤慨なさつ

たそだ。

「あのね、おまえは、お父様の無事をお祈りをしようとなれば、おまえは、ここで母上、母上と邪魔ばかりして、なにをしているの」といつてね、文句をおつしゃつたので、

「母上様、あなたは御立腹なさつてているのですか」というと、

「腹を立てて」と、

「ああ、そう、へえ、そうですか。ほら、母上、この御先祖様も、まつたくあなたとは同じ。今日も明日もウートートウ、トートウとお祈りすれば、私があなたをこうしてお呼びたてするのと同じことなんですよ。

毎日そのようにウートートウ、トートウしたら、しまいにはトートーメーも、御先祖でもお怒りになるんです。まず一日、十五日、口を定めて、そのときにお祈りなさいませ。そうすれば、御先祖も龜の神様も、神仏もお聞き届けになるものを。このように今日も明日も毎日ウートート、トートウとやれば、しまいには、あなたがご立腹なさつたように、御先祖様も神仏もお怒りになられますので、一日、十五日に口を定めてお祈りをお捧げなさい」というと、
「そなうしようかね」といつて、そのとおりなさつた。

(9) 母の御願好き

① 母の御願好き

伊佐安弘（明治四十一年生）山里

〈方言原話〉

もう、朝も晩も、もう、神様ばかりにお願いする女の親を（モーイガ）見てね、「うんぐどうーしーねーちやーむぬーなでー、あぬ神加那志」と聞ちみそーらんどー」んでい。

〔御願事でいしえー」回なーどうする。うんじゅがむの一、朝ん夕さん御願事びけーしーねー、後ーにりてい聞ちみそーらん」と言うたららしいんだよ。それから、女の親も

「ああ、なるほどねえ」と言つて感じて、毎朝ということはやらなかつたという話があつたんだよ。

〈共通語訳〉

「こんなにしていたらいつものことだと思つて、あの神様はお聞きになつてくださいませんよ」と、もう、朝も晩も、もう、神様ばかりにお願いするお母さんを見てね。

「お願い」というのは一回だけるんだよ。あなたがするのは、朝も夕もお願い」とばかりしたら、ついには（神様が）飽きてお聞き下さらない」と言ったらしいんだよ。それから、「お母さんも」

「ああ、なるほどねえ」と言つて感じて、毎朝ということはやらなかつたという話があつたんだよ。

② 床下勉強・母の御願好き

安次輔ツル（大正六年生）嘉間良

（モーイ親方という）人はね、とっても偉い人の長男だつたでしよう。で、綱がね、「勉強しに行きなさい」と言つても行かないで、行かないで遊んでいたみたいだけど、とつても勉強していただつて、あの、床下に隠れてからに。昔の床は地から床は高かつたから、人も入られよつたから。あつちに隠れてね、木ぬ葉よ、木ぬ葉に勉強しよつたって、自分で。モーイ親方。わからんみたいにふらーふーじー（気がふれたようなまね）して。鶴もまた抱いてね、鶴抱いてあつちこつち歩いて、鶴に試合させてよ、試合させて帰つてくるさあね。帰つてきて、もう、自分は勉強ひとつもしてないみたいに、親方がもわからぬけど、床下で自分で勉強していただつて。

で、またお母さんがね、いつも仏壇に拝むさーね。もう、なんとか、家庭のあれも、このモーイのことも拝んでいるだろう。拝んでいるときに、「アヤーさい、アヤーさい（母上さま、母上さま）」んでい。

「ぬーが、モーイー（なあに、モーイー）」して、「ぬーがさ、アヤー。うんじょー毎日ぬーんちーいぬ事そーみしえーが、アヤーさい（なんですか、母上。あなたは毎日どうしておなじ事をなさつてているのですか、母上さま）」

「ぬーが、モーイー（なにが、モーイー）」

＊一神加那志 神様のこと。加那志は牧
意を表す接尾語。

てい、しみそーらんていんしむるする（なんでこのようすに毎日仏壇に向かって、なさらないでもいいのに）」「モーイー、いやーや。いやーがそーいり、いやーそーいりんちるやんとーやー、モーイー」んでい言ちが「モーイ、おまえね。おまえに性根が入るよう、おまえが性根の入つたしつかり者になるようにといつてやるんだよ」と言つたけど、「ぬーがさい、アヤー。私がそーいらんて、なんくるないびーささい、アヤーーん」とい言ちさぎーしが（なんです、母上。私に性根が入つてしまつかりしなくても、どうにかなりますよ」と言つていたみたいだけど）。

芝居、また、芝居でこんなしようつたけどよ。あれだつたよ、あとは、もう、自分で勉強一生懸命やつているから、とても偉い人になつて、首里の王様になつて、たかね。

(10) 一吹き煙草

知念善助（大正七年生）古瀬

〈方言原話〉

だからあの、お父さんからね、父親から、「モーイー、いやーや煙草ーなー日に一吹ちなー吹きよー」でい。

「あんし煙草びかーぬ吹くなよー」でい言ちやくと、「あんしそーなー、ターリーさい、私ねー日に一吹ち

吹けーしまびーらやー」と言つて。この煙管ぬ皿の大きいのを作らせてからにね、これ四十匁。昔は四十匁という袋があつたよ、こり、これぐらいの。あれ、重みは四十匁やたるはじ。なー、うり、一鉢に入りやーによ、うりんかい火しきてい吹ちやくとう、すぐ家んづーべーし、なー、くりが、見じまー、ちやーすがぶー」、ちゅけー隙から、「火事ろー、火事ろー」し話ぬあたんでい。そういうことで、「これはターリー言ちさぎどうやでいどう、私ねー一吹ちゅくどう、なー、うつささーに大丈夫」でい言つたんでい。

ターリーーさい、お父上様。ターリーーは父を示す語で、士族の身分の者が用いる。「さる」は自上の人に対する禮と書き使う。
お四十匁 外（もんじゆ）は麻糸の量位で、方言では「もんじゆ」四十匁で右よそ一五〇グラムほど。一枚で約三・七五グラム。

接3 フーー もうもー。すごい量の煙

が立ちのぼる様子。

ターリーー もうもー。すごい量の煙



んだって。そういうことで。

「これは父上の言いつけだから、私は一回で吸うのであつて、もう、これだけ吸えれば大丈夫」と言つたんだつたのね、昔のキセル、わかる? これ、大きい皿作つてからに、自分で。あんさーにすぐ、一袋、うりんかい入りやーによ、ブーケー吹ちやれー、また、うんにぬん親にぬらはーとーたんでー。

あんし、うれーなージンブノーまんどーーるばーてー。あんし、
「一吹ちる吹ちよーんどー、私ねー」んでい言たん
で、あんし。これで、そう言いよつたつて。ジンブ
ンまんどーーるばーてー。

〈共通語訳〉

親が、

「煙草一吹ちなーる吹ちゅんどー、わらべー」んでい
言ちやくどう、ちやびんそーる煙草ん、煙管んちあ
たしえーや、昔の煙管、わかる? これ、大きい皿作つ
てからに、自分で。あんさーにすぐ、一袋、うりんか
い入りやーによ、ブーケー吹ちやれー、また、うんに
ぬん親にぬらはーとーたんでー。

〈方言原話〉

親が、

「煙草一吹ちなーる吹ちゅんどー、わらべー」んでい
言ちやくどう、ちやびんそーる煙草ん、煙管んちあ
たしえーや、昔の煙管、わかる? これ、大きい皿作つ
てからに、自分で。あんさーにすぐ、一袋、うりんか
い入りやーによ、ブーケー吹ちやれー、また、うんに
ぬん親にぬらはーとーたんでー。

② 一吹き煙草

屋宣ハル(大正三年生) 安慶田

れに入れてね、ふうふう吹かしたら、また、そのときにも親に叱られていたつて。
こんなふうに、この人はもう知恵はたいそうあつたわけね。それで、「吹きだけ吸っているんだよ、私は」って言つたつて、ああやつて。これで、そう言いよつたつて。知恵持ちだつたわけ。

③ 一吹き煙草

神里マカト(大正元年生) 安慶田

〈方言原話〉

みんな煙草吸つていたつて。

「あーつさ、あんまり煙草吸つたら大変よー」んちゃ
くどう、
「とー、あんしえー私ねー、なー一回なかい煙草吹
ちやーにかいや、吹かんさ」。ひつちーすぐ煙草吹
ちやーによ、なーまた、やみたんでい。煙草びけーし
ちや、吹ちやーなかい、煙草すぐ一回で吹ちやーに
てー、

「なー、あんしえー私ねーなーやみーさ」んでい。

煙草びけーすぐフツ、フツ、フツ。だーーんぬあり
んかい作くやーに、うつびなーそーし煙管作くやーな
かい、
「とー、私ねーなー、むる煙草一吹かんよなー、今日
ひつちーなかい吹ちゅさ」でい、ブーケーブーケーし
吹ち、やみたんでい。

〈共通語訳〉

「みんな煙草吸っていたつ。」「ああもう、あんまり煙草吸つたら大変だよ」と言つたら、「さあ、それなら私は、もう一回で煙草を吸つてね、吸わないさ」。いつもすぐ煙草を吸つて、もう、また、やめたつて。煙草ばかり吸つて、煙草をすぐ一回で吸つてね、

「もう、それなら私はやめるよ」と。煙草ばかりすぐフツ、フツ、フツとやつて。たいそう大きな入れ物を作つて、こんな大きな煙管を作つて、「ああ、私は、まるで煙草は吸わないから、今日一日で吸うよ」と、ふかふかと吸つて、やめたつて。

⑤ 一吹き煙草

普久原幸（大正五年生）泡瀬

〈方言原話〉

「あんさい、煙管だてーん作いたんでい。」「一吹ちんでい言てーくとう」でいやーいさーに、パクパク吹ちょーたんでい。

東一バクバク ぶかり、ぶかり、タバコを吸うさまをあらわす複語

「（煙草は）一吹きずつ吸うんだよ、モーイー」といつたら、また親もそう言つたので、またも、（煙管の皿に煙草を）めいっぱいそのまま、煙管に入れて、たちまち煙をもうもうと吹いたつて。一吹きではあるからね、そうやつても。

④ 一吹き煙草

比嘉トミ（大正六年生）諸見里

〈方言原話〉

「パイプぬまぎーうりさーに、煙バーバーしみてーたんたさや。ジンブン持ち。

「一次ちなー一次ちゅんどー、モーイーんちやくどう、また親んあん言い、またん、みっちかーしぐ、煙管んかい入りやーい、すぐ煙バーバーすたんでい。」

⑥ 一吹き煙草・下駄と草履

金城初子（大正五年生）センター

〈共通語訳〉

「それで、煙管をたいそく大きく作ったそだ。」「（煙草は一日に）一吸いにしなさいと言われたから」と言つて、（大きな煙管で一日分を一度に）ふかふか吸つていたそだ。

〈共通語訳〉

「一回しか吹かないでよ」と言つたら

「もうせ一回なら、たくさん、一回であれしたほうがいい」と言つて、もう煙バーナイ出して（煙をもうもうと吹き上げて）からに、あれしているし。

パイプの大きいのを作つて、煙をもうもうとあげていたそだよね。知恵者。

下駄れしよ。お母さんがは草履、
外でるときには草履置いて歩きなさいよ、お父さん
がは、「下駄置いて歩きなさいよ」と言つたら、もう、あの、
二人が言うこと聞かなければいけない」と言つて、
二人、そして草履と下駄と履いて歩きよつたつて、そ
の話だつたよ。

(7) 一吹き煙草

知花ツル（大正五年生）嘉那良

で、また、これ（モーイ親方）、煙草吸いよつたつ
てよ。「いやー、あんし煙草一吸てーならんどーやー（おま
え、そんなに煙草ばかり吸つてはいけないよ）」と言つ
たら、

「一吹きちならんとーやー、モーイー、セーモー

（一吹きずつ煙草を吹くもんだよ、モーイー）と言つ
たら、「一吹きち吹けーしまびーらやーさい（一吹きで吸え
いいんですね」と言つて、こう、大きな煙管作つ
てよ、煙草一個ぐらい入るぐういの、で、あそこで吸
うつて。で、煙まくさあねえ「火事どー、火事どー（火
事だ、火事だ）」して、もう大騒ぎだつたつてよ。で、

これも、また、

「なー、あんしちさんぐーとう（そんなにまでし
て吸わないで）。こう、少しづつ吸うのは許したわけ
じやないかね。」

(8) 夜勉強・一吹き煙草

佐久田千代（大正七年生）率川

あのモーイ親方という人はね、やつぱし、あれ、
芝居にあつたもんだけれの。小さいときから、昔の人は縁組するさーね、親同士。
だからね、大きくなつたからね、うんと勉強させるた
めに、親はよく言いつけるけど、これ、モーイ親方ど
きう人はね、親が寝ているときは一生懸命勉強して
ね、またみんながね、一般が起きて歩く時分は、もう、
しょっちゅう鶴抱いて遊んでよ。だから髪も、もう、
いくら結んで出してもね、モーイカンカンしてね。鶴
逃がしたらあつちこつち入つていくさーね、小さいと
ころにも。だから、こんなに突つ込んだらバラバラなつ
てさ。だからもう、これでモーイ親方とは（髪もぼさ
ぼさだから）、親方ではあるさーない、親方だから。
だから、モーイ親方という名前つけられてよ。そして、もう、煙草もね、一回によく吸つてね。し
て、お家の中に、煙草吸つたらね、すぐ煙突のよう
に煙が出来るさーね。そうしたらね、経済的つて。何回
も吸つて捨てるよりはね、一回に吸つた方がいいと
言つてよ。全部親の言うの反対さ、ね。で、
「あんた勉強もしないで」と言つて、もう、人にあれ、
笑われ者さ。

ぐうよー、

「あー、あんやんな。あんしそー、あんしつししむ
んどー」んでいちしえーござん。

うぬ後つし、またうまぬ祝事あたどーてーぎざん。
隣の屋敷の主ぬ祝事。うまぬ門んじ、はたんじ、どうー

ぬ屋敷んかい棒えー、棒えー立ていやーに、ビー
チャー、死じよーるビーチャーくんち、かんし、あま
んけーねーらち下ざてーるふーじやん。門ぬ出じかー

出じかーしとくまに。奥さぬ歩からんしょーやー。
またん合図し、

「えー、モーイー、いやーあんしるすんなー。奥さぬ
歩からんしがーいぢやくどうや、

「ぬーが、私つたー地んかい立いてーるむん」ん
でい、い、

「うんじゅなーむんかい立いてーねーん」ち。うり
ん返しうたつとーるばーてー、モーインかい。

うぬあたいじんぶんぬあてーるばーよー。

で、

「ああ、そなのかい。それなら、そーしてもかまわ
ないよ」と答えたようだ。

その後で、今度は隣の家でお祝いがあつたらしい。
隣の屋敷の主人のお祝い。(モーイは)そつちの家の

門に行つて、(門の)そばで、自分の屋敷に棒を、棒
を立てて、ジャコウネズミ、死んだジャコウネズミを
くくりつけ、こうして、あちら(隣の屋敷)に向け
て下げておいたようだ。門の出入りするところに、奥
くて歩けないよね。またも(隣の主人がモーイを)呼
びつけて、

「おー、モーイ、おまえはあんなことをするのか。奥
くて歩けないんだが」と言つたら、「なんだ、うちの土地に棒を立ててあるのに」と、
(隣の主人は)やり返されてるわけだね、モーイに。
(モーイは)そのくらい知恵があつたわけだね。

〈共通語訳〉

(モーイの)自分の屋敷はここだよ。また隣という

のはここだからね。わざと、ここに、自分の土地に(へ
チマの苗)の根元は植えて、立派に成長して。そうし
て、隣の屋敷の上に、(ヘチマのつるを)這わせてあつ
たようだ。すると、その隣の屋敷の主が、

「おい、おまえは、自分の土地にこそヘチマは這わす
ものを、人の屋敷に這わせてあるようなものは、こつ
ちにあるものはうちがもいで食べるぞ」と言つたの

※1 ピーチヤー リュウキュウシャゴウ
ネズミのこどートガツネズミ科の哺乳類。
雄性は、独特的のジャコウ臭がある。頭部
は細長いばかり、尾は太く短い。両側
諸島では同地域の歩道や畜舎の周り
に見られ、よくピチヂ、チンチンとい
う鳴き声を発する。



喜屋武輝子(大正十一年生)泡瀬

〈方言原話〉

モーイ親方の木、屋敷、こんなして生えているでしょ
う。隣にあつたらしいのよ。隣にあたる(隣にあつた)
あんさー、これ、たれていたらしいのよ。

「根やまーやが」でい言たんでいやー、

「すーらーまーやが」でい、言やーによ、あんさーに、
「根やまーやが、すーらーまーやが」でいちん、はつ

きりわかりませんねえ、私も。蜜柑だつたかなあ、やん。

「夷やまーやが」んでいやーに、あんさーに、取ら
うんなとーたんだい。

〈共通語訳〉

モーイ親方の木、屋敷にこんなふうに生えているで
しょう。隣にあつたらしいのよ。隣にあつた木。それ
で、これ（枝先）が、（モーイの屋敷のほうに）たれ
ていたらしいのよ。

「根はどこか」と言つたんだってね、

「根はどこか、枝先はどこか」といつても、はつきり
わからませんねえ、私も。（この実は）蜜柑だつたか
なあ、だねえ。

「夷はどこか」と言つてね、それで、（隣の家の人
は）蜜柑を取れなくなつたんだ。

③ 根はどこか

山口栄順（明治四十四年生）泡瀬
蜜柑の話はですね。根っこは隣の家に生えてね、そ
いで、蜜柑はモーイ親方のこの屋敷の方にあって、そ

れを取つたら隣の人が怒つたらしいですよ。そうした
らね、隣の人が怒つたもんだから、
「根っこはあんたのもんだけれど、こっちにたれさ
がつたのはね、これ、私のもんだよ。私の屋敷に入つ
てある。なつてある」と、そういうような、取つてね、

やつたという話ですがね。

それからまた仕返しというのは、根つことは言わなかつたと思うんですがねえ。そのまた、根っこはこのモーイ親方の所に生えている木にですね、その枝がまた向こうにたれている。それで、たれているところに、なにかはつきり覚えてないんですけど、猫とは聞かなかつたですがね、他のものがね、そこにできましたから、それをね、相手の人が怒つたと言つたかねえ。吊りさげたそですよ。吊りさげたらね、それから今度はモーイ親方は、相手の人が怒つたもんだから、そ

うして、「なんだ、根っこは私の屋敷だよ」と言つて、その、返したという。そういう話を、まあ全部はその、あたりまえに覚えてはなんですがね、忘れて。ただこれだけはね、覚えているんですよ。

（吊りさげたものは）なにかは覚えてない、嫌なもの。それでこっちが怒つたらね、「なんで、根っこは私のところだよ」と返したわけですよ。向こう、相手の人がここに蜜柑取つたときにつつたから、そういうふうに返したわけですよ。そういう話を聞きましたがね。

蜜柑の話はですね。根っこは隣の家に生えてね、そ
いで、蜜柑はモーイ親方のこの屋敷の方にあって、そ
れを取つたら隣の人が怒つたらしいですよ。そうした
らね、隣の人が怒つたもんだから、
「根っこはあんたのもんだけれど、こっちにたれさ
がつたのはね、これ、私のもんだよ。私の屋敷に入つ
てある。なつてある」と、そういうような、取つてね、

(12) 許嫁と鶏

① 許嫁と鶏

嘉陽宗喜（大正二年生）美里

（方言原話）
伊野波ぬモーインんち。でーじなジンブン持ちやたん
で。親がいかなる説得しても絶対我一折りらんたん
で、ガージュ。

あんさーに、後ぬうじみねー、女 縁組みぞーの女

ぬうーしが、むる見らうんたんでいよー、うぬ女ぬ
モーインかい。なー、親同士えー相談なつているんだ
が、本人同士えー見合いできなかつたつて。あんさー
い、それで考えて、くぬモーイ観方ー、オーラサー鶏
持つちんじやーに、どうーぬ、うぬ女ぬ門んじ、うち
ゆるさーによー、
「モーイぐわーよー」し泣ちやくどう、うぬ女ぬ出じてい
ちゃーに、あんすくどう、
「今ねー見ちゃん、見ちゃん」さーいたん。ジユーン
うり、ジンブン持ちやてるばー、でーじな。

（共通語訳）
伊野波のモーイといつて。たいそうな知恵者だつた
そだ。親がいかなる説得しても絶対に我を折らな
かつたんだつて、頑固者。

そうして、しまいには、女、縁組みしている女がい
るけど、まつたく会うことができなかつたそだね、
その女は、モーイに。もう、親同士は相談ができるい

るんが、本人同士は会うことができなかつたつて。そ
うしてね、それで考へて、このモーイ親方は、關鶏
を持つていつて、自分の（許嫁）の、その女の門で（鶏
を）放してね。

「私の鶏よ」と泣いたので、その女が出てきて、そして、
「ついに見た、見た」と言つていていたそだ。尻尾まで
これ、知恵があふれていたわけ、たいへんな。

② 許嫁と鶏

橋田トミ（大正五年生）セントラ

知恵が、ジンブンがあつたつて。小さい時にね、鶏
ぐわーと遊んだんだつて、このモーイは。小さい時
に鶏ぐわーだけ抱いて、あつちこつちに、はい、もう、
そうでしよう。

これ（モーイ）は、（女人の人を）見たことがないつ
て、この人は、もう、役だたなかつたつてよ。だから、
あの、これを、自分がだつたら、見る人、なにか、賭
き一かなにかしたはず、賭けかなにかしたはず。そん
でね、この鶏をね、この（女人の）人の庭に放つてから
に、その人が出てきた。そのときにはもう、
「見ちゃん、見ちゃん（見たぞ、見たぞ）」してね。あ
の人は初めてこの人を見たつて。この人はね、知恵が
とても強かつたつて。

③ 許嫁と鶏

伊佐安弘（明治四十一年生）山里

嫁にするよ」というところに行つたんだが、まだ顔を見てない。それを、鶴を抱いて、だー（ほら）、鶴好きだから、これー（モーイ親方は、タウチー（關鶴）ぐわー好きだから。これを持つていつたら、そこ家の放してわざと飛ばしたわけさ。あんさい、うり捕みでいろいろさくどう（そして、鶴をつかまえて放す）。

「ぬーがやー」ち（なにかねえ）と）。この自分の嫁になるこの女が出てきて、そのときに、「なんだか」と言って見たら、「見ちゃん、見ちゃん」と、また家へかい（見たぞ、見たぞ）と言つて、また家に帰られよつたっていう話があるんだよ。

(13) 掛けた縁

① 下駄と草履・許嫁と鶴・掛けた縁

島袋サダ（明治三十六年生）高原

〈方言原話〉

だから、本当、このモーイ伊野波はね、昼は遊んで、片足はお母さんの草履、片足はまたお父さんの草履も履いてね、こんなに歩くくらいの、ふらーみたような歩くだつたつて。モーイ伊野波ぬるーと言つたつて。して、縁組をしてあるがね、そのお父さんが、「こんなふらーとは夫婦はさせない」と言つて、言一戻しに、言い返した、

「もうあんたの嫁にはさせない」と言ゆうたから、やー。

伊野波は、本名である伊野波謙左衛門。

妻のカケヅヤー／カケヅユ。

「自分の嫁になる人を見る」と言つて、鶴を落つこと

したわけさ。それ、それで、この、鶴逃げたと言つて、

「やなモーイのふらーだから、もう嫁にもくれない」。

昔の侍は、いくら縁組しても見られないさーねー。

今なら前もって縁組したら、毎日も見られるけれども、昔の侍そじやないから。このお父さんが怒つて、

「言い返しに来るさー」と言つて、

「あんたに嫁にくれない」。したら、このモーイ、また、カケヅヤー作つてね。なんで、こんなに頭にかけ

るもんさー、カケヅヤ。頭は昔は男も髪結つてゐるさー。

門に、これをかけるのを作つて、引っ掛けると言つて、自分が作つて。この「あんたに嫁にくれないよ」と言つてくるときに、「言ーほー、こっちに座つて、このお父さんが来たら、頭にかけて、あの、

「掛けたあるカケヅユの切りらん」でいら。

あんさーに、うんぐどうーしたる偉い人やしが、ふらーふーじーし歩ちょーんやー。お父さんがやていん、

「くれーなーふりむんどう産ちえーるむん」でい思とーしが、お父さんが一かなーん。またうりが書ちえーる字やたんてーまん、

「まーぬ誰が書ちえーる。ぬーが、真似していくーし

や、捨ててあるもの、誰が捨てたかな」

「私が書ちゃんじやー」でい言つてーるくどうまん。偉い頭を持つてゐるが、お父さんがはそん見なかつたわけさ。

したら、このモーイ伊野波が本当の、この鹿児島の戦に取りかえした人は、このモーイ伊野波つて。

うん、釣り。カケジャ一といつて。なー、これもう、

それはただ、芝居見たからわかるけれども。あの、門に、この人が、今来るねえといつて見てはいるから、

ここに、門に。昔の人は門、立派に作るさあねえ、これを入れうとしたら、これをこんなに頭をかけて、カ

ケシユで。

掛けたある縄は切りらん」と言つてね、こう言つて、やつたという話は聞いたことがあるが。

昔はね、あの、カケジャ一といつて、木の枝に、こんなに、枝があるのをみんな、水汲みによる桶にもこんなにカケジャ一で。

〈共通語訳〉

だから、本当に、このモーイ伊野波はね、屋は遊んでいて。片足はお母さんの草履、片足はまたお父さんの草履も履いてね、こんなに（ちぐはぐに）歩くくらいの、たわけ者めかして歩く人だつたつて。モーイ伊野波のばかたれと呼ばれていたつて。

そして、縁組をしてあるがね、縁組先のお父さんが、「こんな馬鹿者とは夫婦にはさせない」と言つて、談しに（来て）、

「もうあんたの嫁にはさせない」と言つたからね。

鶴をね、鶴を取つて、必ず、その妻（となる人の）の前に鶴をほうり投げたから、

「自分の嫁になる人を見る」と言つて、鶴をほうり投げたわけさ。それ、それで、この、鶴が逃げたと言つて、「くだらんモーイのたわけ者だから、（娘は）もう嫁にやらない」。

昔の侍は、いくら縁組しても（結婚するまでは相手の姿）見られないよね。今なら前もって縁組したら、毎日でも見られるけれども、昔の侍はそうじやないから。このお父さんが怒つて、破談しに来るよね、破談した。

「あんたには嫁にやらなし」。そうしたら、このモーイが、また、鉤を作つてね。こんなふうに頭に引っ掛けるものだよ。頭は昔は男も髪を結つてあるよね。門に、これ（鶴）をひつ掛けるものを作つて、（鶴を）引っ掛けと/or/言つて、自分が作つて。この「あんたに嫁にはやらないよ」と言つてくるときに、いわば、こつちに座つて、このお父さんが来たら、（お父さんの）頭に（鉤を）ひつかけて。

「掛けた鉤は切れない（同じように縁も切れない）」と言つて。

そうしてね、こんなようなことをした偉い人だけど、たわけ者ぶつて過ごしていたんだよ。お父さんでさえも、「こいつはたわけ者に生まれついてしまつたものだ」と思つていたけど、お父さんではかなわない。またモーイが書いた字であつたとしても、

「どこの誰が書いたものか、なんだか、（書写を）真似してあるものが、捨ててあるんだが、誰が捨てたかな」「私の書き損じ」と（モーイが）答えたことからもね。偉い頭を持っているが、お父さんはそんなふうに見ていかつたわけね。

そうして、このモーイ伊野波が本当の、この鹿児島との戦で（問題を解いて証文を）取りかえした人は、このモーイ伊野波だつて。

うん、釣り鉤。カケジャヤーといつて。もう、これもう、それはただ、芝居で見たからわかるけれども、あの、門に、この人が、今来るなといつて見ていはいるから、ここに、門に（鉤をつり下げて鬚を引つ掛けた）。昔の人は門を立派に作るんだよね、ここを通ろうとしたら、これ（鉤）をこんなふうに頭にひつ掛け、鉤で、「掛けたる縁は切れない」と言つてね、こう言つて、破談をなしにしたという話は聞いたことがあるが。

昔はね、あの、カケジャヤーといつて、木の枝に、こんなに、枝のあるのをみんな、水汲みゆる桶にも、こんなふうにカケジャヤーで（ひつかけて持ち上げた）。

② 許嫁と鈎・掛けた縁

佐久田千代（大正七年生）室川

〈方言原語〉

あんすくどう、^{しづや}見ぢやしがて。

隠ぬ妻しみーんち、親ぬぢやーがじこーそーしゃーや。あんしが、うりふるふるなたくどう、昔えーくーさーにーやていん縁組すしぇー、親ぬぢやーが。

あんしぇー、大きくないしんでーうれー髪えーモーイクリンクワンし、むる鶏ぐわーびーひさぎて、あま走いくま走い、わざつとう。あんすくどうよ、うぬ女ん子、昔えー絶対結婚する日までい女ー見しらんよーやー。見しらんくどう、見ちん見だんしぇー。だから見たいさーねー、どんな女、かーじー、どんなかねーんち。

あんさーに、今度一わざつとう鶏ぐわーあまぬ屋敷んかい逃んがさーに、あんさーし、空足ーしげぐ鶏追いまーちあつちゅえー。あんさー、うまんかい「ぬーやがやー」んち、飛ん出ちちやくとう、見ちゃん、見ちゃん、さーにや、なー、見たんでいねーありやえーや。あんさーになー、今度ー、

「うれーふらーどうやるや、うりが妻えーなさんーんちなー、親ぬぢやーや、なー、ありやるばーてー。反対さくどう、今度ーうまぬ旦那さんが、うまぬ門ぬ出じかー入りかーすんどうくるぬ、門ぬ、かんしあしえーや。あまんじ上とーてい、ガキジュー下きて。あんし、昔ぬ人よー髪えー結どーしぇー、カタカシラ。かんさーに引つ掛けていよー、あんさー、

「あいたー、あいたー。誰やがよー、許しぇーよー」

さくどうや、

「掛けたる縁ぬんはんはんでいーみーんでいち。なー、

反対さくどうや、

「やっぽしくーさいにーからや、許嫁しぇーるむんぬ、うりがん掛けられーからーはんりーみーでいちょーるばーてー。だからや、

「いやーがかんし言ーねー、掛けられーからーはんりらん。はんちとうらしえーよー、合点やさ」でい言やーにや、あんさーに、はんちえーたんでい。うんぐとーる話。作りもんがらぬーがらわからん、芝居でやつていたよ。

「はずれないから、絶対どんなんしてもはずれない」んでい。だからね、小さいときには許嫁しえーしょーやー、うぬ縁がや、はんていらんでいちょーるばーてー、くりがぐどうし。だからね、「なすんでい、言りわる、うれーはんする」んちょーるばー。

(共通語訳)

それで、芝居で見たんだけどね。

隣の女を妻にさせるといつて、両親がたいへんがんばっているんだよ。だけど、モーイが年頃になつたら、昔は小さいうちでも縁組するからね、親たちが。そしたら、大きくなるにつれてモーイは髪は乱れ放題にして、いつも髪ばかり手にひっさげて、あっちこっち駆けりまわって、わざと。そしたらね、その娘、昔は絶対結婚する日まで女は見せないよね。見せないから、見ようにも見られないよ。だから見たいよね、どんな女、容貌は、どんなかねえと。

それで、今度はわざと髪をあちら（許嫁）の屋敷に逃がして、そうやつて、はだしでそのまま髪を追いまわしていたからね。すると、そこに「なにがおきたの」と（娘が）飛び出してきたので、

「見た、見た」といつてね、もう、見たといつたら大変なことだからね。すると、今度は、「こいつ（モーイ）は馬鹿なのか。こいつの妻にはさせない」と、親たちは、もう、あれなわけ、（結婚に）反対したので、今度はそこ（娘の家）の旦那さんが、家の門の、出たり入ったりするところの、門がこうあるでしょ。そこに上つておいて、鉤を下げて。そして、昔の人は髪を結つているからね、カタカシラ。こうやって（髪に）引っ掛けたね、そして、「あいた、あいた。誰なんだね、勘弁してくれ」と言つたならね。

「掛けた縁でもはずれるということがあるか」と。もう、反対したのでね、

「やつぱり小さい頃からね、許嫁とされているものを、そういうものは掛けたからにははずれるものか」といつているわけ。だからね、

「おまえが言うように、掛けたからにははずれない。はずしておくれよ。（結婚は）承諾するよ」といつたからね、それで、はずしたんだって。

こんな話。作りものだからんだかわからない、芝居でやつていたよ。

「（結んだ縁は）はずれないから、絶対どんなんしてもはずれない」つて。だからね、小さいときに許嫁とされているよね。その縁はね、はずれることはないとつているわけ、この鉤のようだ。だからね、

「結婚させると言えば、鉤ははずす」といつているわ

*1 「なにがおきたの」直訳は「なんのかね」にさうや、文脈に沿つて意訳した。

(3) 掛けた縁

吉田(島袋)タケ(大正七年生)知花

率イシザキ 未詳 石垣のことか。

<方言原話>

カンブーぐわー針金し引っ掛けやーに、

「ちやーがさい、ちやーがさい」んち、夫婦

「くれーなー、ふり遊びんちやーふくとう、くりとー

なー夫婦なはん」でい言やつて。いぬ、殿内御城

勤ぞーる人ぬちやー待どう一さーどー。あんしなー、

夫婦なさん」でい言やつたぐどう、なーくつたー

二人やじこーかなさそーんでいしえーやー、相手の男

とくぬ女、モーイ親方どうびちぬ女どうてー、なー、

かなさーじこーそーんでい言しが、親ぬちやーがなは

んぐーどうーほーるばー。また、くぬ女ぬ方ぬ親ぬん

なさんぐーどうーさつどーるばー、あんねーるふりむ

んどう。

「あんし遊でいあつちるふりむんどうや、夫婦な

しーねーならん」でい言やーに、

「なー、なさん」でい言やーるばー。あんすくどう、

くぬモーイ親方やどー、女ぬ家んかいもーやーに、あ

んさーにな、

「必じなちとうらざらんなー」でいちゃんてーんなー、

「ならん、いやーとーなさん」でい言ちさくとう、

「あー、あんやーいからー」でい言やーに、うぬイシザ

キ、門入り口ぬイシジヤキンじ懶くいとーれるふーじ、

くぬモーイ親方やどー。『くり今日やなーしぇーちし

どうらさんれーならん』でい言やーに、あんさーに、

うまんじいっちゅかーなー隠くいとーてい。くぬターリー やーとー、うぬ女ぬ方ぬ親や、うまから用事けーんち出じていめーしよー、引っ掛けーるふーじ、うぬカンブーぐわー、昔やれーちよんまげぐわーやしえー や。

「ちやーがさい、ターリーさい、夫婦なはんだらー や、

なさんだらー、くぬカンブーな私が引ち抜じゆしが、

しまびーみさい、ゆたさいびーみ」んち、なー、クワーケワーケワーフーし、なー、しぐ

「とーとーとー、なー、いやーねーかなーんくとう

てー、なすき」んでい言やらつていよ、あんさーに

夫婦なさつたんでい言ぬあたさ。

でーじなジンブン持ちやてーるばーてー。くれー

よー、屋ーまたひつちー鶏おーらしえーさいや、アー

タビチャヤーしぐどーがんじやい、あんし遊でいとー

たんでいよーくぬ人よー。一風、人どう変わどーてー

るばー。

<共通語訳>

(許嫁の父親) 髮を針金で引っ掛けで、

「どうですか、どうですか」つて、夫婦(になるゆる

しを得た話)。

「モーイはね、ばけた遊びばかりしているので、こ

いつとは(うちの娘は)夫婦にさせない」と(許嫁の

父親)に言わされた。同じ、殿内御城勤めしている人の

ところ、侍同士だよ。そういうことで、

「夫婦にさせない」と言わされたので、もう、この二人

(モーイと娘) はとても好きあつてはいるというのでね、相手の男とこの女、モーイ親方とその女だとだよ。もう、たいそう好きあつてはいたと言うんだけど、両親が結婚させないようにしてはいたわけ。また、この女のほうの親も結婚させないと反対していた、あんな馬鹿者とは。

「結婚させるよ」とおっしゃつてね、そうして夫婦にしてたという話があつた。

④

普久原幸(大正五年生)泡瀬

方言原語

「もう、結婚させない」とおっしゃっているわけ。そうしたら、このモーイ親方がだよ、女の家におうかがいして、そしてね、

「どうしても結婚させてはくださらぬのか」とお願いしたら、

「だめだ、おまえとは結婚させない」と言うので、

垣、門の入口で釣り針をね、持つて引つさげて、門の入り口の石垣で隠れていたらしい、このモーイ親方がだよ。『今日はもう決着をつけてやらんといかん』とおっしゃつて、そして、そこにしばらく隠れていて。このお父さんはね、その女の方の父親が、そこから用事にと出かけていらっしゃるのをね、引っ掛けたらしい、その罠を、昔はちゃんとまげだよね。

「どうです、お父上、結婚させないというなら、そういうなら、この髪を私が引き抜きますが、いいんですか？」といつて、もう、わざわざ

わあわあ騒いで、もう、たちまち

第一回 ミタヤ 軒 軒下

來のあとも一なー驚いたんかいは發する語。

言ひたんだい。あんさーによー、この人がこのまま結婚したんだいよ。

〔共通語訳〕

昔、昔は妻をめどるときはね、この、家と家とで決めることなんだよね、親たちが許婚をきめるんだよ。(モーイと娘は)縁組されていたわけんだよね。同じよう、親たちは偉い人たちだから、この家(の娘)とね、縁組していたけどね。

「モーイは髪もぼさぼさ振り乱しているようなやつだから、これとは結婚するなよ」と(娘に)言いおいたわけ。そして、娘の親はモーイのところに(縁談を)断わりと行つて、来たつて。来る時には自分(モーイ)は軒下に立つてね、釣りをするこの釣竿ね、それを持つて立つていたつて。そして、その人(娘の親)が来たら、たちまち(釣り針で)引っ掛けたんだつて。「なんとした、なんとしたこと。こんなことをするのは、おまえ、おまえは、こいつめ、これをはずさんか、はずさんか」と言つう、
 「(ひとたび)掛けたものでははずせるのか」といつてね、「約束はしてあるのに、それでもはずせるものなのかな」と言つたつて。そうしてね、この人はこのまま結婚したつてね。

〔方言原話〕

モーイ親方がてー、お父が行ちゅしやしが、お父が行くのがね。なー、くれー、んーなさーに、きちがいよ、きちがい。きちがいだからね、あれにもうさせないよー」つて、親が言一戻したつて。「ぬー、私つたーなー、いやーねー妻えーしみらんむん」んちやくどう、

「あんすらー、私どう縁えーしがちやーすが」んちやぐどう、
 「いやーんいやーんとうめーれー」んちやくどうや。
 お父言一戻しーが行じよーるばーてー。お父言一戻しーが來やくどう、

「いやーねー妻えーしみらん」でいちやくどうや、
 なー、門から出じていちよーるばーてー。見ちやくとう、すぐ、門んかい、上んかい、家から出じていさくとうてー、モーイがひつかきて、ちやー、ちやーかちみーし、ちやー計さんばーてー。
 「ぬーがいやー、あんしうりする」んちやくどうや、
 「あんし掛けてーるありがんはんりーんなー」でいたんでい。

「掛けたあるぬーんくいーんはんりーみ」んちやくどうや、

「あんしなー、ぬーぬちむえーが」んちやくどうや、
 「なー、あんし掛けてーるむん、たんでいんなすん」でいや。あんさーにまたすぐ

⑤ 掛けた縁

神里マカト(大正元年生) 安慶田

「なー、あんしえーなー悪さくどうや、いやー妻しみー
くどう、なー許ちどうらしまー」でいたくどう、はん
さーに、妻しみたんでいなー、妻さつてい。

〈共通語訳〉

モーイ親方がね、お父さんが行くべきなんだけど、
お父さんが行くのがね。もう、モーイは、みんなして、
「(モーイは) きちがいよ、きちがい。きちがいだから
ね、あいつにもう(嫁には)させないよ」つて、親が
破談にしたって。

「なに、うちは、おまえにはさせないからね」
と、
「それなら、私と縁を結んだのはどうするのか」とい
うと、
「おまえはおまえで潔せ」といったのでね。(相手方の)
お父さんが破談に来たわけね。お父さんが縁談を断り
に来たので、

「おまえには嫁にやらん」といつたら、もう、門から
出てきているわけね。見たら、すぐ、門に上に(上つ
て)、(相手方のお父さんが) 家から出てきたので、モー
イが(釣り針で) ひっかけて、それで、つかまえたま
ま、ずっと離さないわけね。

「なんでおまえ、こんなことをするんだ」といつたら
ね、

「このように掛けたある針でもはずれますか」と言つ
たって。
「掛けたある釣り針がはずれるのか」というと、

「それで、どういうつもりか」と言うので、

「もう、そのように掛けたあるものを、誰であつても
結婚させるだろう」と。それではまたすぐに、

「もう、そつしたら私が悪かったから、(娘は)おまえ
の妻とするから、もう許してくれ」といったので、(釣
り針を)はずして、妻にしたんだってよ、妻になさつ
て。

⑥ 掛けた縁

屋宣ハル(大正三年生)安慶田

〈方言原話〉

「上びんかい上とーてい、うまから歩ちゅんでいち、
まーから歩ちゅんちわかいるばーてー。うま、上びか
ら、うり下ぎやーない、髪んかい引つ掛けーーたん
でいち話聞ちゃん。

〈共通語訳〉

上に上つておいて、そこを通るといって、どこを通
るということがわかるわけよね。そこ、上から、それ
(鉤)を下げて、髪の毛に引っ掛けたという話は聞い
た。

⑦ 掛けた縁

知花ツル(大正五年生)嘉間良
嫁にもらうつもりだつたけど、これ、くんぐどうふ
らーやしょーやー(モーイは、このように馬鹿者だよ
ね)。ふらーではないけど、ふらーふーじー(気がふ

れたようなるまいを) するさあ。

「モーアー、いやーねーくいらんどー(モーアー、お前には娘をやらないよ)」と言つて、こっちの主人が断りに行くわけよ、こっち(モーアーの家)に。あれ、芝居でよつたのに。断りに行つたら、これ聞いてからに、このモーアーは。うまいあいるすぐどう、うわーびんかい登やーにや、(知恵はあるわけだから、上に登つてね)、こっちのターリーのウンチヨーピ(主人の御髪を)、髪、昔のカタカシラ、これに、釣り針を引っ掛け、掛けで、逃げられないさあね、このターリーは。あとじりも引かないし(後に引くこともできないし)、そして、

「いやーやひやー(おまえというやつは)」つて怒つた

「だーさい、掛けてーる縁のーはんりーびらん。掛けでーしがはんりーびらんとー(どうです、ひとたび結んだ縁ははずれません。掛けたものははずれませんよ)」と言つて、なー(もう)、こんな言つたら意味わかるさー、あつちでも。だから、別譲にはしないで、ちゃんと結婚させなさいっていう意味だつたつてよ。これ、いろいろ芝居でやりよつたのに。

⑧ 掛けた縁

宮城ツル(大正十三年生)センター

この人(モーアー)はまた、妻は、約束がいるからね。いつも、もうこの娘の方は、「ふらーだから(モーアーは馬鹿だから)」と思つて、どうにかして別れようと

思つてゐるけど、親がもね。そして、自分がジンブンぐわー(知恵)があるからね、別れないよ。そして(許嫁の)親がね、断りに来るわけ。(モーアーの)お父さんとのところに。そしたらね、玄関の上にあがつてね、そして、カキジヤー(鉤)でね、このお父さんの髪を掛けるわけさ。そしたらね、

「なんで、なんで」と言つたらね、「掛けで、あんたの娘も掛けてるから、これが外れるわけがないから、あんたも外れないよ」と言つたらね、「もう、(娘を)やるから外してちょうどいい」と言つてね、ごめんするわけだね。ああいう話があるよ。モーアイ親方つてね。

※一ツンチョーピ 髪(カラシ)の歌詞

おぐす。

※さカキジヤー 鉤

※さじるい 未詳

⑨ 掛けた縁

知念真章(明治四十二年生) 胡屋

結婚した妻が、昔は偉い人の乗る駕籠でしぶるいしだんだよ。駕籠言うて、人が乗る駕籠さー、駕籠。それが通るときに、門の上に上がつてよー、カケジユーぐわー持つてよー、その駕籠をひっかけてよ、もう、ゆるさないよ。

「掛けてーる縁ぬはんりーみ(掛けた縁がはずれるものか)」といつて、

「あんしみー妻しみーさ(それなら妻にさせるよ)」と いうことで、(夫婦になれたという話もあるよ。本当か嘘か知らんが、そういう話もある。モーアー親方の)。それはもう、昔のなには、偉い人だよ、とても偉いさー。ずば抜けて偉い。

護佐丸の子孫なんだよ。護佐丸。伊野波ぬモーイー
と言つてな。

⑩ 掛けた縁・立ち小便

鴻田トミ（大正五年生）センター

侍の娘がいたつて。これ（モーイ）もう、こんなに髪も乱れて、ふらふら（気がふれたようなふるまいを）しているから、これとは破談つて。したからね、こっち、あのう、カケジユーブーウー（つるし鉤）かけてよ、お家から出るときにこれに引っ掛け、掛けと一る縁（ぬんはんりーみ）（掛けた縁がはずれるものか）」、ちやーかしいして（ずっと引っ掛けたままで）、あんさー、うぬターリーに（このお父さんに）。

（許婚の）親が、
「なさい（結婚させない）」と言つたから、もう、こんなに掛けたから、「掛けと一る縁（ぬんはんりーみ）（掛けた縁がはずれるものか）」んち、親のカンブープー（沖縄風の髪）に掛けたから。
「あんしおーなー、させるさ（それなら、結婚させるよ）」って、（つるし鉤を）解いてあげたつて。
これ（小便）、お金出したらやつてもいいつて。したから、
「なんで、いやー、うまかいシーバーする（なんで、おまえ、ここに小便をするんだ）」と言つたからね、「お金出したらいいと書かれているさー」。罰金するつて書いてるのにね。これーなー（この人は）、頭が、

⑪ 立ち小便・掛けた縁

橋本初子（大正五年生）センター

「小便するべからず。『二貢』（あのときのお金だから、二貢納めて罰金にするべし」と言つて書かれているのを見てから、

「なんで、『二貢あげたら小便はしてもいいね』と言つて。皆が怒つたから、

「なんで、この立て札のとおりらつたら、二貢納めたらしきとしてもいいでしよう」と。

「こんな書き方されているの」と言つて、これ、シンブン（知恵）あるから、もう、あれに負けているわけさ、モーイに。

また、隣の娘と縁組みしているのに、これから、「もう、鶏ぐわーおーらさーばけーするから（もう、鶏を闘鶏させてばかりいるから）」といつて、あの離婚させようとしたらね。
「掛けと一る縁（ぬうりさりんなー、はんさりんなー）（いぢ）掛けた縁がそっされるのか、はずせるのか」と思う気持ちで、お家の上から魚、魚釣りみたいに、髪に、あつちのお父さんの髪、引っ掛けているわけ。もう、こんなにしてから、「なんで、なんでこんなことするねー」と言つたつた。
今あんたが話してたの、マジルーと私と離婚させようとしているけれど、結ばれている縁がそんなに簡単に切れるか。だからあんたが承知するまではこれ

知恵があるわけさー。

東城役司護佐丸盛養。?

一四五八年。山田城、鹿喜味城の城主を経て、一四〇〇年頃に中城城を築城して移り住んだ。娘は尚古に奥へ入れ、護佐丸に従つて孫にあたる妻女、百十賀衛を生す。王家の親族となるとして勢威を誇る、阿麻和利に謀叛の罪をさせられて自害する芝居の題材などによく取り上げられる。

忠臣として名高い。

※2) 貢 四錢分のお金。六開き銀二千文。

しそーしが、ターリー御礼ゆんでい、唐風おうぬ
吟味すん所やしそー。親ぬ御礼ゆんでい、ターリー
やか一足先めんそやない、先あまんじいみそーち
よー。なー、いぬ親方どうやくとう、先うまんかい
いちよーみしおーしんかい「いめんしそーびていー」
でいち御礼すしそー。あるいや「いりみそーちょー
みしおーびーみ」ち御礼すしそー。あんすべくどう、
ターリー御礼いーゆんでい先行じ、いちえーしーしみ
しそーーたん。

（共通語訳）
摠政三司官の方々が協議会をして、龍樋の井戸は國

王様がお飲みになる井戸だからね、御龍樋って。御龍
樋って、見てみたことないか、御龍樋。首里城をいま
改築しているみたいだが、その手前に、今は囲われ
ているがね、工事で囲われているがね、その開いの
中に御龍樋といつて、毎日水が湧き出している泉が
あつたよ、御龍樋といつて。そして、この摠政三司官
の方々は協議して、

「この側に小便する者は五貫分の罰金をとる」と、あ
のように立て札を立ててお置きになつたつて。立て札
を立てたら、「はあ、おや、これは、私は金が五貫あつたらここで
小便できるじゃないか」と。そして、お金五貫を持つ
て、五貫といつたら十錢だよ。昔の金の十錢だけどね。
そして

「誰か来ないかなー」といつて、ちらちらあたりをう
かがわれて、人が来たときにだよ、その、モーイより
上の位の人方が来たときに、そこでわざと小便して、そ
うやつて小便なさつたら、

「おまえは、モーイ、おまえはあるの札は見たか」と
聞かれたので、
「ああ、見てます」
「なんぞ見ているというのに、そこで小便をする」と、
そうやつて怒られたので、
「あのもし、私には五貫の金がありましたので、そこ
でしました」と。

「えつ、おまえは五貫あればそこに小便してすます
か」と。

「ああしてあなたがお書きになつたとおり、なん
で、五貫を納めればすむんじやないですかね。やつて
いいつてことでしよう。私は五貫持つていましたか
ら、その罰金を払えばいいと思ってやりました」と
返事した。

「それで、どのように書いたらいいのか」と聞いて、
また、そのモーイから習いなさつてね、その摠政三
司官たちは。そして、「そこに、龍樋の側に小便する者は处罚をするとお書
きになれば、それからは小便する者はいないはずです
よ。私でもいたしません、そのときからは」と答える
と、

「ああ、そうか」と、その札も書きかえなさつたそうだ。

その後から、このモーイも親方の位になられて
ね。お父さんも親方の、モーイ親方と同じ位であら

※1 唐風 首里城正殿の屋根を指し、転じて首里城正殿の俗称ともなった。

れるが、お父さんにおじぎをしてもらおうと、唐破風という所はその協議する所だからね。親のおじぎをもらおうと、お父さんより一足先にいらっしゃって、先にあそこでお座りになられたね。もう、同じ親方なので、先にお座りになつてらっしゃる方に「おいになりましたか」とお辞儀するからね。あるいは「お座りになつておいででしたか」とお辞儀するからね。だから、ターリーにお辞儀してもらおうと先に行つて、お座りになつたりしていたそうだ。

② 立ち小便

知念善助（大正七年生）古謝

〔方言原話〕
「首里城内に、あの、龍種（りゆうしゅ）というのがあるでしよう、わかるでしよう。あの、お龍（りゆう）にね、ところに、「うまんかい立ち小便（たてこひん）のーするな」でい札（さつ）立（たて）いていたくどうよ。
「うりんかい立ち小便（たてこひん）すしえー、罰金（ばくきん）、罰金（ばくきん）に廻（まわ）する」
「どー、あんしえーなー、私（わたし）ねー」、うり見（み）じやーによー、うぬモーイーや、
「あんしえートウナーナ納（な）みれーつししむるばーやさやー」んでいやーに、すんでいさくどう、くどう、
「ぬーすがーんちやくどう、
「あー、うぬ立てい札（たてふだ）見（み）でーわかいみしえーみ」んちやく
くどう、
「ぬーやがやー」

幸一お龍 龍種のこと。

「うれーやー、トウナーナ納（な）みやーにしえーしめるばーえーさに」んちやくどう、
「とー、あー、うれー、あんしえーならんてーさー」でいちえーさに」でいぢやぐどう、
「んー、確か（か）にあんやんどー」
「ぬーが、トウナーナ納（な）みやーにしえーしめるばーえーさに」んちやくどう、
「とー、あー、うれー、あんしえーならんてーさー」でいちえーさに」でいぢやぐどう、
「ち、看板（かんばん）も書き直（ただ）したと、立て直（ただ）したと、こういう話はあつた。

〈共通語訳〉

首里城内に、あの、龍種（りゆうしゅ）というのがあるでしよう、わかるでしよう。あのお龍（りゆう）にね、その場所に、「ここに立ち小便（たてこひん）をするな」と札（さつ）を立てたたらね、「これに立ち小便（たてこひん）をするものは、罰金（ばくきん）に廻（まわ）する」と言うので、「さあ、それなら、私は「立札（たてふだ）を見（み）てね、そのモーイは、「それなら十貫（じゅうせん）のお金（かね）を納（な）めたら、小便（こひん）をしててもいい」というわけだよね」といつて、小便（こひん）をしようとしたので、「なにするんだ」と言われたので、「ああ、その立て札（たてふだ）を見（み）たらおわかりになりますんか」と言へば、「なう」とことか」「これはね、十貫（じゅうせん）の罰金（ばくきん）を取（と）られるよ、と、立ち小便（たてこひん）をしたら十貫（じゅうせん）の罰金（ばくきん）を取（と）られるということが書いてあるんじゃないかな」と言うと、

「うん、確かにそうだよ。」「なんだ、十貫の金を納めれば小便してかまわないわけだろ」と言うと、

「そうか、ああ、これは、ああして書いてはいけないんだね」と、看板も書き直したと、こ
ういう話はあった。

③ 立ち小便

伊佐安弘（明治四十一年生）山里

〔方言原話〕
それから、またモーヤーが、御殿ぬ、御龍種と言つてあつたんだよ。御龍種、王様があがる水が出る、龍の型のあれ。あの付近で、役人の方々が看板を建てたそつちに小便する者は、五貫文の罰金に処す」と言つて、役人の方々が看板を建てたそつちに小便せーる。役人に見つかってね。

「いやー、や、うまんかい書えーしょーわかいみ」んちやくどう、五貫の一持つちょーびーん。五貫出じや

「あー、五貫の一持つちょーびーん。五貫出じや
ぢやしが、うれーぬーんち書けーしむが」でいちざくとう、

「うれー、うまうてい小便出した者には死刑に処す、ということを書けば、これは絶対やりませんよ」と言つて。えー、やつたという話もあるんだよ。

〈共通語訳〉

それから、またモーヤーが、御殿の、御龍種と言つてあつたんだよ。御龍種、王様があがる水が出る、龍のかたちのあれ。あの付近で、

「こつちに小便する者は、五貫文の罰金に処す」と言つて、役人の方々が看板を建てたそつちに小便をモーヤーが見て、非常に笑つてね。
「ああ、どれ、それなら私は、五貫のお金を出してもいいから、小便をしてやろう」と、小便した。役人に見つかってね。

「おまえは、そこに書いてあるのがわかるか」と聞かれたので、

「ああ、五貫は持つています。五貫出したら、どれだけでも（小便をしても）いいんですよ」と言うと、役人の方々もびっくりしてね。

「したら、おまえは、この触れ書きを見てそう言つてはすだが、これはどのように書けばいいか」と言わるので、「それは、ここで小便出した者には死刑に処す、といふことを書けば、これは絶対やりませんよ」と言つて。ええ、そうやつたという話もあるんだよ。

※1 御殿 王子、波司の家、またはその人をさす敬称。王族の家系や邸宅を意味し、その血筋に属する人々に対する敬称としても用いた。

(4) 立ち小便

知花ツル（大正五年生）嘉間良

方言原話）
龍種ウカーつて、首里にあるよ、あれは。龍種ガ一つて、あの、えー、龍つていうの、あれのところで、こう

開つて、開いてあるところで小便しようとしたつて。これが立て札を立ててあるのを見てからに、わざつとさ。で、

「あいあいくまんかい小便しえーならんどー。いやーあり見ちよーみ」と言つたら、

「うんじゅなー、あり見ちよー、くれー僕みたいな生意気が、ふらーふーじーや……」自分では、皆がそ

う思つてゐるから、「……むん言ねー、お金にトウナーニー二十錢持つてい

たら、「これ二十錢あれーうまんじないむんぬ」つて言つてするから、何回もやられるよ」と言つたら、

「あんしおー、うれーちやしおーましがー」つて、この役人たちは言つたつてよ。したら、

「ここで小便する人は、打ち首の咎にあたる」つて言つたら、あれからはもう、しなくなりりますよ」と言つてよ、これで決まつたつてよ。

(5) 立ち小便

神里マカト（大正元年生）安慶田

方言原話）

うまーカーぬあたんで。カーぬ側かいてー、小便しーがうたんで、小便しーがうたんでー。あんさくどう、

「ぬーがいやー、うまんかい小便する」

「だー、なー仕方ーならん、すんどー」でいやくどうや、

「あんしおー、うまんかい小便すらーや、ちやつさなんぢや、取いんどー」でいやぐどうや、

（共通語訳）

「おいおい、ここに小便してはいけないよ。おまえ、あれを見たか」と言つたら、「……意見を言うなら、トウナーニー二十錢持つていたら、「これは二十錢あればここで小便できるということなんだな」とて言つて小便をするから、何回もやられるよ」とて言つたら、「じゃあ、それはどうするのがいいのか」とて、この役人たちは言つたつてよ。したら、「ここで小便する人は、打ち首の咎にあたる」とて言つたら、あれからはもう、しなくなりりますよ」とて言つてよ、これで決まつたつてよ。

第一回一 龍井戸の丁寧な言い方 龍井戸のことを方言でカーといい、王が利用する井戸ということで後頭部「ウ（御）」がついている。後の文に出でくる「龍種ガ一」のガーも井戸の意。カーが「龍種」という語と複合し、濁音「ガー」で発音されている。

「と、あんしえー取れー」でいやぐどう、書ちよーるばーて。書ちやーさくどう、なー、うぬ、モーイー來やーなかい、また、ちやーむるシーバイしえーしーしーすたんでい。

「ぬーがいやー、あんし小便する」

「ちやつさなーやん」ちやつさなーちどうらち、うりとうらちえーしーしーすたんでい。

「えー、うんぐどうーしょーやー人のーありならんどー。あんしーねー、すぐ錢持つちょーしょーやー、うまかい小便さーなかい錢とうらちえーしーしーすくどう、うまかい小便ーすしょーや、あまかい入りーんどー」でいやぐどう、

「あまんかい連でいいちゅんどー」でいいちやくどうやー、あんどうやんなー。だー、あんしえー、なーえー、あんどうやんなー。だー、あんしえー、なーさんさー」でいやー、うんにんから小便さんたんでい。牢屋に入れるからね。

「うまんかい小便しーねーすぐ牢屋に入りーんどー」んち。

〈共通語訳〉

そこには井戸があつたって。井戸の側にね、小便をする人がいたって、小便する人がいたんだってね。そしたら、「どうしておまえは、そこに小便するのか」

「そら、もうどうしようもない、するよ」としたら、「それなら、そこに小便するならね、いくつといつて、

(罰金を)取るよ」といつたら、

「いいよ、それなら取りなさい」といつたから、(罰金のことを)書いたわけだね。書いたら、そしたら、その、モーイーが来て、また、いつも小便をしたりしていたそうだ。

「なんでおまえは、そうやって小便をするのか」

「いくらだつて、いくらいくら(罰金を)渡して、それを渡したりして(小便を)していたそうだ。

「おい、このようにしては人に禁止することはできないよ。そうしたら、金を持っている人はね、そこに小便をしてお金を渡して小便したりするので、そこに小便する者は牢屋に入るよ」といつたので、

「牢屋に連れていくよ」といつたからね。
「ああ、そななのか。さあ、それなら、もうしないよ」といつて、そのときから小便しなかつたそうだ。牢屋に入れるからね。

「そこに小便をしたらすぐ牢屋に入れるぞ」と。

〈方言原話〉

うんぐどうーしてー、

「うまんかい小便しーねーちやつさぬ罰金」ち書かつとーたんでい、うまなかい。十錢ぬ罰金でいがらー、ちやつさんでいがらー、書かつとーたくどう「あんしえー、んだ、十錢出じやーねー、罰金取ていしますれー、んだ、私ねー錢出じやさーに小便さん」

星宣ハル(大正三年生) 安藤田

⑥ 立ち小便

でい言ち小便さくとう、かちみらつてい、うれー、また。かちみらつたくとうでー、

「ぬーが、十錢出じやしえー、小便しん罰金出じやしえーしむんでい言ゆるむんぬ、あんし、罰金の一出じやちえーしえー」んでい言ちやくとう、うんにーねー、またよー、

「あんちや、うれーあんしえーならんさやー」んち、やたんでいさんんはなえー聞ちゃん。

（共通語訳）

そんなようにしてだよ、

「そこに小便したら、いくらの罰金（を払え）と書かれていたそうだ、そこに。十錢の罰金だか、いくら

だか、書かれていたので、

「それなら、どれ、十錢を出せば、罰金を取つてすま

すのであれば、どれ、私はお金を払つて小便しよう」

と言つて小便をしたら、捕まえられて、モーイは、捕

まえられたので、

「なんで、十錢払つたら、小便をしても罰金を払えば

すませるというのに、ああして、罰金は払つてあるの

に」と言うと、そのときに、またね、

「そりゃ、これはそのように（罰金を払えという札を立てるよう）に、したらいけないな」と、そうだったとい

う話は聞いた。

⑦ 立ち小便

普久原幸（大正五年生）泡瀬

（方言原話）

モーイ親方だつたら、だからね、親ぬちやーが吟味

そんでいるむぬや。吟味さーに、

「うまかい、うま鐵うどーいてい小便しーんでいすしが

ういねーや、トウナ一罰金さやー」でい言やーに、

吟味さくとう、

「あ、トウナ一罰金すんびー」でい吟味し家かい

帰ていちやくとう、すぐ翌日ートウナ一持つちやーに

や、行いやーに小便し立つちよーたんでい。

「いやー、いやーうれーわからん、立てい札見だに。

立てい札見ちよーみ」んちやくとう、

見ちよーいびーんどー。うり、トウナーでいたん

でい。

「うり、トウナー」でいちやくとうやー、

「あんしやー、トウナー持つちよーしがうれーやー、

物乞やーがやていんくまうてー小便ししまびーみ」ん

ち言ちやくとうやー、やつぱし、うぬんだーや負きとー

るばーでー。

こつちはね、こんなことしないでと書けばいいの

にね、トウナー罰金と言つたらね、なー、

「罰金払れーわ誰がしんしむらやー」つて言われるで

しょう。だから、うんぐどうーがあたんでいちめ、モー

イ親方ぬ。

（共通語訳）

モーアイ親方の話だったら、だからね、親たちが協議したというがね。協議して、「ここで、この御獄で小便しようとする者がいたらね、十貫の罰金にしようね」と言つて、協議したら、

「ああ、十貫の罰金を取るぞ」と協議して家に帰つて

きたら、すぐ翌日には（モーアイが）十貫のお金を持つて、行つて小便して立つていたって。

「おまえ、おまえはこれがわからないのか、立て札を見なかつたのか。立て札は見たか」というと、

「見てますよ。ほれ、十貫」といつたそうだ。

「ほれ、十貫」といつたのでね。

「そうやつてね、十貫のお金を持っている者がいればね、乞食であつてもここで小便してかまわないじやないですか」と言つたのでね、やっぱし、その人らは負けているわけだ。

こちちは、こんなことしないでと書けばいいのにね、十貫の罰金と言つたらね、もう、

「罰金を払いさえすれば誰でも（小便）してかまわないんだね」って言われるでしょう。だから、そういうことがあつたという、モーアイ親方の（話）。

⑧ 立ち小便

高江洲昌保（大正二年生）セントー

あの、首里城のこつちの、龍種^{リョウジン}といって、今も残つてゐるさ。今ある、頭の方はなくなつておるけどね。水は流れてるよ、見たら。そこで、御籠種^{ヨリヨウジン}の前で立ち

小便なんかした人はね、十錢、五貫の罰金。五貫といつたら十錢さ、十錢。今の十錢といつたら、わけがわからんでしょう。まあ、一円に当たるわけさ。そして、「五貫の罰金」と言つたら、そんなのは、なまやさしいから、時の吟味によつて処分する」と、立て札を書き直させて。

「ああ、そう、なるほどそだ。五貫罰金の一、十錢うつちきれー、シーバイしんしむみ」ち（「五貫の罰金を十錢を納めれば、小便をしてもいいのか」と）言うわけさー、上方に。この立て札立てた方に。

「ああ、なるほど。十錢、十錢うつちきれー私ねーシーバイさんどーー」ち（十錢、十錢置いて私は小便するぞ）と、言うわけさー。そうしたら、

「ああ、なるほど、時の吟味に行つて処分すんでいち、あんし書ちみそーれー（政府の評定にかけて処分すると、そうお書きください）」ち、立て札いつたん。それから、もう、怖がつて、もう、小便する人はいなかつたという。そういうふうな、時代が。

⑨ 立ち小便

山城清輝（大正十二年生）中の町

モーアイ親方^{モアイキンカフ}と言つて、歴史的^{レッセティック}人物だとと思うけど。モーアイ親方よ、とても頭が、たいへん切れ者でね。切れ者だけども、なんていふのかな、いつもちょっと風変わりな人だつたんだろうな。で、首里の城^{シテ}、たいへん大事なところに、よく、人がね、立ち小便するもんだけ

※一時の説明 その時の説明 吟味は説明することを言つ。

ら、そこには、「うまつてい小便し——ね——罰金取いんど——（ここで便をしたら罰金を取るぞ）」と立札立てたそだよ。立ち小便是してはいかんと。して、当時の金、いくらかだったかしらんけど、いくらかの罰金にするといふ立札を立てたそだ。それを見てね、このモーイ親方わざとの立札の所には、毎日小便にきよつたつて。そして小便してはね、この役所に罰金持つて、「今日、小便しそくとうやー、罰金納めにきました」と今日、小便をしたので、罰金を納めにきました」と言つて。小便するたんびに罰金持つちゃーなかい納みーが、「今日ん私ね小便しそくとう、罰金納みーがち来やーびたんどー（今日も私は小便をしたので、罰金を納めに来ましたよ）」言つたらしい。それで、「ああ、これでは人の心をね、罰金で人のなにを治めることはできないんだなあ」ということで、役人もどううね、このモーイ親方わざとされて、その立札を取つてね。それからは立ち小便はなくなつたつと。これはなんでしような、政治に対する権力、あるいはそういうふうな罰でもって人間の教育はできないといふ一つの大きな戒めでしょうね。最近、教育でもよく言われるでしょ。体罰はいけないとかね、体罰では生徒はけしてよくならないとか。そういうふうなのがおなじで、昔からそういうことはわかつてていたわけ。罰で人間の心をおさえることはできないと。で、心でもつてしか。

「なぜ、そこに立ち小便してはいけないか」と言うことをみんなに教えてね、言うべきであつて、罰金取つてそれが直るはずはない。いうふうなことで、このモーイ親方が政治家に自分の身をもつて教えたといふ話ですね、これね。

⑩ 立ち小便

比嘉喜代吉（大正四年生）山内
こつちに小便するのは五貫罰金と。そしたら、（罰金）持つていつて入れて、小便したそだ、それを聞いた。それでも協議やりなおしてね、時ぬ吟味で、時といつても類は決めないさー。それで、この方はできなかつたつて。時ぬ吟味ね、その日ね、協議によつて決めますといつて。時ぬ吟味して、したら、もう、いくら罰金するかわからんといつてね、それで、やめたと、小便するのは。あんし、五貫だけ持つていつて小便したらしい。

⑪ 立ち小便

鴻田トミ（大正五年生）センター

これ（小便）、お金出したらやつてもいいつて。したから、「なんで、いやー、うまかいシーバイする（なんで、おまえ、ここに小便をするんだ）」と言つたからね、「お金出したらいいと書かれているさー」。罰金するつて書いてるのにね。これーなー（この人は）、頭あたまが、知恵があるわけさー。

(15) 難題

① 難題

久場政三(明治四十三年生) 園田

方言原話

薩摩ぬ國んかい。取らつていからーあらんがやー、
やー。なー、うれーまーぬ国うていんでいぬくと一聞
ちよーたるはじやしが、私がけー忘しとーるしがや。

ターリー御用やでーるふーじ、「ターリーー來」んち。

あんし、ターリーんかいぬ御用や、くぬ、
「井ぬ御鐵」切ち持つちくー」、うりからアクシナ、アク
んでーやー、あぬー、灰鐵やー。ぬーん、チリんぬー
ん燃ーち、うぬ灰、灰がないしえーやー。

「うりさーい綱のーていくー」んでいち。うりから、

「雄鶏ぬ卵持つちくー」でいち、ターリーんかい注文
さつてい。ターリーーや、なー、うー心配いくしみ
そーやなかい、なー手かみてー寝じ寝じみそーちや
くどう、うぬ御用さつたれ。

「ぬーが、ターリーー來んでい言ーるんしえー、いやー
が来やがーんち、あんしうりしみそーたくどう、

「あーさり、なー、私たーターリーーやくまんかいんち
しごーとーみしえーしが、あつたに産催しみそーやー

なかい、あんさーいめんしえーうーさん。ターリー一代
わい私が来やーびたん」でいち、

「えー、あにー。あんし、いやーがないみーんちやく
とう、

「私がないびん」。あんさーい、うりが、

「ターリーー來」んでいち、すゆぬー、

「ターリーーや産催そーみしえーん」でー、さくどう、

「ぬーが男ぬん産催そんぢあみ」んでー、

「あんしうりするむんぬ うんじゅなーや、雄鶏ぬ
卵持つちくーんでい言ーみしえーんなー」でいちやく

「なるほど」でいち、あんさーい向こうは、首振みそー
とう、

「井ぬ御鐵」持つちちー」でいちやくどう、

「あいびらん、ターリーー、私がないびーくどう、私

やらちくみそーり」。ターリーーや、また一応や、くぬ
三司官ぬちやーどう相談つし、あんしうみそーちやく
とう、

事の井ぬ御鐵 那珂市吉高町にある
井ケ岳のこと。首里城の東にある丘陵。
頂上には櫓が高く、園子の折御門
で、久高島と通じる御鐵を守護する御鐵と
して有名。

事の井ぬ御鐵 那珂市吉高町にある
井ケ岳のこと。首里城の東にある丘陵。
頂上には櫓が高く、園子の折御門
で、久高島と通じる御鐵を守護する御鐵と
して有名。



「あーさり、今、琉球の国なかえーくぬ井の御嶽乗せーる車ぬねーらん。また、船ぬねーやびらんくどう、うぬ、あまからー港までいぬ車どう、うりから、うり乗しーる船借らちくいみそーり。あんしんー、しぐ、なまにん持つちちやーびーくどう」でいやぐどう、なー、うりん、むこうや首振いみそーち。うりから、「あんし、いやーや灰綱ーちやーさが」でいやぐどう、と、

「あ、こー、うれー今ないびーくどう、うふえー待つちよーちくみそーり」んち、側うてい綱ぐわーけーひにやーなかい。あんさーい、けー燃ーさーい、

「くれー持つちちやーびたん」でいち、あんしうさぎたくどう、なー、うれー、うりしーねー、うぬ綱ぐわーや灰などーくどう、アケなどーしょーや。うりつし、ターリー、うりはんしみそーちゃんでい。

〈共通語訳〉

薩摩の国に取られてからじやなかつたかなあ、ねえ。もう、それはこの国でのことだといふことは聞いていたはずなんだが、私が忘れてしまつていていたんだけどね。

(モーイ)お父さんに御用であったようだ、「モーイの父よ、来なさい」と。そして、モーイのお父さんへの御用は、「この、

「井の御嶽を切つて持つてこい」、それからアクジナ、アクというのは、あのう、灰綱ね。なにか、ごみもなにも燃やして、その灰、灰になるだろう。

「それで綱を纏つて持つてこい」と。それから、「雄鶴の卵を持つてこい」とモーイのお父さんに注文された。お父さんはたいへん心配なさつて、もう頭を抱えては寝込んだりなざつていたので、その御用を言いつけられてから。

「なんで、お父さん、そんな休んでおられるのですか」と(モーイが)たずねたら、

「薩摩にだか、とにかく、注文があるが、『井の御嶽を持つてこい、それから、灰で纏つた綱を持つてこい』と、そういう注文が来てゐる」と。

「もう、おまえでは、おまえ、子どものおまえができることがあるなら、どうしてあれだけこのように苦労するか」とおつしやつて。それで、(モーイが)言うことは、

「ちがいます、お父さん、私が解決できますから、私を行かせてください」。お父さんは、また一応は、この三司官の方々と相談し、そのようになさつたから、「モーイが行く」というのだけど、どうするのがいいでしょうかねえ」と相談すると、

「さあ、モーイができるならできるので、モーイを遣わしなさい」と。そして、このモーイ親方を行かせなさつたよんだ。すると、その薩摩の国に行つて、

「なんだ、父親に来いと言つたものを、おまえが来たのか」と、そのように聞かれたので、「もし、もう、私どもの父はここへ来ると支度をなさつ

て い ま し た が、急 に 産 気 づ いて し ま わ れ て、そ れ で お
 い で に な れ ま せ ん。父 上 の 代 わ り に 私 が 来 ま し た」と、
 「あ、そ う か。そ こ で、おまえ に で き る の か」と聞
 か れ た の で、
 「私 が で き ま す」そ し て、薩 摩 が、
 「モーイの父 が 来 な さ い」とい つ け た の が、
 「父 上 は 産 気 づ いて は っ し ゃ い ま す」と、す と、
 「ど う し て 男 が 産 気 づ く と い う 事 が あ る も の か」と、
 「そ う お つ し ゃ る と い う の に、あ な た が た は「私 に
 雄 鶏 の 卵 を 持 つ て こ い」と お つ し ゃ る の で す か」と 言 う
 と、

「なるほど」と、薩 摟 は、首 を 振 ら れ た。そ れ か ら、
 「弁 の 御 墓 は 持 つ て き た か」と 聞 く の で、
 「も う し、今、琉 球 の 国 に は この 弁 の 御 墓 を 乗 せ き れ
 る 車 が あ り ま せ ん。ま た、船 が あ り ま せ ん の で、そ の、
 あ そ こ か ら 港 ま での 車 と、そ れ か ら、そ れ を 乗 せ き れ
 る 船 を お 借 し く だ さ い。そ う し た ら、す ぐ、今 も 持 つ
 て き ま す か ら」と 言 う と、も う、こ れ も、向 こ う は 首
 を 振 ら れ て、そ れ か ら、

「そ で、おまえ は 灰 綱 は ど う し た か」と い う と、
 「あ、そ ら、こ れ は 今 で き ま す の で、少 し 待 つ て い
 て く だ さ い」と、側 で 綱 を ち ょ ち ょ い と 縦 い あ げ て、
 そ し て ぱ つ と 燐 や し て、
 「こ れ を 持 つ て き ま し た」と、そ う や つ て 献 上 し た の
 で、も う、こ れ は、そ う や れ ば、そ の 綱 は 灰 に な っ て
 い る の で、灰 な っ て い る よ ね。そ う し て、モーイのお
 父 さ ん は（譲 さ れ た 難 題 を す べ て）解 決 し た そ う だ。

② 下駄と草履・難題

桑江幸子（明治四十一年生）泡瀬

モーイ親方のこと。

〈方言原話〉

モーイ親方の話。モーイ親方はですね、とつても
 頭 が 優 れ て。あんさーい、髪んバーバーし、ふりむ
 んみたよ う に 歩 き よ つたつ。そ う し て、皆 さ ー に、
 「モー やー、モー やー」と 言 つ て ね、話 を し た た ら。
 また 下駄 も、一 つ は 草履、片 足 は 下駄 履 いて こ う 歩
 い た た ら、
 「モー や よ、ふりむんとういぬむんやさ」と 言 つ た
 ら ね
 「くれー アンマー 孝行、くれー スー 孝行」言 つ て ね、
 ほ い で 平 気 で 自 分 は い た そ う です。
 ほ い で、ある 日 の こ と、友 だ ち は き が い な 着 物 着 て
 い る け れ ど、自 分 は い つ も 悪 い 着 物 を 着 て 遊 ん で
 い た。みん な が よ、ば か に し て ね。
 「モー やー、モー やー」する そ う で す。ほ い で あ の、
 ま た、自 分 の 男 の 類 な 一、も う 心 配 し て 座 つ て い る
 も ん だ か ら、

「ぬーが う んじょーう つ び 心 配 そーみ し めーる」んち、
 「あんがんし ど う、御 主 加 那 志 前 か ら や、難 問 題 言 い
 ち き う つ て い、う り な ー 私 が ー な ら ん。ち ゃ つ さ 断 わ
 て い ん、いやーが 一 な い し めーん ち さん」
 「う り ん な 一 や 難 問 題 や ん な 一。ぬー や い びーが ーん
 ち や く と う、
 「ムイ 墓 ち 持 つ ち べーん で い ー さ ぬ。う り が ち ゃ ー す
 が、う り が ん ムイ ぬ ん 持 つ ち 行 か り ー ん な 一」で い 言 い

るむん。

「あんすらー、うり、私がさびーさ。」言ち、

「あ、確かにいやーがないんなー」でい、

「うんじゅががー、私が引き受けやーに行ちゅさ」でい

やーに、どうくる行ちゅるぐとうかい決まつたそ

です。そうしたら、

「いやーがーならん」

「なゆん。親ぬ代わい私が、子ぬ行ちゅしおー当たい

前やくどう、私が行ちゅん」

「やん。とー、あんしぇー、いやーや無事に行じくー

よー」んち、親が見送りやつて。

向こうの難問題や、

「あんし、いやーや、だー、ムイや持つちえーみーん

ちくどうや、

「どー、ムエー城ちうぢえーしがや、乗ーる船ぬねー

びらん。早くうぬ船出じやー」でいちやくどう、ない

でしょ、難問題は。なー、うり、負きとーるちむえー。

「ぬーが、あんしぇー男ぬ親、いやーがー来ゆーる」

でいちやぐどう、

「あー、私たー産催しや、私つたースーや産催し子産

すんち、私が來よーいびーさ」

「男ぬんひやー子産すみ」と怒つたそうです。

「あんしぇー、うんじゅなーや雄鳥ぬ卵やれーや、
雄鳥や子なさびーんなー」またこれも負けたそうです
よ。

そして、なーーちえーぬーやたがやー。繩、とー、

「いやーや灰綿持つちくーんでー、うり持つちえーみー」

「あー、うれーどうーやつしー。持つちえーびーん」

でい。

「ちやーしのーていちやがーんちやくどう、

「しへーの一らつとーる頗然さーに持つちえーびーさ、

うれーし、持つちえーびーんじーでいち。

御褒美を頂いて、位も上がつたそですが。あんさー

い、「ジンブンぬある人よーぶりむんふーじーどうそー

る」という言葉がね、あれ、そのあとから、「ジンブ

ンぬあしぇー、ふらーふーじーどうそーる、ジンブン

持ちやさー」という話はこれから出たそですが、モーイ

親方。

うれー、泡瀬ぬ喜屋武ちゅ兄弟ぬ親祖父母。はい。

喜屋武、喜屋武。セイインぬモーイ親方、あそこ拝

みに行きますよ、喜屋武ちゅ兄弟。泡瀬ぬ門中。あん

くどうゆーわかいるばーよー。うり、セイコーやつちー

ぐわーよー、喜屋武小ぬ、けーまーちー、私つたーが

行く、聞き取り困難、ゆー話すたしえー。

「私つたー親祖父母、うんぐどうーしジンブンぬある

人ぬうたんどー」でい。

〈共通語訳〉

モーイ親方の話。モーイ親方はですね、とっても頭

が優れて。そうだけど、髪もボサボサにして、気がふ
れた人のようふるまつていたつて。そうして、皆で、

「モーヤー、モーヤー」と呼んでね、話をしたら。

また下駄も、一つは草履、片足は下駄を履いてこう

第一セイインぬモーイ親方 モーイ親
方のこと。セイインは、本名の聲から
名づけられた。

※2 〔聞き取り困難〕 音声不明瞭
で聞き取れないが文脈からは（客
属武小のいえに）行つたとき／へらの
意味のことを言つていると思われる。

「モーヤーよ、気狂いとおなじだな」と言つたらね、
「これは母さん孝行、これは父さん孝行」と言つてね、

それで平氣で自分はいたそうです。

それで、ある日のこと、友だちはきれいな着物を着ているけれど、自分はいつも悪い着物を着て遊んでいた。みんながね、ばかにしてね。

「モーヤー、モーヤー」と呼ぶそうです。それであの、また、自分の父親がもう心配して座つていてるもんだから

ら、「なんであなたはそんなに心配なさつていてるのです」と聞くとね、

「かくかくしかじかで、王様からね、難問を言いつけられて、これは私ではできない。どんなに断わっても、おまえならできるから」というんだ

「それほどの難問なの。どんな問題ですか」とたずねると、

「丘を壊して持つてこい」というんだ。それをどうするか、丘を持つていかれるものか」と言う。

「それならば、それ、私がいたしますよ」と言つて、

「え、本当におまえができるのか」と、「あなたのつとめは、私が引き受けて行くよ」といつて、自分から行くことにきつたそうです。そうしたら、

「おまえにはできない」

「できる。親の代わりに私が、子が行くのは当たり前だから、私が行く」

「そうか。じゃあ、それなら、おまえは無事に行つてね、

「知恵のある人は狂人じみたふるまいをするものだ」

きなさいね」と親が見送つてやつて。

向こうの難問題は、

「それでは、おまえは、どれ、丘は持つてきたのか」と聞かれたら、

「ええ、丘は壊しておきましたが、乗せられる船があまりません。早く丘を乗せられる船を出しなさい」といつたので、ないでしょ、難問題は。もう、これ、(相手が)負けたことになった。

「なんで、それでは父親は(来ないで)、おまえが来ているのか」というと、

「ああ、うちのは産氣づいてね、うちの父さんは、産気づいて子どもを産むというので、私が来たんですよ」

「男が子を産むもんか」と怒つたそうです。

「それじや、あなたがたは雄鶲の卵というが、雄鶲は子を産みますか。またこれも負けたそうですよ。

そして、もう一つはなんだかねえ。綱、そうだ、「おまえは、灰綱を持つてこいというのは、それを持つてきただか」

「ああ、それはたやすいこと、持つてきてあります」と、「どうやって綱つてきたのか」というと、

「そのまま、縫われた綱を燃やして持つてきました。それはそのまま持つてきますよ」と。

御褒美を頂いて、位も上がつたそうですが。そうしてね、

「知恵のある人は狂人じみたふるまいをするものだ」

「知恵のある者は気がふれたようにふるまう、そういう人が知恵者だよ」という話はこれから出たそうですが、モーア親方。

この人（モーア）は、泡瀬の喜屋武一族の御先祖。はい、喜屋武です、喜屋武。セイインのモーア親方、あそこ拝みに行きますよ、喜屋武一族は泡瀬の門中。だからよくわかるわけ。これ、セイコー兄さんがね、喜屋武小（という屋号の家）の、うちらが行くと、よく話をしていたから。

「うちの御先祖には、このように知恵のある人がいたよ」と。

③ 難題

溝田トミ（大正五年生）セントラ

〈方言原話〉

「あんさーに、三つの問題解きなさいと言つたからね、『焼綱御用どう、雄鶏ぬ卵どう』、ぬ一御鐵んでいたが、この、山があるけどね、

「山も持つてこい」、三題なたくどう、くぬ、焼綱御用」というのはね、

「くり、どう一やつしーむん」と、

「やさしい、とってもやすい」と言つたわけさ。綱、ぬわられた綱、これ焼いたから、そのまま持つていつた

ら、「焼綱」、ね。また、雄鶏ぬ卵つたら、

「私つたーターリー や産催そーみしえーん」

「男ぬん卵産すみ」んちやくどう、これも解いている

わけ。男は卵できないさーね。このモーアが、

「私つたーターリー 産催し、ならん」でいら、
「男ぬん卵産すみ」んち、くりん負け。

「港まで船は用意してあるけどね、これ乗せる船がない」って、山乗せる。こっち解いたから、これもう、位にあがつたわけ、このモーアは。

〈共通語訳〉

それで、（モーア）三つの問題解きなさいと言つたからね、

「焼綱御用と、雄鶏の卵と」、なに御鐵と言つたか、この、山があるけどね、

「山も持つてこい」と、三つの問題だつたので、この焼綱御用」というのはね、

「これはたやすいことだ」と、

「やさしい、とってもやすい」と言つたわけね。綱を、綁められた綱を、これを焼いて、そのまま持つていつたら、（これが）「焼き綱」、ね。また、雄鶏の卵と言つたら、

「うちの父上は産氣づいてらっしゃいます」

「男でも卵を産むのか」と答えたので、これも解いているわけ。男は卵できないさーね。このモーアが、

「うちの父上は産氣づいて、来られない」といつて、

「男でも卵を産むのか」と、これも（相手が）負け。

なに御鐵といつたか、八重山の、

「山を持つてこい」と言つたのでね、これを乗せ

る船がない」って、山を乗せる船。こっち解いたから、これもう、「上の」位にあがつたわけ、このモーイーは。

④ 下駄と草履・難題

島袋フミ（明治四十一年生）諸見里

〈方言原話〉

うんぐどうし歩ち、むる人ぬぬ鶏ぐわーんぬーん
うりし、むるわぢやくし、人ぬ家にぬらーつていや。
一ぢえーおどう孝行んでい、一ぢえーアソーマー孝行
んちよ。

あんさーい、うりやたしえーやー。お父さんが首里
命令下たくどう、うりやたしえーやー。お父さん、
ちやーじこーうじてい、うまー役員捕てー、じこー話
し合いそーしが、うじてい。モーイ親方ーまた、
行ちぶさーねーん、私が行ちやびーさーんち行ちやー
に、むる。

王様ぬ座んかいちよーたしえーやー、むる明かさー
に。

「なんでお父さん来なかつたかー」んぢやくどう、
「お父さーの産催している」。また、

「山ー、根ぐーしし山ー置ちえーしがや、船ん持つ
ちえーくーん、載しらんんだん」でい。また、なー
ちえーぬーやたがやー。灰綱、灰綱ーまた、板んかい
置ちきやーに、綱巻きえーさーに、うり持つちんじ。
さくどう、うぬモーイ親方ー、なー負かちよーしえー
やー。王様ぬ座んかい、かんしいーくーーたんだい。
うぬモーイ親方や、いつベージンブンあつい。

〈共通語訳〉

あのように（いたずらして）歩いて、ことばこぐ人の家の鶏などにも、ことばごく悪ふざけして、家人に叱られてね。

一つはお父さん孝行、一つはお母さん孝行といってね。

そして、こういうこともあつたからね。お父さんが首里から命令が下つたので、それだからね。お父さんも、たいへん気をもみとおしで、そこに役員捕つてけんめいに話し合いして、心配して。モーイ親方はまた、「行きたくなければ、私が行きますよ」と行かれて、全部（難題を解いた）。王様の座にすわつていたからね。全部難題を解いて。

「なんでお父さんが来なかつたか」と聞かれたので、「お父さんは産催している」。また、

「山は、根っこから切つた山は置いてありますね、船を持つてこなかつたので、載せられませんでした」と。また、灰綱、灰綱はまた、板に置いておいて、綱を巻いたままにして（焼いて、それを持っていく。そしたら、このモーイ親方は、もう負かしているんだよね。王様の座にこのように座つておられたそうだ。このモーイ親方は、たいそう知恵があつて。

※一ぢえーおじよ坐行、一ぢえーアンマー妻行 モーイ親方が、父の母がそれを言つた表示に苦笑ひ從つて、片足と下駄 片足に草履を履いた事績について語つていると思われる。

(5) 難題

伊佐安弘（明治四十一年生）山里

方言原話)

御獄御用とかいう難題を解いての、あるんだよ。

これは最初は、弁ぬ御獄御用とう、灰綱とう、もう一つはなんだかな。鹿児島、現在の鹿児島さ、あそこから献納しなさいという命令がきて、自分の父はもう大物だからね、親方だから、非常に心配しておつたらしいんだよ。

「そんなの、あんたが心配する必要ないよ。うちが全部解いてきてあげるよ」と言つてね、このモーヤーが行つたらしいんだよ。で、向こうに着いたら、

「ぬーが、いやーや、いつた親方のあびてーるむん、いやーが来やる」でいちゃくどう、

「私つたーお父や産催し来らん。私が米やーびたん」でいちゃくどう、

〔男ぬんひやー産催すんちんあみ。〕

〔そんな馬鹿な話はないよ〕んちゃくどう、

〔ぬーがさい、あんしえー、ぬーんちうんじゅなーや雄鶏ぬ御持つちくーんでい言うが〕んでいちゃく

とう、向こうも、

「あ、これにはやられた」と。免れたそだよ。それ

から、

〔弁ぬ御獄持つちくーんちえーしが、持つちえーみ〕んちやくどう、

〔弁の御獄ーしちゃーい、那覇港までー持つちえー〕

いびーしが、うり乗しーる船ぬねーらんくどう、船貸

らちくいみそーり」んちやくどう、だー、こんな大きな山を乗せる船はないだろう、向こうでも。ね。
「はー、またこれも負けた」という話でね。で、またもう一つは、

「灰綱持つちくー」でいらやくどう、これも、まあ、「ちゃんと準備つし持つちえーびーん」言ち、これを、灰綱を出したらしいんだ。これを、綱をぬつて、それを巻いてからに、それに火つけて焼いたのが、この灰綱」ということになつておつたという話を聞いたんだよ。これでまあ、薩摩の国との難題の三題は解いたという、モーヤーが話だよ。

（共通語訳）

御獄御用とかいう難題を解いたのがあるんだよ。

これは最初は、弁の御獄御用と、灰綱と、もう一つはなんだかな。鹿児島、現在の鹿児島さ、あそこから献納しなさいという命令がきて、自分の父はもう大物だからね、親方だから、非常に心配しておつたらしいんだよ。

「そんなの、あんたが心配する必要ないよ。うちが全部解いてきてあげるよ」と言つてね、このモーヤーが行つたらしいんだよ。で、向こうに着いたら、

「なんだ、おまえは、おまえのところの（父である）親方を呼んでいるのに、おまえがきたのか」と言つたら、

「うちのお父さんは産氣づいて来られない。私が来ました」と言つた、

「男が産氣づくことがあるか。そんな馬鹿な話はないよ」と言うので、

「なぜですか。それなら、どうしてあなたたちは雄鶲の卵を持つてこいと言うのか」と言うと、向こうも、

「ああ、これにはやられた」と、免れたそうだよ。それから、

「舟の御嶽を持つてこいと言つてあつたが、持つてきたか」と言わされたので、

「舟の御嶽は掘り起こして、那覇の港までは持つてきていますが、それを乗せる船がないので、船をお貸しください」と言うと、ほら、こんな大きな山を乗せる船はないだろう、向こうでもね。

「はあ、またこれも負けた」という話でね。で、またもう一つは、

「灰綱を持つてきなさい」と言つたので、これも、まあ、「ちゃんと準備して持つてきました」と言つて、これを、灰綱を出したらしいんだ。これを、縄を縛つて、それを卷いて、それに火をつけて焼いたのが、この灰綱ということになつておつたという話を聞いたんだよ。これでまあ、薩摩の国との難題の三題は解いたといふ、モーサーの話だよ。

さ話ぶるばやしが。

「雄鶲ぬ卵持つちく」んち言ちやぐとう、
「はー、うれーなー、雄鶲ねー卵ーねーんしがやー」

んりち、家んけー来、心配さくとう、
「うれーどうーやつしーやーんどー」でい。

とー、また、御用めあるばー行じやーに、

「ターリーや、産儲し、めんしおーうーさん」りちやぐ
どう、
「男ぬん産むゆーすんなー」でい、

「男ぬん卵ぬあんなんー」りち、あんしはんちゃんりる
話ん昔あたんりる。
うりから、また、
「灰綱持つちくー」りちやぐとう、

「灰綱りちんあんなー、また、あんしんないんなー」
りちやぐとう、
「うりんでーどうーやつしーやんどー」りち、綱の一
やーに、あんさーに板きれんかいうちきやーに、うり
ういて燃一ち、うり持つちんじやくとう、
「どー、灰綱ーかんしやいびーさ」りちやくとう、あ
んしひるまさしち、負きどーたんどーやーんり、うぬ
話。

ただ、それだけ。

〔方言原説〕

モーサーといふから、話えーそーらーこーわからんしが、昔聞ちやる話えーうすうそー覚びてい、うつ

島袋新栄（明治三十一年生） 池原

〔共通語説〕

モーサーといつたか、話はしつかりとはわからないけど、昔聞いた話はうつむらとは覚えていて、それだ

け話ををするわけなんだけど。

ただ、それだけ。

「雄鶏の卵を持つてこい」と言つたので、(モーイの父親は)

「はあ、これはもう、雄鶏には卵はないんだがなあ」と、家に帰つて、心配していたら、

「これはたやすいことだよ」と(子どものモーイが言つた)。

そうして、今度は、命令がでるときに(お父さんの代わりに)行つて、

「お父さんは」と言われたので、(モーイは)

「父は産気づいて、夢上できません」と言つたので、「男でも産気づくものなのかな」と、(言われて、モーイは)

「男にも卵があるのかい」と答えて、そうやつて突つぱねたという話も昔はあつたといふ。

それから、また、「灰綱を持つてこい」と(モーイの父親は)言われた

ので、「灰綱を持つてこい」と(モーイの父親は)言われた

「灰綱というものが存在するのか、また、あるようには(灰を綱に)できるものかなあ」と言つたので、(子どものモーイが)、

「こういうことはたやすいことですよ」と、綱を絆つて、そうして板切れに置いておいてね、それで燃やして、それを持つていつたら、

「ほら、灰綱はこういうのですよ」と言つたら、(相手は)あんなに珍しがつて、負けていたんだよと、その話。

⑦ 難題

普久原カマド(明治四十三年生) 安藤田

〈方言原話〉
「雄鶏ぬ卵持つちくー」でいたんでいよー、
うぬ鹿児島からぬ注文。
親が役人だつたつて。だからもう、とつても心配しておつたつてよし、親は。

それでは、

「雄鶏ぬ卵持つちくー」でいたんでいよー、
うぬ鹿児島からぬ。注文。
この親は役人だつたつて。役人に押しつけられたからね、このモーイ親方が、なー、ふらーふーじーんか

い。
「いやーがひやー、ぬーんないんなー」でいいやーに、
あん言たんでい。あんし。

「私やらし」んでい。あんさーなかいや、くぬ、また
もう一つは、

「灰で綱持つちくー」んでいさんでいくどう、あんさー
なかい綱持つちぢやーなかい、けー燃一ちゃんでい

よー。これでもう、あんしえー、完成したんでい。

〈共通語訳〉

親が役人だつたつて。だからもう、とつても心配しておつたつてよし、親は。

それでは、

「雄鶏の卵を持つてこい」といつたんだつてよ、その鹿児島からの注文。モーイの親は役人だつたつて。役

人に押しつけられたからね、このモーイ親方が。もう、たわけものじみたこの子に。」
 「おまえめに、なにができるのか」といつて、そう言つたつて。そこで、「私を行かせてくれ」と。そしてね、この、またもう一つは、「灰で編んだ縄を持つてこい」と言われたらしく、そうしたら縄を持ってきて、燃やしてしまったんだってね。これでもう、完成したんだと。

(8) 難題

皆久原幸 (大正五年生) 泡瀬

〔方言原語〕
 モーイ親方のことですよね、あの、ぬーんでいがやー。
 薩摩からのあれがあつて、
 「弁の御嶽、弁ぬ御嶽むつちくーんでい言ちやくどう。これ、聞いたことあるでしょ。え、聞いたことある？」
 「弁ぬ御嶽、薩摩かい持つちくー」でい言ちやくどうや、
 「じゃあ、準備しておきますから」これ持つていくことができないと、あつちわかつてるでしょ、御嶽が、この山壊して持つていくの。あんさう、
 「準備そーちやびーくとう、うり乗しーる船しこーていめんそーりよー」って言つたつて。船ね、大きい船。あんしうてー、あまー負きどーしょーやー、あん言えーからやー。

「雄鶏ぬ卵持つちくー」んちやくどう、「うー、私が持つちいちゃびーさ」でい。なー、うぬ親一心配さくどう、

「雄鶏ぬ卵持つちくー、ちやーすがやー」とう、私が持つちいちゃびーさ」んちやくどうや、「いやーがないみ」
 「うー、私が行ぢやびーさ」つてね、行ぢやーに、「男ぬん産稚すみひやー」つて言つたら、「ぬーが、いったーや、ターリーーや来ーん、いやーが来る」んちやくどう、
 「ターリーーや産稚そーいびーつさー」んちやくどう、「男ぬん産稚すみひやー」つて言つたら、「ぬーが、雄鶏ぬん卵ぬあみ」つて言つたつて。だから、こんなねー、これで、昔の人は知恵で全部あれしたつて。知恵勝負やてーるばー。

〔共通語訳〕

モーイ親方のことですよね、あの、なんていつたかねえ。

薩摩からの難題があつて、
 「弁の御嶽、弁の御嶽を持つてこい」といわれて。これ、聞いたことあるでしょ。え、聞いたことある？「弁の御嶽を薩摩に持つてこい」と言われたのでね、「じゃあ、準備しておきますから」御嶽を持つていくことはできないと、薩摩のほうではわかっているわけだ。御嶽を、この山を壊して持つていくのは（できないと）。だから、「準備しておきますから」御嶽を持つていく

〔準備しておきますので、弁の御嶽を乗せきれる船を

準備していらしてくださいね」って言つたつて。船ね、大きい船。そういうことで、あちらが負けているんだよね、そう（モーイガ）答えたもんだからね。

「妹達の卵を持ってこい」といってたんだ

は心配していたので、

ねえ」と、

「おまえができるのか」

「なんで、おまえのところは、父上が来ないで、おまえが来なさい。」

「父上は産気づいてらっしゃいます」と答えたので、

「男が産気づいたりするもんか」って（薩摩側が）言つたら、

「なんだい、雄鶏にも卵があるのか」って言つたつて。

したって。知恵勝負だったわけ。

9

安次嶺ツル(大正六年生)嘉間良

方言原話

鹿児島からね、この灰、灰持つてこいと言いつけられたからね。燃やしたこの灰さ、灰。あれ持つてこい

と言わされたらね、もう皆は悩んでよ。

からも沖縄の灰持つちくーんてい言らつとーしがや、
くれーちゃーさらーましがーんち、黄じん味みしている
ところに、また、自分が遊び込んできて、
「ぬーんち、うんじゅなー、あんし懶だーみしえーが、
ぬー考かーとーみしえーが」んちやくどう、
「モーイー、いやーがーぬーんわからんさー、あまん
かいどうきれー」んでい言ーしが、
「ぬーやらわんしまびーさ、私わたしにんかい聞かしみそー
れー」んでい言ことやくどう、
「とー、あんしやー、あい、あまから、鹿児島から、
かんし灰持アシホつちくーんでい言らつとーしが、うぬ灰持アシホ
ちやーし持ハサフちちゅーが」
「はー、うれーじうーやつしーぐわーるやるい、うん
じょー。うりん心配ハラハラしみしえーんなー」んでいやーな
かい、
「いやーがあんし考かーとーしえー、ぬーやが」でいちゃ
くどう、
「はー、うれーどうーやつしーぐわーる。私が行ハシちや
いびーん」でい、「いやー、あんしえー本ホン當カタ」。
うぬタリーーが、親おやぢがさー、タリーーんでー親おやぢや
しぇーやー。タリーーがや、
「いやーがーがならんどー、モーイー」んでいしが、
「うーうーうー、アヤーさい、タリーーさい、うれー、
どうーやつしーぐわーるやいびーる」んち、
「私が行ハシちやー」

「いやー、持つちやー」んちやくどう、
「はい、持つちやーびたんどー」で、うまうでい
バーバー燃ーさー、これ、これまた勝つ。また、
「土んまた持つてこい」で、んちやくどうや、
「また、この土もどうする。どうしたらいいか」。くぬ
士、
「島持つちくー」んたがやー、
「山持つちくー」んたがやー。
「根元しーてい持つちくー」んでい言らつたくどう、
これもまたや、考えて。皆がまた悩んでいるところ、
「ぬーやがー」んちやくどう、
「うんぐとううんぐとうやしが、あんし、ちやーすが」
んちや、
「ああ、うれーどうーやつしーぐわーるやいびーる」。
「くり持つちちゅーしーーどうーやつさしが、くり乗^の
しーる船ぬねーらんくどう、くまから船持つちちゅー
らー乗^のしていやらすんどー」。これも負けて、こんなな
だつたつて。あんさーにしぐ、帰るときはこんな大き
な、モーや、お土産持たされたつて。

「ううして、あなたたがたは、そんなに悩んでいらっしゃるんですか。なにを考えていらっしゃるんですか」と言うと、「モーア、おまえにはなにもわからないよ、あっちに行つて」というけど、「なんでもいいですよ、私にもお聞かせください」と言うと、

「山持つちく！」 なたがやー。
「山持つちくー！」 なたがやー。
「根元でーー持つちくー！」
これもまたや、 考えて。皆が
「ぬーやがー」 んちやくどう、

モーイのお父さんが、親がね、ターリーというのには
親だよね。お父さんがね、「おまえではできないよ、モーイ」というけど、
「いえいえ、母上さま、父上さま、これはほんの簡単
なことなんですよ」と。
私が行つて（解決するから）」

(鹿児島) 行ってからね、縄作って、藁で縄を編んでから持っていくて、

ど」でいち、「いやーぐどーとーる者ぬひやー、うぬよーな難問や、ちやーしはんじうーすが。いやーや、むぬん言よーあろー」でいやいぎさぬでい言ちやぐどう。

「あらん、あらん。絶対心配ーしみそーんな。私が行

ちゅぐどう」でい言やーに、あんざーに、うりやらさつとーるばー。

「とー、あんやーらー、まじ、いやーはんじらー」でいちやらちやたくどう、なー、あまんじなー、むるうりはつとーんでいしえーやー。あんざくどう、

「いやーやや、私ぬ言ーちけー持つちぢやみ。雄鷹ぬ卵持つちぢやみ」でい言ちきくどう、

「私つたーターリーーやー、今すぐうーばんじ子産ふんちや、産催しめーてい、代わいぬ私が来やーびたん」でい、あまんじ言ちえーるふーじ。あんざくどう、

「男ぬ子産ふんちあみ」でい言ち、あね、あまなかいぬらーつたくどう、

「あんするむんぬ、なーや私にんかいや、私つたーんけー、雄鷹ぬ卵持つちくーんでいろー、雄鷹ーがん卵産すみ」でいち、とうつけーさつていよー。

「あんやさいー、私つたーが悪きたん」でいち、悪ささつたんだー、あまや。あんざーに、でーじな要美んしぐ、くいらつていてー、

「くりうてーなーいやーなかい負きたん」でい言ちらーに、あんざーに、すぐ、でーじなうつささつとーたんでー、親や。

「いやーやなー、ふりむんがやーでい思みたれー、ぬー

が、あんし頭切り者やてーる」でいちでーなー、親ぬん悪ささつたんてい。

あんゆかななー、でーじな切り者やてーるふーじ、なー、くぬモーイ親方やどー。

〔共通語説〕

モーイ親方というお方はね、昔の偉い人だよ。モーイ親方

とい親方という方は、他の人とは違うことをなさつてたんだつてね。モーイ親方といの方は、屋は遊んでね、夜になると一生懸命に勉強なさつたそつだよ。もう、人とはなんでも同じにならないようにして。だから、そのモーイ親方のことは皆で狂人だと言つてね。

「こいつは遊びほうけてばかりいてねえ。親でさえも、屋はいつも遊んでいるものだから、狂人と思つているわけだよね。

「こんなやつは、もう、この子は侍の子として生まれてゐるのに、勉強もしないで、昼間は蛙を捕まえてね、蛙を捕まえて遊びどおしで、これはどうしたらいいものか」と。また、題を持っていて鬱鬱したり、そうやって遊んでいらしたんだつてよ。それで親はもう心配なさつてね。

「こいつはどんな人間になるかわからない」といつて、そういうふうだつたけど、知恵者で、屋は遊んで夜に勉強するといつてね。それでも、はかりしれないほどの出来物だつたということ。知恵者が秀才だよ。

それで、モーイはね、上つ方、王様から、親もまたお城勤めの身分であつたんだね、もしかしたら。それ

で、内地、日本からか、薩摩からだらうかね、「雄鶏の卵を持つてきなさい」といつて首里城に「命令が」来てしまったわけね。そうして、「雄鶏の卵なんてあるのか」と、もう、親はもう、たいそう心配なさっているわけだよ。

「そうだなあ、これはどうしたらよいものか」というので、もう、このモーイ親方がね、「なにも心配なさいますな。私が解決してくるよ」といつて、

「おまえみたいなやつめが、このような難問を、どうやって解決できるんだ。おまえは、ものも言いうがあるだろう」というようなことを言ったので、

「ちがう、ちがう。絶対に心配はなさらないでください。私が行くから」と言って、それで、(親は)モーイを行かせたわけ。

「さあ、それなら、まずおまえが解いてみなさい」といつて行かせたので、もう、あちら(薩摩)で、すべて問題を解いたといふんだよね。そうして、

「おまえはね、私が言いつけたものは持ってきたか。雄鶏の卵を持ってきたか」と言うので、「うちのお父さんは、今まさに子を産もうという最中で、産気づいてつしゃって、代理の私が来ました」と、あちらで言つたみたい。すると、

「男が子どもを産むことがあるか」と言つて、ほり、あちこちに怒られたので、

「そうおっしゃるのに、あなたが私に、我々に雄鶏の卵を持つてこいと言つことは、雄鶏も卵を産むのか」

と、やりかえされてね。

「そうだな、こちらが悪かつた」と、悪いことをしたと、あつちは。それで、たくさんの褒美もたまわってね、「このたびはおまえに負けた」とおっしゃつて。また、たいそう喜びなさつたって、親も。

「おまえはね、馬鹿者だと思っていたら、なんだ、こんな切れ者だったのか」といつてね、親も悪いことをしたと。

そんなふうで、たいへんな切れ者だったみたい、このモーイ親方がだよ。

⑪ 床下勉強・難題

神里マカト(大正元年生) 安慶田

方言原話

「ぬーが、いやーや、むる学校じえー勉強さんーん
さくどうよ。床下ぬみーんじ勉強すたんてい。あん
ちゃくどうや、

「んーんーんー、私ねー字や習んでいんしむん」でい
言たんない。

「字習んでいんしむくどう、家うていい遊ぶ」でいたん
でい。あんさーなかい、

「ぬー、いやー、あんし勉強さんくどう、家うていい勉
強すん、家うてーならんそーていや、勉強さんちあん
なー」んちやくどう、

「んーんーんー、私ねーなー勉強さん」でいたんない。
あんすくどう、ちやー床下ぬみーうどーてい勉強さー

なかないで。

あんさーにまた、内地んかい出でい、いや、内地んかい行かんしが、あまんかいぬ話ぬあたくどうや、「えー、モーイーや、いやーや内地んかい、勉強さんあれーないんなー」でいやぐどう、

「ねーん勉強さんていんしむん」でいたんでい。

あんさくどうよ、あぬ、試験があたんでい。親ぬ、

「私ねーなー、試験ぬんわからん、でーじなどーさー」

でいやぐどうや、

「ぬーが、なー、うぬあたいぐわーんわからんなー」

でいやぐどうや、

「あん、だー、あんしわからんどうあるむんぬ」

「どー、あんし、なーわからんあれー私が出でやすく

とう」でいやぐどうや、あんさーに、うりが出でいや

さーなかないや。あまからよー、親んかいてー、あまからお父んかい

や、「いやー、雄鶏ぬ卵持つちくー」でいち、あまかい、

お父んかい言ちよーるばーー。あんすくどうお父や

また、「雄鶏ぬ卵んちあんなー」んち、ありいつべーなー

残念そーるばーー、親や。あんすくどう、うぬ子ぬ

ちやー、「ぬーがなー、ぬーんち残念そーが」でいやぐどう

や、「あんし、あまから、雄鶏ぬ卵持つちくーんでー、私

ねー雄鶏ぬ卵ーねーんむん」でいやぐどうや、

「わからんむん」んちやぐどう、

「んー、私が行ぢゅさ、あんしえー。なーや家かいう

とーけー」うりが行ぢゅーなかいや、

「だー、いつたー、いやーや、いやーが来ゆーる。うつ

たースーがくーんだる、ターリーーやくーんだる」んちや

くどうや、

「うー、あぬ人よーなー卵、子産ちや、家なかない

ちょーん」でいやぐどう、

「ぬーが、男ぬん子産すみ」

「あんするむんぬや、男んかい雄鶏ぬ卵持つちくーん

ち、ちゃーる訳が」んちやくどう、あんさー負けたん

でい、あまや。

負けやーに、あんさーなかない

「どー、あんしえーなー悪ささ」んち、あまーわびそー

たんでい、親方ぬ前やてー、わびそーたんでい。あん

し、「どー、あんしえーなー、あんし私つたーが悪さくどう

や、ぬがーらちどうらしえーんでい。

「内地かい私が行ぢやくどう」んでいや、このモー

イが、「私つたータリーーやや、来ゆーさんくどう、私が

来やんどー。私つたータリーー子生ち、来ゆーさんく

どう」

「ぬーが、男ぬん子生すみ」

「あんし、うまからあんし雄鶏ぬ卵持つちくーんでい

る、男ん子生すくどうあえーさにーんち、あり、あん

いちやくどうや、

あんしえーなー、「私つた一題ささ」んちあつたつて。わびそーたんでい、あまや。あんさーなかい、うつさまでいやさに。

〈共通語訳〉

いつも、あの、床下で勉強していたそうだ。それでね、

「なんだ、おまえは、ちつとも学校について勉強しない」というとね、

「いやいや、私は字は習わなくていい」と言つたつて。

「字を習わなくていいから、家で遊ぶ」と言つたつて。そうしたら、

「なに、おまえ、そうして勉強しないで、家で勉強する、家ではできないのにね、勉強しないことがあるか」と言つたら、

「いやいや、私はもう勉強しない」と言つたそだ。そして、いつも床下にいて勉強したつて。

そしてまた、内地に行つて、いや、内地には行かないけど、あつちに行くという話があつたのでね、

「おい、モーイよ、おまえは内地へ、勉強しないで行けるものか」と言うと、

「なにも勉強しなくていい」と言つたつて。するとね、あの、試験があつたつて。親が、

「私はもう、試験もわからぬ、大変なことになつたよ」と言つとね、「なんで、あなたは、そのくらいのことわからぬ

の」と言つたらね、

「ああ、ほら、このとおりわからぬんだもの」

「さあ、それなら、あなたがわからぬのなら私が答えるから」と言つてね、そうして、モーイが答えてね。

あちら（薩摩）からね、親にだよ、あちらからお父にね、

「おまえ、雄鶏の卵を持つてこい」と、お父に言つているわけだよ。そしたらお父はまた、

「雄鶏の卵というものがあるのか」と、お父さんはたいへん困つていたわけね、親は。そうしたら、その子どもたちが、

「どうして、どういうわけで困つてらっしゃるのですか」と聞いたらね、

「あのように、あちらから、雄鶏の卵を持つてこいと言われて、私は雄鶏の卵は持つてないのに」と言つて、わからぬのに」と言つて、

「そう、私が行くよ、そしたら、あなたは家にいて起きなさい」、モーイが行つたらね、

「おい、おまえのところの父ちゃんは来ないのか、父上は来ないのか」と聞かれたので、

「はい、あの人は卵を、子どもを産んでね、家にいる」と答えると、

「なんだ、男でも子を産むのか」

「そういうのには、男に雄鶏の卵を持つてこいというの、どういう訳か」と言つたら、そしたら負けたん

だつて、あつちが。

負けてね、そうして、

「まあ、そうしたらね、悪かった」って、あちらが謝りなさつたって、親方がだよ、謝りなさつたって。そして、

「まあ、それなら、このとおり私たちが悪かったので、許してください」と。

「内地に私が行くから」といつてね、このモーイが。「うちのお父さんがね、来られないから、私が来たよ。

うちの父上は子を生んで、来られないから」

「なんだ、男でも子を生むのか」

「そうして、こちらからあのように雄鶏の卵を持って、こいついうのに、男も子を生むことがあるのか」って、モーイは、そう言つたのね。そうしたら、「我々が悪かった」と言つたって。謝りなさつたって、あちらが。それで、これだけなんだよ。

〈共通語訳〉

黒綱御用といつて命令かかつたよ、上方から命令が、黒綱御用。そうして、その子（モーイ）にだよ、「黒綱御用つて、こんな命令、これを滞らせたら、これは大変なことになるよねえ」と、モーイの親が、このモーイ親方に言つたわけ。

「ああ、そのくらいのこと、なにもそれは問題ではない。これは、こうして芭蕉の葉の上に綱をやいて、これ、「こうだから」と出したら、これでできているから」と言うと、も、それで、通ることができた。あれ、いじらなければ、このまま残っている、黒綱、焼けあと。これ、モーイ親方が親に（答える）言ってあるわけ、親が心配しているのを。そうして、（モーイは）これで知恵者だつて、そういうふうなわけ。

あれ（綱）、こう、チヨイチヨイ燃えたら、このまま芭蕉の葉に置いてあるから、このまま残るよ。うん、これが話があつたよ。

⑫ 難題

宮城次郎（大正三年生）園田

〈方言原語〉

「黒綱御用んち命令かかつたよ、上方から命令ぬ、黒綱御用。あんさーに、うぬ子んかいてー、「黒綱御用んち、かんし命令、くりどうどうかさーねー、くれーでーじないさがやー」んち、くぬ親ぬ、くぬモーイ親方んかい言うえーるばーてー。」「あー、うぬあたいぐわー、ぬーんうれー問題あらん。くれー、かんし芭蕉ぬ葉ぬ上んかい綱焼ちゃやーなかい、くり、『こうだから』んち出じやしえー、これで

(13) 難題

島袋ヤス（明治四十二年生）山里

〈方言原話〉

「雄鶴の卵持つてきなさい」と言つて、したでしよう。

だから、息子が行つたらしい、この伊野波のモーイーが行つたらしい。

「なんでね、あんたじやない、お父さん呼んだのに、

あんたが来たか」言つたら、「お父さんは、子ども、いや、卵を産む言つて産催

しているから、来られない」つて、向こう、返答でき

んさーね。あんし、

「ぬーが、男ぬん産すんなー」んち、

「うまから注文やくどうや、卵産すんなーあんそー

んどー」んちやくどうよー、負けているさーね。

（共通語訳）

「雄鶴の卵持つてきなさい」と言つてきましたでしょう。

だから、息子がいたらしい、この伊野波のモーイーがいたらしい。

「お父さんは、子どもを、卵を産むと言つて産気づ

ているから、来られない」つて、向こう、返答できな

いんだよね。それで、「なんだ、男でも産むのか」というと、

「そちらからの注文だからね、卵を産むといつてそう

しているんだよ」と答えたから、負けているんだよね。

(14) 難題

松下栄吉（明治三十五年生）池原

〈方言原話〉

「うれーよー、鹿児島藩めや、

「恩納岳や、鹿児島んかい持つちくー」んちえーる

ばー。なー、恩納岳の一持つちえーくーらんしえー。

なー、仕方ならん。あんさーに、

「嘉津宇岳どうくぬ恩納岳どう一ち持つちくー」んり

言いやくどうやー、

「私がかたみて山原から持つちえーしが、オーダー

ウーぬ切りやーに、なー仕方ならん、一ちちんいしてー

ん」でい。

「那覇まで持つちえーちーさんたん」り言ちやく

とう、なー鹿児島藩や、

「あんやらー恩納岳びかー持つちくー」んでい言

ちえーるはー。

「とー、あんしえー持つちゅーびーん。何月何日ぬ、

何年ぬ何月何日までいんかい持つちくーでいしえー

らー、持つちゅーん」でい。

「とー、あんしえーしまびーん。大丈夫、引き受けーん

り、もう引き受けたそうだよ。那覇までい恩納岳持つ

ちよーんり。

「道具ーあしがやー、道具しちゃーに、沖縄ん人う

るぶんしかたみーくどう持つちゅーん」でい言ちや

くどう、

「うぬ日までいんかい船造りー持つちくー。那覇ぬ港までいうぬ船持つちくーでいちょーん船持つちえー

※一蘭丸島藩 蔭澤藩のことか。現在の鹿児島県にあった藩。島津氏を藩主とする。一六〇九年に薩摩藩に侵攻し、以降支配に置かれた。

支配に置かれた。

※恩納岳 沖縄本島北側、本部半島の本部町に位置する山。八重岳と連山

をなしている。標高四五二メートル。

※4オーダー もつこ。なーを網のよう

に編んで、四隅に網をつけたもの。土石などを運ぶ。

ちーさんなやーに、ダメなたんりるばー。

と言っているんだ。（鹿児島側は）船を持つてこれないとなつて、その話はダメになつたというわけ。

〈共通語訳〉

これはね、鹿児島藩がね、

「恩納岳をね、鹿児島に持つてこい」と言つてきたわ
け。もう、恩納岳は持つてはこられないよね。もう、
仕方がない。そして、

「嘉津宇岳との恩納岳と二つ持つてこい」と（鹿児
島側が）言つたからね。
「私がかついで山原から持つてきてありますが、もつ
このひもが切れ、もう仕方ない、二つともそのまま
置いてあります」と。

「那覇までは持つてはこられなかつた」と言つたので、
もう鹿児島藩は、

「それなら恩納岳だけでも持つてこい」と言つたんわ
けだね。

「じゃあ、それでは持つてまいります。何月何日、
何年の何月何日までに持つて来いとあれば、（それま
でに）持つてきます」と。

「そう、それなういですよ。大丈夫、引き受けます」
と、もう引き受けたそだよ。那覇まで恩納岳を持つ
てくると。

「（運ぶ）道具はあるんだけどね、道具を使って、沖縄

の人いるだけ皆でかつぐで持つてきます」といった
ようだ。

「その日までに（恩納岳を運ぶ）船を造つて持つてき
なさい。那覇の港までその船を持つてきてください」

⑯ 難題

大嶺博（明治二十七年生）池原

〈方言原話〉

「恩納岳やー、はさん壊ち持つちくー」んちゃくどう
よー、

「うへーる恩納岳、ちやーし持つちやーびーが。う
りうーする船造くていくいみそーり」んでいち。あ
まー、うれー造くいうーさんり。あんさー負きどーた
んでい。

〈共通語訳〉

「恩納岳をね、はさんで壊して持つてこい」といわ
れたので、

「これだけ大きい恩納岳を、どうやつて持つていきま
すか。これを載せきれる船を造つてください」と言つ
た。相手は、その船は造りきれない。そうして負け
たんだって。

〈方言原話〉

大嶺博（明治二十七年生）池原

唐からる、うぬ話や。うれー、
恩納岳持つちめんそーり。雄鷹ぬ卵持つちめんそー
りでいしえーや、唐からぬうりるやたんり、沖縄ん



かい。沖縄ねーちゃんふーじーぬ人ぬめんしぇーが
やーんちん心んじ、ゆーるやたんりんどー。

^{アシビ}ぐわーしーしか、川崎ぬ。

（共通語訳）

（難題は）唐から（の命令）だよ。その話は。それは、

「恩納岳を持つていらしてください。雄鷦の卵を持つていらしてください」というのはね、唐からの御用であつたそうだ。沖縄に。沖縄にはどれくらい優れた人がいらっしゃるかねえと、心を見るためにだそうだよ。

村アシビで演じられていたよ、川崎の。

⑯ 床下勉強・難題

桑江信子（明治四十一年生）泡瀬

モーイ親方はまたね、あり、なんて、勉強よ。あれするに、あの電気が、あの頃はないさーねー。だからいつもローブー（ロウソク）塗って、あれウコー（線香）、床下に行つて、それで勉強しようつたていう話があつたね。モーイ親方。

「繩持つてきなさい」と言つたら、お父さんがね、困つてね。もう、こんなしたら、

「なんで、お父さん、こんなにしているの」と言つたから、

「あちらぬ灰さーに、綱のーてい持つちくーんでいるむん（あそこの灰で、綱をなつて持つてこいというの

に）

「たやすいことよ、お父さん」って言つて、

「どんなするの」って言つたら、綱を持ってきて焼いてね、そのまま持つていつたつて。だから、これで、

「ジンブンあさやー（知恵があるねえ）」と言つて褒められたという話があるし。

雄鳥も、だから、

「あんたはね、あんたはなんでお父さん来いといったう、あんたが来るねー」って言つたから、

「お父さんは子ども産んで、来ない」つづつたつて。

「男ぬん子産すみ（男でも子を産むのか）」

「雄鳥ぬん子ぬ産さびーみ、んぢや、卵産すみ（雄鳥でも子を産みますか、いや、卵を産むのか）」でいやーに、まち打つたんだいしーやーなー（どいつて、やり込められたというんだよね）。そんな言いよつたよ。

「うぶ丘（大きな丘）よくれ、くれる」と言つたから、「うんじゅなー、うりんかい入りーる船持つちくーんで言つたんていちぬ話あつたさい、いー（あなたがた、ここに、（丘を）入れられる船を持つてこい」と言つたという話があつたよ、うん）。

⑰ 難題

知念真章（明治四十二年生）胡屋

（モーイ親方は）親父が三司官の上の役だつたらしく、そして、内地から灰網三十尋に、それから雄鳥ぬ卵。それから首里ぬなんとかムイ（丘）を、なにし

セニアシンドウー 次 三味焼、語りなしを表すむこと。また、村々居や祭りなど、仕事を休んで行う漁業、娛樂。

川崎 沖縄本島中南、うるま市の字。かわさき。方言でなーせす。

第3首里ぬなんとかムイ 首里城の御殿、首里城が、あるいは首里城の東にある井ヶ岳のことか。

た（難題を出した）らしい。そしてモーイ親方も、昔はカントーさん、カントーモーヤー（ボサボサ頭）。それでモーイ親方もとか言つんだがね。それで、「どうしておまえが来たか」かと言うたら、「親父は産催しています」と。男がも子を産むか」と（言うと）、「雄鳥ぬ卵あみ（雄鶴の卵があるのか）」と言つて。そして、灰綱ぬ三十尋をな、三十尋の縄を箱に入れてよ、焼いたらしい。これ、灰綱。それも合格やつた。

それは、どこかの、首里ムイの、首里のどこかのモリ（丘）を、あれを注文したなら、それを起こすへらと船を持つてきなさい」と。そしてもう有名だよ、あの話は、薩摩から問題がきて、モーイ親方が全部（解いた）。それがまだ子どもの頃という。

「お父さんのかわり、おまえが来たか」と。「お父さんは今、産催している」。そうしたら、「雄鳥ぬ卵ある（雄鶴の卵があるのか）」んち。それから灰綱はな、灰綱三十尋は箱に入れてよ、火で焼いたんだよ。これ、灰綱。それで合格。首里ムイもあつちが負けた。

「積む船を持ってきなさい」と。

（モーイの父の）親方がね、鹿児島からね、「灰し綱の一していくんでいちさつと一しが、灰し綱の一らりーがやー、モーイー」んでい言ちもさくとう、「（灰で縄を編てこい」と命令されているんだが、縄を編てるものだろうか、モーイよ」と言うので）「はーつ、うれーどうやしむんどうやる。うんさくぬどうやしむんぬあんなー」りち言ち（（ははあ、それは簡単なことだよ。こんな簡単なこともあるのか）といつて）。「あんし、ちゃーしの一らりーが（それじゃあ、どうやつて編えるのか）」。

灰だから編うることはできないでしょ、

「あい、ちやーしうりがのーらーりーが」んでい言ちさくどう（おい、どうやつてこれを編うことができるのか）と父親が言つと、「どー、うれー、どうやしむんやくどうやー（ほひ、これは、簡単なことだからね）。細ねつてさー、お膳の上に巻いて、そんでもう巻いてさ、戸の方から火つ

東一三十尋尋（方言でじゆ）は長さの単位で、三十尋でおよそ四五メートル、五五メートル弱。一尋はおおむね成人男子が両手を左右へ広げたときの指先から指先までの長さ。

(19) 床下勉強・難題

玉元栄松（明治四十一年生）池原モーイ親方の話やるばーーー。聞いたこともあるかも知らないけどさ。

けて燃やしなさい」と言つたら、その綿いままで、ぬいまま（綿つたまま）、その灰は火ついておるでしよう。綿いままで、そのお膳の上にすぐそのままあるもんだから、お父さんはそれ持つて行つて、「こう、灰で縄ぬつてきました」つて、向こうに持つていつたらね。

「上等 ゆ一考んげーとい持つちえーさー」りちよー（上等だ、よく考えて持つてきたな）といつてね）、非常にほめられてさ。

あんし（そして）、向こうから勤め終わつてお父さんのがね、

「いやーや、まーから習^むいでいちやが」りちやぐどう（お前は、どこから教わつてきたのか）と言つたら）、「ぬー、うぬあたいやどうやしむんどうやる、ちやーしんわかいする」りち（などに、これくらいのこと

はたやすいことだよ、どうやつたつてわかることだよ」と）。あんさーに（そうして）、すぐ灰を戻^{もど}るのぼうから火付けて、そのまま、綿つたまま灰がね、綿つたまあるもんだから、「よく考えてきたね」と言つてね。ほんで、ほめられたさ。親は、親はほめらつとるけど、子どもには教えられておるけどさー。だから子どもは「簡単ですよ、そんなものは簡単ですよ」と言つてね、それで、ぬつた綿を戻^{もど}の方から火つけたら、そのままあるでしよう、崩れずに。それもう上等といつてね、親は非常にほめらつたもんだから、また、家帰つて来て、子に、

「モーイ、いやーや、うれーまーから習^むいでいちやが」んでい（モーイ、お前は、これをどこから教わつてきたのか）と、「どこから習つてきたか」と聞いたら「習わなくとも、ちゃんとわかりますよ」といつてね、そんで、もう、あそこは、その日はまだ、親もほめられて、またモーイも親からほめられておるけど。

また、次の注文がきどるんだよ。
「雄鶏の卵、持つてきてくれ」と、そういう注文がまたきたんだよ。そういう注文がきたもんだから、それもまた困つてね、その親は。
「雄鶏の卵産^{うぶ}するばーい」りち、くさみちよー（「雄鶏が卵を産むもんか」と憤慨してね）。

「雄鶏の卵産^{うぶ}するばーい」でいくさみち、また家んけ一來^{まい}さくどうよー（「雄鶏が卵を産むもんか」と憤慨して、また家に帰つてきたからね）。あんさくどう（そうしたら）、また、お父さんにお、代わりにまたモーイが行つておるんですよ。そこで、（首里城の人がモーイに）お父さんはどうしたかを聞いたらね、

「なー、私つたーお父^{おとう}さの一産^{うぶ}催^{すい}し家んけ一眠^ねとーさー」でい言^いちざくどうやー（「もう、うちの父は産氣づいて家で休んでいるよ」といつたからね）、「産催^{すい}し家んけ一眠^ねとーさー」でい言^いちざくどうやー（産氣づいて家で休んでいるよ」と言つたからね）、「あんし、男^{おとこ}ぬん産^{うぶ}催^{すい}すんりあんなー」、またぬーらつてーるふーじーyan（なんだと、男が産氣づくといふことがあるものか）と、またしかられたようだ）。

あんさくどう（そうしたら）、

「あんしーねー雄鶏ぬん卵産さびーがやー」で、どう

いけーさつていよー「それなら雄鶏が卵を産むとい
うこともあるんですかねえ」とやり返されてしまつて
ね。そんで、その日もやっぱり、モーイ親方のどん
ちが本当によかつたというふうでね。

んで、親一（親は）、なんでと言つたら、首里のほ
うに勤めておるから、も、習うのはみんな子どもから
習つて、親はいつでも返答しておつたそうです、はい。

「雄鶏にん卵産すんなー」でい言ぢやぐと、「雄鶏が
卵を産むことがありますか」と言つたので、
「あい、男ぬんさんむゆーすりあんなー」でい言ぢ
さくどう（「おや、男が産気づくということがありま
すか」と問い合わせられたので）、

「あんしー雄鶏ぬ卵産さびーんなー」でい言ぢやさく
とうよ（「それなら雄鶏が卵を産みますか」と言うと
ね）、なんども取り返しつかなくなつて、そんで、やつ
ぱり、その、これは、やつぱり向こう、鹿児島の、み
んな鹿児島の注文ですよ。鹿児島の、沖縄は鹿児島に
そのときはどられておるから、鹿児島からの注文を
ね、そのモーイ親方が、モーイがみんな教えてやつた
ら、

「偉いねー、沖縄の人、偉いねー」と、そういうふう
に言わされたそ�だ。その話だが、モーイ親方の話は。
聞いたことあるでしょ。

◎ 難題

島袋監修（明治三十七年生）知花

^{〔註2〕} 「繩はぬつて薩摩を持つてこい」と言う。それが、モーイ親方の親は伊野波ぬ親方といつて、三司官の位だつたかねー。その位もはつきりはわからないですが。とにかく、沖縄政府の議員だつたらいいですが。そのことで、もう、とっても、心配しておつたらしいですけど。子どもが、

「そんたなやすいもの、あんだ、心配しないでもいい
でしょう」と言つて。どうしているかといつたら、繩
をぬつて、膳の上でゆつくり燃やして。したら、灰で
ぬつたように（できた）。それを出したらしんです。
この、雄鶏ぬ卵、注文されたときも、モーイが返答
はしたらしいですよ。

「子どもがなにしに来たか」と言われたらしい。

「お父さんは、まあ、お産もようで腹が痛いといつて、
お産らしいから来れないで（私が）来た」
「男がお産する馬鹿な話もあるか」といつて叱られた
らしいんですよ。

「だから雄鶏の卵もないですよ」と言つたら、
「発やられた」と言つて、そのまま戻されたという
話も聞いたんですよ。

※1 鹿児島県 原産地は、一八七一年（明治四年）、明治政府が藩を廢止して府県を置いたことをいうが、この限りの文脈上、江戸時代はじめに起つたいわゆる島津氏の琉球侵攻のこととされることが多い。一六〇九年に島津氏の兵三千人が琉球國に侵攻し、敗北した琉球國は以後、幕藩体制が終わる明治期にいたるまで、島津氏の実質的な支配下におかれることになった。

※2 繩はぬつて「繩をぬつて」という日本語共通語の言い回しが、沖縄語や
や語つたもの。方言では繩や綱をぬつて
とを「のゆ」と言い、繩をぬつて
を直訳すると「なーのーい」となる。

※3 三司官 琉球王府において、国王と王族が務める政務を除く、最も上位にある役職。大臣、宰相に相当する。

※4 沖縄政府

琉球王府を現代にたどえで表現したもの。モーイ親方の父親が、三司官や表十五人のうち、御評定所での評議にかかるよう高い地位にあつたことを説明したものと思われる。

当山翠治（大正五年生）住吉

灰綱 雄鶏の卵。あと一つはなんと言つたかな。山
ああ、うん、だから、

◎ 難題

「これを乗せる船をよこしなさい」と言うて。それから、あの、雄鶏の卵といつたか、これは、だー（どら）。灰繩といふのは、灰よ、木灰。薪を燃やした、これで繩ぬってきなさいと。これは、ほんとの繩を、ぬつた繩を焼いて、みごとに、もう、そのまま、そのかつこうで、焼けたまま、灰繩で、雄鶏の卵といふのは、だー（どら）、これがわけわからんが。あ、今、お産していいる」と言った。

「なにを言うか。男がお産であるか」

「それじゃあ、雄鶏の卵んちあいびーみ（雄鶏の卵といふものがありますか）」。こういう、とんちの。

⑫ 難題

渡名喜トシ（大正四年生）住吉

シナ（現在の中国）には唐の国と言よいよつたさーね、昔は、そのモーイ親方のお父さんが偉い人だつたわけさー、沖繩の。親方いうかねー、なにか、偉い人。して、あつち（唐）からね。

「灰でぬつた繩と、雄鶏の卵と、金、何千金といつて持つてきなさい」と言うて、あつちから言いつけられたら、もう、そのお父さんが心配してね。して、

「灰でぬつた繩といつたらどんなするかねえ」と言つたらね。してまた、「雄鶏は卵産まないので、なんでむつかしいこと言うかねえ」と言つて。して、こんなのを聞いたからして、そのモーイ親方という人はね、みんなで「モーイあらー、モーイふらー（モーイの馬鹿、モーイの馬鹿）」

と言つて、ふりむん（狂人）扱いしていた。頭利いでいるけど、まあ、みんながふらーという扱いして「モーイふらー、モーイふらー」。したらその人が考えてね。で、繩よ、繩焼いてして、箱に。この、焼いてね、したから灰でぬつた繩みたいになるでしょう。して、これは、これで。して、雄鶏の卵言つたからね、「私のお父さんが産催ししています」と言つたからね、「して、男がも子どもも産むか」と言つたからね、「したら、なんで、雄鶏がも卵産みますか」と言つて、やり返して。して、また「金は何千金持つてきなさい」というでしよう。

「もう、これ持てないから、どこにとか置いてある」と言つたからね、それで、通したつて。して、その後からも、この人ね、とつても頭が利いてるといつて、偉い人なつているかつて、モーイ親方はね。

こんなので、学校でね、先生から聞いたけどね、はつきりなとも、くわしいことわからんけどね、先生からこんなのが聞いたよ。

⑬ 難題

桑江朝盛（明治四十五年生）中の町

こんな大問題を言いつけられて、もう、
「どうやるか」と、もう非常に心配しておる時に、このモーイ親方が来て、「ぬーんちうんじょー、あんし物思みーそーみしえーが（どうしてお父さんはそんなに心配していらっしゃるのでですか）」と言うたらね、

「実えー（実は）こういう、こういうことで、まあ、非常に心配しておる」と言うたらね、そのモーイ親方

「ターリーたい、うぬあたいいむんぐわーちゃん

ねーびらんさ。私が行じうさきーさ」でい、「父上様、そのくらいのことどうつてことないですよ。私が行つてさしあげますよ」と)、

「あ、いやーがないみ」んちやくとう（「えつ、お前ができるか」と言うと)、

「あー、大丈夫やいびーさ。いつべーないびーさ」ち(ああ、大丈夫ですよ。じゅうぶんできますよ)と)、行つて、それを受けたらしいんだよ。で、行つて、この三つのなに(問題)は、なんかというたら、なんですねえ、始めは、

「なんで、いつたー、親来ーん、いやーが来やが(どう

して、おまえの親は来ないで、おまえが来たのか)」

始める言葉は。そして、問題は、始めの問題は、

「雄鶏の卵持つてこい」という、

「雄鶏の卵持つてこい」といふ

「灰綱持つてこい」という返事は、すぐ始めから、

もう、このベーカーがわかつておるわけさー。自分が

行つたから、

「ぬーが親ー來ーん、いやーや來やる」でい、「どうし

て親は来ないで、おまえが来たのか」と)。

「自分の父親は子ども産むといつて、「産催し」と言うんだよね、

「産催し來やーびらん」でい、「産氣づいて来られませ

ん」と)、
男ぬ親ぬ（お父さんが)と言つたら、

「雄鶏の卵もありますか」と言うたらね、これでもう。男が産催しはしないでしょ。女は卵はないでしょ。そ

うやつてはずしたらしいんだよ。

灰綱はどうやつてはずしたかといふたらね、綱をぬつてね、なんか、かけて、こう、このまま燃えて、置いたら、このまま残るんだよ、あの、灰。さわらな

いうちは、もう、立派な灰綱よ。それを、こうしたと

言つて持つていつたらしいんだよ。

あの、もう一つはあんまり、覚えてないが、わからないが。その理屈はあんまり覚えてないね。

そうですよ、(灰綱は)誰がもそんなの考えきれんよ。綱というたら、灰で綱ぬうて來いという、誰も、こう、ぬうたものを焼いたら、その残ると言ゆうて、誰がもそうわからないでしようねえ。そんなもんだから。

ら。そういう頭があつたんだ。

(16) 一日殿様

① とりもち・難題・一日殿様

方言原話

モーイ親方（ヨウカウ）でいぬ話や、聞いたことある
ニ——イ見（スル）——、ハ——、あれ（オホレ）

モーイ親方んでいしな！ あれ！ 侍め子やした
よー、全然勉強しぬ、親ぬ、
さむけり くわ

「いやーやひやー待ぬ子やくどうやー、なーうふえー
机つくどうたつくわいてい学問がくもんしー、勉強べんきょうしー」でい親ぬ言
ねーとー、

「ヤンムチぬありわるんけーたつくわらりーる」。む
る急きていいよ、絶対勉強さんたんでいひがよ。

うれ一本當や、名前ぬーん言たがやー、モーイねー。
なーひん名前あたひが、ぬー言たが。うぬ人よーいつ
ペー頭ー才知んあん、偉い人やんよー。あとーよー、
沖縄ぬ上納むるぬがーらふん、うぬ子ぬるありやたん
でいっさー。

親んかい言一ちきてーる。鹿島島でいがらーまーん
でいがらー、王からーてー。沖縄うしえーやーによー、
ならんくどう言一ちきてーんでいくどうやー。
「雄鶏ぬ卵、沖縄からぬ上納物持つちくー」んでい、
あまから命令しえーぎさくどうてー。

だ、うれしーぬーんでい言たがやー、伊野波ぬモーイーやあらん、なーふえー覚おさーあたひがやー。

某の経験も云々 評論は福澤諭吉の字で、解説書はそこにある丘陵を指す。尚真王時代、この地には妖怪が出ると恐れられていたが、日向大という豪傑の僧侶が石に金剛經書き写して丘に埋め、妖怪を鎮めたらしい。

んさびーは」でい言やーに。あんし、うぬ子また、親代わい、あまんかい行じえーきさは。鹿児島がらーな「首里ぬ王がらー、まーがらんかい。あんし行じやーにな、うりたーばんねーんてーちくなー、按司ぬすぐ立派すがらつてーな、王ぬ座いーらつとーきさは。「あつたー、来ー」んでい呼ばらつてーくどうや、うりがな一行じえーきさは、モーイ親方おおきなでいがらー言つたよ。エーかたんでいねー親方やるばーてー。

「ぬーが、いやーや、親どう呼でーて、親んかい言一ちきてーる上納物や持つちくーんでー、いやーが来るーんでー、かんし言やつてーるばー。」
 「親や座むゆーそーみしえーん」でい。雄鶏ぬ卵でーくどうよー、うりてーやあらんひが、頭ーがんじゅーさんなやーに、

「くまめるやー、あんし雄鶏ぬ卵持つちくー」んでい、上納どうやいきさんどー、うれー。なー、あいねーあまーな一心配すがなーなー、あんし、くま、沖縄心配しみーんねーやーてーんやー、えーりん。ねーらんむん持つちくーりや。

「ターリーーやーなー、産むゆーそーみしえーん。なー私が來やーびたんでー、うぬわらばーぬ。わらびどうやしが、じんぶんぬちゅーあんてーなー、あんしえーぐどう、

「いやーや、親来んでいねーいやーが來やーに、ぬーんち、親ぬ、男ぬ産備すんでいあみ」でい、また、あまからあびらつてーるふーじやは。王ぬ、按司がらー王がらー、じこーぐんあがやーが。

「ぬーが、うんじゅなーややー、あんし雄鶏ぬ卵持つちくーでい上納物言一ちきりつて。私つたータリーンかいあんし言一ちきてーみしえー、ぬーが、あんするむんぬ。雄鶏ぬ卵持つちくー、ターリーーやくまぬ言一ちきてーるむつとうあんさーに、産備どうさつとーる」うね言ちえーくどう、あまー負きやーによー、沖縄ん人んけー負きとーんばーてーなー。質問つし、ぬらーつてい。

「あんしきーに、またなーちえーぬーんでい言たが、三ちぬ証明やたんでいよ。」
 「あんし、なー、うぬわらばーなー、平生なーむる雄鶏持つちよー、鶏ぐわーおーらへーし遊でい、なー、むる勉強はんぬーどうやんでいがよー。でーじな生成りぬゆたはんてーんばーやは。あまんけーや、むる、親ぬ責任ありわる注文ぬわじやんやー、子ぬどうむる返答さーに、

「とーなー、くれーやーただぬ人よーあらん」んでい、あまー考ーやーに、

「いやー、裏美ーぬーやましやがやー。いやーが望みぬまま、今日や裏美くいーくどう、とー、今、くまんかい聞かしーんでい。あまぬ、あびらつてーるふーじやは。あんぐとーやー、

「ただ一日やてーん王ぬ座んかいや、一日やてーんいーしていくみそーり。うりどう望どーる」んち、「ぬー言ーいー。鐵うほーくいーらー」んでいが、「いーらん」でい。

「あんあらん」でい。

「もううらだーばんねーんてーちくなー聞き取り困難につき未詳。又前より、モーイたちの番になつた」と記出し

「ただ王様の座んかいよー、席でー、うりどう希望やん」でいくどう、「えー、あんやみ」でい。

「なーふえー、王や座からすんち降りー、うりいしてーちくよー、税金払一る帳簿よ、むるむる引きたりたつくわざーにてー、くぬ冲縄ぬ税金てー。うりが一日やていんしむんでーぎさぬ。

「あー、なー、いやーがましやるぐどう褒美ーくいゆんどー」でい向こうぬ言らによー。モーイ親方でいたがやー、私ねーなーひん名前聞ちよーたんでいひがるー。あんさーに、あまーなー、うりがどうく返答ん上等なやーに、あまな困までいどう、

「あんしいやーや褒美望みぬままくいー」んでい言ちやくどう、「ただ一日やーいん王ぬ座んかいし、ひらい望どー」でい言ち、すぐうぬ王や座からーしんち降り、うりいしやーにどう、上納物帳簿よー、税金帳簿むるむる引つきだつくわざーに、「沖縄ぬ上納ややー、ねーらんむん」言ーちきらつていなー。じこー沖縄心配そーんで、農民のー。あんさーうりが言ーちえーくどう、むる出じやはんくどうなー、けーぬがやーによー、沖縄中助きてーる人やんでいどう言たつさー、このモーイ親万。あんし話やあたしがてー。

あんくどう人よーよー、どうく錢ばかりあたちはしぇーならん。あらんうんぐどうしーねーよー、いか

へや、かなーんてーんでいしや、三ちぬよー。また、うぬ、灰綱よー、うりんだやんでい。一

ち、灰綱やは。灰綱ん箱んかい詰みていよ、あまんけー上納出じやしんでい言ーちきらつとーんでい、鹿児島でいがらー、王から。あんしんちやくどう、綱のーい、

「うりんただやいびーん」でい親んけーや。ターリーんけーよー、灰綱ん出じやしんでい言ーちきらつていや、なーターリーーやなー、

「あいえーなー、ちやーしが出じやち、あまんぬちむわきぬあんなー」心配はつたんでいるばー。うぬ子またや、

「うぬあたいたぐわー、私がただどうやいびんどーやーなー、ターリーー」んでいやー。綱ーいたつくわざーによー、立派なー、すぐあぬかんし綱ーいね、かんし箱んけー、かんからまちよー、入りやーにてー、箱作くやーに。あんし、うぬ火ちきーねー、チナアクやはに。チナアクやーてーやー。あんしーねー、薦つしどうの一ーへーやー綱。あんさーに、火ちきーねー箱んかい入でーる綱てー、灰ないにさー、けー燃ーいねー。また、うんあぬ言ーちきてーる、

「出じやしー」んでい言ちじく、また、「持つちょーいびーん」んでい。また、

「うつさぎやびーん」でい言やーかい、むる負きやーにてー。あんさーに、

「とー、いやーや、望みぬまま、あまから褒美くいゆんどー」でい言ーちきららーに。うにうてー御礼さー

に、王ぬ座んかいしらつとーたんでいどー。灰綿あじな
とう、雄鶲ゆづれぬ卵ひなーひのー、ぬーんでいがらーてー。

あはー、ムイ瓈けいしーねーー、うり乗のーる船ふなよー、

「あまから送りわる瓈けいち持もちちゅーる」でい、言いちじ
く、すぐなー、船ふな、ムイ乘のーる船ふなーねーんしえー

やー、あまー。うんにん負きとーたんでい。うぬう三みち
ぬ、沖繩じよのりぬ上納物じようのぶつやたんでい。偉うい人ひとやーさやー。

やー、あまー。うんにん負きとーたんでい。うぬう三みち
ぬ、沖繩じよのりぬ上納物じようのぶつやたんでい。偉うい人ひとやーさやー。

(共通語訳)

モーイ親方おおきがたという話は、聞いたことある?

モーイ親方おおきがたというのはね、の方は侍の子しやくのこだけど
ね、せんぜん勉強めんこうしなくて、親が、

「おまえは侍の子しやくのこなんだから、ちょっとは机にひつづ
いて学問がくもんしろ、勉強めんこうしろ」と親が言うとだね、

「なら、とりもちを買ってこい」。親に対たいしてなんだけ
んだけどね。

「とりもちがなければ机にひつづいてなんかいられない」。まつたく急げてね、絶対勉強めんこうしなかつたという
んだけどね。

この人は本当は、名前なんといつたかね、モーイには、

は、もつと名前あつたけど、なんて言つたか。この人
はたいそう頭脳ずのうは才知さいしもあり、偉い人ひとなんだよ。のち
にね、沖繩じよのりの上納じようのぶをすべて免除めんぜんさせたのは、まさにこ
の子(モーイ)だつたってよ。

親に言つつけたのは、鹿児島かごしまだから、王おうからだか、
だよ。沖繩じよのりを見くびつてね、できないことを言つつけられ

てやろうととううことでね。

「雄鶲の卵ひを、沖繩からの上納品じようのぶひんを持つてこい」と、
あちら(鹿児島)から命令めいめいされたらしいんだよ。

そら、その人の名はなんと言つたかね、伊野波いのなのモー
イではない、もうちよつと覚えている名前なまなまがあつた
けどね。

そういうことでね、その人(モーイのお父さん)は
もう、首里の王様おうさまからだか、鹿児島の王様おうさまからだか命
令されたので、この沖綿あじなは、もうね、なんの丘おかといつ
たかね、經塚きょうづかマイだか、

「瓈けいしてこい」と、命令があつたけど、それ、誰も丘
は瓈けいせないよね、大きくて。そう言うけど、また、雄
鶲の卵ひも、また灰で纏まつつた綿あじも。そろして三つ、こ
の沖綿あじなに、税金ぜきんね、

「上納品じようのぶひんを納めよ」と、あちらから手紙てしだかなんだが、
たぶん按司あんしだかなんだが王様おうさまの命令めいめいが来たらしい。

この子(モーイ)はもう優れていて。お父さんは、
王様に言つつけられたので、鹿児島かごしまへの、ちょうど連
絡れんらく係けいみたいなものだつたんだろうね。そんな立場たち
たといふんだけど、(難題なんびを出されたので)心配して、
もう寝こんでいたんだとか、親は、侍は。それで、こ
の子(モーイ)がね、お父さんに、

「どういうわけでお父さんはこんな休まれてらつしや
るのですか」と(たずねたら)、

「かくかくしかじかで、鹿児島の國くにからだか、首里の
王おうからだか、どこだから、上納品じようのぶひん、これこれの上納
品じようのぶひんを持つてきなさいと。灰で纏まつつた綿あじも言つつけられ
て、雄鶲の卵ひも持もってこいと言いわれてゐるのでね、も

う、それは、どのように考えすればあちらに工面で起きるのか、もう、心配で、考えても考へつかないので寝ているんだよ」と、子（モーイ）に、お父さんがね、そうおつしやったみたい。そうしたら、この子はね、そのくらいのことにして心配なさいますな。私が解いてみせますよ」と答えて。そして、この子はまた、親の代わりに、あちらに行つたようなんだね。鹿児島だから首里の王のところだか、どこだかに。そうして行つて。モーイたちの番になつたら、按司がもう立派に裝つて、王の座に座しておられたそうだ。

「そのほう、まいれ」と呼ばれたのでね、その人が行つたみたいよ（名前は）モーイ親方だか言つたよ。エー カタというのは親方のことであるわけ。

「なんで、おまえは、（おまえの）親を呼びつけたものを、親に言いつけて上納品を持ってこいと言つたのに、おまえが来たのか」と、こう言われたわけ。

「親は産氣づいてらっしゃいます」と。雄鶏の卵といふことでね、そんなものはないんだけど、頭が賢かつたので。

「ここにね、雄鶏の卵を持つてこい」つて、上納としでらしいんだよ。これは、もう、こう言えはあちら（沖縄）は心配するだらうとか、それで、こつち（鹿児島）は、沖縄を心配させようといつもだつたんだろうね、おそらく。ないものを持つてこいというのは。

「父上はね、産氣づいてらっしゃいます。それで私が来ました」と、この子ども（モーイ）が。子どもなんだけど、知恵があるので。すると、

「おまえはね、親に來いといつてあるのをおまえが来て、なんだか、親が、男が産氣づいているなどというのがあるか」と、またあちらから怒鳴られたようなんだよ。王が、按司だか王だか、たいそう位の上の人が。（モーイは）

「なんで、あなたがたはね、ああして雄鶏の卵を持つてこいと上納品を言いつけなさつて。うちの父上にそういうお言いつけになりましたから、なんで、そのとおりしただけなのに。雄鶏の卵を持って来い、父上はこちらの言いつけあるのはもつともだと産氣づいてらっしゃるのに」そういうふうに答えたので、むこうが負けてね、沖縄の人負けてしまったわけだよね。質問して。怒られて。

そうしてね、またもう一つはなんと言つたか、三つの証明だったそなんだよ。

それで、もう、この子ども（モーイ）はね、普段はいつも雄鶏を抱えてね、開通して遊んで、もう、まったく勉強しない子であったというんだけどね。たいへん生まれのよい人だつたわけだよね。あちらに、すべて、親が責任あるはずの注文の仕事もね、子がすべて返答して、

「まあこれは、この者は尋常の者ではない」と、あちらは考えて、

「おまえ、褒美はなにがいいかね。おまえの望みのまま、今日は褒美をやるから、さあ、今、こちらに言ひなさい」と。あちら（鹿児島）が、言われたようだよ。そうしたら、

「ただ一日でも王の座に、一日だけでも座らせてくださいませ。それこそが望みです」と。

「なにをいうのか。金をたくさんやろう」というが、「いらない」と。

「それではない」と。

「ただ王様の座にね、（王の）席だよ、それこそ希望するものだ」というので、

「ほう、そうか」と。

そして、王は王座からしりぞいて、モーアイを座らせたらね、税金を払う帳簿をさ、みんなみんな引ききぎつてね、この沖縄の税金をだよ。モーアイが一日でもいいからといったらしい。

「ああ、もう、おまえの好きなように褒美をくれてやるぞ」と、向こうが言わされたのでね。モーアイ親方とか言ったかねえ。私は、名前はもとほかに聞いたんだけど。それで、鹿児島は、モーアイがあまりにもすばらしい返答をしたので、あちらは困つてしまい、「それじゃおまえはね、褒美は望みのとおりにやろう」と言われたので、

「ただ一日だけでも王の座にすわらせてくれ、それだけを望んでる」と言って、すぐ、鹿児島の王は王座からしりぞいて、モーアイを座らせてみれば、上納品の帳簿をさ、税金報復、みんなみんな引きちぎって、「沖縄の上納はね、ないんだからね」と言いつけられてね。たいそう沖縄は心配してたって、農民は。それでモーアイが、「上納はなし」と言いおいたので、みんな（上納を）出さないで、免れることができてね。

沖縄中を助けた人なんだと言っていたよ、このモーアイ親方。そんな話があつたんだけね。

だから、人というのはね、あまりお金ばかり惜しんではいけない。このようにしたらね、いかにどこかの王であつても、モーアイにはね、あれだよね、かなわなかつたといってね、三つの（難題）ね。

また、その、灰綿ね、それも問題ないと。（難問の）一つ、灰で綿つた綿だよ。灰綿も箱に詰めてね、あちら（鹿児島）に上納として出せと言いつけられたって、鹿児島だか、王から。そうしたら、綿を綿つて、

「それも問題ないです」と（モーアイが）、親に、お父さんにはね。灰でなつた綿も出せと言いつけられてね、もうお父さんは、

「ああもう、どうやつて（上納を）出して、あちらの方の意にそわせられるだろう」と心配なさつたというわけ。その子（モーアイ）はまたね、

「そのくらいのこと、私には簡単なことですよ、お父さん」といつてね。綿を綿い合わせてね、立派に、こうして綿を綿つて、こうして箱に巻いてね、入れてだよ、箱を作つて。そして、それに火をつけたものは、綿灰でしよう、綿灰なんだよね。そうしたら、藁で綿つたものが綿。そして、火をつければ、箱に入れてある綿はね、灰になるよね、燃えてしまつたら。また、それも、あちら（鹿児島）が言いつけてある、

「出しなさい」と言つたら、今度は（モーアイが）、「持つています」と。また、

「献上します」と言つたので、みんな負けてね。それで、

「さあ、おまえに、望むとおりに、褒美をやるよ」と言いつけられて。そのときにはお辞儀をして、王の座に座られていたんだってよ。灰でなつた綱と、雄鶲の卵。もうすこしほかに、なんとかってね。

ああそうだ、丘を壊したものを持つて、それ乗せられ

る船をね。

「そちらから（船を）送りさえすれば（丘を）壊して持つていきます」と言いはつて、もう、船も、丘を乗せきれる船はないものね、あちら（鹿児島）は。それにも負けていたんだって。その三つの、沖縄の上納品だつたつて。偉い人であつたよねえ。

② 難題・一日殿様

又吉松八（明治三十八年生）池原

方言原話

「くぬ鹿児島からぬ、「灰綱御用」んでいち、親んかい請求ぬあるばー、男ぬ親んかい。あんごくどう、男ん親な一熱出じてい裏て、心配し。あんさーに、くぬモーイ親方んでいしえー子やるばーてー。うりんかいい、

「ぬーが、あんし、お父さんどうるばとーる」でいぢやくどー、

「あ、私ねーなー、あんがんしなー、あまからぬ御用ぬあつい、なーわからん、でーじなーるじしやんどー」んでい、

「うぬあたいぐわー、どうーやつしーどうやる」でい

男ぬ親んかい言ちえーんぎさん。

「いやーやふりむんや。ぬー、いやー、ぬーわかるいるばー」んちやくどう、

「はー、うれーどうーやしー」でいちえー。

「あんさーに、親ぬ代わいどうーし行じやーに、

灰綱、強く綱のーやーに鉄うじぬんかい置ちきて、

火ちきて、燃ーち。うぬますすぐ燃ーち。かちけーら

さんよーい持つちんじえーぎさん。あんさーどう、

「ぬーが、親の御用やるむん、いやーが来やる」んでい、

鹿児島ぬ御主加那志が言ちよーるばー。

「ああ、私つたーお父さーのー産催し慢でー、代わい私

が来やん」でい言ちやぐどう、

「男ぬん産むゆーすんなー」でいち、大口つしぬらつ

てーるふーじ。あんすくどう、

「雄鶲ぬん卵産すんなー」でい言ちやぐどう、あまー、

たつ返らつさつとーるばーてー、なー。

「男ぬん産むゆーすんでいちあんなー」でいぢやぐ

とう、

「うんじゅなー雄鶲ぬ卵持つちくーんでいちやく

とう、うりんていーちどうやるむん」あんさー、

あんし、あん後からでーいやーに、だー、ぬーイシ

んでいたがやー、まームインでーいかー、離れ島んか

いあるムイよ。あり、「鹿児島んけー持つちくー」んちやくどうや、

「船出じやー」んでい、請求はつてい。

「うり、うり負ーしる船出じやー」んでい、うりんたつ

まふりむん 気がふれた者。馬鹿者。
とんま 狂人。

准^准御主加那志 王様 加那志は教養を表す後尾冠。ここでは薩摩藩の藩主を示している。

返さつと一るぼー

あんさーに

「いやーが一番欲さしえーぬーやが」んでい言ちやくどうよー、

「沖縄ぬ借金、証文入つちょーしや、くぬ一時間
御主加那志んかい私ねーなてい、うり欲さぬ」。あん
さぐどう、

「はあ、それは簡単」と（モーアイが）答えて

「御主加那志どーいやー、うれー約束やでーるばー約束やでーーなー。いやーが言しえーぬーやでーん聞ちゅんどー」でいち。あんさー、うれー、「私ねー御主加那志、一時間やでーん、御主加那志ぬ席んかいいーぶさん」んち、いーしたくどう、あんさー

た。
沖縄ぬ借金ぬ証文、むるうまんかい持つちく！」んでいぢ、持つちぢやーに、すぐ火ちきていけー燃さーに、沖縄やでーじな助かたんだい。そういう話があつ

共通語訳

この鹿児島からの、「灰獨御用」といって、(モーイ親方に) 灰獨を献上しようと請求があるわけ、父親に。すると、父親はもう熱を出して寝込んでしまって、心配して。それで、このモーイ親方というの子どもであるわけ。そのモーイが、

「なんで、そうして、お父さんは寝込んでいるの」と聞くと、鹿児島

「おまえはバカだな。なに、おまえになにがわかるのか」と（父が）言うと、「はあ、それは簡単」と（モーイガ）答えて。

それで、親の代わりに自分で（鹿児島に）行って、灰綱、きつく縄を編つて鉄のお盆に置いておいて、火をつけて燃やして。そのまま燃やすして、くさらないよう持つていったようだ。すると、「なんだ、親に命令したものを、おまえが来たのか」と（鹿児島の王様が）言ったわけ。

「ああ、うちのお父さんは産氣づいて寝こんで、代わりに私が来た」と答えたから、男が産気づくものか」と、大声で怒られたみたい。すると、

「雄鶏でも卵を産むのかね」と答えたので、相手はやり返されたわけだね、もう。

「男が産気づくことがあるか」とて言うので、あなたがたは雄鶏の卵を持つてこいと言ったのだから、これも同じことだ。そして、

「灰綱も、ちゃんと灰綱も持つてきてあります」と見せたから、すべて難題を返答なきつたわけ。

それで、その後にどういうことで、なんの石といったかね、どこの丘だか、離れ島にある丘ね。あれを、「鹿児島に持ってこい」と言つたからね、

「船を出せ」と、請求なさつて。
「それを、丘を乗せきれる船を出せ」と、これも言ひ返されているわけ。

そして、

「お前が一番欲しいものはなんだ」と聞かれたので、

アヤーがまた下駄くみんでい言ちやぐどう、親ぬ言
しえー、「人が言し聞ちよーるばーる。親ぬ孝やいびー
ん」でいち、さーに。
親ぬ代わい行ちーに、また、

「沖縄の借金 請文があるものをね この一時間 王様になって、借金の証文を欲しい」（とモーアは答えた）。すると、「王とはおまえは、それ（望みはなんでもかなえること）は、約束してあったわけだからね。おまえが言うのはなんでも聞くよ」と。それで、モーアは、「私を王の、一時間でも王の位にすわりたい」。すわらせてると、モーアは、

言つて、持つてきたら、すぐ火をつけて燃やしてしまつて、沖縄はたいへん助かつたそうだ。そういう話があつた。

③ 下駄と草履・難題・一日殿様

星宣ヨシ(大正十年生) 起来

方言原話

うれやまた女ぬ親ぬ、うりぬんしえーやー。かたぐー
や草履くまーによ、かたぐーやありくだくどう、また、

「ぬーんち、いやー、うんぐとうー」「ううすが」モーイ親方んかい、

「ぬーんちうりすが」んちやくとう、
「ターリー やくり、ちやー草履じきくみんでいちうりやい、

あんしえー、あり、持つちいじゅくとう、
「通算までーくんち持つちゅえーしが、うり乗入
る船ーねーんぐどう、んまから船出にやしまー
しえー、乗していうーする、船出じやちきみそー
んちやくどう、またねーびらんしえーやー。うり
勝つち。

「あんし、いやーが来ーしが、ぬーが、いつたー男ぬ
親」。だー、いやー、あんし、灰編ん持つちちーん
ちやくどう、
「灰編ん持つちえーいびーん。使者ん持たちえーい
びーん」でいちさーに、編のーてい、板んかい焼ち
うちけーてーし持つちんじ、うれー編などーしょー
やー。

「うーむぬ卵持つちー」んちやくとう、うーむのー
卵なさびらんしえー。あんさーに、
「ターリーや産催^{さんさい}」、子生ち産催^{さんさい}し寝んとーん」ち、
「いきがねん子生すん」

「いやーが言し、いやー負かちよーくどう、いやー望めー聞ちゅん」ちやくどう、
「うまぬ証拠出じゃし」んで、いやーに、うり取やーに、
に、証拠取やーにかい、うり焼ていひで、いやーに、

今度沖縄ぬうりなやーにかい、うり見ーち、
私ねーうりーちどう欲さる。どうーや、なーいー、いー
ねー一時間のー、あまぬなー大将なやーに、かんしや
ぎーしうーやー。いやーに、
「証拠ん」んじやくどう、証拠ー持つちつち、うりん
かい取らちやくどう、うり見ん破やーに、焼ちめー
さーに、パーなーなー、証拠ーねーびらんしえー。あ
んさーに負かち、うりさーに。

〔共通語訳〕

(モーイ親方) はまた母親が、親がいるさーねー。
片方は草履をはいて、片方はあれ(下駄)をはいたので、それで、
「なんでおまえはこんなことをするか」モーイ親方に、

「なんで、こんなことするのか」と言うと、
「お父さんはこれ、いつも草履をはきなさいと言うし、
お母さんはまた下駄をはきなさいというので、親が言
わること、一人が言うことを聞いているのです。親
孝行しているんです」と言うことで、

親の代わりに行くときにもまた、

「おまえでもなにができるというのか」
「そのくらいのことなら、私が行きます」といつて、

行つたら、

「それで、おまえが来ているが、どうした、おまえら
の父親は、どれ、おまえ、それで、灰縄は持つてきた
か」と言つて、
「灰縄も持つてきました。使いの者が持たせてあります
す」といつて、縄をなつて板の上で焼いておいたも
のを持っていつて、それは縄(の形)になつてゐるよ
ね。

それから、あれ(山)を持つていくといつて、

「通堂まで持つて持つてありますが、これを乗
せられる船はないので、そちらから船を出しさえすれば、乗せてみせますので、船を出してください」といつ
たので、また(船は)ないですよねえ。それも勝つて、

「雄(鶴)の卵を持ってきたか」と言つて、雄は

卵を生まないですよね。それで、

「お父さんは産気づいて、子を生むと産気づいて寝て
いる」って、

「男でも子を産むのか、雄でも子を産むのか」と、そ
れから、そうして(答えた)。

「この者を帰すことはできない」といつて、あちら
は殺す企みをしているけど、「おまえの言うことを、
おまえが(我々を)負かしてあるので、おまえの望み
は聞こう」と言つたから、

「沖縄の証文を出せ」といつて、それを取つて、証
文を取つてから焼いて捨てて。今度は沖縄の代表とし
て、証文を見て、

「私はそれ一つだけが欲しい」。自分は、もう、いわば、

一時間はあそこの大将になつて、そういうことを命令するんだよね。座つて、「証文も」といって、証文を持つてきて、モーアにあげたら、それを見るなり破つて、焼いてしまつて、パ一になつてもう証文はないんですよ。そうやつて負かして、そうして。

④ 一日殿様

屋宣ハル（大正三年生）安慶田

〈方言原話〉

「ぬーましが」んでい言ちやぐどう、また、くぬ人。

ぬてー、

「ぬー、あんしえー」一時間やていん二時間やていん、「うぬ、上びぬ人、ぬーんいで言が、だー、

「うりが台んかいいちんじふさん」でい。なにももらわないので、

「うりが、上びんかいいちんじふさん」でいやーに、うりが上びんかいいれーからー、どうーぬ勝手やしえー

やー。あんさーなかいよー、上びんかいいやーなかい、

沖縄ぬ、ぬーんいでいがらー、あぬ、載どーしー、

「うり取っていくー」んち取らさーに、ちやーさんでいがらーんでいいしえー聞ちやしが、うりまで一聞ちやしが。

「沖縄ぬむん、ぬーがらかじみらつとーし、うり、あんしえー取っていくーわ」んち、なー、うりが上びんかいいれーからー、どうーぬ勝手やくどんでい、あんし、

「取いくーわ」んでいち、沖縄ぬむん取らちえーたんでいさんち話。うぬーくまぐまぬ話聞かんばーたなー。

「褒美いーらすしが、ぬーましやが」でいぢやぐどう、私ねー褒美んぬーんいらていんしむくどう、うぬ、うまぬくらいぬ上びんかい、一時間やていん二時間やていんいしらちとうらし」んでい言やーなかい、うまなかいいやーなかい、沖縄ぬぬーがな書類どうらぢやるばーあらんがやーでい思どーるばーでーやー。

うんな話聞ちやしがよー、詳しい話聞かんばーてー、また。

〈共通語訳〉

「褒美に」なにがよいか」と言われたので、また、この人（モーア）がね。

「私は、それなら一時間でも二時間でも」その位の高

い人（名称は）なんて言うかな、

「その台座に座つてみたい」と、なにももらわないので、

「その上に座つてみたい」といつて、モーアが上にす

わつたら、自分の勝手だよね。そうしてね、上に座つておいて、沖縄の、なんとかいう、あの、載つているの（証文）、

「それを取つてこい」と持つてこさせてから、どうにかしたんだというのは聞いたんだけど、それまでは聞いたけど。

「沖縄のものを、なんだかしまいこまれてきるものを見

それを持ってきなさい」と、もう、モーイが位の高い人の座に座つたら、自分の勝手だからといって、そこで、持つてこい」といつて、沖縄のもの（証文）を持つてこさせたという話。これのことごました話は聞いてないわけさ。

「褒美をとらせるが、なにがいいか」と言うと、「私は褒美もなにももらわなくていいから、その、そこの位の上に、一時間でも二時間でもいいから座らせてくれださい」といつて、そこに座つて、沖縄のなにかしら書類を持ってこさせたわけではないかなと思つてゐるわけよね。

そんな話を聞いたけどね、詳しい話は聞いてないわけよ、また。

⑤ 一日殿様

神里マカト（大正元年生）安慶田

〔方言原話〕

「ど、あんしぇー、いやーややー、親方なれー」でいちゃぐどうや、「ん、だー、あんしぇー私が親方なさいさ」でい、一回いなかい、あんさーに、褒美いーらんぐどうし、殿様なやーなかい帰ていぢやんでい。

〔共通語訳〕

「さあ、それなら、おまえはね、親方になれ」と言つたからね、

「うん、どれ、それなら私が親方になるよ」と、一回に、そうして、褒美をもらわないようにして、殿様になつて帰つてきたつて。

⑥ 難題・一日殿様

佐久田千代（大正七年生）室川

そうしてね、あの唐の国から、あまり税金が、沖縄にくるさーね。そしてこのモーイ親方がよ、これがお父さんは、やつぱし役人だからね、あの唐の国にね、船とね、今度は雄鶴の卵と、また灰鶴、三つだつたと思う。

「三つ持つてこい」と注文されているわけ。唐の国によ、唐の国、あの、偉い人にさ。やしが（だけど）、やつぱし税金というのは、向こうから、向こうに帳簿はあつたという話だからや。そうしたらね、沖縄にはやつぱしあの、モーイ親方のお父さんが上だつたと思う、あの芝居から見たら。そうしてね、これ呼ばれているわけ。そうしたらお父さんはもう、考えても考えても絶対考えきれないからつて、もう熱出て寝ているわけ。だから、これモーイ親方がね。

「ターリー代わい（お父さんの代わりに）ね、うちが行つてくるから心配しないで。うちが行つてくるから」

「いい（いやいや）、あんた、今若くてなにもできなからね、行かないで。ターリー（お父さん）が行つてくる」と言つてもね、「いや、ターリーは、もう、熱出でいるからね、お家

で寝ておきなさい」と言つて、そうしたらモーイ親方(モーイチンボウ)も、ぼーはねで、行くわけさ、自分で、唐の偉い人の前によ。そうしたらね、この人がね、

「あんたはね、雄鶴の卵を持つてきましたか」って聞いたからね、階段のずっと上に座つてあるから。この入口によ、座つてよ、もう、向こうの質問したら。そしてや、「持つてきたか」って言つたら、

「あんしんや、全部あかしたら（問題を解いたら）ね、全部持つてきたら、あかしたらどんなにしますか」つて。こっちも番兵が立つてゐるさー、偉い人だから。上つていつて殺させたら大変だから。そして、「うちがね、向こうから下りて、一日、あんたを向こうの一番偉い人、あれ（王様）にさせるから」 「ああ、そうれすか」って。して、もう、言うさーね。して、質問出したから、

「雄鳥の卵、持つてきたか」って言つたらや、

「お父さんはね、今、卵産むといつてね、お家の卵産む用意していた」って。そうしたら、

「雄鳥のや、卵つてもあるか」って聞くさーね。そうしたら、

「ないのに、どうして注文したか」って、こんな言ふうわけ。返すさーね。今度は、もう、これも返されて

いるからね、今度はね、「あんた、灰綱持つてきたか」と言うからね、灰綱は、繩を持つていてね、こうして焼いてよ。やつたら、灰綱なつてあるさーね。して、

「これが灰綱です」つて、またこれも返されて。

「そしたら、今度はね、

「船、大きな岩をね、乗せる船、持つてきたか」と言つたからね、そしたらね、

「大きな船はね、こっちから造つたらね、持つてこられます」つて。ほしたら全部返されているさーね。そして、もう、もうなにもない。もう聞くのはないつて言つたからよ。で、交代してよ、そしたらこつちは怒つてゐるわけ、衛兵は、王様下ろされるさーね。そしたらね、王様、

「これなー、男と男のね、約束だから、大丈夫だから」つて下りて、これ（モーイを）(モーイヲ)上してね。して、あつちにいる間、沖縄の帳簿(ヒヨウブ)全部調べてよ、全部焼き捨てね、あれ（モーイ）が、だから助かつたとの話だった、沖縄は、その時から、やっぱしあの、これが（モーイの）頭には負けているわけさ、向こうも。

⑦ 難題・一日殿様

金城初子（大正五年生）セント

あれはね、本当はモーイのお父さんが（薩摩からの問題を解決しに）来るべきだけど、

「なんでお父さんは来ない」

「私はモーイの長男です」と言つたら、

「なんでお父さん来なさいと言つたら、あんたが来たか」と言つて。

「あのね、船着き場までは來てゐるけど、お産するためにならなかつた」と言つたから、

「なんで男がお産するねー」とあつちに言われたから、

「なん、雄鶏の卵、雄鶏がも卵産むねー」と言つて、またモーイに言われたわけ。
「あそれもあるね」と言つて。そしたら、あつちの山、あの山の名前なんと云つたかね。あれ持つてきなさいとの、(難題のうち) 一つは。えー、弁の御纏。

「弁の御纏持つてきなさい」と質問したから、

「船着き場までは持つてきてあるけど、これ乗せる船がないから、薩摩にはこんな大きい船があるかと思つて、持つてこられないから船貸してください」と言つたから、

「こんな、山乗せる船はない」って、薩摩には、これも負けているわけさ。じやあ、もう一つの問題は、

「灰綱持つてきなさい」との質問。だからね、灰綱持つてきなさい」と言つて、

「こっちに今降ろしてある」と言つて、ぬつた縄を皿の上に置いて、それ火付けたらきれいな灰綱なつているわけ。綱の形も全然崩れらんように、綱のあれが見えているわけ。そしたらあつちはこの三問題に負け、あの、あれしているわけさ。薩摩の国から、モーイのお父さんに出したのを、お父さんがはできないと思つて自分から

「私がやつてきます」といつて、モーイが來たわけよ。

(薩摩から褒美をたずねられて)

「なにが欲しままに褒美はある」と言つたから、今まで社長が座つていた椅子、あれに座りたい」と言つてゐるわけさ。で、もう、座つたから、

「こっちの、なにもかも書いてあるの、帳簿見せなさい」と言つ。もう、ちゅーぱー(強者)なつてゐるから、もう、言うこと聞かなければいけないでしょ。こつちの薩摩のちゅーぱー(強者)が、「持つてきなさい、持つてきなさい」と言つて、持つてきなみんな引つ切つてしまふ、モーイが。それで、もう、薩摩とあれとの関係なくなるわけさ。
だから、お父さんの、もう、話は、「欲張りしたらあんなことになるよ、こんなことになるよ」と言つて、「いつも欲張り、欲張りの気持ちを持たないで」と言つて、あんな話しか教えられてなかつた。

⑧ 難題・一日殿様

宮城ツル(大正十三年生)センターモーイ親方つていたわけね。で、この人はね、普通

はね、勉強はできるけど、いつもふらーふーじーして(気がふれたようなふるまいをして)、道からはもう、皆にはね、ふらー(馬鹿者)みたいなね、見られていいわけだね、世間にはね。だけど、先生がはわかるわけさ。そして、お父さんがもわからんわけ、自分の子ども、長男だけどね、
「馬鹿みたいに生まれて」と言つて。

そして、ある日ね、鹿児島からね、沖縄人は馬鹿にされていたわけだね。鹿児島からね、このモーイ親方のお父さんにはね、お父さんに、手紙が来るわけだね。そしてその手紙にはね、

率1弁の御纏 薩摩市阿里島町にある弁ヶ岳のこと。首里城の東にある丘陵。頂上有近は標高約一六六メートルで、那覇市内へ最も標高が高い。園主の折廻所で、久高島と差場御嶽を運送する御纏とて有名。

縄を編んで持つておいで」っていう手紙であるわけ。そしたらもう、ここのお父さんは、

「そんなこと絶対できない」言うてね。

「雄鷲の卵があるわけがあるかなあ」と言うてね、一

生懸命心配するわけさ。そしたらモーイー、長男がね、子どもだけど、

「お父さんね、なにが心配ごとがあつたら、私もね、一緒に心配させてください」と言つたならね、

「いやーがーぬーんならん。(おまえではどうもできな

い。)」て。

「いつたーが聞ちゅしえーあらん。童だから、いつたーが聞ちゅしえーあらん(おまえたちが聞くものではない。子どもだから、おまえたちが聞くものではない)」つて言うわけ。そしたら、先生の方がね、

「これ、子どもじゃないから、言うたらいいじやないか」といつて。先生がも考えきれんから。

「じゃ、鹿児島に私行かしてくんだい」と(モーイが)言うわけ。したら親はびっくりしてからね、

「んーんーんー(いやいや)。もう、あつちには、あんた、雄鷲の卵ね、持つてこいと言われてんのにな、あんたが行つたら大變なるから、いいよ」と言うてもね、

「自分が行く」と言つて、自分が行くわけ。そしたら行つたらね、あつちでね、やつぱし問題出すわけさ。

そしたらね、「じゃあ、山持つておいで」と言うたらね、

「やあ、その山運ぶ船作つてちようだい」と言われた

りね。また、

「灰で縄編みなさい」言うたらね、縄を燃やしてからね、「これ灰になつています」言うてね。また、そしてから、あれ。

「雄鷲の卵ね、持つておいで」つたら、

「今はね、自分が来るべきじやなかつたけど、お父さんはね、今、産婦やつていて(産氣づいて)いるから、

かさぎーがーたー(妊娠している最中)だから来れない」と言うたらね、

「あんたはね、男がね、かさぎる(妊娠する)わけがあるか」って怒られるわけ。そしたらね、

「雄鷲が卵産むわけがあるか」言うてね、言われるわけさ。そしたらね、あつちは、

「あんたはね、頭いいから、あんたのね、ましな(良いと思う)褒美上げるから、なにが欲しいか」と言うたらね、

「自分はね、一日この殿様になりたい」と言うわけ、

一日ね。そしたらね、皆は怒るけどね、殿様一人はもう、

「仕方がない」言うて、一日殿様なすわけさ。そしたらね、沖縄から税金が行きよつたらしいよ。それの書類をみんな破つたらしいよ、このモーイがね。そして

「自分が行く」と言つて、自分が行くわけさ。

そしてこの人はね、あつちはもう、普通の人間に、

もう、ふらーふーじー(気がふれたようなふるまいを)しないわけだね、あつちでは、鹿児島の姫様でも、好きにしてよ。妻はしないけど、好きにしてね。そして、

まあ、むじゅ、産まれているけろね、あれよ、ぬんじゅ。

まーむじゅ 方言で、笨や悪い人を意味する。「無駄(んじゅ)」か。

※のねんじゅ 未詳。

妻はしないけど。

⑨ 一日殿様

稻嶺和子（大正六年生）セントー

方言原話

高江洲義慈（明治二十八年生）泡瀬

（17）薩摩武士との立ち合い

「おちかなるん 未詳 文庫から「うる」にちがひ」と脱出した。

（モーアイは難題を）これをね、三つ解いたからね、解く前に、「私がこの三つ解いたらね、私の希望も聞いてくれるか」とそこで約束するわけ。したらね、「これだけ解いたらね、あなたの希望も聞く」んぢやくどう（というので）、だから、今度は私の希望聞いてくれ」言ひゆうてね、このモーアイが、その親方に言うたわけさ。したち、「私はもう、なんにもいらない」つて。

「金もなんにもいらないから、その位をくれ」つて、そこの位に座るわけ。

「あんたが座っている位に座らせて」でいるばー（というわけ）。したが、沖縄の税金をね、勉強させた（値切させた）つて、これ、この人が。

「あんすらーーー（そうすればだよ）、これはもう、私の言うことだからね、沖縄からの税金を免除してくれ」言ひうて。そして、沖縄の税金は免除されたと、そう話があった。ジンブンで、うん。だからとつてもジンブン持ちだったつて。

「誰んかいちかならんさー」

あの人は偉いですよねえ。なー、急げ者にてふうしてね。世間の人が見る場合には、すぐ、伊野波ぬモーイはアタビチャーピヤー捕やーどうやる、鳥ぐわーちかなやーどうやる、アタビチャーピヤー捕やーどうやる。学問ぬん、伊野波殿内ぬ嫡子んぢよー。だから、伊野波、親かい、親吸さびーるんまじゅん、撰政三司官。だから、これ、でいるが先やらわからんしねーやー。それがある。この人が親は、親の撰政のときは子どもだから、鳥ぐわー持つち、おーらちえーし。あるいは、鳥ぐわーなかくわーし、アタビチャーピヤーすぐたんよー、するでしょ。あんすくどう、人のー、世間みる人ぬ、伊野波ぬふらー、モーアイモーーでい言しがや。

だからね、その場合に、鹿児島から御用があぐどう。だから、それ、うぬくとー親ぬるないるんぢ、撰政三司官うどーてい吟味ちやるばーー。あんぐどう、このターリーーはね、伊野波殿内ぬターリーーは、手かみて、もう寝んでいやーに、むるしみそーらんち。モーアイはね、

「ぬーが、ターリーー」ち、うれ一聞ちよーるばーよー。

「ぬーが、ターリーー、うんじよーかんし寝んたい起きたいしみしえーる」んぢやくどう、

「ぬー、聞かちんじみそーれー」。あとー、あんやん
で、なーちかならんでい。
「いちぬいつか鹿児島かい御用ぬあいしがてー、私が
行きわるやんでーさー」
「ぬーやいびーがー」
あんかんでーい。
「うれーどうーやつしーぐわー、私が行ちえーびーさー」
んち、モーイーがね。
「ふりむん、いやーやー」でい言やつとーさみ。
「いやーがーならん」
「ないびーん」
「いやーやみりー」
あんさーい、くりからね、今帰仁御殿んじ、うにぬ
親方でいむのー、今帰仁ぬの一上やみしえたんでい。
あまんかいうみかきたくどう、
「あんやんびんでー、ちゃーがやー」んちやくどう、
「あ、行ちゅんでーらー、やらー」んでい。
「ありがーないくどう」でい。
「ありがーないくどうやらしーんちやくどう、行じえー
ぎさんてー」
「ぬー、いやー。親来ーんでー、いやーが來やが」
「私つたーターリーや産催そーん」言つてね、
「男ぬん産催すんなー」
「ぬーが、うんじょー御用ややー、雄鳥ぬ卵んちえー
くどう、雄鳥ぬん卵なさびーみ」。一つはこれでしょ
う、これ御用があつたです。
「やん、男ぬ卵なすんなー」んちやくどう、

「子生すみ、雄鳥ぬ卵がなすみ」。だから、今度ー、
「井ぬ職ーちやーすが。井ぬ御職持つちくー」
「あれは壊ち置えーびーしがや、乗しーる船ぬねー
ん、船送ていきみそーり。うり積むる船んねーん、
持つちえーちゃーびらん。うりゆくしーんち。モーイー
ぬくれー」。今度ー
「灰糊持つち」
「うれー持つちえーびーん。うれー持つちえーびー
ん。くり綱のーやーに焼ぢゃーに、うぬまま持つちー
よ。

あんさーい、
「くぬひやーや、いやーが望めーぬーやがー」んちやく
とう、
「いやー、いやーむのーむるかなわつとーぐどう、
いやー、お土産として持たすしえー、望めーぬーやがー
「私ぬーぬーん望めーぬーびらんびー」。ただ、一日や
ていいね、いわゆる、薩摩ぬ王様しちんでーしんでー
やーんでい思むいびん。一時間やでいんしみるする
でいぢやくどう、

「だー、いやーが望みましましーん」んちやくどう、あ、
仕方ねーんうん人よー。その、もう、そこのね、おつ
た子ぬちやーよ、くさみちよーるばー。

「ぬー、いやーや」
「いーいー」んちいち、
「証文持つちくー」んちよー、
「証文持つちくー」。そこに書類が入つていて。沖縄か
ら上納物書類が。取やーに、

沖縄がある。
今帰仁御殿 未武 尚吉子の子、今
帰仁王子朝典を元祖とする具志川御殿、
あるいは尚真子孫の久名(今帰仁)御殿頭頭
の子のいとが。まだモイ親方の流跡
時代より後の時代となるが、尚吉子の
子、今帰仁王子朝典が沖縄としまで傳
承がある。

「私ねーなー、うつさーにゆたさいびーんびー」。
上納物ぬ書類がね、書類取り出してね。なー、うんにー
からーぬーんねーらんさ。沖縄ぬのー。それで、そ
この小庭に、したから、なー殺する考ーそーしえー。
「いやー、親ぬ、沖縄ぬ、うひなーる人んかいくどう、
悔いんねーんさみ」。舞踊。いわゆる、古典さ。琴
持つちぢやーに弾かぢやぐとう、琴ん上手やる。あん
さー、うーに殺すんぢやくとう、琴うしぬきぢやー
に、琴しほんぢえーたんでい。
なーひんあいえーすがやー。

〔共通語訳〕

「あの人（モーイ親方）は偉いですよねえ。もう、怠
け者に似たそぶりをしてね。世間の人が見たら、ただ、
伊野波のモーイは蛙捕りである、鳥飼いである、蛙捕
りでしかない。学問なども（しないで）、伊野波殿内
の嫡子といつてね。だから、伊野波家、親に、親戚も
いつしょ、摂政三司官。だから、これ、どのが先だつ
たかわからないよね。それがある。この人の親は、親
が摂政のときは（モーイは）子どもだから、鳥を持つ
て、喧嘩させて。あるいは鳥にやるといつて蛙をいじ
めたりね、するでしょう。だから、人は、世間の人は、
伊野波の馬鹿者、ばかたれモーイと言うけどね。

だからね、そういう状況で、鹿児島から御用があつ
たので。だから、それ、そのことは（モーイの）親な

ら御用を果たせると、摂政三司官で評議されたわけ
ね。そしたら、このお父さんはね、伊野波殿のお父

さんは、頭を抱え込んで、もう寝込んでしまい、なに
もなきないと。モーイはね、

「どうしたの、父上」とモーイが聞いたわけだよ。

「どうして、父上、あなたはこうして寝たり起きたり
なさつているのです」というと、

「誰であつてもどうにもならないよ」

「なんです、お聞かせになつてみてください」。どうと
う、これこれしかじかと。どうにもならないと。

「いつの何日（に）鹿児島に（行く）御用があるんだがね、
私が行かないといけないというんだよ」

「なんの御用ですか」

かくかくしかじかと説明すると、

「それは簡単なこと、私が行きますよ」と、モーイー
がね。

「馬鹿者、おまえは」と言われたかね。

「おまえではできない」

「できます」

「おまえは行くな」。

そして、これからね、今帰仁御殿に行つて、そのこ
ろの親方というのは、今帰仁の親方が上であられたん
だつて。あちらにお目にかかると、

「モーイが行くといいますが、どうでしょうね」とい
うと、

「ああ、行くというなら、行かせよ」と。

「あの者ならできるから行かせよ」というので、（モー
イが鹿児島に）行つたらしいんだよ。

「なんだ、おまえは。親が来ないでおまえが来たのか」

「うちの父上は、産気づいています」と言つてね、

「男でも産気づくといふのか」

「なんで、あなたさまの御用はね、雄鳥の卵というこ

となのに、雄鳥でも卵を産みますか」。一つはこれで

しよう、これ御用があつたです。

「なんだ、男が卵を産むのか」といつたら、

「子を産むのか、雄鳥が卵を産むか」と答えた。だから、今度は、

「弁の御嶽はどうするのか。弁の御嶽を持つてこい」

「あれは壊して置いてあります。乗せきれる船がない、船を送つてください。御嶽を積める船もない、持つてはこられません。それをよこせ」と。モーヤー(モーヨー)の返答は。今度は、

「灰で鞠った縄を持つてこい」。

「それは持つてきてあります。それは持つてきてあります。これ、縄を鞠つて焼いてそのまま持つていいですね。

そして、

「こいつめ、おまえの望みはなんだ」と聞くと、

「おまえ、おまえの答えはみな要求にかなうものだつたから、おまえ、土産として持たすから、望みのものはなんだ」

「私はなにも望むものはありませんよ。ただ、一日だけでもね、いわゆる、薩摩の王様の位というものを経験してみたいと思います。一時間だけでもかまわないから」といつたら、

「どれ、おまえが望むとおりにさせてやる」といつて、もう仕方がない、その人は（薩摩の王様）は。その、もう、そこには、おつた（王の）子どもたちがね、怒っているわけ。

「なんだ、きさまは」、

「いやいや」と（モーヨーは）座つて、

「証文を持つてこい」といつてね、

「証文を持つてこい」。そこに書類が入つている。沖縄から上納物の書類が。取つて、

「私はね、これだけいいですよ」。上納物の書類がね、書類を取り出してね。もう、そのときからはなにもないよ、沖縄の上納物は。それで、そこの、小庭に下りたら、もう（薩摩側はセーイを）殺そうという考えをしているんだよ。

「おまえはね、親の、沖縄の、こんな偉い人の座にすわつたら、悔いもないだろう」。舞踊。いわゆる、古典（音楽）さ。琴を持ってきて（モーヨーに）弾かせたらね、琴も上手である。それで、そのときに殺そうとしたら、（モーヨーが弾いていた）琴をおしのけて、琴で（攻撃を）避けたんだって。

（モーヨーの話は他にも）もうちょっとあつたんだけどね。

② 難題・立ち合い

島袋サダ（明治三十六年生　高原

方言原話）

お父さんが、お父さんがなにかの役所の頭だったか

ら。そのときの間切はなんと言つたかなあ。んーん、王様一あらん、村の、なにか偉い人たち。地頭代、地頭代だったか。國から、あのう、國から、「雄鳥の卵とう、また灰綱とう持つちく！」んでいちやくどう、このお父さんはもう、夜がた、もう、歩いたからね。自分の息子が、息子は、みんなでふらーと言つたって、星は勉強してね、とつてもなにも上等だつたけれど、みんなで、「モーイー伊野波ぬふらー」と言いよつたつて。したら、お父さんが、この、頭があるとは思わなくて。「なんで、こんなに夜明けどおしもう歩くねー、父ちゃん」と言つたら、「雄鳥の卵とう、灰綱持つちくーんでいさつーるむんぬ（雄鳥の卵と、灰綱を持つきなさいと命令されているものだから）」。灰綱、灰綱でいねー、あぬ、縄をぬつて、こんなに皿に焼いて、焼く、焼いて出すもんと。また、雄鳥ぬ卵。あんさーい、「お父さんができなかつたら、私が行くよ」と言つてね、したら、「雄鳥の卵持つちやみ」んちやくどう（「雄鳥の卵を持つてきたか」と聞かれたので）、「私つたーお父さんのー雄鳥ぬ卵産すんでー、寝んとーん」で、眠つてと言つて。

鹿児島の戦負けて、あそこが偉いときに、なんかあつたという。国は鹿児島に取られているときに、ちょうど、今、今、あのう、アメリカの、あの、沖縄どつているのと同じ。いわゆる証文はみんなあつちに行つて、「モーイーは伊野波のばかたれ」と呼んでいたつて。

「雄鳥の卵産すんでー、お父さんは寝んとーん」で、地頭代、地頭代だったか。國から、あのう、國から、「雄鳥ぬ卵産すみ」、「雄鳥ぬ卵一質問しやらす」「ぬーが、あんするむー、雄鳥ぬ卵一質問しやらす」でいち。それ言つたわけ。それ、これも負けで。灰綱も負けで。家来はこんなに、こんなにたくさん座つて。これを殺そうといわけで。なにもかも勝つたから、灰綱も勝つた、雄鳥ぬ卵も勝つたから。もう負けると思つて、みんな心配して、家来どもは、みんな刀を持って殺そうとしたら、これの、質問こんなに聞きながら、すぐ、打ち返して。そーむんだつたという意味聞いたことがある。

共通語訳

お父さんは、お父さんはなにかの役所の頭だったから。そのときの間切の名前はなんと言つたかなあ。ううん、王様ではない、村の、なにか偉い人たち。地頭代、地頭代だったか。國から、あのう、國から、「雄鳥の卵と、また灰でなつた綱と持つて来なさい」と言わされたので、このお父さんはもう、一晩中、もう、難問に困つてうろうろして歩きまわつたからね。自分の息子が、息子は、みんながたわけ者と呼んでいたつて。星は勉強してね、とつてもなにも上等だつたけれど、みんなで、

るから、わけさ。あれが、
「雄鳥の卵産すんでー、お父さんは寝んとーん」で、
眠つて。ある。地頭代、近世琉球において、領主である地頭の代理者として各間切を管理する役職。その領地に住む平民のうちの有力者が担う。現在の村長に近い。
名前が間切から村に変更され、統いて沖縄及高嶺町村制の施行により自治体となつた。

したら、お父さんが、この、(息子に)頭があるとは思わない。(モーイが)

「なんで、こんなに夜通し歩いているの、父ちゃん」と言つたら、

「雄鳥の卵と、灰綱を持つてきなさいと命令されるものだから」。灰綱、灰綱というのは、あの、綱を

持つて、こんなふうに皿に(置いて)焼いて出すもの

だと。また、雄鳥の卵。それで、

「お父さんができなかつたら、私が行くよ」と言つて

ね。そしたら(国から)、「雄鳥の卵を持ってきたか」と聞かれたので、

「うちのお父さんは雄鳥の卵を産むといつて、寝ています」と、眠つていると言つて。

鹿児島との戦で負けて、鹿児島のほうが偉いときには、そういうことがあつたという。國が鹿児島に取られているとき、ちょうど、今、アメリカが沖縄を取つてゐるのと同じ。いわゆる証文はみんなあつちに行つてゐるわけね。モーイが、「雄鳥の卵を産むといって、お父さんは寝ています」と、眠つていると。

「雄鳥が卵を産むだと」、

「なんで、それなのに、雄鳥の卵のことを質問してよこすんだ」といつて。それを言つたわけ。それで、これも(鹿児島が)負けて。灰綱の難問でも負けて。

家来がこんなに、こんなにたくさん座つていて。モーイを殺そうというわけ。なにもかも(モーイが)勝つたから、灰綱も勝つた、雄鳥の卵も勝つたから。もう

負けると思つて、みんな心配して、家来どもは、みんな刀を持って(モーイを)殺そうとしたらね、モーイは、質問をこんなふうに聞きながら、すぐ、(攻撃を)はじき返して。しつかりした人だつたという話は聞いたことがある。

③ 難題・立ち合い

山口栄順(明治四十四年生) 泡瀬

あれはですね、鹿児島からですね、沖縄のほうにね、さあ、そのう、それからだつたかねえ。鹿児島の、薩摩から。えーっと、その前に色んな話があつたんですねえ、だー(ヒヒ)、「これは忘れてしまつますが。鹿児島から、本当はね、沖縄の方にね、(注文があつたらしいですよ。あれは、ぬー、モーイ親方でいどう言つたがやー(あの人は、なに、モーイ親方だと言つたかなあ)。モーイ親方」と言つたねえ。

モーイ親方^{モーイ}というのは子どもでしよう、あれは、ふらーぐわーふーじーでね。これは頭はしっかりしていますよ、しているが、自分の気持ちでね、相手の、みんな世の中をね、人は、ありがは、その、みんななにもわからんなあというよくな、この、なんといいますか、自分一人いばつてゐるわけですよ。自分一人いばつてね。

それで、親の方にね、親はなにか、なにか沖縄の役を持たれていたかもしませんがね。鹿児島から、そのう、薩摩からね、あの、なんというモリだつたかね、あの丘はぬー丘^{モーイ}言つたがやー(あの丘はなに丘と言つた

※「あらーぐわーかーじー」狂人のもうなづかるまいをしている様子。非常識なことをして、あたかもたわけ者のようにならぬまゝの様子。

かねえ、

「あの丘^のをね、持つてくるよう」にと、向こうから注文されたそうだ。またそれからね、縄は、

「灰で縄をしてね、持つてきなさい」とこれも注文されたそうですよ、「灰で、灰で、縄を、灰で。これも注文されてね。それから、もう一つ、なんだつたかね。

ああ、うんうん、雄鶏の卵をね、注文されたそうですよ。もう、三つね。そうしたらね、

「これぐらいもわからんが、私が行くよ」って、親父に、親に。

「あんたがた、これをね、できないならね、私が鹿児島行^くよ」といってね、それで、

「おまえはふらーどうやるむんぬ（おまえは馬鹿なのに）、おまえができるか」と言つてね、親がはやつたそですよ。

「でもね、私が行くからね、私を行かしてください」と。そして、むこうに行つたらね、むこうではもう非常に、沖縄からそういうふうに来ているから、歓迎されたらしい。そで、あるところに座らせてですね、そして、

「今度は鹿児島の偉い人からね、」

「おまえはこつから注文したのは持つてきたか」といったらね、

「あの山をね、持つてこいと言つたがね、持つてきたか」と。（モーイの返答は）

「あれを積む船がないからね、この船をやつてください。そうしたら持つてきますから」と。

そうしてまた、灰はね、灰はまたあれば、この縄を

ぬつですね、これ燃やしてね、そつてこれを持つて行つたら、これも合格した。これは合格した。

今度はまたね、

「卵を持ってきなさい」といつたでしょう、雄鶏の卵。あの雄鶏の卵の場合にはね、

「男が子ども産みますか」といつて聞いたそうだ。そして反対に今度はね、向こうはもう、がつかりしてしまつた。

「雄鶏に卵産むわけはないでしょう。男が子ども産むわけはないでしょう」と言つて、これを返したわけですよ。そしたら、これでね、オーケーになつたそだ。

それからね、そのあとは今度は、

「これはね、あんまりその、頭がいいからね、殺さんといかん」と言つてね、それで、お湯を大きな鍋にね、こうお湯を沸かしてね、そいで、これに入れてやろうといつてね、やつたらしいですよ。そしたら、この人はね、頭はいいから、「たしかにこれは私を殺すつもりだからね」と言つて（考えて）、

「そこに座りなさい」と（命じられたら）、

「じゃ、偉い人もこつちに来なさい」と言つてね、そこに集めてやつたらしいよ。そしたら、お湯はコンコン沸いていますからね、そつして今度は、相手が殺さないうちに、自分からね、すぐ取つて、みんなこの、投げて（鍋に）入れたそですよ、相手を。

だから、この人はね、やつぱり、モーイ綱方といつてね、この人は偉い人だつたらしい。この人は殺され

んどう灰し綱のーてーしえー（それは綱をなつて、火

を燃やしたら、ほら、ちゃんと灰で綱をなつてあるよ(ね)」と。あと、もうまいってね。

「王様の席に僕はいつべん座りたい」と、いやいやな、たいへん琉球もこんな知恵者がおつたかと。褒美はなにをくれようか」と、

「そんな馬鹿なことができるか」ってね、家来が。

「いー、いー、もう私が言うたからー」。そこに行つてね、
正こなつたつもありで、薩摩の守こなつたつもありでね。

薩摩、なんとか証文入れてるわけよね、琉球王から。

「あり持つちく一わ（あれを持つてむ）」と（モーラ
が）言う。どうぞ。

「そんなこと言う」（薩摩側の部下がモーイを）殺そう

「待て、取つてこい」と叫ひしゃが

「これ、これ、これ。なまからー琉球んかいうんぐ

とうーしーねーならん（これからは琉球にこんなことをいはなう）——言つてゐ。あれ（薩摩の王）が。

をしてはならん」と言つてね。あれ（南國の王）た
仕方がない、持つてきて読んだらね。

「と」、なまから（さあ、いまから）琉球にこういう

ことしてはいかん】（モーアが語文を）ひて換へてお
てる。そして（薩摩側の兵はモーアを）殺そうとする

んだよ。また武勇も達者で、そこでうまくやつて帰つてくる。

町田宗勇（大正六年生）中の町
あの人（モーイ）が薩摩に行ってね、薩摩からの恩納森^{えのな}御用とかね、灰綿御用。それと雄鶴ぬ卵御用と言ふの、その三つの難問を持つてきてね。それを向こうで、全部、向こうに納得させて、したのがモーイ。
「そう、そこに、それだけ持つてきなさい」と言つてね、「それだけ納めなさい」と言うのをなにしてね。
向こうではやつぱり沖縄の人の頭を試したかもしれないね。試すためにそれだけを持つていつた。難問を持つてきてからに、それをはずしたのは、モーイ。
親方つて。
恩納森^{えのな}と言つたら、恩納森^{えのな}があるでしょ、山。あれは、どうしてほんしたか（解いたか）言つたらね、あれ、あの、
「くれい、持つちちゅーんでいやいびーしがてー（これは、持つてくるということでしたが）、持つてくるつもりだつたけど、船も無いしね、その、あれ根こそぎするへラもないし、鉢もないし、だから、それが準備してください」と言つて、言つたら、あまり、こっち作れないでしょ。
「ああ、それでしよう、わかつた」と。
今度また、灰綿御用、灰綿御用、とあるわけ。
「綱をのつてからでー（綱を縫つてからだよ）、この灰綿を持つて来なさい」と言つてね、それもやつて、綱の一やーんかい（綱を縫つて、箱^{ばこ}に）入れて、これ見せたらね、

「綿でしよう、灰でしよう、どりなさい」。あれは、それもはずして。

それから三番目に、それまた、合格して。三番目にね、雄鶴の卵^{アヒルの卵}といつて、雄鳥の卵。そこをね、どうしてはずしたかと言うとね、「私つたー親父が子ども産むと言うてね、もう、なにしておってね、代わりに私がきました」と言つたらね、「ぬーがいやー（なんだおまえ）ターリー（父上）を親をよこせと言つたらね、あなたが来たか」と言つたらね。

「私つたー親父はね、産氣^{うぶき}してね（産氣づいてね）、もうできないから私が来ました。そういうのに、なんで雄鳥の卵、持つてきなさいと言うか。私つたー親父も産氣し私が来よーいびーしゃー（うちの親父も産氣づいて私が来たというのに）」でい。すぐ、くり（これ）、

「ああ、そうか」と。

「あれは負けた」と言つてね。そこで三つの難問を通りこして、その後から、「あんたはなんでもできるねえ」と、

「はい、なんでもできます」つて。

「私はねーよ、空手ざーんかいでー、ぬーん持たんぐとうさーんかいや、ぬー持たわんしむしがてー、あれしーねー、立ち合いそーん」とい言ちよるばーてー（私はね、空手をするにはね、なにも持たないようやるから、なにも持たなくてもいいからね、あれをすれなら、試合をしよう」と言つたわけ）。立ち合いしたから、またここに筵敷いてあるさーねー。すぐそこ

で、たち落^{たたき落}こうしたのー（たたき落としたのは）、そこから出たらしい。刀をね、刀を落とさせるさ。これ、

薩摩^{さつま}、あれ、引ちぬじんでいしーねー（引き抜こうとしたら）、くんしーさー、くれなかい、くれ（こうしてね、これに、これ）、薩引^{さつひ}張つぱてしまつたら、転ぶ^{ころぶ}でしょ、あれー。そこで、あれ（立ち合いの相手）は刀を落として、その越をひつくりかばして、コーサイぐわーするんち（拳骨をくらわすつて）。薩摩のうりとうしんちやーに（薩摩の人と戦つて）。そこで、それがわかつて、なに（武芸）も上等だなあ、あんしえー（それなら）、今度はあんたの望むものをやると言つたから、そこで、あの……（ここで収録が終わっている）

⑥ 立ち合い

亀島忠賢（明治三十五年生）室川

薩摩の武士とね、モーイ親方^{おおきわ}でね。モーイ親方は徳利^{とくり}でしよう、昔のひょううたん、それに酒を入れて飲ましたり。そして立ち合いしようとやつてね、やつたから、

「ちよつと待てよ」とて、薩引いたから、薩摩の侍は転んでね。そしてこの徳利で剣を取つてね、取つてからしたからね、大変はめられたそうです。頭の利いておる人だ。

(18) 雀の噂話

① 雀の噂話

普久原幸（大正五年生）泡瀬

〈方言原話〉

モーイー親方の話ーや、また、うんぐどうーすたん
よー。

モーイー親方ぬ話はね、あの、うぬ大工ぬちゃーん
かい家造くいたんでいしがてー、家造くいぬばーに、
大工ぬちゃーんかいや、

「えー、あぬー、うぬクラーグワーハむぬ言ーし聞か
りーみ」んちやくどうや、

「ぬーんでい言いやびーがやー」でいぢやぐどう、

「あぬよー、真玉橋うとーていよー、馬が難波しや、
米放りとーんでいくどう、食でいくー」んでい。モー
イ親方んでい言たれー、わからんしおーやー。あんさー
い、こんなこと言つていていたよ、くりわかいたんでい、
あぬつ人よー。

「うぬ鳥ぐわーぬむぬ言ーし聞かーりーるはじどー」
でいち。

うんな話して、大工ぬちゃーとうまじゅん話、私、
そばでいつも聞いていたけどね。こんな話しよつたの
よ。だから、昔ぬ人よーやー、うんぐどうーぐわーつ
し知恵のある人がいたということ聞いたけど。

〈共通語訳〉

モーイ親方の話はね、また、こんなふうに話してい

たよ。

その大工たちに家を造らせていたというがね、家を
造るときに、大工さんたちにね、

「ねえ、あのう、そこの雀が話していること聞けるか」
といつたら、

「なんと言つていますかねえ」というので、

「あのね、真玉橋でね、馬が難波してね、米を放り出
したというから、食べてこよう」と。モーイ親方と言つ
たか、わからないけどね。そうして、こんなことを言つ
ていたよ、これがわかつたんだって、あの人は。
「その鳥の言うことを聞くことができるそうだよ」つ
て。

そんな話ををして、大工さんたちと一緒に話を私はそ
ばでいつも聞いていたけどね。こんな話しよつたの
よ。だから、昔の人はね、こんなふうに知恵のある人
がいたということ聞いたけど。

(19) とんち比べ

① 難題・鳴った手はどうやら

仲宗根初子（大正七年生）越前

非常にあの、体が弱いみたいであったがね、人より
頭がね、ジンブン（知恵）があつて。いつもこう頭を
持つて遊んでね、上からいつもいじめられよつたらし
いのよ。で、それをね、なんかこう、上からね、この
人の頭がどこか、鹿児島あたりに使いに行かされるわ
けさ。また、この使いに行かされるときに、このモー



イ 親方いつも鶴ぐわー持つて遊んでるから、

「フダカチャー、私が代わりに行こう」言うてからにね、この人が行つたらさ、このモーイ親方がね。そして、向こうでいろいろなことこう問われたもんだから、「あんたはね、綿持つてきなさい」といつたら、この綿を焼いてからにね、そのままその灰を、このかたちをそのままね、王様に持つていって、あれしたつて。

今度、手を打つて、手を打つたら、「どつちが手がよく鳴ったか」つたら自分の手を打つて、こう見せて「どつち」、そういう芝居見た。

モーイ親方^{モーイ}というのはね、頭が良くて、いつも鶴を持つてね、遊んでおつたということ。

(20) その他、モーイ親方^{モーイ}にまつわる話

① 家系・下駄と草履・布巻き

〔方言原語〕

うまや、^{モーイ}豊見城殿内んち、うまんかいあんよ。チユイ
豊見城^{モーイ}んち、うりんかいあたしえーや。あまぬ、

私つたーむーとうどうくまーうまやるばーて。くまー

またモーイ親方^{モーイ}ぬ家やしがや。あんし、うま拌みーが

行じやくどうて、うまぬオバーや、
「ぬーが、拌^{モーイ}がでーんーだんしが、うまんかい拌みー

が来ゆーんなーーちや。あんしん、ぬーが拌がだし

がよー。うまぬ跡繼そーるおばーがて、うぬ人一人

どううたるよー。あんさーに、うんにーからーぬーん

行かんしがてー。すぐ豊見城殿内^{モーイ}ぬすば。だー、う

まーぬー殿内^{モーイ}でいたがやー。「うまんやんどー」でい

言一たるむんぬ、えー、あと一拌^{モーイ}ーさ。私つたー

豊見城殿内^{モーイ}えー拌^{モーイ}ーが行ぢゅしがや、私つたー子ー

アンぬ子^{モーイ}どうやんでい。

うりやたんでい。片足^{モーイ}ー下駄^{モーイ}くでい、片足^{モーイ}ー草履^{モーイ}く

でいてー、うんぐどうーー歩^{モーイ}ー歩^{モーイ}、むる世間^{モーイ}なかい笑^{モーイ}

りーる考^{モーイ}ーしょー。あんさーにや、私つたーお父^{モーイ}たー

が話^{モーイ}すたしがや、「えー、いやーんぐどうーー歩^{モーイ}ー歩^{モーイ}、親ぬちやー

までいん恥じかさんどーー」

「あ、親ぬる買^{モーイ}ーてーくまさんむん」ち。

あんさーに、またや、着物^{モーイ}くしらんなどうや、

しーじやぬんかいや綿^{モーイ}ーいくしたくどうや、あん

さーに布ぬあたん^{モーイ}でい。布^{モーイ}いっべー、どうーいっべー

絡^{モーイ}まちやーにや、しぐ、みーむんぬあるどうくまんか

い行^{モーイ}じやーにや、親ぬちやー取^{モーイ}かかちスーたん^{モーイ}でい。

布^{モーイ}ひつ絡^{モーイ}まちでー、どうーぬいっべー。

なー、うつさるばー聞^{モーイ}ちえーるむん。どうーぬー門^{モーイ}

やしそーやー、モーイー。

〔共通語訳〕

そこはね、豊見城殿内^{モーイ}で、そこにあるよ。チユイ
豊見城^{モーイ}といつて、そこにあつたんだよね。あちらは、
うちの本家はそこになるわけだよ。ここはまたモーイ
親方の家なんだけね。それで、本家を拌みに行つた
らね、そこのおばあさんが、

まーづ フダカチャー 未詳

まーづ 「どつちが手がよく鳴っただ

言^{モーイ}したるむんぬ、えー、あと一拌^{モーイ}ーさ。私つたー

豊見城殿内^{モーイ}えー拌^{モーイ}ーが行ぢゅしがや、私つたー子ー

アンぬ子^{モーイ}どうやんでい。

うりやたんでい。片足^{モーイ}ー下駄^{モーイ}くでい、片足^{モーイ}ー草履^{モーイ}く

でいてー、うんぐどうーー歩^{モーイ}ー歩^{モーイ}、むる世間^{モーイ}なかい笑^{モーイ}

りーる考^{モーイ}ーしょー。あんさーにや、私つたーお父^{モーイ}たー

が話^{モーイ}すたしがや、「えー、いやーんぐどうーー歩^{モーイ}ー歩^{モーイ}、親ぬちやー

までいん恥じかさんどーー」

「あ、親ぬる買^{モーイ}ーてーくまさんむん」ち。

あんさーに、またや、着物^{モーイ}くしらんなどうや、

しーじやぬんかいや綿^{モーイ}ーいくしたくどうや、あん

さーに布ぬあたん^{モーイ}でい。布^{モーイ}いっべー、どうーいっべー

絡^{モーイ}まちやーにや、しぐ、みーむんぬあるどうくまんか

い行^{モーイ}じやーにや、親ぬちやー取^{モーイ}かかちスーたん^{モーイ}でい。

布^{モーイ}ひつ絡^{モーイ}まちでー、どうーぬいっべー。

なー、うつさるばー聞^{モーイ}ちえーるむん。どうーぬー門^{モーイ}

やしそーやー、モーイー。

まーづ チー・アン 未詳

「なんだい、（今まで）拝みにきたこともないのに、こ

こに拝みに来たのかね」とね。それでも、なにかしら拝んだけどね。その跡をなさっているおばあさんがね、那人一人だけいたんだよ。そして、それからはもう行かないけどね。すぐ豊見城殿内のそば。ほら、そこはなに殿内といったかねえ。「そこもだよ」と言つてゐるもんだから、ああ、しまいには拝んだよ。うちは豊見城殿内は拝みに行くけどね、うちの家系は乳母の子孫なんだつて。

こうだつたつて。片足は下駄を履き、片足は草履を履いてね、そうして歩いて、世間中に笑われようといふ考へでね。そうしてね、うちのお父たちが話していたけど、

「おい、おまえのように歩いたらね、親まで恥ずかしいよ」

「えつ、まさにその親が買つて履かせたものなのに」と。

そして、またね、着物もこしらえてもらえないくなつたのでね、兄さんたちには縫つて着せていたので、それで布はあつたんだつて。布をたくさん、体じゅうにまきつけて、そして、見世物のある場所に行ってね、親たちに恥をかかせたんだつて。布をひつ締ませてね、体じゅうに。

もう、これだけしか聞いてないので、自分の一門なんだよね、モーイは。

② 試験の失敗・難題

知名タケ（明治四十年生）越前

ヨーポット・イポット・イ　未詳。姓などのよろこびをもつてまとまらず、頭がうまく働かなかつたということを言ったものか。

あの、お父さんとお母さん、この貰取りにいくさーねー。なにかねー、昔は貰取るさー、これ取りにいつたわけさー。学校のあれでしよう。取りに行つた試験しに行つたけど、できないさーねー、このモーイはモーイはできないから、帰つてきたら、人はできていないのに、この人（モーイ）できないさーねー。だからお父さんとお母さんが叱つたわけ。叱つたら、このままでモーイという子はよ。

「これお母さんが、僕にあんまり白いお肉ばかり食べますから、この脳がボットトイボットトイなつてできなかつた」って。そんでからこのお父さんに、お母さんは叱られたわけさ。そんでこのモーイは、こんなこんなしてしよつたさーねー、このモーイはよ。そんでから、このお父さんがさ、お父さんが今度別に、「どこかになにかしてちようだい」と言つたがさ、

「雄鶏が卵作つて、雄鶏が卵産んでつて」言つたさーねー。だからこのお父さんに言いつけたのがさ、また鶏、あれが、

「縫なにかで縫作つて」って言つたわけさー。だからこれもできないさー。できないわけ、このお父さんがは。だからこのモーイという人はよ、

「くれー私が簡単作い（これは私が簡単に作る）。これ簡単にできる」と言つたつて、

「いやーぐどーるふらーがん簡単にならないんなー（お前

のような愚か者でも簡単にできるのか」と言つたからさ、「私がすんち（私がします）」と、言つて。そんでから、この雄鶏の卵は、どうして自分で作つたのかね。卵も産んで、自分で卵も産んで。またあの細は、細さ、あれ燃やして、本当、この細が作られていた。ん、こんななだつたよ。これ、これ、モーイの話、こんだけは聞いた。

③ 歌会・難題

山内盛福（大正二年生）南林原

モーイ親方ね、伊野波盛平。あの人気が非常にまたうんな、そう頗るとかなんとか、話はあるでしょ。モーイの、もう、あれも、このまま芝居みたいにしていたと思うんですよ。芝居なんかもね。あの人にはもう有名ですよ。薩摩とのね、王様の代理で行つて、なにしたというの。

これも本当は、もっと先輩の方々に聞いた方がいい。

歌詠むにしてもね、このモーイは、この王様から、「いついつか一ね、琉歌のこの歌会があるから、銘々考えてきなさい」と言つてね。モーイは、それで、家

来てね、いわゆる奥方にもうそ言つたんでしょうね。いわゆる「いついつか」と。それだけ、モーイはね、その頃、琉歌を考え、歌を考えようとはしない。まあ

お城から下がつてきたらね、まあ、ちょっと腕力をしたりして、ただもういるもんだから、奥さんは心配し

てね、もう、なにしたんでしょうねえ。

「近いうちお城で歌会もあるというんです、あんたはそんなにしてね、なにもお酒ばかりあがつていいですか」と言つたらね。そうして、モーイは、「うん、大丈夫だ」というふうにして、なにしたと。それまで、おそらへは、たんなる作りごと、言い伝えだろうが。

そして、当日、お城に行つて、銘々歌を発表して、自分の自作の歌を発表したらね、モーイが、言つたのがあるんすよ。

高枕かきてい 歌詠まんさしが

詠みはていてい無ん 曽ん人ぬ

（高枕で歌を詠もうとしたけれども
詠みつくしてなくなってしまった、昔の人の歌）

と。昔の人がと。まあ、文に書いたらそういうふうになるけども、音読みで、琉歌の読み方。そういうこともあつたそだとか。

そこで、王様がいて、薩摩に行つてね、なにした場合、むこうの殿様から、

「恩納岳を持つてこい」と言つたら、「できるか」と言つたら、「できます」と言つて。

「いやあね、じゃあそれ、間違いないな」と。

「間違ひありません」と言つてね。

* 1 伊野波盛平 モーイ親方のこと
（一六四八—一七〇〇）毛氏八世、唐名毛克盛。三司官を務めた上源士衡。

※ 2 琉歌 おもに布美や沖縄で伝承される短詩や歌謡の総称。和歌に対する謂。一般的に琉歌という場合、八・八・八・六の四句体三十音の伝型で、個人の感覚を叙情的に詠むものを指す。兎賀 四季、恋など題材にするほか、教訓歌や泡浦にまつわる歌などがある。

「じゃ、それをね、これだけはまた、薩摩の殿様が、それを運ぶ、恩納岳を乗せるほどの大さの船を、どうぞください」と言つてね、恩納岳を運べるくらい船ないでしょ。それ、薩摩の殿様がまいったとかね。いろんな話があるでしょ。

それで、

「雄鶏の卵を持つてこい」と言つたらね、

「そんな難題もちかけるか」と言つてね、

「ああ、それはね、実は、そのことなら」モーイ親方

の父も三司官だからね、

「父が今、妊娠中で、私が代理で来ました」と言つてね、

それで返答したと。

「おい、いくら琉球でも、男も妊娠するのか」と。

「じゃあ、殿様そうおっしゃるが、雄鶏が卵産みます

か」と言つてね、返したとか。もういろんな話が。こ

れ首里の方面の方で聞いたほうがいいと思うよ。

渡瀬敷ベーケーとモーイ親方とはね、モーイ親方、

もう三百年前の人で、渡瀬敷ベーケーは、せいぜいもう、今からもう百三、四十年前まで生きていた

はず。時代がちよつと違うがね、この二人は、もう。

(4) 親の字

玉城カヌ（大正十年生）美里

琉球はね、たいへん優れているわけ。なぜならばね、漢字をほとんど琉球から出ているわけ、最初の漢字は。なぜ信仰が深いから言つたらね、琉球は、信

仰深いでしょう。なんでもウーツー、ウーツー

トウでしよう。そしたらね、

「漢字の『親』つていう字はね、大事にしなさいよ」つ

て。なんのために親。

「いつた一やひやー、トートーメーなでいやー、木切

らーんでい言ゆーしがてー、木切らーじやないよー（お

前達は、位牌を目の前にして、木切れって言うけどね、

木切れじゃないよ）。あんたがた、あのこの、親つて

いう漢字はね、最初、だー、なに書くかつて言つたら、

「立つて木の上で見る」が『親』つていう漢字でしょ

う。だからね、たとえ位牌なで、木んかいの名前あ

いしが（たとえ位牌になつて、木にしか名前がなくて

も）、うん、いつも自分の子孫をどんなにして暮らし

ているかねーってね（見守つて）。だから親つて

いう、親は大事にしなさいよつて。「立つて木の上で

見る」が『親』でしよう。これ、モーイ親方が出したつ

て。

(5) 工工四はじめ

町田宗勇（大正六年生）中の町

あれもモーイ親方が造らしていらっしゃい。三味線

じゃない、その音譜を出したのは。あんたがた、あの

う、なんか、歌を歌うとき音譜がないと歌えないで

しょ。三味線も、琴もできないでしょ。あの音譜をだ

したのは、モーイ親方。

※1 渡瀬敷ベーケー（一七五〇）
一八四四年里恭田村の渡瀬敷兼倫の三男。北谷間切真榮城の名島を廻り、真榮城に改姓し北谷に隸属する。ベーケーは士族の位牌のひとつである親雲上をい。モーイ親方と並ぶ笑い話の主人公で、頗る才覚ではなく、おどけ的な性格が強い。

※2 ドードー、トウトウー 神仏や、先祖を拝むときに発する言葉。あなた尊ご。まだ、

おまわ行うこと。

※3 位牌 死者の名前や死名を金文字で記した朱塗りの木牌。方言でイヘー、イエー。トートーメーともいう。

※4 音譜 沖縄の三味線で用いられる工工四のいじ。

[乙] 渡嘉敷ベーケー

(1) 渡嘉敷ベーケーの事績 (モチーフ複合)

鷹汁・基打ち・低頭門・根はどこか
島袋吉盛 (大正十三年生) 南桃原

渡嘉敷ベーケーの掛軸というのは、今あつたら、相場がないつてよ。那覇あたりに、この渡嘉敷ベーケー

の掛軸持つている人がいるといふんだがね、いくら値つけても売らんつて、譲らんつて。もう、滅多にああいう字はないよう字でね、昔の人で。

で、この人は、ベーケーというの、当時の首里務めの、なんという、職名じやないかと思うんだが。ベーケーというのは書記官の位の名前さね、今から言うと。親方に近いような身分じやなかつたからと思うんだが。親方は一番上さーね。親方の上に三司官がいる。三司官がいて、表十五人と言つて三司官の下にまた、今県会議員のみみたいな人。

ベーケーはとても王から信頼が築くてね、この渡嘉敷ベーケーがないと王はもう絶対。もう、なんという、この人を頼らんと生き甲斐がないというか、とにかくとも、なんといつても偉かつたんじよ。うね。だから、この渡嘉敷ベーケーはね、とても王がお気に入りで、おんせね、坊主御主と言つて。坊主御主といふのは、あんたにいい着物をあげようね。もう、あんた、着物、きれいなもんからあげるから」と言つて、着物を褒美

にくれたら、で、

「私はこんな上等着物着けるんだが、私のアヤーさーね」アヤーというのは奥さんのこと。アヤーさーね」と言つて、アヤーはもうみそばらしいものを着せるのかなあ、これじやあ不公平だねえ」と言つて。

今からいうと民主主義だね、ほんとね。で、「アヤーは」と言つて、しょっちゅうアヤーのことばかり心配したら、王も、

「そいやアヤーのものも準備して持たしてあげなさい」と言つて、アヤーのもんまでもらいよつたつて、奥さん。

これもあるし、それからまた、また褒美くれる場合ね、兵糧と言つて、お米、粟かもしらんが、内容は、これ一俵くれよつたつて。で、一俵くれたらね、馬さーね、鞍かけて馬を引つ張つてきよつたつて。で、この鞍には一俵なしたら、あつ側はかたちんぶーなつて(偏つて)こう、片一方なつて安定して歩かんさーね。と、バチナイ(ばちばち首をさせて)馬を叩きよつたつて、

「なんでの馬ぐわーは歩かんか」
「それじゃあもう一俵くれてあげなさい」と言つて、またもう一俵くれよつたつて。だから、とんち、頭良かつたんだじよ、こつちが。

そうしたり、それからまたあの、水戸黄門みたいな人さーね、坊主御主と言つて。坊主御主といふのは、おんせね、今の天皇家みたいな、天皇が亡くなると後を維ぐというような系統じゃなくして、沖縄でも、一応

*1 渡嘉敷ベーケー モーライ親方と並ぶ笑い話の主人公。嘲諷的ではなく、おどけ的な意味が強い。

*2 那覇 琉球王国の都。王が居住する首里城を中心とする。近世から現代を通じて商業、経済の中心として発展する。

*3 那覇市 琉球王国において、国王と位の位階。また、間切の地名間にたいする呼称。

*4 聖方 位階名。王子、挿司に次ぐ高位の位階。また、間切の地名間にたいする呼称。

*5 水戸黄門 みどりのむらむら 水戸藩一代第3代藩主徳川光圀(とくがわ みつゆき)のいふ。史籍とは異なるが、トレンドラマの時代劇においては、光圀は徳川の二房院に育つて、供奉連れて日本の各地を旅したとあります。

*6 坊主御主 第二尚氏王統十七代の王、尚源王のこと。(一七七八~一八三四)。在位は一八〇四~一八三四。尚源の第四子。一八〇三年、十七才で王となる。一八〇四年に病にかかるで王となる。

「自分はもう疲れて隠居したい」という場合は、一応、子どもか誰かに王の位をね、譲つて、自分は髪を剃つて、坊主みたいに。だから、坊主御主というのは、坊さんになった御主という意味さーね。で、坊さんみたになつて、世の中をこう、隠居しながらも黄門みたにあつちこち歩きよつたつて。いいことをするものは問題じやないが、悪者を、こう、見たりして。その場合、この渡嘉敷ペークーはやはり、坊主御主ともどつても仲が良くてね、坊主御主に、「今日は鷹の御吸物ね、鷹の御吸物をあげるから」と言うて呼んで、轟を御馳走しようとしたら、この坊主御主が取つてきた轟をね、女中さーねー、召使い。これが轟の肉は上に浮くらしい、上に。上に浮くというんだから、この召使いは「下に沈んでいるもんだけれど、上のものは問題じやないんじやないか」と言つて、上のもの全部味したつて。下に残つたの、大根ばかり残つてね。で、この坊主御主もさー、下に沈んでいると思って、轟の肉は。で、渡嘉敷ペークーを呼んで、あの、この、

「今日は轟の御吸物だよ」と言うてあげたら、もう、いくら食べてても大根、大根ぱつかりさーね。で、もう、渡嘉敷ペークーは、結局ジンブン（智恵）もあつて、頭も頼むといつから、「いいよ、今日はもう黙つて大根ばかり御馳走して」もう、喜んで御馳走になつたといつて帰つてね。

したら、またいつか呼んでね、この坊主御主。たぶん、桑江（まへりや）というさ、渡嘉敷ペークー、桑江のあたり、

今、桑江中学校があるさーね。上方に軍病院があるさ、あの辺が桑江という一帯さー。で、坊主御主呼んでね、「今度ー（こんどは）、私の出番」と言うて坊主御主呼んで、

「轟がいっぱいいるからね、桑江には、轟を弓で取りにいらつしやい」と言うて呼んだら、大根畠に呼んでね、

「轟がたくさんいますよ、坊主御主」と言うて、こうやつたつて。で、あの向こうで大根喰わしたら、今度はまた、「これ大根じやないか」と言われんわけさーね。

「あんた、轟喰わしたじやないか」つて、「これも轟よ」という。それで、どんちはどんちで返したというが、この渡嘉敷ペークーの、結局頭の良さとどんちの良さじやなかつたかね。これ物怖じしなかつたつて。

よく、だから、王の人ともね、五目しようつたといふんだがね。あれつてよー。王にもね、「いやー負きどーんやー（お前負けているな）」とか言うて、もう敬語は使わんで、おんなし、おんなし、同士みたいに言葉使いしようつたつて。もうしょっちゅうね。もう夢中になつてゐるわけさーね。で、王の方もおもしろいわけさ。こんなして本当、おんなし気持ちでね、五目を打つてくれる部下というのはいないさーね。あんまり人間、敬いばかり、敬遠されては困るさーね。なんという、一人もなつて。で、どつても喜んでいるうちに、部下がね、

「王の場面に対して、あんまり無礼じゃないか、失礼じゃないか」と言うて、まあ、牢屋^{らうや}というのはあの言ひ過ぎかもしらんが、とにかく、謹慎じゃないかね。「おまえ、もう王とは会うな。無礼のさんざん見苦しいよ」というふうに、謹慎処分でしたらね、もう渡嘉敷ペークーは王に会えないわけさーね。」「あんた王に対して無礼千万だから、見苦しいから」と言うて、謹慎処分にしたら。王はね、部下に、「呼んでいらつしゃい」と言って、また呼ばしようつたて。だから、渡嘉敷ペークーというのがないと王はもうたいへん寂しかつたんじやないか。話もうまいし、すべてはもう、夢中で一生懸命王と相手するから。たぶん、側近中の側近で、とてもどんちもいしい、偉かつたんでしようね。普通ならね、王にもさり、さりして物も言いきらんぐらいだが。渡嘉敷ペークー、ペークーは、今の民主主義じゃない、こういう人ね。ほんどの民主主義の偉い人。これが渡嘉敷ペークー。

あれは、それもあったね。坊主御主^{ぼうしゆしゆ}は、だから、渡嘉敷ペークーの屋敷によく通うもんだから、この、

知らんが。とにかく、結局こう、礼やらんと入れないようなこれ、させようと思つて、ちよど家の入口にね、これもう、竹でやつたか、どんな細工でやつたか

「なんで人の屋敷内に腐りむん、こんな下げるか」と言うて。で、ペークーはまた、「うん、これは、私たち、根っこは私たちのもんだのに、私たちの勝手だよ、なあ。取ろうがどうしようが私たちの勝手だよ」と言うてやつたら、それから、その次

作るもんだから、どうしても頭下げんど入れない状態をからはね。

を作つて、
「坊主御主が御礼しようつた」とか、と言つて、もう大笑いして。この坊主御主はもういたずら半分に、冗談半分に弱らしたわけさー。うん、こういう話だね、あれ。

隣の人のね、蜜柑^{みかん}が、結局、渡嘉敷ペークーの屋敷内に入つて、この蜜柑を取つて食べたらしいさーね。これ結局ね、法的にも、屋敷内に入つたものは取つて食べていいらしいね。例えば、こつち隣の屋敷^{こつち}ちは私たち自分の屋敷と言つたらね、根っこはこつちに入つていても、こつちで実ついた蜜柑は取つて食べていらしく。そいで、ペークーは食べたつて。自分の屋敷内に入つている蜜柑は。で、隣の人が、もう、うんと怒つてね。ペークーは、

「私たちの屋敷内に入つているもんは、もう、私たちのこれは所有物になるから」と言うて、オーエー（喧嘩）に負けんでやつたらしい。そいやあ、向こう頑張るもんだから、なにか、豚か山羊かの廢れものをね、今度は竿にさげて、根っこはこつちからね、あのこうやって、向こう側の屋敷に垂らしたら、向こうはまた文句言うさーね。

まーさり も。口上に話かけるときなどに男性が発する敬語。

「これを取つてくれ、ペークー」と言つて、で、

うねえ。ところがよその撰政三司官が聞いて、

「あ、これはまずい。なんで王様に向かつてそういう
ふうな言葉使うか」って言つて、

「それじゃ私たちの屋敷内に入つた蜜柑は全部取つて食べて」。いい条件を作つて、うん、これ取つたといふ。これ、話があるね、んぢや。だから、屋敷内に入つてゐるものには取つていいらしい。

「なんであんたは王様に『ひーひーするか』
あるいは、

「煙でもね、こういう煙があるさーね。だからこの烟に邪魔になるぶんだけは、木でも切つていいらしいという話、これからじやなかつたかね。例えはこつちに山があるさーね、こっち、烟があるさ。この山から入つた木の枝を切つていいらしいというのも、これもペークーの後じやないかね。烟に邪魔なる木の枝、

「悪口言うか」ちゅうふうに、叱られたそうです。
「いや、それじゃあ私はもうやりません」と言つて、渡嘉敷ペークーはもうお家帰つたらしいです。で、王様がまた今度撰政三司官を呼んで、

「なんで渡嘉敷ペークー帰したか」

「いや、あのは王様にこう、『うふうな、おもわしくない』ような言葉使うから帰しました。」「じゃあ、あんたがたが私の相手するか。私はペークー以外には相手はおらんから、必ず呼んでこい。ほんで呼んできて。ところが

② 基打・一人問答・褒美の片荷

渡嘉敷百魚（大正八年生）泡瀬

渡嘉敷ペークーちゅう人はとても頭がいい人で、なんも役員ではなかつたらしいんですけど、『収録がテー
ブA面B面交換に当たり、一部欠』

ところがね、そういうふうなゲームは、よう言いま

すでしよう。「ほいひやー」とか、「ほかやろう」とか、

あるいは「なにか」つち、こういう風に。この癖があ

りますね。で、渡嘉敷ペークーのおじいが、なんか王様に向かつて、

「はい、王様ぐわー」とかなんとか言ゆうたんでしょ

「いやあ、来ます」言つて、

来たところが、とにかくまあ、うちの中にたくさんご馳走作つて、誰もおらん。ペークー、うぬ（この）

人はちょっと頭がいいですから、なー（もう）、自分自身もの言いかた（自分自身にものを言う様子が）で

すね。

「はい、ペークー やなまどうちやーびたんどー（はい、ペークー は今来ましたか）」

「おー、入れー、ペークー、おー（おお、入りなさい、ペークー、そら）」

「じゃあ、あんしぇー入びら（じゃあ、それなら、入ります）。今度、入つてから座つて、

「はー、んなー、ぐすー やめんしぇーびていー（はあ、皆は、こ一同はいらつしやいましたか）」と言いまし

て、それから、

「ペークー 食めー、いやー ゃんちやくとう（ペークー 食べなさい、さあ）といったら、

「おー。はー、くわつちーさびら。あ、にへーでーびる（こ馳走になります。有難うございます）。で、ペー

クーさんは、それを自分で食べられたらしいそうで

す。それを見た王様が、

「これは頭がいい、とんでもないことをした。で、王様が出てこられて、

「あ、おまえには負けた」って。

「今度は主様にお願いがあります」言うたら、

「なにがあるか」って、

「お米をください。私たちはお米がないから、お米をくらさい」って。その約束は十分はたして、できました。で、明日は馬持つていつてお米もらいに行つたらしいです。行つたところが、たつた一俵もろうた。

あんとき負ーしー荷つてね、負ーしー荷つて馬に、背中に乗せるでしょう。それやつたところが、一俵もろ

たんで、わざわざペークー考へて、馬ひつくり返ら

たそうですよ。んで、王様が、

「なんで、ペークー」言つたら、

「あー、このやな馬ぐわーは、これ、聞かんあいびらんさー（ああ、このしようもない馬めは、言うことを

聞かないですね）」

「どうして」

「なー、片荷重さぬ歩かんでー言やびーさ。なー、俵くみそーれー（もう、片側だけ重くて歩かない」と言つていますね。もう、俵くださいませんか）、それで同じくなるから。歩きやすいから。なー、俵くみそーれー（んちやくとう（もう、俵くださいませ））といつたので、

「お前は偉いなあ、よくわかつた」という風な話もあつたですね。もう、俵もろうて、今度はもう、ちやんと両方にくつておつて、

「じゃあ、有難うございます」という風に言つたらし

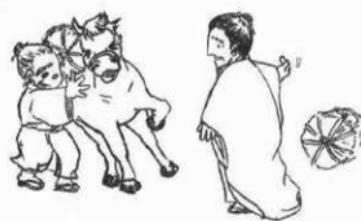
いですけれど。

「お前は偉いなあ、よくわかつた」という風な話もあつたですね。もう、俵もろうて、今度はもう、ちやんと両方にくつておつて、

「じゃあ、有難うございます」という風に言つたらし

いですけれど。

③ 低頭門・馬勝負・根はどこか・難題・褒美の片苟



宮里勇緒（明治四十一年生）比原根
(渡嘉敷ペークーが王様に)頭を下げさせたという
ことを聞いたんですよ。それでみんな、友だち同士が
集まつて、

「僕がいつか王様に頭下げさせる」って、

「王様があんたに頭下げるか」いうてね、冗談でも友

まーはー、ペークー や、なまどうちやー
びたんどーーあ、にへーでーびる
この一連の語彙文は、ペークーの一人間
答である。王が計りうて、おら、まともな
御馳走をまくさん用意したまじ、無理の
屋敷にペークーを招きさせ、どうするの
か悩んだのだが、ペークーはひるむひと
なく、自分で主人と客の二役を演じ、平
気で御馳走をたべたのだ。

だち同士やつたらしいが。
まず生活は貧しかったか、それはどうか知らんが、
非常に低いお家だった、高さがね。そこで、王様がこ
う言いよつた。

「今日は非常に用事で、あんた、すみません、お家ま
で来てもらえません」言うてね、そうしたら、おそる
おそる、付き添いもあれして。して、(ペークーが)
「ここにおるから入ってきてください」んち、座つて
おつてね、いたら、うぬ屋根、家が低いもんだから、じゅ
んに頭を下げて入つたというがね。あんねー、で、
「ようこんなことができたね、あんた。そんなお家に
王様招いたのかい」とて、ありました。頭ほんとう
に下げなければ、もう、頭が危ないしわ。いうふうな
話は聞きました。

(渡嘉敷ペークーと王様の関係は) とんちの人だか
ら、非常に有名のあれで、関係があつたんでしよう。
あれもありましたね。ということはね、雌馬を自分
持つていつてよ、ちようどさかりの頃の馬だつたで
しよう、雌馬がね。もう、本当に競争やつたら、もう、
勝負にならない、有名な馬ばかりだから。だけど、雄
馬の五、六匹並んでねこの馬の後からついてきたつ
て。ペークーが乗つた馬は。だから、あれで、もう勝
負は決まつたと言うてね、ことは聞きましたよ。ちよう
ど、さかりのときには、さかりの馬やつて。
それではまた、もうひとつまた聞いたんだが、お隣

と、隣の家と非常にくつついていてね、そつて隣の果
物か、ミカンかなにかは知らんけど、果物がね、ペー
クーの屋敷にいつて、ぶら下がつていつぱいでききた
の。隣のものが。

「あんた、僕の屋敷にあんな実ができるから、僕に
もくれんか」言つたら、「根元はどうにあると思う」って、隣の人、相手しな
かつたつて。

「そうだね、根元はあんたのとこだね」言うてね、そ
の日は笑つてます。それで、そのあと、なにか探
してきたかどうか知らんが、猫の死んだのをね、持つ
てきて、大きい竿にかけてね、下げて。で、根元は自
分の屋敷に立てて、ぶら下げて、隣の屋敷にやつたつ
て。それで隣の人怒つてね、

「あんた、どうしてこんなところにこんな汚い動物を
下げて、死んだの下げるか」いつて、

「あ、そうですか。これ、根元は僕のところですよ。
なにもあんたに関係ないですよ」言うてね、という話
聞きました。必ず、死んだ猫ね、あの、大きく、長い
竿でぶら下げてきて、こうして、隣の屋敷にやつたら、
もう、臭いでしよう。で、怒つてたら、

「根元見てごらんなさい。どこに根元があるか」言つ
て、自分やられたから、ああいつてまた返答したとい
うような話。あんなことやつたでしょう、あの人なり。
とんちがどうもこうならんかな、あんな人とは。

「山ど、灰で網をぬつてこい。また、雄鶏の卵」この
三つ注文されたの。薩摩から。それで、もう、王様は、

率一「山ど……」後半の難題を解く部
分は、調査者に難題の話を振られて語り
だしている。

「これはひどいことなつた」言うて、もう、閑僚集め
てね、

「どうしようか、この注文。皆で思案してくれんか」
言うて。という中から、また、ベーケーがね、「んー、僕が引き受けましょ」言うてね。ご飯食べ
ているときに、「山と灰と雄鶴の卵」と。

いよいよその、鹿児島から使者が来る日になつて
よ、いよいよ首里御殿に来たので、待ちかねておつた
ばかりに、

「じゃあ、どうしました。雄鶴の卵できましたか」つて、

「うん、今、準備中だが、お父さんが今、出産するた
めに苦しんでおるから、ちょっと待ってください」言
うたら、

「このやろう、男が子を産むか」言うてね、怒られたつ
て。

「ああ、そうでしょう。雄鶴の卵もお父さんもおん
なじじゃないですか」言うたらね、「一本、やられたなあ」言うて。そんで、山はもう、
どの山だったかなあ、
「移すことにできるか」言つたら、
「できます」結局、

「その船を持ってきてください。すぐ移しますから」

言うてね、したら、これでも、もう、らちがあかん。
最後の繩は、立派に作つてあげてね。ぬつた繩を火で
あぶつて焼いて、
「受け取つてくれ」言うて。そのまま、皿の上に置い
たままね、あげたから、

「かしこまりました。もう、今度は負け」といつて帰つ
たらしいんですよ。

褒美は、そうですね、米一俵だったかなあ、

「これでは持てないから、あと一俵はあげたら、馬も
よう持てる」といつて、またあと一俵もらつて、いつ
たという話もありましたよ。片一方になつて運ぶこと
もできないがね、二俵なら大丈夫、平均がとれている
から、家まで届けるから言うて、二俵もらつて行つた
という話がありましたよ。

(2) 辻通い

① 立ち合い・辻通い

方言原話

金城水保(明治四十二年生) 松本

東一辻、仲島、渡地、那覇にあつた三ヶ所の遊郭のこと。辻は波の上宮の近く、現住の那覇市辻のあたり。仲島は現在の那覇市泉崎二丁目。渡地は現在の那覇市東町の一部。

来るのヨリ 遊び

来るミースチャ一穴開き銭を組でつ
づつしたもの。ミーは穴、ヌチュンは買
く、穴に通すの寫。相手な六開き銭(通
目錢)五十枚を組でひとつつりだしてあ
るもの。

あれは王様の先生なつたらしい、王様の先生。それ
があまりあの、人間は誠でもあるし、武士でもあるし、
鹿児島に行つたらしいね。それで、棒とあつちの刀と
やり勝負して、渡嘉敷ベーケーに負けたらしい。
誠だから、六十なつてから、飲みあつたらしい、人
にしかされて。もう、そんな飲め一ぬうるもんだから、
男からくわ一奪い取られ、奪い取られて錢ちよつとも
なかつたので、辻、仲島、渡地ぬジユリ、

「渡嘉敷ベーケーぬわきなー、錢わきーくどう寄
ていくー」。だー、ジュリえーいちやんだ物食どうや
しえー、かんし寄でーぎさな、ただ三厘やー、あぬ、
ミーヌチャー三厘、ぬちしん、わかるでしよう。辻ん

か「グンジュー」、仲島んかい「グンジュー」、渡地「かいグンジュー」で。

うり、けー下りていちやーに北谷うとーていハル サーそーたんで、うぬつ人よ。あとー、うぬ人がちみてーるジユリアンマーや、とー、昔えまじむしえー覚びらに、船まじん。うりてー、覚びらんてー、姉さんたーがー。

くぬ、くまんかいまじむてーくどうや、くぬ庭だんかい。とー、ジユリから錢取り返するたみに。まじん抵当さーに、
「錢の一貸らし」んでー、どうーぬ呼でーるジユリアンマーから。さくどう、うりやでー、なー轟びかーんまじりよー。あんさーに、
「とー、なまやさ、くぬまじん」。払うーさんくどうやー、くぬまじんけー取つちーに、いーぬ取いけーさつとーたんだい。あいいどうぬ武士やてーぎさん。いつべー人助けやーてーる。鹿児島ぬ殿様んうぬ人がる負かちよーんでい。

北谷育ちそーるばーてー。子孫まんどーるはじでー。

〔共通語訳〕

あれ「渡嘉敷ベーク」は王様の先生になつたらしい、王様の先生。それがあまりあの、人間は誠でもあるし、武士でもあるし。鹿児島に行つたらしいね。それで、棒とあつちの刀と勝負して、(鹿児島が) 渡嘉敷ベークに負けたらしい。

誠の力だから、六十なつてから、飲み合(勝負)をしたらしい、人にそそのかされて。もう、そんなに飲めないもんだから、男から奪い取られすぎて、奪い取られて金が少しもなかつたので、辻、中島、渡地のジユリが、

「渡嘉敷ベーク」の分け前、金をわけるから寄つてきな」。ほら、ジユリはただの物に目がないからね、こうして集まつてたらしく、たつた三厘(百五十文)ね、あの、ミーヌチャー三厘分、穴開き錢をつづつたもの、わかるでしよう。辻に五十文、中島に五十文、渡地に五十文、と。

渡嘉敷ベークは、「田舎に」下りてきてしまつて、北谷で農業をしていたそーだ。この人は。しまいには、渡嘉敷ベークがよく通つていた遊女の抱え親は、ほら、昔は稻を積みあげていたのわからないか、稻まじん。それだよ、わからないか、姉さんたちには。

この、ここに稻を積んでいたからな、この庭々に。そり、ジユリからお金を取り返すために、稻束の山を抵当にして、

「金を貸してくれ」と、自分が呼んだ抱え親に。すると、これなんだけど、もう裏ばかりが混じつていてね。そうして、

「ほら、今だよ、この稻束の山」。払いきないのでね、この稻束を取つてしまつて、(一度はジユリにお金を取られたので) 同じような仕返しをしたそーだ。そう

いう武士であったようだ。たいそう人助けをした方である。鹿児島の殿様もその人が負かしたんだと。

*1 グンジュー 金銭の単位。場目銭五十文(五十枚のこと)。寛永銭一厘(一枚)に換算される。ごく少額の金であることを意味する。

*2 そりてい 首里を離れて北谷間切に住むことになつたことを指している。

*3 ハルサー 烟仕事、あるいは煙仕事をする人。ここでは煙草仕事をしないことをあらわしている。

*4 ジュリアンマー 姉女の抱え親。すべて女性で、遊女や母子を養った關係を結び、アンマー(母親の意)と呼ばれる。

*5 ラウジン 収穫した稲茎を束ねたうに積み上げたもののこと。文中の「まじん」も稲束の山を指す。

*6 北谷 沖縄本島中部の地域名。また、現在の北谷町にある名前の別称「ちゃんと」方言「チャタン」。地図名、行政区画名などして、近世に北谷町、現在は北谷町。第1次大戦が終了後、村域を云するかたちで米軍軍事基地が建設されたため、北側は分離して嘉手納町となる。字として、北谷マスク南側に広がる古い集落で、近接する伝道集落五代勢集落と統合させて北谷三箇(チャタタサンカ)と呼ばれた。

北谷育ちでいらしたわけだよ。子孫がたくさんいるはずだよ。

② 辻通い

当山全榮（明治四十年生）泡瀬

〈方言原話〉

船頭ふなつ 向むかこうんじ、その、銭の一儲しゆきていちやく
とう。あんさー今度こんどーまた辻つじかいくまやーい、うぬ
銭のーむるうちゅくわくへい。あんさーい、この、んな
どうーから通とおがた、北谷きたやぬんかい來きんでい。うぬ話はな聞き
いたことがある。

儲じゆきて、全部じゅぶん。あんさーい、残のことーるダンジュー
んむるうち捨すてていやーい、なんどうーから歩あるつから
てい、北谷きたやかい來きー。から、やつばしあの、北谷きたやぬん
かい帰かたん、元もとぬ生なまり島しまぬ帰かたんでいる。話はなあるばー
てー。

船ふなぬ船頭ふなつ、船ふなやたん。言いえば、唐からかいぬお使つかいつ
し、船ふなぬ、いわば船長ふなぢょうさんやるばー。

〈共通語訳〉

（渡嘉敷ペークは）船頭ふなつをしていて、向むかこう（唐から）
に行はって、金を儲けてきたから。そして今度こんどは辻つじにい
りびたつて、その儲けてきたお金はすべて使い果たし
てしまつて。そうして、すつからかんになつて、北谷
に來きたそだ。その話を聞いたことがある。

儲じゆけて、全部じゅぶん。そつしてね、残のこっているお金もみん
な打ち捨てて、すつからかんになつて、北谷に來きて。

だから、やつばしあの、北谷に帰つた、元もとの生まれ故郷むすめに帰つたという、話があるわけだよ。
船の船頭ふなつ、船頭ふなつだった。言えば、唐からにお使いして、
船の、いわば船長ふなぢょうさんであるわけ。

（3）低頭門

① 低頭門

平田盛永（明治四十一年生）登川

〈方言原話〉

あれー、やつぱり、首里しゆり勤こなやてーるふーじやしが、
首里しゆりからー田舍いなかんじ育いくちゅくわくへい。あんさーに
また、家いえぬ前まんかい、くぬ野菜棚のやな、なまにーねーゴー
ヤー、ナーベーラーーーらする棚作たなぐてーしが、うり
ん、また家いえやか低ひく作つくくやーに、人ひとぬ来くわねー、お客さ
ん来くわねー、お客様ひとさんななかうすでいどう入いらりーるあ
たたい低ひくしおーたんたんでいどう。

首里しゆりからー、ペークーいちえーが、

「話はなぬあくどう、ありいちやりわるない」んでいやー
に、首里しゆりからめんそーち、さくどう、偉うい様ようんちやー
ていん、棚たなー低ひざるあくどう、這はーてい入いつちやー
に、家いえつち、
「ぬーが、ペークー、いやーあんし、うまーうんたき
ぐわーちやーひー」
「うー、あんしるないびーる」んでい言いち、物もの笑わられー

東一コーヤー ニガウリ・ウリ科の植物。
番2ナーベーラー ヘチマ。ウリ科の植物。
沖縄の重要な夏野菜。

そーたんでいしが。

あんさーに、また、ペークーどうしんちやーが、

「いやーまた、あんしうりしーる。なーへー高く作

くわりわりやるむんぬ」

「ぬー、うれー、あんしわる、誰やていん私前御礼

しから入る」

うりんなー頭ぬすぐりとーるばーやどう、くぬ

ペークーでいしん。あんし、王様んむる頭下ぎらすた

んでい。いちえーが来ゆーしぇー。

〈共通語訳〉

あの人（渡嘉敷ペークー）は、やはり、首里勤めをし

ていたようだけど、首里よりは田舎で育つほうがいい

と、北谷に帰つていって。

すると、北谷に来たら、（作った）家の（の屋根）も低いし、そしてまた、家の前に、この野菜棚、今でいうと二ガウリ、ヘチマを這わす棚を作つてあるが、それも、また家より低く作つて、人が来たら、お客さんが來たら、お客さんに（頭を）低くしないと入れないくらい低くしてあつたんだつて。

首里から、ペークーに会いに、

「話があるので、ペークーに会わなければならぬ」といつて、首里からいらつしやつて、すると、お偉い様であつても、棚が低いので、這つて入つてきて、家で、

「なんだ、ペークー、おまえはそうやつて、ここをこんなふうにしてあるのか」

「それは、そうであつてこそです」と言つて、物笑いの種になつたそだが。

そして、また、ペークーの友人たちが、

「おまえはまた、あんなに低くしているのか。もう少

し高く作らないといけないので」

「なに、それは、そうすればこそ、誰でも私の前で御

辞儀をして入るんだ」

ペークーも頭が優れていたわけだから、このペー

クーという方も。そして、王様もみんな頭を下げさせたという。会いに来る人は。

② 低頭門

〈方言原語〉

金城真良（明治四十年生）古語

北谷間切にうていや、「北谷間切」一氣高さくとう、出じたい入ぢやい私にんかい御礼しみりわるやる」でい。ナンベーラー棚一低く作くやーに、んぢや、うれー低くとうに頭にかかれー入らんしえーやー。か

んしうつちんきわる入らりーさいや。あんさーに、うつちんぢやーに、ちゃー渡嘉敷ペークーんかい御礼しみたくどう、

「ぬーが、渡嘉敷、あんし低く作くてーる。人ぬどうー立つていー」

「北谷間切一氣高さくとう、うつぢえーひつぢえー御礼しみーん」でいやーに、あんし。あんさーにや、渡嘉敷ペークーんでいる名いり者なでいや。

*一覧編集「沖縄語辞典」によれば Okinawan は「生意氣である。高ぶつている」という意味の形容詞。また、日本には「気」の意味があるため 漢字表現では「気」を当てた。

〔共通語訳〕

北谷間切にいてね、「北谷間切の者は高慢なので、(家)に出て入り入ったりするたびに私にお辞儀をさせてやる」と。へちま棚を低く作つてね、なるほど、棚を

低く作ると頭にぶつかつて入ることができないんだよね。こうしてうつむかないといれないですよね。それで、うつむいて、いつも(家に入るたびに)渡嘉敷ペー

クーにお辞儀をすることになったので、「なんだ、渡嘉敷、みんな低く作ったのか。人が立てないではないか」

「北谷間切の者が偉そうにするから、よしつちゅうお辞儀をさせるんだ」といつて、そうやつて。そうしてね、渡嘉敷ペークーというのはみんなが知る人となつてね。

(3) 低頭門

知念善助 (大正七年生) 古瀬

〔方言原話〕

渡嘉敷ペークーはね、首里城に行つてね、あの、いーねー王んかいどう会ーーさに、「いちぬいつかー、私つたーかいめんそーちいくみそーり。うんじゆもてなししあぎやびーくどう」言つたからね、

「あー、やん、あんやみ。とー、あんしえー、いちぬいぢやー」でいち日や決みやーに。さくどう、うぬ渡嘉敷ペークー、うんにんまでいによ、どうーぬ、

どうーぬ家かいよー、どうーぬ家に座ちよーてい、あ

まからいづちゅーる人よーかがでい入ーるぐどうし、あま棚かちやーに。どうーやまたうまからかんし見ちよーいよー。さくどう、うぬ侍入つちやくどうて、

「あ、うる、こーていどう、入らりーさやー」でい、くんぐうとうー御礼し入つちさくどうよー、「うんじょー私やかたけふのー下やん」でい。

〔共通語訳〕

渡嘉敷ペークーはね、首里城に行つてね、あの、いわば王にだつたんだろうね、

「いつのいつの日は、私たちの家にいらつしゃつてください。貴方様をおもてなしもしあげますから」と言つたからね、

「ああ、そう、そうか。さあ、それなら、いつのいつね」と曰を決めてね。すると、この渡嘉敷ペークーは、そ

れまでにね、自分の、自分の家にね、自分の家に座つていて、外から入つてくる人はかがんで入るよう、あつち(入り口)に棚を作つて。自分はまたそこ(家の中)からこうして見ていてね。そうしたら、その侍が入ってきたのでね、

「おや、これは、かがんでしか入れないな」と、この

ようにお辞儀して入つてきたからね、

「あなたは私よりも身分は下だ」と。

第一回

首里城 第一尚氏 第二尚

氏の主統において琉球國王が居住する城であり、琉球國の行政と文化の中心地でもあった。一九七九(明治二十一年)日本政府による琉球外島十二個島に行政権としめ渡されたが、一九四五(昭和二十一年)沖縄戦で焼滅的な被害を受け、数々の国宝を含むほとんどの建築物が破壊された。また、戦後、琉球大学のキャンパスが置かれ、残存した遺跡の多くが消滅する。一九七七(昭和五十二年)琉球大学が西原町にキャンパス移転をはじめたのちは城跡の復元が図られ、正殿などいくつかの主要な建築物の再建が進められた。現在は国際平和公園として国内外で人気の観光地のひとつとなつてゐる。

(4) 低頭門

富山茂（明治三十八年生）美里
門の入り口を低くして、偉い人を、こう、かがまし
て出入りさせて。あれは渡彌敷ペークーか。偉い人を
礼をさせたと言つて話しておったというような新聞
いいた覚えだが。
(門が低くするのは) かがんで入るから。偉い役人
でもかがんで入るから、偉い人に自分が礼をさせたと
いうふうに。そういう意味。

(5) 低頭門

島袋スミ（大正七年生）越米

といつて喜んでいたというさーねー。ちょっと位の高
い人じやなかつたかねー。誰といつてはつきりわか
らん。
甚(しげ)打ちーがんでいちうまんかい来やーに(甚を打
つといつてそこに来て)、お家が小さいから、こう、
かがんで入るでしよう。そしたら御(ご)礼(れい)してふんとー、
「上ぬ人ぬんちよー御(ご)礼(れい)みしぇーるむん(御辞儀
してほんとは、「位の高い人であつてもお辞儀してお
りになるもの」と) といつて自分でこう、あれしたわ
けじゃないかね。

(6) 低頭門

薄暮教直鬼（大正八年生）泡瀬
これは自分考えが、「必ず御主を頭下げさせる」と。

という風に考えまして、で、御主のほう、まあ、お迎
えしたわけですね、ペークーが。で、そのお家は茅葺
きだから、とつても入口が低いんで。で、ペークーが
家に入つたっても、

「めんぞーれー、うまー」言ーるんしえー(いらっしゃ
ませ、さあここに)と言えば)、言いますでしよう
ねえ。こんどきに、(入口が)低いもんだから頭を下
げて、その王様は入つたんで、「どうですか、今度は私に頭を下げたな」ちゅう話が
あつたわけですけども。ねえ、まだ、たくさんあります
けど、これで終いにしましよう。

(7) 低頭門

嘉陽田朝興（大正一年生）胡屋

そして今度は北谷にですね、桑江の、今、真榮城と
いうところに、この元祖はあるんですね、真榮城と
いうところにあるんですね。

北谷に来て、今度はどうしたかといつたら、門ので
すね、門にはその、人がかがんで入れるだけの門作つ
たらしいですよ。そしたら、そしたらね首里から
ね、いわゆるその首里の侍の連中が、ま、いろんな機
嫌伺いなんかしに来たんでしょうね。そのときにみん
な頭下げてくるもんだからね、

「私の、わしの家來たら、みんな頭下げるなあ」と言つ
て、そういうふうなそのまねもやつたらしいですね
え。偉い人も頭下げさしたというふうなことなん
もあつたらしいですよ。

率1御主 王。ここで特に坊主御主と
あだなされた御主を指している。
率の發端 先祖、祖先のこと。祖先のう
ちの初代、あるいは代々の祖先全体を指
す。また、位牌をさしてケワシと語り
こじとある。

まあ、いろいろこの人は、非常にとんちに長ける。そしてまた、首里から来たのも、そういう首里での、いろんな摩擦があつたですね、あつて、その、どうとう生まれ故郷に帰つたということなんですかね。それぐらい知恵ね、あつたらしいです。渡嘉敷ペークーといつたら有名なんですよ。

⑧ 低頭門

桑江明盛（明治四十五年生）中の町

（人が頭下げて入れる）ぐらいしか造つてなかつたつて。ペークーの家。そして、そつち入るときは、みんなもうかがんで、礼して入るんだよ。

「ぬーがうんぐどう一造つてーる（なんでこのように造つたのか）」と言つたらね。

「皆、私にんかい御礼し入らすんちどう造くつてーる」んでい（「皆、私に御辞儀して入らせようと造つてあるんだ」と）、わざわざ。そういうなにもあるよ。わざわざ低く造つてね、もうみんな、かがんで入るからね。

誰でも、こう、かがんでしか入れないから、そういう話になつておるんだよ。

⑩ 低頭門

稻嶋盛英（明治四十三年生）山里

その人（渡嘉敷ペークー）が今度は、もう隠居をして桑江に帰つてきてね、あれ、自分の家で、今度は考えてね。ちゃーがな（どうにか）どうにかしてもう、王さんをね、頭下げさせるようなことを考えたわけ。それで、自分の家の前にゴーヤー棚ですね、わざと低く、自分の門にね、わざと低くくね。ゴーヤーはそのまま生やして。

そこで、ある日、王さんがね、面会に來たわけね。

「はい、渡嘉敷 元氣やみ（やあ、渡嘉敷、元氣か）」と言うて。そこで、すつかり、ゴーヤーあんまり低いもんだからね、こう、王様（くわうし）すると、こう、頭下げて入つてきたわけね。それで、頭使つてね、「王さんが自分に頭下げさせた」いう、自慢話さ。そういう話もある。ゴーヤーのために、頭下げるど入れないもんだからね。

「渡嘉敷 やかなどーみ（渡嘉敷は達者か）」と、こう、「元氣やみ（元氣か）」と、頭下げて入つてきたもんだから。

⑨ 低頭門

伊佐安弘（明治四十一年生）山里

家を、昔はもう、風の関係で、家をこう、低くするのが当然だつたんだよ。が、王様のお家はもう、頑丈だらう。だから、これ、頭を下げて入るわけにもいかない、すぐ真つ直ぐ入れる。が、田舎の家としてはガヤヤー（萱葺きの家）で、こう垂れ下がつて、もう、

(4) 基打ち

① 基打ち

〈方言原話〉

久場政三（明治四十三年生）園田

渡嘉敷ペークーは、王様と基打ちどうしだつたらし
い。あんさーい基ぬ好きない、王様ん。あんさー
い、くぬー、ぬーんでいが、この王様とうまじゅん
甚打ちゆるばーに、しぐ、「うねひやー、御主、私が
る勝つちょーつさい」とかなんとか言うて。あんし、
一人やいがーいがーいして。そうしてやつたら、その
攝政三司官言うて、今の大臣級さあね、今ぬ大臣ぬ
ちやーが、
「いやーや御主加那志前んかい、うんぐどうーる言葉
使て、基打ちゆんちあんなー」でい、ほれで怒られた
らしい。あんさぐどう、
「どー、あんしえー、今から直さびーさ」でい言やー
なき。今度ー基打ちーねー、一目置いては後ろに下
がつて、
「うーうー」んでいちえー、あのー、うりつし。また、
「どーひやーべークー、今いやーたましやさ」んでい、
あんしーどうんしえー、また、
「うーうー」んでいち、また一目置いて。また後じー
んかい下がてい、
「うーうー」んでいち、あんし。あとー、
「今日ぬ基や面白こーねーらんむん」でい、
「いやー家かい行けー」んでい言やーなかい、この基

盤ひつくり返して。あんさーい、うりつしえー、
「これ確かにちやーがなさつとーん」でいやーなかい。
うりから、攝政三司官ぬちやーあびやーい、
「いつたーべークーんかいぬーんでいん言ちー」ん
じやくとう、

「あーなー恐りぬあたらん言葉使方さくとう、あん
しえーすなんでいち言やびたん」でい。あんさくとー、
うぬペークーやーうんぐどうーさくとう、
「うりから、今からー、私ねーうりどう楽しどーく
とう、イーヒーつし勝負する樂しどーくとう、今か
らうれーすなんでいち、いつたーさーい言ーんでい
ち。あんさぐどう、攝政三司官のーまたペークーあび
やーなかい、

「いつたーや、いえー、今からー、なー、いやーがま
しやるぐどうし基ん打てい」んち。あんさくとう、う
んにんからー、

「ちやーが、御主ぐわー」でい、うぬ人、しぐ、ひたイー
ヒーし。あんさーい打ちさくとう、
「どー、今やき」んちよー、王様ーうつさしみそーやー
なかい。うんにーからむる、しぐ、一人争い争い、し
ぐ王様んベークーんうりしみそーちやんでい。

〈共通語訳〉

渡嘉敷ペークーは、王様と基打ち仲間だつたらし
い。そして基打ち好きになつて、王様も。そして、こ
の、なんというか、この王様と一緒に基を打つとき、
そのまま、

※1 摄政三司官 国主様。琉球国王を
指す敬称。加那志去は尊称を示す後尾辞で、
前は敬称で、「摄」ほどの意味。

なる。

※2 御主加那志前 前は敬称で、「攝」ほどの意味。

※3 うーうー 目上の人に対して、同意
を表す語。

※4 イーヒー おい、おう、と言ひ合う
よう、気安い言葉づかい。目下または
きわめて親しい同年の者に対する言葉づ
かい。「ひー」は「いやーううー」から
の否定の返事、「ひー」は自下に呼は
れたときの「ああ、うん」くらいの肯定
の返事。

「ほらみろ、王よ、私が勝っていますよ」とかなんとか言うて。そして、一人で言い争つて(笑んでいた)。そうしてやつたら、その摂政三司官といつて、今の大臣級だよね、今でいう大臣たちが、

「おまえは王様に、このような言葉使いをして碁を打つことがあるか」と、それで怒られたらしい。そしたら、

「そう、それなら、今から直しますよ」と言つて。今度は碁を打つときに、一目置いて後ろに下がつて、「ははあ、ははあ」と言つては、碁をさして。また、「どうだベーケー、次はおまえのばんだぞ」と王様が言つと、そうするとまた(ベーケーは)、「ははあ」と言つて、また一目置いて、また後に下がつて、

「ははあ」と、そうやって(碁をさしていた)。しまいには(王様が)

「今日は碁は面白くない」と、

「おまえは家に帰れ」と言つて、(王様が)この碁盤をひっくり返して。そうして、

「これはきつとなにかされたはずだ」といつて。それから摂政三司官たちを呼びびけて、

「おまえたち、ベーケーになにか言つたか」と聞いてみるど、

「はい、恐れおおい言葉の使い方をしたので、そういうことはするなと言いました」と。それで、そのベーケーはあのようになつたので、「これから、今からは、私はこれこそ楽しんでいるの

で、そらやあと気安く勝負するのこそ楽しんでいるから、今からかしこまつたことはするなど、おまえたちから言え」と。そういうわけで、摂政三司官はまたベーケーを呼びびつけて、

「おまえは、今からは、もう、おまえが好きなように碁を打て」といつて。そしたら、そのときからは、「どうだ、王め」と、ベーケーは言つて、たちまち、ひたすら氣安くして。そんな風に碁を打つたら、「そうだ、今のようにだ」といつて、王様は喜ばれて。それからはいつも、互いに言い争いながら、王様もベーケーも碁をなさつたんだって。

② 碁打ち

伊佐安弘(明治四十一年生) 山里

方言原話

渡嘉敷ベーケーとかの話は簡単にしかわからないが。

王様のところに、

「ベーケー、いやー、や、うまんかい碁打ちが来ーわ」

んでいちざくどう、

「うー」んでいち、王様の前に碁を打ちに行つたわけさ。それで、

「あいひやー、ぢゃーが、ぬーぬー」んち、すぐ王様

に言つたらしいんだよ。で、それを側の役人が聞いて、「いやーや王様んかい向かてい、うんぐどうーるく

どうしぇーならん。罪あていーんどー」でいちざくどう、

「あんしぇー、ちゃーし打ちやびーが」んちやぐどう、
 「どー、うすりて打つている打ちゆる」でい言ちやくどう、
 「はいさい、うがどーいびーん」退いて、したら、王
 様も怒つてね。
 「こんな甚の打ち方もあるか」と言つて、また、元の
 あが好きなように、
 「はいひやー、ちやーが、ぬーぬー」と言つて、こう
 王様に言つて喜んで打つたらね、
 「どー、今やさ」と言つて、王様も非常に喜んだとい
 う話ですよ。

「もうし、お目にかかります」退いて、したら、王様
 も怒つてね。
 「こんな甚の打ち方もあるか」と言つて、また、元の
 あが好きなように、
 「ええこの、どうだ、なんだかんだ」と言つて、こう
 王様に言つて喜んで打つたらね、
 「よし、今のようにだ」と言つて、王様も非常に喜ん
 だという話ですよ。

③ 低頭門・甚打ち

比嘉真松（大正二年生）城前

〈共通語訳〉

渡嘉敷べークーとかの話は簡単にしかわからない
 が。

王様のところに、

「ペークー、おまえは、ここに甚を打ちに来なさい」
 といわれたので、
 「はい」と、王様の前に甚を打ちに行つたわけさ。そ
 れで、

「ええこの、どうだ、なんだかんだ」と、そのまま王
 様に言つたらしいんだよ。で、それを側の役人が聞い
 て、
 「おまえは、王様に向かつてそのようなふるまいをし
 てはいけない。罪とするよ」といつたので、
 「それなら、どのように甚を打つばいいんですか」と
 たずねると、
 「そりや、かしこまつて打つんだよ」と言わされたので、

〈方言原語〉
 甚よー、甚、五目。五目がとつても好きだつて。
 王様もこの人となら打つが、別な人とは打たんあたり
 好きだつたつてよ。

じうくすくちな者なでいよ。なー、えーりん、王様
 んちうすりーねーうむつさーねーんしぇーやー。あん
 さーなかい王様どう打ちーねーなー、いつペー王様ん
 喜くでいありそーしが。

うつたー家ぐなさんでいよー。あんさーんかい、
 ぐなさくどうまつすぐー歩ちえー入ららん、かんし
 御礼しみてい入つちよ。家や低く造くやーんかいや、
 御礼しみいでうまんかい入やーたんでいよー、う
 ぬ話やーたんでい。

あんすくどう、ぬー、「はいさい、はいさい」し打ち
 ねー、うむさしえーやー。なー、ふーじーありやるばー
 てーなー、あの、むこう、なーうしぇーてい、んじ、どう

④ 暮打ち

島袋貞栄（明治四十一年生）知花

んたでいな、「はい、はい」し打ていわる暮やうむつさみ、「さり、さり」し打ち一ねーうむつさーねーんくどう、うんぐどうーし打つちえーるばーどうやる。あんやたんでいぬ話やん。

〈共通語訳〉

暮だよ、暮、五目。五目がとつても好きだつて。王様もこの人なら打つが、別な人とは打たないくらい好きだつたつてよ。

（渡嘉敷ペークーは）あまりにもひょうきん者でね。もう、たぶん、王様といつて恐れ入つたらおもしろくなひんだよね。それで王様と（暮を）打つときには、たいへん王様も喜んでお打ちになつてたんだけど。この渡嘉敷ペークーの家は小さかつたそうだよ。それで、小さいからまつすぐしたままは歩いて入れない、（王様は）こうお辞儀なさつて入つてね。家は低く造つてね、お辞儀させて家に入れたという、そんな話。

それで、なんだ、「はい、はい」と言つて打つのはおもしろいんだよね。「はい、はい」と打てばこそ暮はおもしろいが「されば、されば」と（かしこまつて）打つのはおもしろくないから、そういうふうに（相手が王様でもはい、はいと氣楽に）打つたわけだろう。そうであつたという話だ。

〈方言原話〉

「イーピー、イーピーしえー、私にんかいイーピーしえー。なー、いやや、しぐなー御礼しえー、あんしゃ禮儀さほーくどうや、私やーあんしえー楽しめーあらんどー」でい。

「ちやーが、ちやーがんち、しぐ互ーにうりしわるいそーはるや、あんしえーいそーさねーん」でい言やりーたんでい。

王様負かしーねー、

「ちやーやいびーがさい、御主加那志」んち、ひさまんちかきていありが前んかい御礼するばーてー。さくとう、王様負きとーしえーやー、「あんしえーさんよーい、お互、いぬたんかーどうーしーヒヤーマーターそーぐどうしや、あびりしーわる私ねー楽しみやる。あんしえーなーぬーんちむえーねーらんどー」でいたんでい、王様。

〈共通語訳〉

「気安く話しなさい、私にも気安く話しなさい。もう、おまえは、（暮をひとつおいては）すぐにお辞儀して、そうして礼儀正しくしてたら、私はそんなんに楽しくないよ」と、「どうだ、どうだと、すぐたがいに言い合いながらが楽しいのであって、こんなふうでは楽しくない」と言われたそだ。

王様を負かす」とね、

「いかがでいらっしゃいますが、王様」と、ひさます
いて王様の前にお辞儀するわけね。すると、王様が負
けているでしよう、
「そんなふうにしないで、お互い、向かい合っている
者同士はわいわいするようにしてね、声をかけ合つた
りしたほうが私は楽しいのだ。あんなかしこまつて
やつたら、なにも面白くないよ」といわれたって、王
様が。

⑤ 基打ち・能書

山内盛福（大正二年生）南原原

あのね、碁を打つときにもね、こうだつたつて。殿
様、王様、尚瀬王というさ、碁打つの。なにした人。（渡
嘉敷ペークーは）もう、口も悪いし、まあ殿様という、
殿様でも、えー、御主加那志前でもわかってるさーね。
ペークーよ。今日、碁打ちゅくとう相手しえー（ペー
クーよ、今日、碁打つので相手しろ）と言われてね、
「はい」と言つて、かしこまつてね。
「しかし、碁を打つときには堅苦しくしては興味
がありませんから、気楽に打たしてくださいませね」
と言つたら、

「ああ、いいよ」と言つたらね、打つ
でしょ、

「はい、ペークー」と言つたら、
「はい、大御主」なんてね、こういうことになる。それ、
はたの者が見るじゃないですか、また、あれでしよう、

こう考へたわけ。

「いえー、ペークー、御主加那志前んかいそん、
いやー、無礼な言葉言ちえー、あんしぇーならんしが
(おい)、ペークー、王様にそんな、おまえ、無礼な言
葉を言つては、それではならん」と言つてね、
「ああ、そうですか」んぢ、
「もう、それじゃあわかりました」と言う。碁盤を前
にしておつてね、その王様が打つでしょ、あとは自分
はもう、ずっと下がつてね、正座して、そうして、もう、
碁を一たま打つたんびに後ろに下がつて、もう、こう
してね。もうこれくらいで、もう、おもしろくないわ
けよね。

「ああ、もう」殿様はね、

「ペークー、いやーうんぐどうしえーうむしこーねー
んぐどう、なーいやーがするまましえー（ペークー、
おまえこんなふうにしてはおもしろくないから、もう
おまえが好きなようにやれ）と言つてね。それであ
た、今言つたように、これも実際作り話では、もう、
到底、殿様まで、
「はいたい、ウスメー！」。御主加那志前のことウ
スーと言つたんだね。まあ、あんたがた、それ聞きな
れない言葉かもしらんが。本当は王様とはいわんで
御主加那志前という。で、ペークーは、
「はい、ペークー」と言つたらね、

「はい、ダイウスー」となつてこう打つたとさ。実際、
そういう作り話だな。そう、色んな
ことがあるんだべ、ペークーについてはね。

そのぐらいもうとんちも利くしね、また、お城にあがつても、あの人は、島袋さんの話にあつた、非常に達筆だった。祐筆、今ね、祐筆。祐筆みたいなことをしていたという話もあるし、わゆる當時のね。だからあの人にあつては、いろんなこの、北谷に行けば、いろんなこと聞けると思いますよ。

⑥ 務打ち

龜島忠實（明治三十五年生）室川

坊主御主んでいい一ねー（坊主御主と言つたら）、坊主御主という偉い人がおつたらしいですよ。それ、渡嘉敷ペークーがね、それも、これも偉い人よ。運輸

大田、今の運輸大臣。だから高月給取るがね、シナと琉球と物々交換で、それ儲けて城を作られておるから。

その人がね、御主と暮を打つてですね、もう冗談し

て打つてやつて、大変面白くやつておつたそだ。だから三司官がね、これ大変」と思つて叱られてからね、これやつたから、そうしたら、もう、（ペークーは）正座してね、正座して（暮を）やつたらしいなあといつたから。御主はおもしろくなくてね、おもしろくなくて、三司官を叱つてね、また元通り遊んだとかいう。

（5）鳩の汁

① 鳩の汁

伊佐安弘（明治四十一年生）山里

ホートウぬシシ（鷦の肉）というものはね、本当に言えば、炊いたら浮くんだよ、全部。浮いて、まだ、浮いただけは取つたから、まだ下にもあるだろうと思つてやつたら、これがそうでもない。もう全滅しておつたという話だよ。

（6）月影の吸物

① 月影の吸物・低頭門

山内盛福（大正二年生）南桃原

月影の御吸物でー。御吸物ね、月影。まあ、字で書けば、月影の御吸物となるんですね。月影ぬ御吸物と。このお話をなんだつたらしいですよ。

あの、ペークーがね、桑江に隠遁して、わゆるあの、退職してね、首領のお勧めも終えて。そつした場合に、坊主御主でしょ。坊主御主はまた城間に、いわゆる別荘みたいね。浜ぬ御殿かな、そういうのと、すぐね、みんなさんごぞんじというの、坊主御主というのは、尚義王さーね。あの、あとで頭がちょっと變になつて、わゆるもう王様であるのが自分は辞めて、次は尚義王かな、その人に譲る、御摂政にしてね、ほんともう政治から離れてなにした王様だから。ペー

クーと同時代の方です。

幸一ペークー 渡嘉敷ペークーのこと

千一イ親方と並ぶ笑いの主人公。

幸一城間 沖縄本島中部、浦添市の中。

幸三洪ぬ御殿 浦添市城間にあった尚義王の別荘地のこと。

*4 尚義王（一八一三～一八四七）第

一尚氏王統十八代の王。尚義王の長子。

一八二八年、尚義王が病氣により退位し

たため、摂政として政務を執る。尚義王

の死後、國王となつた。

で、この人ね、ペークーは、そして桑江ぬ前なんですか、この坊主御主は、今の城間だね、那朝に。浜の、なにかな、浜御殿と言つてたかな。そこで隠遁して、百姓なるといって。そこで、それほど遠くはないからね、御案内したそだ。ま、ペークーもね。

「どうぞ、桑江になにしていますが、いらしてください」と言つてね。そしたらね、ペークーは、また、王様でも、「これはなににあるな」と思つてたんだ。

「なにをやるかな」と思つて。でね、月影、月影の御吸物おあげしますから」と言つてね、御案内したそだ。そして、ペークーは、そしてまた、門の両方ね、門は両側から、竹ね、竹。竹の中に、ペークーというのはなに竹かな。あれなんで、屋敷にあれするの、両方からね、こう竹を伸ばして、かがんでないと入れないようにね。このまま入れないようにしてあつたそだ。それで、王様はね、しかたがない、かがんで入つたつて。そいで、

「王様にお辞儀をさせた」と言つて、

それで、また、なんだか、それで御案内して、座敷に入つてね。それでいつまで待つても、なかなかかなにもね、月影の御吸物というのが出てこんと。

「ペークー、どうやつたか、おまえ」呼んで、

「月影の御吸物くれると言うから来たんだが」

「いや、もう少しお待ちください。お待ちください」

でね。

それで、十五夜の月がね、真上にくるまで待つてたさーね。そうしたら、縁側なんで、なにしたかもし

らんがね。月影の御吸物で、御吸物に、実は、具はないも入んでね、いわゆる具といふさーね、実はなにも入れんで、ただもう水みたい御吸物出して、

「どうぞおがりください」と。

「えー、ペークー、いやや、あんしまーさ月影ぬ御吸、ちやつさぬまーさむんやんどう思むれー（おい、ペークー、おまえは、あんなおいしい月影のお吸物、どれだけのおいしいものかと思えば、これ、なにかなにも、貝も実も入つてないじゃないか」と言つて。そしたらね、お碗の中に月の、十五夜の、お碗にね。澄んだんだからね、月が映つて、

「これが月影の御吸物」と言つて。

「またやられたなあ、ペークー」と言つて。殿様怒るわけにはいかんからね、笑つてたど。そのぐらいとんちがあつたというんだ。

実際はそ、王様にそんなこと失礼だから、まさかしないだろうと思うが、それも、あとから作り話じやないか、ほんとはね。まさか王様と、それは、もう隠居している王様でもね、權威のある人に来て、両方の門のところ竹を結つてね、かがんでないと入れんようになると。それは、そこはおそらくそんなことまで。しかし、ペークーのことだと王様もどうも、まあ、話に聞けば。

※一テーク ダンチク、暖炉、海岸などは生れるが、岸は高さ二~五メートル、径一~四センチメートル。生垣などに利用する。



(7) 味噌と花鉢

① 味噌と花鉢

久場政三（明治四十三年生）園田

方言原話

「今度一王様ぬわちやくさーない、

「味噌やれー持つちえー行かんはじ」んでいやーなか

い味噌、あれーおいすくどう、

「うれー持つちえー行かんはじ」んでい言やーない、

うまかい味噌齧出じやち持つちつちくいたくとう、く

ぬペークーんかい。

わざわざ、この王様の庭んじ、うぬ花、花木ぬ上等

折やーない、うりちーさちど、味噌のかーみぬ上等

んかい。うりちーさち、うりかたみていうん。王様見

じみそーやーんかい、片口笑れーしよ。王様ぬなー、ぬじゅ

どる花木どうやしが、うりかたみていんじ、うりす

し見じみそーやーんかい、片口笑れーしみしえーたん

でい。

ぬー、うれー昔人ぬちやーから。あぬー、やっぱ

し伝える話やん。

（共通語訳）

今度は王様が（渡嘉敷ペークーを）からかつて、

「味噌なら持つては行かないだろう」といつて、味噌、

あれはにおいがするから、

「味噌は持つては行かないだろう」といつて、そこに

味噌靈を出して持つてきてあげたので、このペークー

に。

ターカー三 麻 痴のこと。前歎を目的にしてつくられた大型の靈廟。

(ペークーは) わざわざ、この王様の庭で、そこにある花、花木の上等なものを折って、これをさしこんでよ、味噌の靈の上に。花をさしこんで、それをかついでいる。王様はこれをごらんになつて含み笑いをしてね。王様がね、気に入っている花木なんだが、(それを折つて味噌にさして) それをかついでいつて。(王様は) そうするのをご覽になつて、含み笑いをなさつていたそうだ。

なに、これは昔の人たちから(聞いた話)。あの、やっぱり伝え話だよ。

② 味噌と花鉢

亀島忠賀（明治三十五年生）室川

これ、味噌。(王様が渡嘉敷ペークーに) 食べる味噌、

くれてね。

「どうして持つていこうか」といつて見たらね、花木

の枝を折つてね、それにつけてね、

「立派な花木を買つてくれてきた」と言つてね、喜んでいたそですよ。

昔の人はみんな知つていた、私も。これ、ほんとの話。

(8) 尻吸い

① 尻吸い

〈方言原話〉

伊佐安弘（明治四十一年生）山里

で、これにまた非常にこれ、そうでもないだろうか。
と思う話もあるがね。王様と渡嘉敷ベーケーの話に
ね。

「ベーケーよ、いやや今日や私どうまじゅん野山
出でてい、「眺みつくしな」んでい言ちやくどう、
言うてしまふたら、

「あー、うがびーいびーん」。野原のところに、ピクニッ
ク行つて遊んでおつたらしいんだよ。そのときに、用
足し行きたくてね、このベーケーは。行つて、座ろう
としたら蘇鉄のとげに尻を刺したらしいんだよ、座る
ときにはね。

「あいー」、もう、やつて、側に寝てからね。

「さつと一びしがー」あしひてーるふーじー。馬鹿
話じやないかとも思うんだけど。これ昔の話、聞いた
もんだからね。

「さつと一びしがー」あしひたくどう、血は出てお
るだろ、このお尻からね、このソテツの棘にやつて。
で、そのときには

「あ、うれーちやーしょーしむが」んちやくどう、
「早く血吸い出せやさーいねー毒ぬ回いびしが」と
言つた。これを王様が吸つてやつたという馬鹿話も
あつたんだよ。

「早く血を吸い出さなければ毒が回ります」と言つた。

〈共通語訳〉

ハブにやられたということを表現しておるんだよ、
このベーケーぐわー。ソテツとはやらないでね、これ。
「さつと一びしがー」さくとう、ハブんかいさつとー
と思ってやつたらしいね。



これを王様が吸つてやつたという馬鹿話もあつたんだよ。

ハブにやられたということを表現しておるんだよ。このペーク一めは、蘇鉄とはやらないでね。これ、「やられました」と言つたので、(王様は)ハブにかまれたと思つてやつたらしいね。

(9) 裏美の片荷

久場政三 (明治四十三年生) 國田

① 裏美の片荷

あんさーい、うりつし、じこーい、どうしなみそー

ちやくどう、今度、

「ペークー、いやや米くいくどう來よー」んでい

ち、

「いちがなー馬持つちくーよー」でいち言みそーちや

くどう、

「あんしそーうたびみそーり」でい言やーなかい、

馬ー引つ張つて出じ、米貰ーがんでいち、行じやく

と、

「米ー俵」、うぬんじやつくわぬぢやーんかい、

「出じやち持たし」でいち、俵持たちやくどう。

今度ーうぬべークーやー、あたいめーや王様やか頭

ろー上やくとう、頭の能率や上やくとう、一俵うぬ

馬ー腹がーんかいたつくわーちえー、うぬ馬ぐわー、米ーちん返らちえーしーしーしー。何回んうり繰り返し

返さくとう。普通の人やれー上んかい乗して、一俵どう持つちはいつさいやー。上んかい乗して、一俵しが、うぬべークーんでいぬ者、うぬ、わざつとう、理屈どうやくどう、あんさーい、何回んうぬ、ちんけーりちさーさーい。あとーまた王様ーうり側うですーみそーい見じみそーやなかい、うりからあぬー、なー俵や出じやち持つたしスーーでいち。あんすべーく、なー俵出じやち持つたちやぐどう、うんにねー両方んかいに積まリーしえー、馬ぬ背中、あんさーい、うつさー家かい帰てーみしょーるふーじーやしが、うぬべークーや。

共通語訳

それで、そんな(暮打ち友のこと)から、(王様は)ペー

クーと大変いい友達になられたので、今度は、

「ペークー、おまえに米をやるから来いよ」と言つて、

「いついつだかに馬を持つてこいよ」とおつしやられ

たので、

「それならくださいませ」と言つて、馬を引つ張つて

いつて、米を貰いにとつて、行つたら、

「米ー俵を」、そこの下男たちに、

「出して持たせよ」と一俵持たせた。今度はこのペー

クーは、あたりまえに王様より頭脳は上だから、頭の

馬は米をひつくり返したりして、何回もそれを繰り

返し繰り返したから。普通の人なら(馬の)上に乗

せて一俵は持つていくよね、上に乗せて。だけど、こ

のベーケーというのは、その、わざと、ずる賢いもんだから、そやつて、何回もひっくり返らせたりしてい。しまいには、また王様がその様子を側でこつそりごんになっていて、それからあの、

「もう一俵出して持たせなさい」と言つた。そやつて、もう一俵出して持たせたから、それからは両方に積むことができるから、馬の背中。そして、喜んで家に帰られたよなんだけど、このベーケーは。

② 低頭門・褒美の片荷

新屋宇盛（明治四十年生）越前

〈方言原話〉

『冒頭一部収録が欠ける』

……王様やていん、ちやうぬんけ一頭下がるんしえや。あんぐくどう、うんぐどうしげスクにしていくどう、じえひくどうや、うつさぞーに、うりやるばーてー。

「さり」、なーんけー、なー、うすりとーる気持ちぬ現りとーるばーてーや。うり考どーるばーてー。

馬一、馬なかい、なー、これも聞いたことある。『ち、一俵持つちいけ』といって、なつたらよ。馬一、始め一馬一鞍一ち下ぎりわるうりやしえや。馬一步ちゅさしえ。あんしが、片りんぶーねー、聞き取り不能ないしえーやー。くれーべー

クーが、

「うれーちしえ一步ちぐるさいびーざーやー」といって、言うたらよー、

「なーちえー、あんしえーいやー、下げていぶつとうぶつとうしえーんち。頭いい。機知に富んでいる人だった。

〈共通語訳〉

『冒頭一部収録が欠ける』

……王様でも、いつもその人に頭を下げるわけではないからね。なので、あるように、グスクにだけいらつしゃるからと、もう人に、もう、敬う気持ちが現れているわけだよね。そこで、王様に頭を下げさせることを考えているわけだよ。

馬は、馬に、もう、これも聞いたことある。

「一つ、一俵は持つていけ」といつて、そうなつたらね、

馬は、始めは馬に鞍を二箇所に下げればバランスがとれるよね。馬は歩かせることができるからね。だけど、片側だけ重くなるようにすると、聞き取り不能なるんだよね。これはベーケーが、

「これは一つでは歩きにくいですねえ」といつて、言つたらね、

「もう一つ（持つて行け）、そろしておまえは、（荷物をたくさん）下げてふくふくとしなさい」と。

頭いい。機知に富んでいる人だった。

③ 褒美の片荷

稻嶺盛英（明治四十三年生）山里

率1へ 聞き取り困難 ないしえーやー
一文ほどの聞き取りづらい翻字です。
前後の文脈より、片方だけ僕の重みがかかるて馬のバランスが悪いことを説明していられるものと思われる。

渡嘉敷ペークーといふのは、まあ、前は、当然まあ、言えども、グスクの納屋に勤められてね。それから、自分の生まれ（故郷）、北谷に来て。で、たびたび王様、グスクの方に用事に行って。

向こうで、あるとき、王さんからね、お米をいただきいたらしいですね。お米、「一俵もらっていいたらしい」。この渡嘉敷ペークーといふ人は、王さんの前で馬に俵を、俵を積んでは落とし、積んでは落としてね、わざと、わざととさー。で、王さんがね、この御主加那志、御主加那志、言ひうたら王様のことだね。「御主加那志前」これ、これ俵一俵やちゃーしん積みぐるさぬ、ないびらん（王様）これ、俵一俵はどうしても積みにくいで、積めません」と言うてね。

「なー一俵あれー、うーし（もう一俵あつたら）のせ

られる）、積みやすいんでが一言うてね。だから王さんももう、「これは頭が、頭の力、こいつはもう、まいつたなあ」と思つて、もう一俵やつてね。両方に、馬の背中に両方に、米もらつて帰つてきてね。これは自分の村の、言えども配給米みたいにね、配給するといつて。もらつて帰つてきたいう話もあつたんですよ。

お米は、言えども、各村にね、配給みたいな米があつたんでしようね。配給米みたいな。もらつて帰る時に一俵だけは積みにくいからつて、それで二俵もらつてきたいう話を聞いた。

④ 褒美の片荷

山内盛福（大正二年生）南桃原

なにかね、王様から褒美というか、まあ、この、「ペークー、おまえはよくなにするから」と言つて、米俵をね、米俵一俵くれたそだね。ペークーは馬を一頭持つていってね、この米俵を鞍かけて、一俵だから、片一方に積んだ。これ、なにですよ、平均が、平均が取れんからね、この馬は転ぶでしょう。それでは、もう、また、ペークーはね、わざわざそこでから、「これ一俵をね、積むと、鞍の両方、鞍にしてね、なんだかね、馬はそれで転んで起き起きしてね、なかなかこの、馬は積めない」と。それ、ペークーは、もうそういう腹だから。

じゃあ、殿様が、

「それ一俵ではこれね、馬に、それは、褒美で積んで、荷物積んで背負わしていけんから、もう一俵、それじゃあやるから」と言つてね、それで、両方に一俵ずつ積んで帰つたとかね。そんな話とかなんとかね。

⑤ 褒美の片荷

伊佐安弘（明治四十一年生）山里

よう王様の前には招かれたそだ、とんちがうまいから。で、そのどんちの褒美としてですね、

「ああ、お米をお前にやるから」と

「馬を連れてきて積んでいきなさい」と言つて、米を一俵やつたらね、この一俵背負わしたらすぐひっくり返るでしょう。この米が落ちるでしょう、片づぱうだ

から。一日中それをわざわざつれておつたらしんだ、わざわざ。ベーケーが米をいただいて、馬を連れていって積もうとしたら、片っぽうしかないからね。これももう、ベーケーがとんちさ。必ず二ツを、「儀ドウ」もらつていくというつもりで。「儀ドウください」とは言わんで、わざわざとんちでもつてやつたらしいんだよ。これも有名だったよ。

⑥ 装美の片荷

魚島忠賢(明治三十五年生) 室川

(渡嘉敷駆べークーが王様から) 米一儀、米一儀取るよ。だからそれを馬に、片荷乗せたからね、全然乗せられんでしょう、これ、一儀は。そうしたから、また一儀、こういつて乗せて。

10 布団着物

① 褒美の片荷・布団着物

金城真良（明治四十年生）古跡

ペークんでいしどう御主加那志前といつペーぬ
どうしやたんでい。^ナなーくにどうし。どうしやたんでい
しがよ。

たーんかい行じやくとう、う

「冬瓜持つちえーるむん」でい言やーによ、米一俵や

出じやさーにしょーるぐどーん。米一俵い一らちやくとう、片はらんかいちきてー駁けーみぐらちうすらー、ぶつちーなーわざれてーるぐどーん。わざりつたくとう、
「ぬーが、ペークー、うんなげーなーいやー、米ぐわーーちん、うんなげーなー」んでい言ちやくとう。
「二ちにやれー両方にたつちきていどうーやつさいびーしが、一ちーるやいびーくどう駁けーみぐーて、ういし、どうーぐるさいびーつさー」でい。またんなーー、ちえーたつくわーさくどう、うにーねー一ちたつくわーさーにや、上んかい乗とーではいはぎーたたつくわーさーにや、
んでい。
あんさーに、また今度一大根ぬでいきたくとう、また大根うーちえーるぐどーん。あんさーに、「ぬー、いやー着る着物のーねーんどうあんなー、ペークーんちゃくとうてー、
あー、私ねーなー着る着物ん買いうーさびらん、ねーいびらんさー」んちゃくとう、
「あんし、被じゅしおーあみ」んちゃくとう、
「被じゅしがあていからなーや、うーぐどうどうやいびーる。被じゅしんむるねーびらん」んちゃくとう、
「あんさー、あり、アヤー、布団ーちえー持たしえーんでい。持たちゃくとう、
「なー今日からーぬくさー寝んじやびーさやー」んち、うぬ布団の一ーいていんじやくとう。なーけー、
ん行ちーねー、なかじのー頭入るぶんぶがさーに、布団かんしんさーに、うま搭つし、

※「なーくにどうし」未詳。誤出せす。
※2 御主加那志 王様。加那志は尊稱を示す接尾辞。

「ぬーが、ペークー。いやー、うれーかんじゅしどうやる、着しーやあらんどーやー」んでい言ちやくどう、「あんじうんじよーなー、かんじゅしばかーしんないびんなー。夜ん寝んぐれー離さりーびらんむん、ぬくさいびーるむん」んちよー。

「あり、アヤー、うれーなー布団かんていちよーさ。着物持たしえーんち、また、着物んいーてい。

「うれー着ち歩つちゆしえーあらんろー。かんじゅしるやる」んち、また、今度ー着物持たちえーんだい。でーじなかんしえーむんやたんでい、渡嘉敷ペークーんでいち。

（共通語訳）

ペークという方と王様とはたいそう仲のよい友だちであつたって。友達だったといふけどね。

冬瓜がよくできたので、馬に冬瓜を二つ負わせて王様のところに行つたら、そこではまた、

「冬瓜を持ってきているので」と言つてね、米を一俵お出しになつたようだ。米一俵をあげると、片側に乗せては鞍を回して乗せたりして、しきりに手間取つているようだつた。手間取つていたので、

「なんだ、ペークー、いつまでもおまえは、米一俵負わせるのに、こう長くかかるのか」と言うと、

「二俵であれば両方に乗せて運ぶのはたやすいことで、が、一俵ですので鞍が回つてしまつたりして、乗せにくいくらいですよ」と。また、もう一つをまとめたら、

その時には二つ（バランスよく）負わせてね（ペークー）

はその米俵の）その上に乗つて帰つたんだつて。それから、また今度は大根ができたので、また大根を乗せてきたそうだ。すると、「なんだ、おまえは着物はないのか、ペークー」と聞くと、

「ああ、私は着る物も買うことができません。（着る物は）ないんですよ」と答えると、

「それで、かけるものはあるか」というと、「かけるものがあるのなら、おおごとです。かけるのもなにもありません」といつたので、

「それなら、おい、奥よ、布団を一つは持たせよ」と。持たせたら、

「もう今日からは暖かくして眠ることができですねえ」と、この布団をもらつていつて。もう一同行つたら（今度は）、布団の真ん中には頭が入るぶん穴を開けて、布団をこんなふうにして（かぶつて）、胸に帶をして、

「なんだ、ペークー。おまえ、これはかけるものであつて、着るものではないよ」と（王様が）言うと、「それではあなた、かけるものしかくれないんですか。夜も寝もこれは手離せませんから、暖かいんですから」とつて返してね。

「おい、奥よ、こいつは布団をかぶつてきたよ。着物を持たせなさい」と、また着物ももらつて。

「布団は着て歩くものではないよ。かけるものだ」と、また、今度は着物を持たしてくれたんだつて。大変感心な人だつたつて、渡嘉敷ペークといつて。

てい」でいちよーるばー（「木の釜で芋を煮たら、釜は焼けてしまわないのか」といったわけ）。だから、これが焼けてしまつたら、ここで焼きーの話したら罪になるんだよ。それは、自分が決めたのに、自分が言つたわけよ。自分からだから渡嘉敷ペークーは頭がいいから、その焼きーぬ話えー（その焼けるものごとの話は）この人にさせようと思つて、「どうして君遅くなつたか」って聞いたら、「ひるましーむんやつさー。木刀釜んかい、与那原ぬ近うてい芋煮たん」でい（珍しいことだねえ。木の釜で、与那原の浜で芋を煮た」と）。あんさぐとう、うぬ偉い人は（そうしたら、その偉い人は、

「あんし、うぬ刃釜一けー燃ーらんていー、焼きらんていー」でい、言ちやくどう（それで、その釜は燃えてしまわぬいか、焼けないのか」と言つたので）、「あんたはね、あんたが決めたでしよう。焼きーぬ話していけないと。だからあなたはね、もう」。

これが、人の言わぬものをね、言わすようにするのが渡嘉敷ペークーの考えだった。頭がいいわけよ。

(13) 後生の年

山内盛福（大正二年生）南極原

で、いいか、例えはこうさ。こういうのがあるさ。この人ね、北谷に隠居して、そして、自分でいわゆる作物を、このナーベラー（へちま）なんかも、南瓜（かぼちゃ）

とかなんとかはね、作つて、那覇の町に売りに行きよつたそうです。そのときには、渡嘉敷ペークーが、そこには集まつてゐる人たちが、有名な親方たちだがね、親方と相当、位なんか、親方とかなんとか。この近くの家で集まつてお茶飲んでおられたそうだ。ペークーはね、またあの、ペークーといふのは親雲上といふことだよ、親雲上の位ではあるよ、親方の下ではあるわけ。そこでね、

「あね、あね、また」。その人たちは、「またペークーが来よる」。この人、とんちがあつてね、いわゆる、なんといふか、上の人にもね、もううげずけ言つて、

「だー（どれ）、試してみよう」と、こういうなんだがね。「ああ、また、ペークーが来よるよ、またなにかあるなあ」と。

「難題もちかけるなあ」と気づいてね、案の定、その三名の親方たちが休んでおるとき行つてね、まあ、丁寧な言葉ですよね、あんなにして、挨拶はすましてあるがね。

「ちょっとお伺いいたしますが」と言つてね、

「なにか、ペークー」と言つてね。

「えーさい、後生んじ、後生んかい」「しーねー、人間しそうぬ姿形、うぬ年頃、いちまでいんあゆみ（あのですね、あの世で、あの世に亡くなつて行つたら、人間といふものはその姿形、その年頃はいつまでもそのままなんですか）」。

たとえばね、八十なつて死んだら、（「くなつて）行つ

たらね、八十の姿であの世に行つて、子どもで死んだら、いつまでも子どもの姿でいると、こういうふうに言われてるでしょ。で、「十二で死んだら十二の姿。五つで死んだら五つ。」と言つた。

「あんやいびーんち、本当やが（そういう様子なんだというの、本当ですか）」

「いー、うれーあんどうやんどー（ああ、それはそなんだよ）」と言つて、

「うん、それは、そうだ」と。

「じゃあですね、またもう一つお伺いしますが、じゃあ、あんしーねー」、盆のなんか、祖先の靈あんなにして、お祀りするでしょ。

「じゃあ、盆に親祖うんちけーお祀りさびーねー、する時は、じゃあ、この私の祖先でね、五つ、六つで死んだ人もたくさんいる。その人たちは元形でそこにいらつしやるがね、じゃあその人たちも敬語つかわなあいけませんか」といつて言う話があるんだよね、

「ウーフーさびーみ（敬語をつかいますか）」ってね。じゃあ、本当に渡嘉敷ペークーはもうすでに六十、七十もなつてゐるでしょ。自分のお位牌の前で仏壇の前でお祈りするとき、じゃあ、その人だの、まあ、よく、昔はね、えー昔はつて、戦前は、ほんと丁寧にやりよつたんですよ。そこからお迎えして。で、その場合には、その五つ、六つの方にも、敬語「ウーフーするか」ということを言つてね。そうしたらね、相手も困つただろうねえ、

「あんやさやー（そうだねえ）」と
「そーなー、うれーなー、あんしぇー、ちゃーぬふーじーがやらやー（そーだな、これは、それなら、どんなふうにするものかなあ）」と。昔、死んだときの形でそのままだということを皆信じておるんだよね。五つで死んだら五つの姿であつて、八十で死んだら八十の姿で、十四、十五で死ぬと（十四、十五の姿で）。だからその人たちは偉い親方たちも困つてね。そうしたら、ペークーはね、

「じゃあ、これ、なーしちきしちき（それぞれのしつけ）」、銘々のしきたりさーね、

「家のしきたりに従つてやりましようなー」と言つて、「いえーなー、うれーましやさ（そーだな、それがいいよ）」と言つたという話がね。親方たちのそんな話もあつた。

(14) 根はどこか

① 根はどこか

川上盛友（大正四年生）美里

果物がなつて、隣とのいさかいがあつたような、それがありますよね。隣のその果物がペークーのところにきたんで、全部もぎ取つて食べたということのようですね。それで、「うれー（それを）、なんでそれ取つたか」というようなんじですよね。

「根や私つた一屋敷んからあるむん、うれー私つた」

むんどうやる（根はうちの屋敷にあるのだから、実はうちのものだ）」というようなかんじですよね。

それで、それを聞いて今度、あとでですね、そのベークーが、子豚の死んだやつを棒に吊り上げて、隣の屋敷のそこにぶら下げたという話があるんですよ。それで、「なんでそんなこと、いたずらやるか」ということで怒つたら、

「根やまーやが（根はどこか）」というようなかんじで、そういう話があるよな。
モーライ親方なんかの話も本当、たくさんあるはずですけど、覚えてないですよね。

② 根はどこか

桑江朝盛（明治四十五年生）中の町

ひとつはまたね、自分のこつち、こう、家があるよね。そばの家の木がね、こつちまで蜜柑の木が、うんと大きい木がね、ベーカーの家まで、境よりずっとこられて、実がなった。毎日これを取って食べよつた。ど。怒られて、

「なぜ、あんたは自分のところのものをここまで取つて食べるか」と、もう怒られて、取つて、「境やまーが」んち、「境はどこか」と言われたつて。

今度は向こうが祝事（お祝い）で、人が余計来たもんだから、自分は、犬かなんか殺してね、棒の先に置いて、下げる、根元は自分の所に置いて、もう下げたらしいんだよ。あんし、

「こんなことをやる人がおるか」と言つて叱られたらね、「根やまーやが、境やまーやが（根はどこか、境はどこか）」ち。根や（根は）こつちにあるから、根やまーやが（根はどこか）。境からもう、実は向こう行つとするから、奥いんでもう取れという意味さーねー、

「取らない」と。
「根元がこつちあるから取らない」と言つて。それで、この返しよつたが。なんでもこく、人に言わされたら、必ず返しがいきよつたさ、あの人はなんでも、知恵があるから。ベーカーです。

(15) 馬勝負

① 馬勝負

当山平治（大正五年生）住吉

これもとんちみたいなものだが。

渡嘉敷ペークーという、昔の競馬、競馬の場に、雄馬、さかりづいた雄の馬を、このペークーは競馬に乗つていったわけさーね。そしたら、みんなに笑われて、「あんたはこんな小さい雄馬を持つてきて、これが勝負できると思うか」

「やつてみないでわかるか」、うぬ勝負。

もう、こう、並んでいたら、雄馬は前に出ようとしたら、このペークーの馬は雌馬で、もうさかりづいているもんだから。で、自分が前に行つたら、雄馬は前として有名。

に行く馬いーなり、全部、後ろから。これで一位なつたつていう。

(2) 馬勝負

龜島忠賢 (明治三十五年生) 宗川

馬勝負と言つてね。馬。今のがれでしよう、なんとうか、競馬。そういうもんでもやつたり。みんな雄の馬持つてきてね。このとき、渡嘉敷ペークーは雌馬のさかりを持つて、さかりでおるこれは、馬持つてきてね。それで小便、雄馬のところに小便してね、さして。そうしてから、いざ勝負に出したからね、えー、この雌馬のあとから（他の馬がついて）来てね、勝つたそです。そのときはね、渡嘉敷ペークーと、各国の百姓たちもね、真和志のこつちに集まつてね、もの笑いしたそうです。

(3) 馬勝負

喜友名朝啓 (大正十四年生) 南桃原

「僕の馬が一番なつた」と言つて、あれしたど。
「また、ふりゆんたく（たわごと）始まつた」どうし
たかつたらね、雌馬をさ。先、あの人は持つてきてよ、
雌馬ありさくとう、雄馬なし、尻追いんでいやーに、
後一から遅りと一るばーーー、あぬ人よー。（雌馬を
前にしたので、雄馬は雌馬の尻を追うといつて、後ろ
から遅れているわけだね、あの人は）。だからそれ一
番なつたというわけさーね。雌を走らせなさいと言
われた。したから雄、だいたい雌はあんまり競馬につ

て出ないでしよう。

(16) 下馬せず

① 下馬せず

稻嶺盛英 (明治四十三年生) 山里

あのはね、首里に上るときには、崇元寺の前ではね、崇元寺あるでしょ、あそこの前では、馬乗つてはね、通れない規則になつとつたらしいですね。馬乗つたら、そこから下りて馬はつかまえて通り抜けせんといかなかつたらしいんだよね。で、渡嘉敷ペークーは頭使つてね。僕、この薪の中にね、薪、タムンさーね。薪にみせかけてね。

「くれーー人よーあいびらん。タムンどうや、御殿殿内んかい、くぬタムンね、薪を持つていく（これは人ではありません。薪をね、御殿殿内に、この薪ね、薪を持つていく）」と言うて。ほで、ようやくそこから通つてしまつてね。

自分も乗つてね、そこから、馬から下りないと通れないんだが、自分は乗つて、薪ものせて、薪の中に自分入つて、それで、馬乗つて通つたような、渡嘉敷ペークーはね、考えたという話はあるんですけど。

崇元寺 那覇市泊にあつた臨済宗の寺院。琉球國主松尚家代々の廟所でもあった。沖縄城で建物は全焼し、石門と下馬碑が残る。石門は国の重要文化財、下馬碑は沖縄県の有形文化財にそれぞれ指定されている。

〔17〕二頭の馬に鞍一つ

方言原話

金城真良（明治四十年生）古謝

ふーじ。習たくど、
「いつたやかさき馬ぬうしー。うりんかい數うす
れ一馬一七などーしー。走川ぬ水んでいしえーや、
人足ぬ切りていから來ーどうやんどー」でいくりん。

ぬ—御殿でいがらーんかい招待ぬあていさくとう、
うりやたんでい。うまんじえー、

「粟飯や哀りちゅくちやみしぇーるむんなー、米飯や
ぐ抱き」んち。

「ちやーひらさい」んでい言ちやくどう、人よー見らんしが、

苦労しきえーみしきーるむん』んちやーなーうり者ーんち転ばとーるばー。

んくいーん飾らつとーるぐとーんどーや。 飾らつてい

えー、渡嘉敷ぬ在番 うりがむるちゅらさる女、女

「がんじゅーやでーー、ペークー」んちやくとう、

で作くてーし、しちやるばーあしがてー

共通語訳

てみたら、こんなことがあつたそうだ。そのお宅に行つて、

「ごめんください」と言うと、人は見えないが、「来なさい」と、そう言つたので、（入つてみたら）そ

こにはなにもかも飾られている様子なんだよ。飾られていたので、

「元気だつたか、ペークー」と聞かれたので、

「馬一ちに鞍一ちうすてい、走川ぬ水ぬ止まいら一
来一」でい、くり約束。くり考う一さん。考う一さん

なたぐとう、今度一隣ぬハーメーんかい行じ習てーる

素一シーケ 小刀

卷之二

196

「おまえはごはんだけ欲しがって、私のことは欲しがらないんだね」と、その娘が言つたので、

「飯も欲しい、娘も欲しい」と、小刀と竹と飾つてい

るのは、「すぐ抱いて」と飾つてあるんで。

「粟飯は苦勞してつくつてらっしゃるんだねえ。米の

飯は苦勞なさつてらっしゃるんだねえ」

「それはどういう意味なんだ」

「馬二頭に鞍一つ置いて、流れる川の水が止まつたら

来なさい」と、これを約束した。この意味を考えきれ

ない、考えつかないので、今度は隣のおばあさんのと

ころに行つて教わつたみたい。教わつたのが、

「あなたのところは妊娠している馬がいるよね。それ

に鞍を置けば（鞍一つに）馬が一頭ということになる。

流れる川の水というのはね、「人の訪れが途絶えてか

ら来なさい」という意味だよ」と、これも（解いた）。

そしてまた、「小刀と竹を飾つているのは、「すぐ抱い

て」と。

「粟飯は苦勞してつくつてらっしゃるんだねえ、米の

飯は苦勞なさつてらっしゃるんだねえ」と、もう、そ

れを考えるといつて苦心しているわけ。

そして、ほら、その渡嘉敷ペークーという人は、渡

嘉敷島の在番で、この人がきれいな女をみんな、女の

いるだけ、一人残らず、思うようにして、その口説ま

で作られているのを、演じたことがあつたんだが。

「それはどういう意味なんだ」

② 二頭の馬に鞍一つ

山内盛福（大正二年生）南原

春潮全集があるでしょ。の中に、全集私持つてますがね。そこに渡嘉敷ペークーのことなんつた

か、「一つ掛け乗るとかね。王様にまた、二頭の馬に

一つの鞍は掛け乗つたという話。

それはね、結構くわしく言つたら、妊娠した馬に、

雌馬に鞍掛けてるんだよ。だから、子どもと二頭で

しょ。それから、なんかそれも、もう掛け合いでね、

本当のことか、王様にね、

「私が二頭の馬に一つの鞍を掛け乗ることができま

す」ということを申し上げて。

「じゃあ、ペークー、そんな馬鹿なことはできるはず

がない」と言つてね、そうしたとか。

もう、あの人のお話というのはたくさんあるんですよ。

だからあの、北谷町に行つてね、教育委員会に行つたほうが、なんじやないかな。そういう、いわゆる古

老、先輩の方がどこにいるか、まあ、こういう話だと

か、渡嘉敷ペークーとか、その他もあるはずです。

北谷、ペークーは、いわゆる桑江、今の桑江ね、

謝刈入^{セイカイヌ}とされておるね、あそこが桑江ですがね、

あの近くに住んでおると。屋敷跡などはあつたん

ですがね、戦前。首里からね、いわゆるもう、致仕

して。

今の退職することを昔「致仕」という言葉を使うね。



著・比嘉春潮（一八八三—一九七七）

沖縄歴史研究者。西原開切翁の生徒で、一九〇六年に冲縄師範学校を卒業後、

小学校教員、新聞記者、編集者として活躍。一九三三年（昭和八年）畠田義男の門下で民俗研究をおこなつた。

市立北谷町 沖縄島牛鹿西海岸に位置する町。もと北谷村。近世には北谷闇切村前は現在の那覇市納波成も北谷村であつたが、一九四八（昭和二十三）年、那覇市（市）が分離独立したため、村域が縮小し現在にいたる。

北谷町 桑江の名前。戦後、その大部分が米軍用地として没収された。

桑江 4歳は、官職を怠める原因らしい。

私も、「チシ」と言つたらね、なんか使用する、なにするか、なにかそんな、非常に憤死するような、なにかと思つたら、「チシ」ということは、私のあの、伯父からね、伯父というのはうちの父の兄なつとるがね。この人が、首里からの一番最後に来た、この人が、私達の先祖。
〔牧牛〕
「牧牛」は、大人の事で、小禄親方と縁故があつたとかなんとか言つてね。そのときにチシしたそうだ、と言つたんだ。

「牧島・恩河事件のときで、そのときで、いろんな小禄親方と縁故があつた」とかなんとか言つてね。そのときにチシしたそうだ、と言つたんだ。

チシといつてもね、「死」というから、なんか、そのためにも非常に苦労して死んだのかなあと思つて、そうじゃない。「致仕」はね、そうじやないんですね。「至る」「仕える」、こう、「致仕」。あれ方言辞典みればわかる。「致仕」したという言葉を使っていてね、これ、官をやめることだそうだ。今の退職さあな。

あの人（浦島勘助）が、も言をやめて桑江に来た
と思うんですよ。もう年いってね。屋敷、桑江にあつ
たんです。それ、その桑江の、もう、なんですがね。
たんです。そのペークー、その人の屋敷、住んでいた屋敷だった
か、その人の子孫の屋敷です、私たちが見たのはね。
ペークーがあとでそこにいたかどうかね。屋敷は変わ
り変わりする場合もあるでしょ。まつたくそのペー
クーの住んだ屋敷かどうかはつきりしません。だから
ら、そういうのは明日向こうに聞いてくださいね。戦
前までペークーが。

(渡嘉敷ペークーの子孫は)今はね、真栄城となつております。真栄城。どうして真栄城になつたか、三

字、真榮城ね。今、三字真榮城になつておるはず。子孫だといって、なにしていますね。「憲」の字が入つてね。憲法の「憲」の字がだいたい入つて。
「(二)頭の馬に鞍ひとつをひつかけて乘ります」ということで言つたら、王様が、「そんな馬鹿なことはできませんだろう」と言つたら、乗るまねしたとかね、いろいろ。
「一頭の馬にだけど、どうしてそれは、一頭の馬じやないか」
「いや、これ、もう妊娠して、お腹の中に子馬がいるからね」結局二頭ということに、そういうふうな、したとかね。

① 冬は青草

(18) とんち比べ

〈方言原話〉

「小さいねー、お父どうしんちゃんがや、なー、博労しげんがんでーがめんそーちやらやーなし、ぬーしーがめんそーちやら。さくとう、
渡嘉敷ベークーりしょー」。うれー、わらびぐわー、
「冬青草、夏ジャラジャラ刈いかもーちゃん」り言えーぎざん。

「んー、冬青草、夏ジャラジャラーんди、ぬーやがーりちやぐど、

(18) とんち比べ

①

松下栄吉（明治三十五年生） 池原

方言原話

卷之三

あの人（浦嘉磨ベーケー）も官をやめて桑江に来た
と思うんですよ。もう年いつてね。屋敷 桑江にあつ
たんです。それ、その桑江の、もう、なんですがね。
たんです。そのベーケー、その人の屋敷、住んでいた屋敷だった

か、その人の子孫の屋敷です、私たちが見たのはね。

ペークーがあとでそこにいたかどうかね。屋敷は変わ

り変わりする場合もあるでしょ。まつたくそのペー

クーの住んだ屋敷かどうかはつきりしません。だか

ら、そういうのは明日向こうに聞いてくださいね。戦前までペークーが。

(渡嘉敷ペークーの子孫は)今はね、真栄城^{まえしろ}となつております。真栄城。どうして真栄城になつたか、三

「うんさくぐわーんわからみ」でい言ちえーる。

「わからんあらー家かい走いみそーれー」り言ちえー

ぎすー。さくどう、

「あらん、語ていどうらし。煙まーやが」りちやぐ

と、

「わからん」り。さくどう、

「冬青草、夏ジヤラジャラ」んでい。さくどう、

「あんしぇー私が語いびーしぇー、うぬ馬ぐわー私に

んいーらすみ」り。

あぬ親子馬持つちえーたんでいよー、うまんかい。

親ぬ馬ぐわーや連ていちやくじう、

「私が語いびーしぇー、うぬ馬ぐわー私にんかいいー

らすみ」りちや、

「いやーが習ーすらーいーらすん。いやーが習ーす

らー私馬ぐわーいやーいーらすん」でい言ちやく

と、

「本當やいびんなー」

「本當やん」り。約束ーかたみいつちょーるばーよー。

「冬青草、夏ジヤラジャラでいしぇーやー、編やいびー

ん」り。

「編刈いがーん」り。

「冬ーあれー青草。夏ないるんしぇーさーらない、

夏えー編刈いがやいびん」りちやぐと、

「えー、あんやんなー」り。綱んじや
さーに、門ぬ木んかいうぬ馬ぐわーや首くんだばやー
に。うぬ馬ぬ主や泣ちょーたんり、馬ぐわーけー取らつ

てい。

うんたきそーいにからジンブノー強ばーやたんり、
渡嘉敷べークんりしそー。

「いつたースーまーかいたが」りちやくじう、

「冬青草、夏ジヤラジャラ刈いが行じょーん」りちや

くどう、あー、仕方ーならん。

「うぬ馬ぐわー私にんかいいーらすらー語いん」り。

あんさーに、田原までい連ていんじよーるばーよー。

〈共通語訳〉

(渡嘉敷ベークーが) 小さい頃、お父さんの友人が、

もう家畜の販賣するといつてだかいらつしゃったの

が、なにをしにいらつしゃんだか。そしたら、

「これ、おまえのお父さんは」と(尋ねた)。尋ねられ

たのは、子ども、渡嘉敷ベークといつ人。すると、

「冬青草、夏ジヤラジャラを刈りにいらつしゃった」

と答えたらしいんだね。

「ううん、冬青草、夏ジヤラジャラとは、なんだねー

と聞かれたので、

「これくらいもわからぬの」と言つて。

「わからないなら家へお帰りなさい」と言つたみたい。

「いや、教えてくれ。畠はどこなんだ」と聞くので、
「わからない」と。そして、

「冬青草、夏ジヤラジャラ」と。そして、

「それなら私が答えを話しましたら、その畠を私にく
ださるか」と。

表一編
妻の語り述いか。妻は答はま
育成中であるため背く、夏に熟成して枯
れる。

表二ジンブノー 知慧 分別 才能

(その友人は) 親子の馬を連れてきていたそだよ、

そこに。親の馬を連れて来ていたので、

「私が答えを話したら、その馬を私にくださるか」と

「おまえが教えてくれるならやろう。おまえが教えてくれるなら私の馬をやろう」と言つたので、

「本當ですか」

「本當だ」と。約束をかたく結んだんだね。

「冬青草、夏ジャラジャラ」というのは、稻のことです

と。

「稻刈りに行つてます」と。

「冬は稻は青くて、夏になつたらさらさら、夏は稻刈りに青く行つてます」と。

「ああ、そうなのか」と。

「さあ、馬は私のものですね」と。綱を出してきて、

門の木にその馬の首を結んだ。その馬の主人は泣いて

いたつて、馬を取られてしまつて。

それだけ小さい頃から知恵があつたつてね、渡嘉敷

ペークーという方は。

「おまえのお父さんはどこかね」と聞いたり、

「冬青草、夏ジャラジャラ刈りに行つてている」と。ああ、仕方がない、

「その馬を私にくれるなら、教える」と(言うの)。

そうして、耕作地まで父の友人を連れていったわけだね。

(19) 書と歌の名人

① 棟上げ祝い

方言原話)

家ふち祝儀があつたそだね。そのときに、ペー

クー、あれはまあ、今もいるわけでしょう、あつちに。

たいへん間違もあるし、また、滑稽な人でもあつたこ

とは、集まつてきた人にはわかつてゐるでしょう。

渡嘉敷ペークーさん、うぬ、ていーちえーカリーぬ

歌、詠でいきみそーれーと言つて、言つたらよ、

「この歌ねーちやーがやー」つていうことで、言ゆー

てきたら、

「くぬチネー」やらや、

「くぬ家や」だつたかなあ、

「ヤナムンに取り回まつていや、いつべーいーたしや

そーら」。そしたら、お祝いの座に、ヤナムヌ取い囲

まつていという意味はね、「これ、いほーなーやつさー

やー」という感じを受けたそうだ。そしたら、後のク

ビはまた、たいへんおもしろいわけ。

「福の神の出る隙もない」ということ言うたらよー、

ヤナムヌ取い囲まつて、

福ぬ神ぬ出じーる 隙間んねーらんどうあたい

うぬ歌詠どーるばーてー。あんすぐどう、

「あー、なまれー上等などーいびーるんなー、渡嘉敷

さん」ち、うぬベークーんかい、うぬ話さんでいぬ話やたんてー。うり聞ぢやるばーてー。

新屋宇盛(明治四十年生) 越来

福ぬ神ぬ出る隙もない。ヤナムンに取り囲まつて、や、福の神の出る隙もない。あとの言葉がね、たいへんめでたいよな、あのー、座ぬカリーやしえーや。福の神なし、ちやんなていぢやーうらんとーならんくとうやー。ぬちれーちやーうりさんとーならんしぇーやー、うまー。

あんしーねー、うり、ゆるつとうなどーるばーやはしぇー。そんな、しゃれたどいうかな、機知に富んだような歌を詠んだということを聞いた。

（共通語訳）

棟上げ祝いがあつたそだね。そのときに、ベーケー、あの人は今もいるわけでしょう、あつちに。たいへん学問もあるし、また、滑稽な人でもあつたことは、集まつてきた人にはわかつているでしょう。

「渡嘉敷ベーケーさん、その、ひとつ縁起のいい歌を詠んでいただけませんか」と言つて、言つたらね、「この歌ではどうかな」つていうことで、言つてきたのが、

「この家庭」だったかな、

「この家は」だったかな、

「魔物に取り囲まれてね、とてもものほしげだ」。そしたら、お祝いの席に、魔物に取り囲まれてという意味はね、（集まつた人々は）『これは、奇妙な歌だなあ』という感じを受けたそうだ。そしたら、後の節はまあ、たいへんおもしろいわけ。

「福の神の出る隙もなし」と言つたらね、

魔物に取り囲まれて
福の神が出る 隙間もないくらいだ

そんな歌を詠んでいるわけ。そうすると、
「ああ、今こそ立派な歌になつてゐるね、渡嘉敷さん」と、このベーケーに、この話はしたという話だったわけだよ。

福の神の出る隙もない。魔物に取り囲まれてね、福の神の出る隙もない。あとの言葉がね、たいへんめでたいよな、あの、座の縁起つけだからね。福の神は、いつも、こうなつたらいつもここにいておかないといけないからね。のちにもいつもそうしないといけないからね、ここは。

そうしたら、これ、やわらいでいるわけだから。そんな、しゃれたどいうかな、機知に富んだような歌を詠んだということを聞いた。

② 不吉な祝いの書

嘉陽田朝興（大正二年生）胡屋

ベーケーですか。だから、この人はね、いわゆるその、北谷に生まれてゐるんですよ。それから非常にその、とんちに長けた人で、結局、首里の王朝、当時の王朝の時代でしょうね。首里に呼ばれて、それで首里に行つてですね、それからいろいろこう、いろいろなことをやつたらしいんですけどね。で、最後は、この人はあまりその口もたつし、それから学もある

し、そういうことで当時の首里の、なんと言いますか、えー、士族の連中からはあまり煙たがられていたといふことですね。

たとえばね、どういうことかといいますと、その御殿の名前はちよつと忘れてますが、ある御殿の新しい建築をやつたと。で、そこに、非常に筆もたつもんだから、なにかその「この額に納めて床の間に書いてくれ」と、「床の間に掲げる書を書いてくれ」と、

そういうふうになつたら、この人がね、

「朝死、子死、孫死」というこの六文字を書いて送つたから、大変なことなつていてるんですよ、それが、どんでもないでしょ。

「どんでもないことだ」と、

「これは許されない」と。

「ベーケーを呼べ」と。で、そのベーケー呼ばれてですね、その祝宴の座に、建築祝宴の座に座らされて、「なんの恨みがあつてこういう書を、こういうことを書いたか」と。で、もう、詰問されたんですね。したらね、

「そうか、これ悪いか。じゃ、これ悪いなら反対にしようか。この字の意味がね、悪いなら、じゃ、反対にしようか。それでどうなるか。この御殿はどうなるか。その意味わかるか」と言ってね、逆にそのやられて、みんな、しーんとなつたといふうなこともあるんですよ。そうです、そう、順序。これもう、

「これが自然である」と。
「人間は生まれれば死ぬのが当然だ」と。

「で、これはもう、当然、そのね、上から順々にこう、亡くなつていくのが自然でないか」と。
「逆にしてどうん、どうなるか」といつて。

「もう、この御殿は、もう全部、その、消滅するがどうするか」といつて。こういうふうなね、なにをしたら、もう、みんなしーんとなつて頭下げたらしいです。よ。それぐらいの長けた。

③ 能書家の隠居

喜友名朝啓（大正十四年生）南桃原

この、公儀のですね、昔は毛筆さーね、公文書書くのはね。これは、ほとんどその時代は渡嘉敷ベーケーが書いたそうです。あのときの時代の、一番の書道家であつたらしい。字のきれいいつつて。

で、それであの、渡嘉敷ベーケーがここにきたのもですね、もう、ちょっと頭が年取つてね、字もやっぱり、目もある方、うぶかないしてあれ、字も曲がつて書いておつたんでしようねえ。で、王様が、「渡嘉敷ベーケーは、もう、やっぱり年とつたなあ」ということ感じて、同情してこちらに、北谷に隠居させたわけですよね、らしいんだが。

その子孫の方々が真栄城とか与儀なんですよ。だけどもですね、その人にそう言つたのか、あの人のすごいとんちのある人だから、それ、なんて言つてあれしたかわからんがですがね、沖縄でのどんちのあれだ、そのおもしろい話がむこうにはたくさんありますよ。

まづふかないじで直訴するみたいへん（目）が利いて、となるが、文脈を考應すると、年老いて視力が落ちてきたことを言つて思われる。

(20) その他、渡嘉敷ペークーにまつわる話

① キーウィとモーウイ

新崎カマド(明治四十二年生)中の町

方言原話

「キーウイモーウイ喰いたん」でい。

「あん言一しえー、ぬーがぬーやが」でいぢやぐどう、
「いやーあん言一しんわからんなー」。

木売しが、モーウインチ瓜があるよね、瓜。瓜があるさ、モーウイって大きいのがね。うり、木商売すし
が、モーウイが生むんかでーるばーてー。木売やーが、
材料売いるつ人ぬモーウイ生むんかでーるばーてー。
あんざくどう、

「キーウイがモーウイ喰いたん」でいぢやぐどう、
「ぬーが、あん言一しえーぬーやが、渡嘉敷」んぢや
ぐどう、
「いやー、うりんわからに。いやーがする仕事やさ」
んでい。

共通語訳

「木(きゅうり)がモーウイを食べた」と。

「そう言うのは、なにがなんだって」というと、
「おまえはああいうのもわからないのか」。

木売しが、モーウイというウリがあるよね、瓜。瓜
があるさ、モーウイって大きいのがね。それ、木を商
う人が、モーウイの生のものを食べていたわけ。木売
りが、材料を売る人が、モーウイの生のものを食べた
わけ。そうしたら、

れてこの竹割るか。こんなして割りなさい」といつて、
こう、こう、こうして、みんな割りよったわけ。こん
な大きなマータク。マータクわかるでしょ。手で、こ
う、横にこうやつてから、また今度、横にこう入れて
入れて、こう。渡嘉敷ペークーが、

頭もよかつたわけじゃないか。

「木賣いぬモーウイ喰い」んぢやくどう、
「おまえがやつていてるじやないか」つて。

「あん言一しえーぬーやが」んぢやぐどう、
「キーウイぬモーウイ喰いでいぬ、木賣やーがモーウ
イ喰んでいしえーぬーやが」んぢやぐどう、
「いやー、あんしやー木(きゅうり)材料売どーてい」。材料に木
んでいしえーやー、その材料商売している人が、その
モーウイ一生で、夏だから、暑いから生でかんで、食
べているわけ。なにか皿にも入れないで、ただ、やつ
たりかんでいるわけ。だから、「木賣いがモーウヤー
喰いたん」。

木(きゅうり) 瓜の一種 しろうり。きゅう
うりに似た瓜で、食用。
木(きゅうり) きゅうりのこと。

木のマータク 竹の一種ダイサンチク。

「きゅうりがモーウイを食つた」といつたので、「なんだ、そう言るのはなんのことだ、渡嘉敷」というので、

「おまえ、それもわからないか。おまえがする仕事だよ」と。

キーウイ、モーウイ。瓜だよ、モーウリ。いまのきゆうりは小さいでしよう、こう長くて小さいでしょ。モーウイといつたらね、このぐらいでこのぐらい長くして、赤くして。見たことない? 店に出てるよ。あれ、モーウイ。昔から、キーウイ、モーウイといって、二つにわかれていたよ。それ(モーウイ)を食べるのは、材料(材木)を売る店の主人なわけ。

だから、

「おまえは、なんで商売もやりながらこんなに手間暇かけてこの竹を割るのか。こんなふうにして割りなさい」といつて、こう、こう、こうして、みんな割つたわ。こんな大きなマーテク(ダイサンチク)を。マタクわかるでしょ。

頭もよかつたわけじゃないか。

「きうりがモーウイ食べて」といつたら、

「おまえがやつてあるじやないか」とつて。

「そう言のはなんのことだ」と言つたので、

「きゅうりがモーウイ食いというのは、木売り屋がモーウイを食うというのはどういうことだ」と聞くと、

「おまえ、そうやって木を、材料を売つてゐるだろう」。

材料に木というだらう、その材料商売している人が、

そのモーウイを生で、夏だから、暑いから生で食べているわけ。皿にも入れないで、ただ、やつたりかんでいるわけ。だから、「木売りがモーウイ食つた」。

② 八重山在番

島袋盛保(明治三十七年生)知花

方言原話

渡嘉敷ペークーンでい言しえー、八重山在番ぬ芝居ぐわーんあたんひが、いつたーがんわからん。川平節、あれー、あの、女ー、どうーぬ愛さる女ー在番なかい引ち上ぎらーに、あり忍でい行じやーに、川平節えーありし、

「なー、うぶいなーぬ在番とう争いんならんあい、命ぬありわどうぬーぬくどろんない」「んち、断いんほーしが、断らはんなやーに、けー逃げるばーに捕らつてい、島流しはりーる途中に、うぬ渡嘉敷ペークーが、「はい、ぬーんち今時分、船ぬ出じーんが。島流しどうやみしえーるい」んちやくどう、

「おー、言みしえーるぐどう、うれー島流しやん」でいちゃくどう、

「ぬーんち島流しえーはみーがーんちやくどう、

「あんがんやん」でいち、さくどう、

「うれーありがる想さる」でいやーに、

「私がお願いすくどう、降るしーんち、

「いやーや在番とうんあんしてーたつち、いやーぬんでいる人やが」

「ぬーやらわんしむくどう、私が返答すくどう、降るしー」

*1 在番 在番者のこと。近世琉球において、宮古、八重山に派遣された幕府のものにて忍んで行く男ども。最初は若手が男の情けにほだされた遊女どもが、最後には将来を誓い合つたもの。

※2 川平節 かびらぶ。男女の交遊をうたつた一種の舞曲歌。思いをかけた姉妹のものにて忍んで行く男ども。最初は若手が男の情けにほだされた遊女どもが、最後には将来を誓い合つたもの。

んち。

「コーガーキー／＼わーさーに在番ぬ前んけー行じ、うりが／＼説離子／＼さーさー、うつたー成り行ひぬ、ちやーちやーやてーんでいる、ありぬままぬうり、口説離子／＼わーし、もーいぐわーさくとう、

「いやー、アタビチ、私つたーん前んけーんコーガーキー／＼來ゆーるむん」でい言やーに、サージえーけー取たくどう、渡嘉敷ベークーなやーに。なーうつたーんでーとー位んぬーん詫ないる人よーうらんだきさくと。かえつて、あまぬ悪さはつてーざさんでいぬ話やしが。

あぬ人よー、琉球王ぬ落とすし詫やーるふーじ、渡嘉敷ベークーや。貞栄さんがちょうどゆーわかいひがや。

あんほーしが、奥間カンジヤーんち、奥間うてい力ンジャーしめーるばーんあたんでい。また、渡嘉敷ベークーんでいる人よー、魚釣やすりらちどうくわーしみしぇーたんでい。黄魚釣ん、どうーくるしこーてい魚くーくわーすくどう。

「曲ぎーねーや、うれー心ん曲がとーん」ち。うれーまじ、私ねーなーてーふあどうやしが、冗談どうやつしが。

「本當や、すりらちくわーはーる、くわーちやるうちやる」んでい言みしぇーたん。ありがむのーかからすたんでいよー、すりらちん。

<共通語訳>

渡嘉敷ベークーというのは、八重山在番の芝居もあつたが、あんたたちも知らないか。

川平節、あれは、あの、女が、自分が愛している女が在番に連れて行かれて、女のところに忍んで会いに行つて、川平節を歌つて、

「もう、このように位のある在番とは争うことできぬし、命もあってこそいろいろできる」と、断ろうと思つてゐるが、断ることもできなくて、逃げだしたときに捕らえられて、島流しにされる途中でこの渡嘉敷ベークーが、

「あれ、どうして今時分、船が出るのか。島流していらっしゃいますか」と言つたので、

「ああ、おっしゃるよううに、これは島流しだ」と答えたので、

「どうして島流しされるのですか」と、(渡嘉敷ベークーが)聞くと、

「かくかくしかじかで」と答えた。すると(渡嘉敷ベークーは)、

「それは在番が悪い」といつて、

「私がお願いするから降ろしなさい」と。

「おまえは在番にもああして刃向かつて、おまえはどういう人なのか」

「なにものでもいいから、私が話をするから降ろしなさい」と。

(その後) 頬かむりをして在番の前に行つて、渡嘉敷ベークーが口説離子をして、島流しされる人の成り行

※「コーガーキー 梶かむりをする」と。

※2 口説離子 口説は歌謡の一種で、叙事的な長編の歌。ここでは、在番の異性によつて慕つてゐる男が引き裂かれるということの成り行きで、「口説ひゆうに」と歌つたことを表したものか。

※3 貞栄さん 島流本島流のことを。この話の話者である島流本島流は、既に知花樂屋田身で、島流店にも話者として民話調査に参加いたいでいた。

※4 貞栄さん 島流本島流のことを。この話の話者である島流本島流は、既に知花樂屋田身で、島流店にも話者として民話調査に参加いたいでいた。

※5 奥間 沖縄本島北部、国頭村の字。
おくま。方言でウクイ。

きを、こうこうだつたと、ありのままにそれを、口説
難子にして、踊つたら、

「おまえ、馬鹿やろうめ、我々の前に頬かむりをして
来るとは」と言つて、手拭いを取つてみると、渡嘉敷
ペークーであった。もう在番たちあたりとは（渡嘉敷
ペークーは）位もなにも話にならない人であつたらし
くて。かえつて、在番が悪いことをしたというような
話だけど。

あの方は、琉球王の落とし種だつたらしい、渡嘉敷
ペークーは、貞栄さんがまさによく知つているけど
ね。

そういう方であるが、奥間カンジャーといつて、奥
間で鍛冶屋をなさつていたときもあつたつて。また、
渡嘉敷ペークーといふ人は、釣針も真つ直ぐにして魚
を釣つたそうだ。昔は、釣針も、自分で用意して魚を
釣るから。

「（釣り針を）曲げたらね。それは心も曲がつていて」
と。私がそういうのは、こつけいで、冗談であるが、
「本当は、針を真つ直ぐにして喰いつかせてこそ、喰
いつかせたうちはいるんだ」とおつしやつた。あれ
でも釣ることができたそうだ、釣り針をまつすぐにし
ても。

③ 盗まれた風呂敷

稻穂盛康（明治三十九年生）山里
波嘉敷ペークーというのは、いわゆる、今の大蔵大
臣に相当する職なのに、ちよつと。で、この人は、一

般の普通の人だが、勤めが大臣級の人に、いわゆる。
そして、その頭の按司とかね、親方とか、オオクナと
か。その、付き合いをやつてね。

六十ぐらいのときに職をやめて、桑江、北谷の桑江、
そこに移ってきた。そこに移つてきたらば、この『

聞き取り困難』。

この渡嘉敷ペークーの隣には豆腐屋があります。い
ろんな店もあつたわけ。

それで、旅の青年が豆腐を食べに来た。昔は、豆腐
を買って食べて、そうして『聞き取り困難』もらつ
て、豆腐屋から。そして食べたわけ。そしたら、豆腐
屋の人は、女人一人、主人も、家族もみんな、女の
人ひとり。この時、豆腐を食べて出ようた時、自分の
風呂敷を、この青年は離してね、風呂敷を台所にいる
女にわからんように。青年が、ほで、戸棚の中に入れ
たわけ。そして、しばらくしてね、

「私の風呂敷、風呂敷がなくなつた」と言つて。
して、この豆腐屋の女に、

「あんたが取つたんだう」と意味わからんですよね。
「なくなつてゐるのに、風呂敷。あんたがたなんか屋
敷に誰もおらんのに」

実はこの青年ね、『聞き取り困難』ほして、自分
の風呂敷袋に、その豆腐屋のものを『聞き取り困難』

』とつたら、戸棚に入れて。そして、ずっと、あつ
ちこつち探して、どこともかも探したから、

「取つたんじゃないか」と。豆腐屋が取つたんじやな
いかと言つて、探して。

第一オオクナ 聞き取り困難、未詳。位
階が役職名と思われる。

表2へ 聞き取り困難 この語型は
語彙状況により聞き取り困難で翻字などで
さかなかった箇所が複数ある。それらはす
べて『聞き取り困難』と記した。

「はい」と言つて青年が戸棚を開けたら、そこに自分の風呂敷があつたんだ。そこに。

「風呂敷を取るうと思つたら、あなただけにしかできなさい」と（青年が女主人に）言つて。

「自分はそんなことはしない」と。

「これは誰かがやつた」。そしたら青年が、「誰もいないのに、誰が」。

そうして困つてしまつて、女の人は。もう、こうなつたら、女は自分が悪いとは思わんでしょ。証明する人を呼んで、そこで、女はその青年に（言われた）。

「私の風呂敷、お金が百貫入つている。もし、それがなければ、豆腐代も払えない」。昔の百貫と言つたら、今の一円以上。

そうして、やつたら、この女の人はもう、必死で、死に物狂いで、家ぬ後がら、腰のおじいに、渡嘉敷ペーク一ね。

「実はこうで来ておるが」。

「そうか、じゃあ、私がなんとかしよう」と言つて。フジョー、昔はフジョー、煙草入れ、キセルも一緒に。それを持つて、そして

「はい、にーしえー。いやーやぬーしーがちやが（やあ、兄さん。あんたはなにをしにきたんだ）」

「豆腐かみーが来よーたしが、くぬ女こ一密人どうやる。私の風呂敷えー戸棚にかじみて、うりなかい錢ぬんだーん入つちょーん」んちや（豆腐を食べに來ていたんだが、この女は盗人なんだ。私の風呂敷を戸

棚にかくして、それには金もたくさん入つてゐる」と言つてね」。

「えー、あにー。とー、あんすらー（おや、そうなのかな。さあ、それなら、私ね（私の）考えを当たつてみよう」

フル（便所）、昔の便所。ここまで（聞き取り困難）、かわつて、この渡嘉敷ペークは煙草入れをこの人の風呂敷包みに入れてしまつて。そして、

「私もここに来て、煙草入れに二百貫入れとつて。この女が取つたんじやないか」。こうして、

「不思議だなあ」と、いろいろ言つたらね、あつちこつちね。その女を呼んで、

「着物のなかに入つていて『聞き取り困難』」。

「私の煙草入れは、あんたが取つたんじやないか。二百貫だから、もし、なければ、おまえは泥棒扱い」

ということで。そういうことで、ますます、困つてね、この女は。こうしてしはらくしたら、

「えー、にーしえー。私煙草入りん、まーとうめーていんねーらん。いやー、ふちゅくる入つちえーねーらに」

（おい、兄さん。私の煙草入れも、どこを探してもない。おまえ、ふところに入つてしまつてないか）。開きていよ（開けてね）、そしたら、その煙草入れが入つてるでしょ。

「私ねー二百貫錢入つちよーたしが、開けてみたら、ねーやびらん。とー、あんしえー、うぬ錢ぬんいやーが取つてーる（私は煙草入れに二百貫のお金を入れて

いたんだが、開けてみたら、ありません。さあ、それでは、その金もあんたが取つたんだ」

「あい、私ねー、うまにうたんだーやー（ええつ、私は、ここにいたんだよ）」「あんしえー、にーしえー、私煙草入れ、フージヨー、フジヨー、いやーが取つてーる。いやーふちゅくるうちに入つちよーる（それじや、にいざん、私の煙草入れは、あんたが取つたんだ。あんたの懐に入つていたんだぞ）」。

そうして、もうしようがない、（青年は）逃げて。

そしたら、渡嘉敷ベーケーは、その女人に、

「門ぬはたにへ 聞き取り困難」かきて、行いく！

ひー（門のそばにへ 聞き取り困難）をかけて、行つてきなさい）。もう、これで終わり」

そしたら、晩になつたら、このうちくつちはね、この（なくなつていた）。

④ 立ち合い

西平守兼（大正三年生）胡屋

渡嘉敷ベーケーという、武士でもあつたでしょ、ねえ、たぶん。薩摩の国から、なにか試合申し込まれて、もう駆動になつて。それで、あれ（ベーケー）を呼んで。そうしたら、沖縄のね、ゴザの大工もね、結び一といふでしょ、あれは。イーもほんと同じころのもの全部、それも作らせて。またこの大工の大工の棟梁が来て、全部立派な力ナ（飽）をついて。この試合する舞台を作るのにね、そんな話を聞いたんだが。これは、ただあまくま話（あつちこっちにまとまつてない話）だから。それで舞台作つて後に首里の空手

の上手たち立つて、

「手（空手）をやつてこらん」と言つてもね、滑つて、もう立ちきれなかつたらしいよ。あんまり、この、立派にされてね。このイーもね、油ぬいて干して。この床も油塗つては、干し干しして。それでちゃんと作つてから、ゴザ敷いて空手使えきれなかつたらしいね。滑つて。それで、薩摩の武士が来て、立つて、その試合するといつて立つたら、もう、ガタガタしてよ。足でこう引つ張つてから倒れていたから、すぐそのままおして、もう薩摩の武士は負け、負けたという話。いろいろ昔話はあつたんだが、もう、はつきりわからぬえ、渡嘉敷ベーケーという人の話も。

※3 渡嘉敷ベーケー この語りの内容自体は、主人公を勝連バーマとして語られる場合が多いが、この話者は、渡嘉敷ベーケーの事績として語っている。

※4 勝連切 沖縄本島中鹿、勝連半島にあった商切。現在のうるま市の旧勝連町域に相当する。

⑤ 神への供物

仲宗根カメ（明治四十二年生）登川

渡嘉敷ベーケーといふ人はね、非常に働き人ですね。この働いて作ったものも、神様に守られたおかげさまでね、できているから、自分初め食べていいないと言うてね。煙の弁当でもね、開いたらすぐ神様にあげてから食べよつたんじる（食べたという）、その話。よー、うつさ（ただ、それだけ）。

⑥ 十日月・こがね待ち

知念善助（大正七年生）古謝

（方言原語）
昔、渡嘉敷ベーケーはね、勝連間切の地頭だつたつて。言いねー總頭でー。支配していたわけさ、この勝連

※1 つむぐつか うぢくい（風呂敷の方言）のことか。

※2 薩摩 薩摩藩のこと。現在の鹿児島県にあつた藩。島津氏を藩主とする。

一六〇九年に琉球國に侵攻し、以降支配下に處く。

間切をね。それで、首里グシクの前にイユグムイがあるからね。あれを構築するために、名市町村からブーを出したわけ。労務者を提供したわけ。

で、今度、勝連の日に当たったもんだから、渡嘉敷ペークーは、勝連の労働人民をね、何百名なら何百名と云つて、決まつていんでしょ。それを引き連れて首里グスクに行つてね。で、

「今日や二十四、五日どうやんていむん」。あぬ、太陽ぬみていらんまる一月も一緒に上がつてくるらしいんだよな。あれは二十九日あまでいからやさ。二十七、八日頃やさ。その日にあたつていたわけさ。そして、

「今日や私つた一月ぬ上がいるえーかちばていなーびらいーんちやくどう、

「どー、あんし、あんしーぶー、ペークー。んちや、いやーがすんねーやさ」んでいち、「あんしえー、あんしえー、月ぬ上がいるまでいやいびーんやー」と言うことで、もう、言葉切つて。あんさくどう、

「どー、どー、あんしえーなー」。うつたーなーい、あんしえー夜夜中までいすんちやんなーんちふーじーなー、首里グスクはなにしていたでしょ。さくとう、

「どー、あんしえー、はい、しんかぬぢやー、なー私つたーや今日や月ぬ上がいるえーかはまりわるやんどー。あんうつさ相談つし約束しちえーんどー」でいちゃくとう、うぬ人たーん、

「あいやー、あんやみ。とー、あんしえー、あんさびらやー」と云つて、みんなやつてたわけ。

とー、あんしがいーに、また、ヤグイー、ヒヤミカ

チャグイーーねー、

「渡嘉敷ペークーがに持ち」んち離子えー入つてー

うーしよーで、囁き言葉ね、

「これを入れておきなさい、ちやーあんやりよー」と言つてしまんだからね。仕事えさがなーよー、

「渡嘉敷ペークーくがに持ち」んち、あつたーー、

働いてる人が離子入れたわけさ。あんさぐどう、

「えー、ひるましーむん。黄金持ちんでいが、ちやつさ黄金持つちよーがやー」でいち、うぬ首里グスクぬ、

まあ、いわゆる王のあれがね、珍しがつて、

「えー、ペークー、えー。ぬーんちいつたーーあん

しいやーんかい「渡嘉敷ペークー黄金持つ」んでいるうりすしが、離子入つとーてい仕事すしが、いやーあんすか黄金持つちよーみんちやくどう、

「あー、うほーく持つちよーいびーんどー」でいちや

くどう、

「あんしえーうぬ黄金見しり」んちやぐどう、鍋ぬ割

りよ、鍋物の鍋ぬ割り、うりたくさん持つてあるく、

これ、クーガー。ナーピナクーがあれる場合、あれ

を落かして補修するわけだから。これ、クーガーたつたつて。

「黄金じゃない、クーガーどうやんどー」んでいち、クーガー。鉄肩のことをクーガーと言つてた。あれを落かして鍋を補修するわけだから、穴あいたの。そ

*イユグムイ 首里城北側にある池
龍源(りゅうげん)のこと。魚が多すぎたことからイユグムイ(魚小窓)と呼ばれ。尚巴志王代の一四一二年に作成された。尚巴志王代の一四一二年に作成された。尚巴志王代の一六七八年記の首里魚沼泡文によれば、尚巴志王代の六〇四年に渡嘉敷されたほか、紀元前の一六七八年十二月から八月にかけて、石工二三五五人、夫役四万三四六人を要する大工事でもつて池をさらい、岸辺の骨石を修築したとある。

まづ一工夫、人足を出すこと。夫役(ふやく)、夫連(ふれん)といふ。琉球王室時代の租税のひとつで、労役のかたちで納める粗い。また、その労働に徵用されたり夫たちのこと。

*クーガー 方言の「クーガー」という詞は、開いたものを閉じるにあらうをやくと云ふ。クーガーは、直訳すると「ふきがね」というような單語で、鍛冶屋が鍛器を開いた穴をやぐるのに用いる金屬片を指す。

*ナーピナクー 鍋、釜などを修理する職人、鍛冶屋。

れでクーガニという。

「クーガニ持ちどうやいびんどー。黄金じゃないよ」
んでい。

「え、あんどうやるい」と言つてね、腹をかかえて
笑つたというよなこともあるが。

あんさくどう、

「遠いな、月えー上がどーびーる、家かいはいび
らいー」でいやーに、なーら、なー、あさばん食でい
ちやーきるやんでいしが、家んかい帰つたつて。なー、
うれー相談だつたから、とんち、とんち。

〔共通語訳〕

昔、渡嘉敷ペークはね、勝連切の地頭だつたつて。
いわば総頭だよ。支配していたわけさ、この勝連切
をね。それで、首里城の前にイユグミイがあるからね。
あれを構築するために、各市町村から人夫を出したわ
け。労務者を提供したわけ。

そして、今度、勝連の番に当たつたもんだから、渡
嘉敷ペークは、勝連の労働人民をね、何百名なら何
百名といって、決まつていたんでしょ。それを引き連
れて首里城に行つてね。で、「今日は二十四・五日であるから」。あの、太陽が沈ま
ないうちに、月も一緒に上がつてくるらしいんだよ
な。あれは二十日過ぎてからだよ。二十七、八日頃だ
よ。その日にあたつていたわけさ。そして、「今日は私たち
は月の上がるまで頑張りますね」と
いったので、

「さあ、それでは、そうしなさいよ、ペーク。そろ

いうなら、おまえがしようというとおりにね」と、
「それなら、それならば、月の上がるまでですよ」

と言つことで、もう、言葉を切り上げて。そして、
「さあ、さあ、それなら(そのように)」。『この人たちは、
それなら夜の中まで(作業を)するというのか』とい
うふうだ。首里城は思い込んでいたんでしょう。する
と、

「さあ、それなら、はい、みんな、もう私たちは今日
は月が上がるまで働かないといけないよ。そのよう
に、それだけ相談して約束してあるんだよ」というと、
その人たちも、

「ええ、そうですか。さあ、それなら、そのように
しますね」と言つて、みんなやつてたわけ。

そつ、そのうえ、また、掛け声、気合を入れる掛け
声をかけるときには、

「渡嘉敷ペークこがね持ち」と囁きを入れたりしろ
よ」と、囁き言葉ね、

「これを入れておきなさい、ずっととそう言いなさい」
と言つてしたもんだからね。仕事をしながらだよ、
「渡嘉敷ペークこがね持ち」と、あの人たち、働い
ている人が囁きを入れたわけさ。そうしたら、

「おや、珍しいことだ。黄金持ち」というが、どれほど
黄金を持っているのかなあ」と言つて、その首里城の、
まあ、いわゆる王の下で働いている人がね、珍しがつ
て、

「おい、ペーク、おい。どういうわけでおまえたちは、
おまえたちは、

ああしておまえに「渡辺一^ク黄金持^チ」というふうに囁^{ささ}すけど、囁^{ささ}子をかけながら仕事をするけど、おまえはそんなに黄金を持^チているのか」と聞くと、「ああ、たくさん持^{っていますよ}」と言^うと、

(1) 勝連バーマーの事績（モチーフ複合）

久場政三（明治四十三年生）園田

第一回 遇バーマー 生没年夫詳。尚敬王から尚穆王のころ、十八世紀の人がいわれる。本名を前浜三良とい、勝連間切平安家の前浜家に生まれたと。勝連間切の地頭代を勤めたことから、バーマーとあだ名がついた。

「それならその黄金を見せてくれ」というので、銅の割れたものよ、鋳物の鍋の割れたもの、それをたくさん持つてあるく、これ、屑鉄。鋸掛け屋が修理すると、ぎ、屑鉄を落かして補修するわけだから。これ、クーパーにこまつとつて。

「黄金じゃない、クーガニなんだよ」といつて、クーガニ。あれを溶かして鋼を補修するわけだから、穴があいたのを。それでクーガニという。

「クーガニ持ちなんですよ。黄金じゃないよ」と。
「ああ、そうなのか」ということになつてね、腹をかかえて笑つたというようなこともあるが。

「(勝連は) 遠いので、月が上がつて いますので、家に
帰りますね」といつて、まだ、もう、昼食を食べ終え
たばかりだというのに、家に帰つたつて。もう、そう
いう取り決めだつたから、とんち、とんち。

「豆腐なす食くむらーぬびでい買くやーなかい」はまいてか
みよーいー」んでいち。あんさーい、うぬひだ夫おぬぢゃやー
んかい話はなさーい。うりからーはまてい、豆腐なす賣うやーん
来るんきえーうり買うてい食くでー、あんし屈かがのー食く
でー、うぶいゆーどうしーねー、なー月つき上あがとーく
とう、
「なー、勝連かつらのー遠とおさのーあん、月つき上あがとーいびー
くどう、なー家いえかい福ふくらくみそーれー」んち。

「今、早く一ねーんなー」んくどう、
 「うー。今日ぬ月ぬ上がる間んでいち、私ねー約束
 しえーびーくとう、上がらしくみそーりー」ち。それで
 もう仕方がない。あんさーい、豆腐代ん払ーんよーい、
 しぐ引ち上きていい家かい帰たんでいる話。御城造くい
 るばーぬ人夫。

あれー、「今日やまーぬ部落、明日まーぬ部落」んち。
 あんさーい、人夫出じやち御城造くたんでいくどう。
 勝連のーうぬふーじーやたん。

やつぱり昔人が、そういう話。うれー、若さいに
 聞ちえーるぐどうるやる。今聞かぢやんてーかん……
 んー、年寄ん達からよ。今聞ちゆるむんやれー、また
 後じーからーけー忘れー、わからんよー。もう、頭は
 古くなつてゐるから。

〈共通語訳〉

はじめて、あの、勝連バーマーが御城を造るとき、
 各集落「今日はどこの部落、明日はどこの部落」といっ
 て、城から夫役が決められていた。それで勝連は遠い
 よね、勝連からあちら（首里）は遠いので、

「もう勝連は遠くて、今やつと来ましたので、今日の
 月が上がるまで働かせてください」と。そうしてね、
 やはり大将になつてゐるよね。（バーマーは）勝連の
 大将になつてゐるんだよね、知恵があるわけ。そうし
 て今日は十三日だから月は二時頃上がるよね。そうし
 て、その仕事をしながらも、

「勝連バーマーは金持ちだつてよ」とかけ声をかけな

さいよ。そうやつて、

「豆腐も食べるなら掛けで買つて、はりきつて食べな
 さいよ」といつて。そうして、人夫たちに話をして。
 それからは（人夫たちも）一生懸命働いて、豆腐売り
 が来れば豆腐を買って食べて、そうやつて昼食を食べ
 て、少しすると、もう月が上がつたので、
 「もう、勝連は遠くもあるし、月も上がつていますか
 ら、もう家に帰してください」と

「今は、早くはないか」と言うと、
 「はい。今日は月が上がるまでと私に約束なさいまし
 たので、仕事を上がらせてください」と。それでもう
 仕方がない。そうやつて、豆腐代も払わないで、さつ
 さと引き上げて家に帰つたという話。御城を造るとき
 の人夫。

あれは、「今日はどこの部落、明日はどこの部落」と（決められている）。そうやつて、人夫を出して御
 城を造つたというから。勝連はそんなふうにやつたそ
 うだ。

やつぱり昔人が、そういう話（をしていた）。こ
 れは、若いときに聞いたことなんだから、今聞かされ
 たとしても……うん。お年寄りの人たちからよ。今聞
 いたとしても、また後からすぐ忘れてしまつて、わか
 らんよ。もう、頭は古くなつてゐるから。

喜屋武英正（明治三十一年生）久保田

方言原話

「勝連バーマー、なー時間遅くりて、なーどう、
「いったーや今日、や時間遅くりとーくどう、
さくどう。なー、

「ぬーんちあんし遅くりて、いやがーんちやくどう、
「和仁屋間うい木刀釜なかい飯煮ーし見じゅんでい
遅らさびーたる」うりんまた燒きてーならんどうー
やたんどう話、うぬ焼きーる語しえーならんぬーやた
んでいよ、うんにんねー。あんしきーくどう、

「なー、今日やー、えーりん十日やーんてーーー。
「今日やなー月ぬ上がるか勝連バーマーやみやびーく
どう」さーに。なー十日月えー早く上がいしえー、月
や。につかからしかきやーい、

「なー、和仁屋間うい木刀釜なかい飯煮ーし見じゅ
んでい、あんし遅くらさびーたる」でいさくどう、

「あい、いったー帰り」でいさくどうなー、

「今日月ぬ上がるかしみやびん」さくどう、なー、
十時頃、早く上がりいしえーやー、十日月えー。あんさ
くどう、

「どー、勝連バーマーゆくり」んちさくどう、なー、大将
などうーが言らよーくどう負きーるばーてー、う
ぬ、うりんかい、勝連バーマーなかい。勝連バーマー、
「えー、勝連バーマーゆくり」。なー、うまぬ係れー約束
やーんち、上がるか、

「今日月ぬ上がるかしみやびん」でいどうやくどう、
はいけないことになつていて、その焼ける話をして
いる。當時はまだ火事の危険性を理解していない。

月 上がとーくどう、

「勝連バーマーゆるし、ちゅんとうゆるしよーーし、よー。

また、勝連バーマーでいしえー、また、ちやー、あ

まういでヤダイー、

「勝連バーマー金持ちていんどーーし、あまぬイユグ
ムイがやらーやなんでいよ。
「勝連バーマー金持ちていんどーーし、さくどう、
「いやー金持ちやんでいるむん、くまんかい持つち
くわー」でいしゃくどう、

「いやー金まんどーんなーーでいくどう、

「おーーんでい言やーに、ナービぬうほーこー、んちや
んだ集みてーーー、割り鍋、鍋力二よ。あんしうま
なかいうーちちえーたんでい。うぬヤグイー、
「勝連バーマーかに持つていんどーーし、しーよーち
やたんでいよー。
調子者やてーんどー、うぬ人よー百姓どうやしが
なー、侍たーや負きーくどう。
「どうしてあんなに遅れてきたのか」と聞かれたので、
「和仁屋間で、木釜にごはんを炊くのを見るといつて
遅れました」それもまた、焼けることに関して言つ
てはいけないことになつていて、その焼ける話をして
いる。當時はまだ火事の危険性を理解していない。

（共通語訳）
勝連バーマーは、もう時間遅れてきたので、
「おまえたちは今日は時間に遅れてきたので帰れ」と
言われた。もう、

「どうしてあんなに遅れてきたのか」と聞かれたので、
「和仁屋間で、木釜にごはんを炊くのを見るといつて
遅れました」それもまた、焼けることに関して言つ
てはいけないことになつていて、その焼ける話をして
いる。當時はまだ火事の危険性を理解していない。

第一和仁屋間 和仁屋間門（ワナマジヨー）のいじ。沖縄本島中央、東海岸
の北中城村和仁屋から瀬戸にかけての浅
瀬。

は。それで、「もう、今日は、たぶん、十日であつたんだろうなあ。」「もう、和」屋間門で木釜で米を炊くのを見るといつて、このように遅れてしましました」と言うと、

遅れて仕事を始めて、

「もう、和」屋間門で木釜で米を炊くのを見るといつて、このように遅れてしましました」と言うと、

「おや、おまえたちは帰れ」と言われて、

「今日、月の上がるまで作業をさせます。するども、

十時頃、早く上がるんだよね、十日月は。そしたら、

「さあ、勝連の人夫は休みなさい」としたら、もう、

大将は、自分が言つたので負けているわけだよ、その、

そいつに、勝連バーマーに。勝連バーマーは、

「おい、勝連の人夫は休みなさい」もう、その係は約束しているので、(月が) 上がるまで、

「今日は月が上がるまでさせます」ということなので、

月は上がっているので、

「勝連の人夫はやめなさい、もうやめなさい」と、ね。

また、勝連バーマーという方はまた、いつも、あそ

こでのかけ声は、

「勝連バーマーは金持ちですよ」と、あそこのイユグムイでとか、かけ声をしていたらしい。

「勝連バーマーは金持ちですよ」としたら、

「おまえは金持ちだというので、ここに持つてきなさい」というので、

「おまえ、金がたくさんあるのか」と聞かれたので、「はい」と答えて、鍋のたくさんあるのを、なるだけ

集めてあつたものを、割れ鍋、鉄鍋ね。そしてそこに運んできていたそだ。そのときのかけ声を、「勝連バーマーはかね持ちだよ」といなさいといふことであつたそうだ。

調子者であつたんだろうね、その方は、百姓だけどもう、侍たちは負けるから。

(2) 十日月

① 十日月

松下栄吉(明治三十五年生) 池原

〈方言原話〉

ありが話え——よ——元ぬり——レンドムイ。今、首里ぬク

ムイヤ——なし、勝連ブ——んち行じやくどうや——な——

え——くぬ勝連ぬ村ぬ人連ていんじさくどう、時間

遅りていよい——な——勝連から首里までい行ぢゅれ——

あんどう、あまぬしんかぬちやんかいな、

「勝連ブ——や今日や遅りと——くどう家かい帰り。明日

んかい来——り言ちやぐどうや——な——

「な——あまからくままでい來ゆ——しえ——な——仕方——な

らんくどう、今日や、必——じ、な——回——ね——十日月

ぬ上——がいるえ——か——しみ——くどう、今日やな——許

くいみそ——り——ち、あんし——え——るふ——じ。な——

あまんな——人——頬——かね——ならん、遅りてう——しが

仕事え——しみて——るば——。さくどう、

「あんし——ね——、いつた——勝連ブ——や、な——回——

ね——十日月ぬ上——がいるえ——ま、だ——、確かに引き受け——

幸一リングタムイ 首里城のそば、龍潭池に接する田舎地のこと。話者が言つている所は、龍潭池、方言でイユダムイと呼ぶ。このように遅く月が空にかかる。このため、日没よりも早い時刻に月が空にかかることがある。

幸一リングタムイ 首里城のそば、龍潭池に接する田舎地のこと。話者が言つている所は、龍潭池、方言でイユダムイと呼ぶ。このように遅く月が空にかかる。このため、日没よりも早い時刻に月が空にかかることがある。

みんちやぐどう。

「引き受けやびーん」り。んじ、うぬしんかくさみちよー、

「いや、一月ぬ上がいるかに、なー一回行ちーねーしみらりーくど、今日ん遅りたまし」なーうぬしんかくさみちよーたんりしが、なー仕方ならん。なー

勝連バーマ言みしえーしえー聞かねーならんばー。

さくどう、なー一回、また勝連アーんち、また行ちーなたくどう。なー時間の一あいてい行じよーるばー

よー。さくどう、番なたくどう、

「皆、はまりよー、はまりよー」し、いつべー働かちやーなー。十日月んちくんたき上がいんよー、三時、四時から、旧ぬ十日月や。あんさくどう、月ぬ上がた

ぐどう、

「はい、勝連アー、家かいどー、家かいどー」し、引

ちあがいてーるふーじ。

「ぬーが、いつたー、うぬ早さ引ちあぎーる」んり。

「あー、十日月上がとーいびーん。見じみそーり」なー

仕方ーならんしえーんでい、はちゃんでいよー。勝連

バーマんり、うぬ人よーうんざくぬ偉い人やるばー

よー。

(共通語訳)

あの人(勝連バーマー)の話はね、元のリングムイ。

今、首里のクムイだよ、(その工事のために)勝連の人たちが夫役ということを行つたらね、あの、(勝連バーマーが)この勝連の村の人たちを連れていった

ら、時間も遅れてね、もう勝連から首里まで行くんで

はね。それで、あちら(首里)の家来の人たちにね、勝連の夫たちは今日は遅れてきたから家に帰れ。

明日来い」と言わされたのでね、

「もうあちらからこちらまで来るのは(大変なこと)で、もう仕方ありませんから、今日は必ず、もう一回来るときには十日月が上がるまで働かせるので、今日はもうお許しください」とお願いしたらしい。もうあちらの方も人の願いは聞かないといけない。遅れては来たが仕事はさせたわけだ。すると、

「それなり、おまえたち勝連の人夫は、もう一回来たときは十日月が上がるまで、どうだ、確かに引き受けれるか」と聞かれたので、

「引き受けます」と。そしたら、首里の臣下の人たち

は憤慨してね。

「おまえは月が上がるまで、もう一回来たときは働かせるからな、今日の遅れて来た分は」。もうその臣下の人は怒っていたといふんだが、もう仕方がない。

勝連バーマのおっしゃることは聞かないわけにはいかないから。

そして、もう一回、また勝連から夫役ということで、また行くことになつたからね。もう時間を守つて行つたわけだよ。そして、勝連の人々が働く番になると、「皆、がんばれよ、がんばれよ」と、うんと働かせていね。十日月つてこのくらいの高さに上がるんだよ、三時、四時に、旧暦の十日月は。そしたら、月が上がつたから、



「はい、勝連の人夫たち、家に帰るぞ、家に帰るぞ」と言つて、引きあげたようだ。

「なんで、おまえたちは、こんな早い時間に引きあげるんだ」と。

「ああ、十日月が上がっています。ごらんください」。もう、仕方がないとなつて、勝連の人夫は帰したそうだ。勝連バーマって、その方はそれだけの偉い人だったわけだよ。

(2) 十日月

島袋新栄（明治三十一年生）池原

〈方言原語〉

昔、イユグムイとかいうところ掘いんりちぬ話ぬあてーるばーやしょー。うぬばーに勝連ブーや人やか遅りやーに、うりしぇーくどう、監督にしちきらーに、「あんしぇー、勝連ブーや十日月ぬ上がるまでいすくどう、なーかんし遅りたしえー許ちくいり」んち顧たぐどう、^{ヒタチハシヨウ}

「あん、なー十日月ぬ上がるまでいすー、あんしむん」りぢ、さる仕事ー、早く月ぬ上がるたぐどう、後から仕事ーしかきやーに、人先ぬがーりたんでいち、勝連バーマーん知恵働ちゅさんでい話聞ちやん。

（共通語訳）

昔、イユグムイとかいうところを掘るという話があつたわけだけどね。そのときに勝連の人夫は人より遅れて着いて、そうして遅れたので、監督に叱られて、

「それなら、勝連の人夫は十日月が上がるまで働くから、もうこうして遅れたことは許してくれ」と（勝連バーマが）お願いしたら、「そうか、十日月が上がるまで働くんだつたら、それでかまわない」と、そうしてやつた仕事は、早く月が上がつたので、遅れて仕事にとりかかり、人より先にまぬがれたといって、勝連バーマも知恵が働くよといふ話を聞いた。

(3) 十日月

松下盛一（明治四十五年生）池原

〈方言原語〉

あれはね、くぬ御城んでーぬむんぬ、うりやるばーてー、仕事ぬあるばーてー。村、一村出じーし掃除すたんでいるむんよ。ちやー早く行じん、遅か行じん、ちやーゆぬまじゅん行じやすたんでい。やたんでいしがよ、うぬ勝連バーマーがてー、

「私つたー月ぬ上がるいいえーかしぇーしむらやー」でいぢやぐどう、

「おー」んでいた。十日月やたんでいひがよー。あんさーに、夜、夜中までいしみーたんでいしがよー、うぬ月ぬ上がるたくどうよー、

「勝連ブーや帰りよー」しょー、勝連バーマー。あんさーに、仕事えーさんよーい、なー月ぬ上がるたくどう、帰ちえーたんでい、勝連バーマーんでいる人ぬ。されー南風原んからめんしぇーんでいしぇー、勝連バーマーでいし。うり有名な人やたんでい。

あれはね、この御城というものの、あれなわけだよ、仕事があつたわけだよ。村、ひとつずつ村が出て掃除をしていたということだよ。いつも早く行つても、遅く行つても、帰らせるのはみな同じく一緒に帰らせたつて。そうだつたといふんだけどね、この勝連バーマー

がだよ、「われわれは月の上がるまで働けばいいかね」という「ええ」と回答があつて。(その日は)十日月だつたそ

うだけどね。それで、(いづもは)夜、夜中まで働かれていたといふけどね、その(月齢十日なので早い時間に)月が上がつたので、「勝連の人夫は帰りなさいね」と言ってね、勝連バーマーが。それで、仕事はしないで、もう月が上がつたので、帰してあつたんだと、勝連バーマーといふ人が。

その人は勝連の南風原にいらつしやるといふんだよ、勝連バーマーといふ方は、この人は有名な人だつたそうだ。

④ 十日月

平田盛永(明治四十一年生)登川

〔方言原話〕

「れー勝連バーマーんでいしえー、勝連ぬブーネ」といつて。ほいで、上のほうから、

「首里城の方はなにか大きな事業があるから、勝連から勝連ブー出じやし」んでい、くぬありが、今の配達

みたようにありがきたわけさー。あんざくどう、勝連ブーや連でいんじさくどう、連さんなやーに、朝連くりてい行じえーるぶーじ。あんざくどう、「くまー、まーから来よーるしんかーんち。
「くれー勝連から、勝連ブーやいびーん」んちやくとう、「今から、なー時間ぬ遲すくなてい、今から来えー勝連ぬブーや連さん。戻ていんじやーに、また明日早ーく來ーんでい、あまぬ役人ぬ言ちえーぎざくどう。あんすくどう、

「あがーとー勝連から、じこー朝ちがきとーるじいやしが、遅さぬ今なるなどーくどうなー、どーりんぐぬまま勝連ブー通ちくいみそーり」でい願てーる。さくどう、「あんしんなんらん。なー、くぬ人んちやーやきつさらしがきとーしが、いつたー今る采よーくどう、ブー や通さん」でい言ちやくどう、「あんしえー今日や、なー遅くりとーるたましえー月ぬ上がり今までいしめーくどう、どーりんブー通しみていくいみそーり」んでい勝連バーマーでいしが言いやくどう、

「月ぬ上がるまでいしめーるじいやらなー、あんしむん。働かし」んでいさーに、働くするぐどうんかいなでいさくどう、「皆はまりよー」んでい言やーにさくどう。朝の十時頃なたくどう、お月様が山たわけさ。旧暦の十時んでいーねー月上がるがいんよー、ほとんど。ほいで、その役人ぬんかい、

頃の月は、午後二時頃に東の地平線より月の出となる。このため、日没よりも早い時刻に月が空にかかるているのを見ることが可能である。

「おお、役人さん、あれーぬーやいびーがーんでい言
ちやくどう、
「ぬー、あれー月どうやさに」

「月やいびらやー」でい。
「間違ーねーびらん、月やいびらやー」でい。

「やんーでいやぐどう、
「どー、勝連ブー、勝連ブーや、まあ、これで終わり。
でいー、家かい引ちあぎ」んでい。あんさーに、

「勝連ブーやなー月ぬ上がりとくどう家かいか帰いん
どーさーにさくどう、役人のーバーマーんかいしおー
さつたんでい。

「バーマーんかい負きたん」でい言やーに。

そういうふうに、頭ぬゆたさる人やたんでい、勝連
バーマーんでいしおー。いえー、ラジオからなまー勝
連ベーケーんでいしょちよーんよー。やし、あれー、
私が聞ちえーひとなーびかーぬ違い。

やつぱり親や、ちゃー親兄弟ぬぢやーが益正月集ま
いねー、昔話しみてーくどう。あぬ、くぬ、伝え話や
てーるばーてー。私がわらばーそーいにれーくどう。
なーあんし、うんなむん覚ーるあたいやくどう、学校
あちよーてーや、ちゃーしん。

配達みたいなもので（連絡が）きたわけだよ。そうし
たら、勝連の人夫は連れていったが、遠いので、朝（の
集合時間に）遅れて行つたらしい。そうしたら、
「おまえたち、どこから来た者か」と。

「我々は勝連から、勝連の人夫です」と答えると、

「今ごろ、もう時間が遅くなつて、今ごろ来ても勝連
の人夫は通さん。（今日は）戻つて、また明日早く来い」

と、首里の役人が言つたみたいなんだ。すると、
「あんな遠く勝連から、とても朝一生懸命に急いだの
だけど、遠くて今になつたものなので、どうかこのま
ま勝連の人夫たちを通してください」とお願ひした。

それでも、

「それはいかない。この人たちは先に来て仕事をして
いるのに、おまえたちは今になつて來たんだから、人
夫は通さない」と言つたので、

「それでは今日は、もう遅れたぶんは月が上がるまで
させますから、どうか人夫を通してください」と勝連

バーマーという人が言うと、
「月が上がるまで働かせるというのなら、それでよい。
働かせろ」といつたので、（その日は無事に人夫たち
を）働かせるということになつたので、

「みんな頑張れよ」といつて働いて。朝の十時頃になつ
たら、お月様が出たわけさ。旧暦の十時というの月は月
が（早く）上がるんだよ、ほとんど。それで、その役

人に、
「おおい、役人さん、あれはなんですか」と聞いたら、
「なに、あれは月じゃないか」

（共通語訳）

それは勝連バーマーというのは、勝連の人夫の頭と
いつて。それで、上のほうから、

「首里城の方はなにか大きな事業があるから、勝連か
ら勝連の人夫を出しなさい」と、このしらせが、今の

「月ですよねえ」と、

「間違いないです、月ですよね」と。

「そうだ」といつたので、

「さあ、勝連の夫夫たち、勝連の夫役は、まあ、これで終わり。ほら、家に引きあげだ」と。そうしてね、

「勝連の夫夫はもう月が上がったので家に帰るぞ」と帰る準備をしたら、役人はバーマーに知恵で負けたと。

「バーマーに負けた」と言つてね。

そういうふうに、頭のよい人であつたって、勝連バーマーという方は。ああ、ラジオで今は勝連バーマーと言つているんだよ。けど、あれは、私が聞いたのとちよつと違つて。

(この話を聞いたのは) やつぱり親や、いつも親兄弟たちが盆正月に集まれば、昔話をしていたから。あとの、この、伝え話というわけだよね。私が子どもだった頃だよ。(自分の年齢は) もう、そうやって、こんな話を覚えるくらいだから、学校に通つているくらいだね、どう考へても。

「あんやらー、あんしむんよー」、うりやたんで。
「月ぐわーや落ていらんまとるよー」、
「月ぐわーや落ていらんまとるよー」 さくどうや、
「皆、ゆくりよー」 さくどうや、

「ぬーが、バーマー」 なんで、

「月ぬうりし、うまりかかどーあいびーくどうや、なー勝連ブーや帰さびたんでー。あんいちめ話などーん。イユグムイ、イユグムイ造くいるばーに。あり掘いてたんでいんどー、人よー掘みていよー。なー、昔えー、もっこ、オーダーぬあしえーやー、うりけーなーつし組み、かんし掘いていたんでいんどー。

〈共通語訳〉

「勝連の夫夫は、今日はね、少し遅れましたのですね」、何月何日月といつて、

「それが上がるまで(仕事を)させますので、もう、お許しください」とお願いすると、「それなら、それでいいよ」、そう決まつたつて、月が沈まないうちに

「皆、休みなさい」と言つたので、

「なんだ、バーマー」と(役人が咎める)、

「月が上がって、そのときまで働いてますので、もう勝連の夫夫は帰しました」と。そういう話になつたんだよ。

イユグムイ、イユグムイを造るときに、あれを掘つたんだつてよ、人が扱いでね。もう、昔は、もっこ、もっこがあるよね、それで扱いで、こう掘つたんだつてよ。

〈方言原話〉
「勝連ブーや、今日ややー、うふえー遅くりとーびー
くどうや」、「何月何日ぬ月んでー、
「うりが上がりいねーまでいしみーくどう、なー、ぬがー
らちくいみそーり」でいさくどう、

*オーダー もつこ、なわを網のよう
に編んで、四頭に網をつけたもの。土、
石などを運ぶ。

⑥ 十日月

川上亀（明治二十九年生）美里

方言原話

作業の集まりに出でて一うーうーし、あまん仕事ぬあ

て一ぎさしが、勝連から出じとるしんかー、

「今日、東から月ぬ上がりいるまでいぬん、私つたーは

まいりんしょー、なーぬが一らちくみそーり」んでい

ち約束しょーやんてい。

「うり、あんししむんどー」でいやくどうや。だー、

あぬ、月でいしょー、なー、何日頃がらー、ずっと早

くけー上がいるばーぬあしょー。ゆーさんで一午後四

時頃からんいつペー上がいるばーぬあしょー。あんし

上がたくどう、あれー相談やくどう、けーぬがーいてい。

あんしょーほーな事ぬあたんどうる話うつさー聞ちや

ん。うぬあたいるわかいる。

共通語訳

作業の集まりにたびたび出て、あちら（首里）も仕

事があつたらしいんだがね、勝連から行つた人たち

は、「今日、東から月の上がるまで、私たちが仕事をがん

ぱつたら、もうお許しください」と約束したつて。

「それは、それでいいよ」と言われたのでね。ほら、

あの、月というのは、何日頃だか、（いつもより）すつ

と早く上がってしまうときがあるよね。ひよつとした

ら午後四時頃でもすつかり上がるときがあるんだよ。

そうやって（月が）上がつたので、仕事は（月が上が

るまでという）取り決めなので、免れてしまつて。こんな変わつた事があつたという話、それだけは聞いた。そのくらいしかわからない。

⑦ 十日月

金城真良（明治四十年生）古瀬

方言原話

あんさーにやー、リングムイ掘にや、

「あぬ勝連ブーや私一人やらちどうらし」ん願てー

るぐどーんやー、村ぬんかい。村ぬんかい願てーるぐ

とーん。

「まさか、王様ぬ、勝連ブーんち村中ぬ人どういやー

一人さーなかいや、絶対オーやさんしが」んちさく

とう、

「あんさー、十人ばかりじえー連ていいけーんち、

十人ばかりじえー連ていいやらちえーるぐどーるや。さ

くどう、なーにつかなでい。さくどう、

「勝連ブーや時間の一運りとーくどう、なー検査ー通

さん」でいやくどう、

「月ぬ上がるえーかさびーくどう、許ちくいみそーり」

でいち、

「検査ー通ちくいみそーり」んち。

「十日やたんでい。さくどうや、あんさーに三時まんぐ

ら、一番後來やー、月や上がるしおーや、昼ん見

ゆしおーやー、十日どうやんでいくどう。

「月や上がるーくどう勝連ブー家かいどー」つしや。

「ぬーが、一番後來よーいて、いつた一家かいどーす

*1 何日頃 月齢十日頃か。新月（密）の次にくる半月（上弦）の二三日後によく月の出となる。そのため、田畠よりも早い時刻に月が空にかかっているのを見ることが可能である。

案のリンク「イ」首里城のそば、瀬底池に接する田舎地のこと。リンは蓮、クムは池の意で、蓮が多く生えていた。
案34 月齢十日頃のこと。午後一時頃に東の地平線より月の出となる。

るんちやくどうや。
「月ぬ上がるえーかいつたすんち約束ーやるさ」ん
ち、
「あー、月や上がるとーびーしえー」んちや。なー
仕方一ならんなん。

〈共通語訳〉

「そうしてね、リングダムイを握るときには、

「あの、勝連の夫役は私一人を行かせてください」と
願ったようなんだね。村に願ったようなんだ。

「まさか、王様が、勝連からの夫役といって村中の人に
(を出すの)とお前一人と(引き換えにするの)では、
絶対に良しとはいわないよ」といったので、
「それなら、十人ばかり連れていけ」と、十人ばかり
連れていかせたようだね。すると、もう運くなつてしまつて。そうしたら、

「勝連の人夫は時間に遅れているから、もう検査は通
さない」って言つたから

「月の上がるまで仕事をしますから、お許しください」
と、
「検査は通してください」と。

（その日の月齢は）十日だったそうだ。そうして、
三時頃に、（勝連の人夫たちは）一番遅く來たが、月
が上がるよね、昼も見えるんだよね、十日月であるか
ら。

「月が上がったので勝連の人夫は帰るぞ」といつてね。
「なんで、一番後に来ておいて、おまえたちは帰るう

とするんだ」と言つたらね。

「月が上がるまでおまえたちは仕事をするという約束
ではないか」と、

「ああ、月は上がっていますよね」といつてね。（約束
のどおりなので）もうどうしようもなかつた。

⑧ 十日月

宇良芳子（大正十三年生）中の町

〈方言原語〉

とにかく親ぬぢやーが話しみしえーしが。
使ふ者んかいと約束つし、

「あんし、番月ぬ上がるいんどう一さびらやー」んぢや、
ちようど請け負ひみたいに。もう、
「あれが終わつたらやめますよ」ということ約束した
ら、この月は昼で出る場合があるでしょう、ね。早い
ときには屋で上がつて。ああ、上がつたから主は負け
たという話よ。それを見ついた。

「あんし、なま昼どうやんどー」ちやくどう、
「うんじゆ約束やたしまー、月上がるとーしえー」と言
うことですね、で、主は負けて手間払つたと、それを聞
いた。

〈共通語訳〉

とにかく親たちが話をなさつていたんだけど、
使いの者と約束して、

「それでは一番月の上がるまでは仕事をしますね」と、
ちようど請け負ひみたいに。もう、

「月が出終わつたらその日の仕事はやめますよ」といふことを約束したら、この月は、昼で出る場合があるでしょう。ね。早いときには昼で上がつてゐる。ああ、上がつたので、主は負けたという話よ。それを見た。「あのように、今は昼夜じゃないか」というと、「あなたがした約束だったよね、月は上がつているんだよ」と言うことでね、で、主は負けて手間賃を払つたと、それを聞いた。

⑨ 十日月

屋宣カメ（明治四十二年生）安慶田

〈方言原話〉

勝連バーマーでいしえーよー、人ぬ董、董刈りが行く
ちゅたんでい。董刈りでいどう、昔え一家造くいつさ
い。あぬ人よー、むる手しやたんでい。あんさーにや、

「勝連バーマー ややー、十日月ぬ上がりいねーぬがーら
す」と

くどう、十日月んでいねー、てーげーなー、一時二時ま
んぐらでいるうま來ゆーしえーやー。十日月なーうり
かー来えーえーさに、ちやーしん。あんさーに、

十日月上がとーに家かいはいびらいーでい言たん
で、勝連バーマーが。あんさくどう、うぬ、なー、

頬でーる人よーゆつくらんしえーやー、じょーい。あ
んさくどう、だー、うぬ人ぬ言ちねーんしえーやー、

「十日月ぬ上がりいねー、勝連バーマー や
やー」んちやたんでいくどう、あんさくどう、目グル

グルそーたんでいさんでい言たんどー。
「十日月が上がりつてるので家にかえりますね」と

あぬ人よーや、董刈りが出てじやしーねー、むる董
よー、引つちゆるすたんでい。あんさー、うぬ、あとう
じーぬーんならんしえーやー。刈れーまたあとうじー
からみーしえー。引ち壊しーねー、なみーらんしえー
やー、うんぐどうーやたんでい。またよー、引ち壊す
しがやー、うぬ刈りい、手ずなーすたんでいどー。刈
いしていんさなー引ち壊すたんでい。刈やーに引ち壊す
さーに、うつびなー東いるばーてー。また、長さつ
さーに東いてーくどう。あんしからまた、うり家んか
いかやーし、うつさぬ家造くいてーくどう、むる。む
る昔えー董家どうやささいやー、むる。てーげー私つ
たーがなー、二十一、三ぬ頃までいむる董家やるばー
てー。うりからるまた瓦などーてーくどう。暑さい
ねーしさ、いつべー夏、真夏んしらさーあたんでー、
董家や。

〈共通語訳〉

勝連バーマーといふ人はね、人の（分の）董、董刈
りに行つたつて。董、董を刈つて昔は家を造るよね。
あの人（バーマー）は（董を刈るのは）すべて手でやつ
ていたつて。それですね。

「勝連バーマーはね、十日月が上がりたら仕事を終え
てもいい」と、董を刈るのをお願いした主が言つたつ
て。そうしたら、十日月というのは、たいがい昼の一
時二時頃にはこのあたりにくるんだよね。十日月はこ
のあたりくるんだよね、どうしても。そうして、

⑩ 十日月

金城ナベ（明治三十六年生）松本

言つたって、勝連バーマーが。そうしたら、この、もう、頼んだ人は日が暮れでいるわけではないよね、まだだ。そうだけど、ほら、その人（主）が言つたことだからね。

「十日月が上がつたら、勝連の人夫は家に帰りなさいね」ということだつたので、それで、（主はぐうの音も出す）目をきょろきょろさせていたようだと言つていたよ。

あの（バーマー）は、萱刈りに行かせたら、みんな萱をね、引っこ抜いていたって。そしたら、その、（引っこ抜いた）あとはなんにもならないんだよ。刈ればまたあとから生えてくるんだよ。引き抜いたら、もう生えてこないんだよね、そんなんだつたって。またね、引き抜くんだけどね、その、刈るのは手づかみでしていたそうだよ。刈るのは手づかみで引き抜いていたそうだ。刈つて引き抜いて、これだけ東ねるわけだよ。また、長いもので束ねていたので。それからまた、それを家に運んでそれだけの家を造つていたので、みんな。みんな昔は萱葺きの家なんだよね、みんな。だいたい私たちがもう二十二、三歳の頃までみんな萱葺きの家だつたわけだよ。それから瓦になつていつたから。暑いときには涼しい、夏真つ盛り、真夏も涼しかつたよ、萱葺きの家は。

（方言原語訳）
月や上んかいあがとへへやー。あんさーに、うぬ月ぬうづき上がいに、ブーやぬーがつたんくわい、皆みなくぬ民間みんかんぬちやー、勝連バーマぬブーべーてー。

〈共通語訳〉

月が空に上つているよね。それで、その月が上がつたので、夫役を免れたそうだ。皆。この民間の人たち、勝連バーマの人夫だよ。

⑪ 十日月

喜納兼優（大正七年生）東
首里城に、まあ、言えば、人夫係であつたらしいん

だがね。これが旧の十日のお月様、昼から上がつてくるわけさ、午後なつたら、だから、向こうの監督さんと相談して、

「今日は勝連の人夫の方々は月の上がるまでさせてくれ」と頼んだわけ。だから言われた人は、月が上がるまでと思つておつたら、月というのは暗くなつてから上がるさーね。その考え方つて

「はい」と言うてしまつてね。今度は、勝連バーマー、月が上がつたもんだから、「もう、はい、勝連の人夫は引き上げだ」といつてやつたらしいんだがね。

(12) 十日月

山内盛福（大正二年生）南桃原

それと、非常にどんちのきくのは、沖縄では勝連バーマーという。これも勝連バーマーと普通言つてゐるが、確かあれね、勝連方面出だ。この沖縄ではどんちとかそういう才知に長けた、だいたいそういう物語多いのは、この三名じやないかなあ。あれ（勝連バーマー）もまたおもしろいさーなー。それもあそこで聞いて、勝連方面で。あの人はね、面白いよ。あの、いろんなあるということをねえ。

あそこの地頭代がなにかした人だはず。それはね、あそこに聞かんと、私たちのはただそういうことがあつたということだけね。そうだ、その話さーね、リングムイ、いわゆる人夫じんぶがね、遅く行つた微用されるでしよう、勝連バーマーがね、遅く行つたそうだ。それ、勝連から首里までね、

「どうして遅れたか、もう君たちはね、それ、もう、今日夕方のね、月の出るまで働きなさい」と言われたた。そうして、「ああ、そうですか」と言つてね、

「はい」と、三日月はね、十五夜のうちに、三日月は出てね、「じゃ、もう私たちは帰りますから」と言つてね、それで怒つて、

「そんな早く帰る。遅く来て早く帰るということがあるか」と言つて、

「なんで、また監督した方に言つたでしよう、あんたがそう、ただ三日月が、月が出るまでやれど、もう、とうに月は出でていますから」とか言つたとかね。そんな話もあるんですね。

だから、ほんとそれ作り話かなのかね、そのところに行つてね、取材するのを、その人たちのいるところに行つたら、いろんなこと聞けると思うんですね。これ勝連バーマーというのは勝連の人だはず。ま、

あだ名みたいなこれなんですよ。なんで勝連バーマーというのか、とにかく地頭代みたいな、なにかやつていた。地頭代まではいってないかもしらんけれど、なにかそうとうそこの、村の役人だったでしようね。おそらく、沖縄で、まあどんちとかそういうね、最近の沖縄では、今さつき申し上げたように、伊野波ぬぞーイーとね、渡嘉敷ペークー、勝連バーマーぐらいの。まあ、あるいは、まあ、広い沖縄だからやー、それ以外に私たちが、まあ、聞いた年代には、その三名がなんだなあという、思つんですがね、どんちのきいた。

※1 地頭代 近世琉球において、領主である地頭の代理者として各間切を管理する役職。その領地に住む平民のうちの有力者が担う。現在の村長に近い。

※2 地頭 琉球王国の都。王が居住する首里城を中心、高位士族、中位士族の居住区があり、琉球王国の政治と文化的の中心となっていた。現在の那覇市の首里地区。

※3 伊野波のモーイー セー親方のこと。伊野波は、本名である伊野波勝平が、毛氏八世、唐名毛克英、三司官を務めた上流士族（一六八八年、父の後をついで本部相切地頭となる。一九四四年、三司官に就任。沖縄の美語の代表的な主人公、領智者として有名）。

※4 月齢 月齢十日頃の月は、午後、西頃に東の地平線より月の出にな。このため、日没よりも早い時刻に月が空にかかるているのを見ることが可能である。

(13) 十日月

島田秀夫（大正十年生）山内

政府の作業に（首里）行つたわけ。それで、遅れたもんだから、バーマーは。

「今日は月の上がるまで仕事やろう」（遅れた）罰で。月の上がるまで。そしたら十時に上がつておつたそつだ。

「家帰ろう」といつて。星上がるさー。星の十時よ。

頭がいいわけ。

(3) かね持ち

① かね持ち・褒美の片荷

平田盛永（明治四十一年生）登川

方言原話

勝連バーマー や、くぬ作業中ん

「勝連バーマー かに持ち」 んちヤケエー しえー しー

し、うぬ作業、言いちきやーに、人夫んちやーんかい

言いちきやー、

「あんしーしーよー」 でい言いちきてーーーるばーてー。

あんさーに人夫んちやー や、

「勝連バーマー かに持ち」 んち、 銀落どうさがちーむ

るヤグイーありし。さくとう、

「ひるましー むん。勝連バーマー あんし 金持つちやる

ばーがやーなー」。あんし、御主加那志んまた、役人

ぬちやーんかい、

「勝連バーマー あんし 金持つちやんでいくと、持つち

ち見しり」 んでい命令さくとう。あん話さくとう、

「どー、持つち見しーるくとー持つちやーびーしが、

うれーただーかたみてー來ららん。馬んかいうーして

くーやりわるなーる」 んでい。

「家かい戻やー や、また、あんしーねーんなどうーう

と、

「米くい いしむん」 でい。あんさくとう、うぬ勝連

バーマー でいしえー、金ねー銭の一あらん、古鉄どう
集みていまじれーたんで、庭んかい。あんさー、う
り馬んかいうーしやーい持つちんじさくとう、うり
持つちんじやくとう、

「うれー銭の一あらん、あたりめーぬ古鉄、金どうや
る。古鉄どうやる」 んでい。銅ヒーラぬ古、むる集み
ていし持つちめーる。うり、またん、くりんかい、く

ぬバーマーんかいしえーさつたんでい。

「なー約束のやくどう、必じ米家けー荷や持たちくい
みそーり」 んちやくとう、なー仕方一ならんやーに、

「米、あんしえー、米一儀やくいーん」 でいやーに。

米一儀や持つちどうらちやくとう、馬ぬ片はらうーし
さーに、馬んかい、ちどうやくとう、片はらんかい

うーしーれー馬ーちん返りつしやー、片はらふーつ
し。あんしえーしーさーに、

「なー絶対ーーしららん。かんしえーうーしららんく
とう、なー一儀くいみそーり」 んでいーんけーなやー

に、

「あー、仕方一ならん」 でい。あんさー一ち、二儀くい
たくとう、かん馬ぬ両方んかいいうーしやーに、

「にへーやびたん」 でい。

あんすかぬ 勝連バーマー でいしえーよー、知恵

ぬあたる、うぬ話。

勝連バーマーは、この作業中も、

「勝連バーマーはかね持ち」と、かけ声をかけろ」と

著者：鶴圭加那志 王様：加那志は尊称を

示す接尾辞。

本語は古語に 古鉄などの金属、鉄のこと
とを方言で「カニ」という。

米一儀は 100g へい。肩の一つ。苗を植
えたり取たりするもの。

米一儀は 100g カタハランナブー ジ
ブサンは重いの意。片方だけ重くてよ
ろける様子。

させたりして、そのように作業を言いつけて、人夫の

人たちに言いつけてね、

「そうやつて（仕事を）しなさいね」と言いつけてお

いたわけだよ。それで人夫の人たちは、

「勝連バーマーはかね持ち」と、鍼を落としながらずつ

とかげ声をかけて。すると、「めずらしいことだ。勝連バーマーはそんなに金持ち

なのかな」。そして、王もまた、役人たちに、「勝連バーマーはあれほど金持ちだといふので、持つ

てきて見せよ」と命令した。（勝連バーマーに）そう

話すと、「ええ、持つてきて見せることは持つてきますが、そ

れは簡単についで来られません。馬に乗せてこな

いとできません」と。

「家に帰るときには、また、そのときは手ぶらで帰る

んですか。米をくださいますかねえ」と。すると、「米をやつてもよい」と。そうしたら、この勝連バ

マーという方は、カネはお金ではない、古くなつた金属を集めて積み重ねていたって、庭に。それで、それ

を馬にのせて持つていくと、それを持つていつたの

で、「これはお金ではない、普通の古びた鉄、金属じやないか。古鉄だ」と。鍼やヒラの古くなつたものをみ

んな集めて持つて参上したんだ。それもまた、これに、このバーマーに知恵で負けた、と。

「もう約束だから、必ず米を家に（持つて帰る）荷物を持たせてください」というと、もう仕方がないとい

うことになつて、

「米、それなら、米一俵はやる」と。米一俵を持つてあげたら、馬の背の片方に米俵を乗せて、馬の背

に一つなので、片方に乗せれば馬はひっくり返るよ

ね、片側だけ重くて。そうしてそれを繰り返して、

「もう絶対に乗せられない。これでは乗せられないの

で、もう一俵ください」となつてしまつて、

「ああ、仕方がない」と。それで二つ、一俵あげたので、こう馬の背の両方に乗せて、

「ありがとうございます」と。それほど、勝連バーマーといえばね、知恵があつたと、その話。

② かね持ち

方言原語

金城真良（明治四十年生）古謡

バーマーでいる人ぬや、首里ぬリングムイ掘いにや、
「勝連バーマー やかに持ち」んちヤグイーやしー

よー」んちさくどうや、あぬ、御主加那志前やや、
『ちやつさが金ぬあらー やー』んちやてーるぐどーん。
あんさーに、「いやー や金持ちんち、仕事さー やむる
ヤグイーすしがや、あんすか金あんなん、バーマー

「まんどー イビーんどー」んでい。
「あんし、私ねー来るんさー見しらんなー」んちや
くどう、

※トヤクイ 気合を入れるために発す
るかけ声。

「あー、めんそーりよー、うみかきら」んちしえーるぐどーん。

行じやくとうや、屋敷ぬまんまーるー古鉄までー

「うつさ、くつさあいびーんどー、御主加那志」でい
たんでい。

「うりんかいる『かに』んでい言ちよーんなー」んぢや
ち見したくどうや

くどう、

共通語訳

「勝連バーマーはかね持ち」とかけ声をかけるよ」といいつつて仕事をしていたら、あの、王機はね、「どれほど金があるのかなあ」と思つていたらしい。そう

「おまえは金持ちだと、仕事をする人がみんなかけ声をかけるけどね、そんなに金があるのか、バーマー」

「たくさんありますよ」と。
「それなら、私が訪ねたら見せてはくれないか」と言
うので、

「ああ、おいでください、お目にかけます」と約束したようだ。

(王が) 行つたらね、屋敷のまわりに古鉄を山積みして いたんだってよ。

方言原話

金城五郎（明治三十五年生）松本

第2ぬー村 村の特産物を毎年決
た分納めること。

案3 シエーハン御殿 桃比麻武御殿(そのひやんうたき)のことか。首里城守才門と歎会同の中間にある拝所で、現存する。園国が境外に行幸するときに必ず拝するならわしだった。

卷4ぐふあれー未詳。上納品のことか。

※1 「かに」 方言では金錢のことを通しては「錢(じん)」と言うが、日本共通

いどうあがとーるはじやくとう、探らち歩ちよーる
ばーどうやいびーる。あんさくどうよー、うぬ魚ぬ
ぐふあれーや半分けーなどーたんでい。

〈共通語訳〉

勝連バーマーは偉い人。

勝連（バーマー）といえば、あれは、今で言う市長とか村長とかでいらっしゃるんだよね。もう勝連は、あの、魚の（豊富なところ）……どの村はなになにができる、どの村はなになにだと、（特産物で）仕分けられていたようだよ。あちら（勝連）は魚のよく捕れるところ……漁師が多くてね。

シェーハン御獄といって、首里の近くにあるそうだなねえ。もう、（勝連バーマーが）勝連の漁師のいるだけ集めて、雇だよ、帰ってきてね、このシェーファン御獄のまわりじゅうね（西山）。昔はその人たち（のところ）はキビの枯れがらなどいうものがたくさんあるし、竹もまた、もうたくさん、みんなそれそれ持つて、火をつけてこう、まわりを、山全体を取り巻かせたんだよ。（そうしたら）呼ばれてね、役人から。

「なんぞそんなことをしているんだ、バーマー」

「勝連はね、魚の上納はね、もう、不漁で捕ることができない。もう、海山といつてね、海のものは山にあがつているだらうから、探し歩いているんですよ。そしたら、その魚の上納は半分になつたつて。

② 山の魚

金城真良（明治四十年生）古謝

〈方言原話〉
海、山なー抱護ーでいしんあしえーや、いー、話や
聞ちえーさに、海山なー抱護ーんでいし。

「勝連の一海ぬはたやしが、海むんまんどーるやー、
バーマーでいぢやくとう、

「あー、まんどーいひーんどー。めんそーりよー、
持つちうさぎらー」でいち。

また、魚いーがんち、王様ぬ、家來、供そーていん
じえーるぐーん。うんにーねー、勝連グスクぬまん
まーるー、松明ちきて歩ちゅたんでいどー。あんさ
くとう、

「ぬーが、バーマー、いやーうまなーりー松明ちき
て歩ちゅる、ぬーやがーんちやくとう、
「海ーや、潮ぬけー満ち入らん。海山なー抱護ん
ち、松明ちきて歩ちやびーしが、ぬーんういびらん
さー」んち、うつさしけーはんちえーたんで、ぬー
ん持たさんよーい。

でーじなやからでー、あれー。「勝連バーマーでい
る人よー神どうやでーさに」でー言らつてーるむん。

〈共通語訳〉
海、山には抱護というのがあるよね、なあ、話は聞
いているか、海山は抱護だというの。

「勝連は海のそばだが、海の幸がたくさんあるだろう、
バーマー」と（王が）いうと、

※1 抱護 抱護林を指すか。琉球王府が木材確保のために定めた制度で、山林の保護をかけた。在地住民の山林利用でなく海も抱護として王府が管理し、上納を求めるに対して皮肉つたものか。

※2 勝連グスク 与勝半島の中央部勝連町南風原にあるグスク。尚泰久（在位一四五九—一四六〇）王の時代に勝連後司阿麻和利の居城であった。勝連グスクからは、中城酒をまたいで南は中城グスクが望見される。

※3 松明ちきて歩ちゅたんでい いづちやびーしが海に入なければ山で、夜に潮干狩りをするときのように松明をつけて歩いて魚を求めているが魚が捕れない、という趣旨。

「ええ、たくさんありますよ。おいでください、持つてきてさしあげましょう」と。

また、魚をもらおうと、王様が、家来を、供を連れていったようなんだ。そのときに、勝連城の周りじゅう、松明をかかげて歩いていたんだってよ。それで、「なんで、バーマー、おまえは城のまわりを松明をかかげ歩くんだ、どういうことか」と聞かれたので、海はね、潮が満ちてしまつて入れない。海山は抱護といつて（同じ）王府の管理だというから夜間の漁りをするように山でも）、松明を掲げて探してあるいていますが、なにもいませんね」と、こうやつて上納を免れさせてしまつたつて、なにも持たないでませてね。

たいしたやつだよ、バーマーは。「勝連バーマー」という人は神なのではないかな」と言っていたんだもの。

(5) 松の植え時

① 松の植え時

金城真良（明治四十年生）古語

（方言原話）
宣野湾松原でいる松や、普天間の寺ぬ前からちやつび、いっただ一がるわからんある、ぬ、ちやつびなーそーる松ぬあたんよーやー、宣野湾松原んぢ。うまんかい、いちめなぎー松原や、村アーバーに植ーらす

てーるぐーとーんぶーやー。勝連アーバーやまーからまーが

で、また、まーぬ村のーまーからまーまでいんち。
またん、「勝連アーバー私一人やらちくみそーり」んちさくとう、
「はー一、村中ぬ人とういやーん一人どうでいねー、
あまー合点のーさんしが」んでい。
「あー、合点さびーさんち。あんさー、皆が植ーるえー
かーいーちょーくどう、キロや、キロはかてい待つ
ちょーたんでい。『ちやさなー離すぞやー』んち。や
がてい皆が終わいがたーなたくどうや、どうん立ちゆ
たんでいるむんぬ、松山んかい植ーたんでいるむん
ぬ、松ぬ枝ぐわー一ちん折やーにや、ちーさちや。だー、
うれー、枝ぐわーぬちーさちやぐどう、みーらんしえー
やー。

「勝連アーバー松えー植ーてーねーらん、松枝でいさ
ちえーくどうや、死刑すん」でい、やー。
「皆が植ーてーる松ぬ生ちゅちゅらー、死刑つーん
でい。

「生ちかんあらー、ぬがーらし」んち。

「皆が植ーてーし生ちゅかんたんでい。あんさーに、
うりからや、

「十月ぬ、ぬーぬ節に植りわる松えー生ちゅる」でい
言やくどう、うぬ勝連バーマーでいが植ーらちえー
しが宣野湾松原どうかぬーどうか、むるでいきとーた
んでいむぬ。王様ぬあとー習とーたんでい。

（共通語訳）
宣野湾松原とよばれた松林は、普天間の寺の前にこ
で、勝連の松原で植えられた松が生きる
からどう問ひば、この枝は全部生える
と答えたというタイプの語感もある。

（共通語訳）
松の枝ぐわー、枝を折つた松が生き
るからどう問ひば、この枝は全部生える
と答えたというタイプの語感もある。

（共通語訳）
松の枝が植ーてーし、松には植え時間が
あり、公儀の命令は時用が間違つていたと
いうことを言つてゐる。

で、また、まーぬ村のーまーからまーまでいんち。
またん、「勝連アーバー私一人やらちくみそーり」んちさくとう、
「はー一、村中ぬ人とういやーん一人どうでいねー、
あまー合点のーさんしが」んでい。

（共通語訳）
宣野湾松原とよばれた松林は、普天間の寺の前にこ

で、勝連の松原で植えられた松が生きる
からどう問ひば、この枝は全部生える
と答えたというタイプの語感もある。

（共通語訳）
松の枝が植ーてーし、松には植え時間が
あり、公儀の命令は時用が間違つていたと
いうことを言つてゐる。

んなに、あんたたちにはわからないだろう、なんといふか、ものすごい松があつたんだよね、宣野鶴松原といつて。そこに、ひと並びの松林が、村から人夫を出させて植えさせてあつたようなんだよね。勝連の人夫はどこからどこまで、また、どこそこの村はどこからどこまでといつて。またも（勝連バーマーが）、

「勝連の人夫は私一人を行かせてください」とお願いする

「ええ、村中の人とおまえ一人と引き換えでは、あちら（王府）は承諾しないよ」と。

「ああ、聞き入れますよ」と。そして、皆が植えるあいだは座つておいて、距離を測つて待つていたんだつて。「どのくらい離すかな」と。もうじき皆が終わるとなつた頃、急に立ちあがつたといふんだけど、松は山に植えていたんだが、松の枝を折つてね、先っぽを。ほら、これは、枝の先っぽなので、（植えても）生えないとよ。

「勝連の人夫は松を植えてはいい、松の枝を折しただけなので、死刑にする」とね。（勝連バーマーは）「皆が植えた松が根付けば、死刑にしてく」と（主張した）。

皆が植えた松は根付かなかつたって。それで、それからね、「十月の、なになにの時期に植えれば松は根付く」と言つたので、その勝連バーマーという者が植えさせた松が、宣野鶴松林とかなんとか、みんな立派に生育

したといふんだ。しまいには王様が教わつていたんだつて。

(6) 長雨と薪

① 長雨と薪

方言原話

松下栄吉（明治三十五年生）池原

東一今年ぬぐどうし雨降るが、この話型を調査した一九八〇（昭和五十五年）は雨の多い年で、四月から五月上旬にかけて雨が続き、四月だけで五五ミリメートルという記録的な降水量があった。なお、翌年の一九八一（昭和五十六年）の梅雨から一九八二（昭和五十七年）にかけては記録的な降水量の少なさで、長期の船水制限が行なわれる大渋滞となった。

昔ぬ、元ぬ、今年ぬぐどうし雨降たるばーちえーねーんさーやー、今し。昔言葉んかい、「七日干やーて、七月雨降たん」でい話えー聞ちよーんやーなー、若いたー。年寄ぬちやー今かんし、今年ーあんぐとう、昔ぬぐどうし、なー七月干てい七月雨降らんがやーち、今年始みやんてーんでいる話やんどー、今年ー。やしが、首里ぬ御殿ぬなー七ヶ月雨降たくどう、燃一する薪ぬんねーんばーよー。なー、薪ぬありわる物ー煮ち食まりーくどう、今なーガスやくどう。あんさくどう、なーうつさ集までいん集までいん、協議ぬ協議ならんなどう、

「りー、くれー勝連バーマー合國つしや、まじ、ありが考ーらちんだー」で、さくどう、
「ぬーがありやれーわかいみ」んで、うぬ言ちよーしゃーなー、

「ありが考ー持ちーやぐどう、あり呼べーんり。あい、御殿から呼びみそーちやぐどう、『今日やなー、ぬーなどーがやー』行じやぐどう、
「いやー呼でーしょーやー、なー毎日雨ー降てい、物

「ん煮ちゃん食まらん、なー死ぬしが多さくとー、ちやー
しえーましやがやー」んり言ちやぐどう、
「いつべーどうーやつしーぐわー。薪のーまんり、
燃ーしーさんある」り。
「ぬーがにじーる」り。
「薪のーどうく多さぬ燃ーしーさんある」り言ちや
ぐどう、なーうりから皆、むのー言やんばーよーなー。
「ぬーが薪のーうつさんまんどーるむん、燃ーしーさ
んどうある、にじーる」り言ちやぐどう。うりから、
「あい、ちやーしえーましやがーり、
「とー、あんやらーやー、私が言し聞ちみせーびり」
「あー、聞ちゅん」り。
「恩納村ぬんかい行じやーにや、恩納ぬ山」、あまー元
やなー自由ねー切らんしぇー。
「恩納ぬ家壊ちや、家壊ち、うれー首里んかいかやー
ち、うぬ當たどーる家庭や、どうーぬましやる材料
切つち新家葺かさ、家やうぬ人ぬ葺ちゆるぐどうし、
望みぬぐどう」んでい言ちやぐどう、申し込めー多さ
るばーなー、うぬ民間や、
「はー、とー、私家持つちめんそーり」
「私家持つちめんそーり」んでい。だー、うぬ古家壊
ち持つちいけーなー、薪のーまんどーしえー。また、
どうーや新材料山から切つち。あんさー、うひぐわー
壊ち燃ーしーなたぐどう、雨ーけー晴りやーにや。
うにーから、うぬジンブンある人よーうらんり。
だー、恩納村ぬ家壊ちち、うり燃ーし、えーかんか
い、雨晴りとーん。あんさー、当たどーる家庭や、

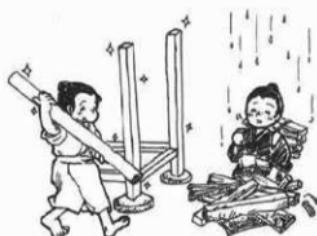
「なー、いちし私つた一番来ゆーがやー」り。うぬさ
くぬ頭切りむんやでーるばー、勝連バーマリしえー。
家壊ちつち、首里ぬ御殿かい、首里侍んかい燃ーし
みるえーかんかい、雨ー晴りとーるばーよー。あまー、
また、山からどうーぬましやる材料切つち、家や
ちやつび葺かわん自由やるばー。

〔共通語訳〕

昔は、今年のように雨が降ったことはないよね、今
は。昔の言葉に、「七ヶ月干あがり、七ヶ月雨が降り
続いた」という話は聞いているかね、若い人たちは。
お年寄りたちは今こうして、今年はあのように、昔の
ように、もう七月月干あがつて七月雨が降つたりし
ないかなあと、今年がその始めではないかという話な
んだよ、今年は。

だけど、首里の御殿が、もう七月雨が降つたので、
燃やす薪もないわけだよ。もう、薪があればこそ物を
煮炊きして食べができるから、今はもうガスだから
から(問題ないが)。そうして、もうこれだけ(臣下
の者たちが)集まつても集まつても、協議しても協議
がまとまらなかつたので、
「どうだ、これは勝連バーマーを呼んでね、まず、彼
に考えさせてみよう」というと、
「なんで彼ならわかるのか」と、そう言つていたが、
「彼こそいい考え方を持ち主だから、彼を呼べ」と。ほ
ら、御殿からお呼びだしなされたので、『今日はまた
なんだろうなあ』と行つたら、

奉一恩納の山 琉球王爵時代の袖山制度
を背景とした話題と思われる。袖山とは、
王爵時代の山林の種類のひとつ。地方の
山林の多くが袖山とされ、王室の監督の
もと、地元の開拓、島村によつて森林
の保護や育成がなされていた。地元の住
民が袖山から必要な木を得る場合は
許可を得て伐採した。



「おまえを呼んだのはね、もう毎日雨が降って、物も煮炊きして食べられない、もう死ぬ人が多いので、どうするのがいいだろうかな」と言つたので、「とても簡単なこと。薪はたくさん、燃やしきれないほどあるんだ」と、

「なにをがまんしているのか」と。

「薪はあんまり多くて、燃やしきれないほどあるんだ」と言つたので、もうそれから皆、(意表をつかれて)言葉も出ないわけだよね。

「なんで薪はこんなにたくさんあるのに、燃やせないほどあるのを、がまんするのか」と言つたので。それから、「おい、どうすればいいか」と。

「では、それならばね、私が言うことをお聞きください」

「ああ、聞くよ」と。

〔恩納村に行つてね、恩納の山〕、あそこは、本来は自由には伐採できなかつたからね、

〔恩納の家の家を壊してね、家を壊して、廃材は首里に運んで(燃やす)〕、この(家を壊すのに)当たつた家庭は、自分の好きな木材を切り倒して新しい家を建てさせよう、家はその本人が建てるように、望みどおりに」と言つたら、申し込む人は多かつたわけだね、この民間は、

「ははは、さあ、私の家を持つておいでください」「私の家をお持ちになつてください」と。ほら、その古屋敷を壊して持つていけば、薪はたくさんあるよ

ね。また、自分は新しく木材を山から切り出して(造ればいい)。それで、ある程度壊して燃やしてしまったので、雨は晴れてしまつてね。

そのときから、(勝連バーマーのように)そんな知恵のある人はいないと。恩納村の家を壊してきて、それを燃やして、そのあいだに雨は晴れている。そして、壊す予定に当たつた家の人たちは、

「もう、いつうちの番が来るかな」と(待ち望んだ)。それほど頭の切れる人だつたわけ、(勝連バーマー)というの。

家を壊してきて、首里の御殿に、首里の侍に燃やさせているあいだに雨は止がつていてるわけだね。あつち(恩納村)は、また、山から自分たちの好きに木材を切つてきて、家はどれだけ建てても自由なわけ。

(7) とんち比べ

① とんち比べ

島袋次郎(明治三十四年生) 知花

〈方言原語〉

私ね、あれ一平安名ぬノボルのおじいから話をえ一聞ちやしが、勝連バーマーがありやたんで。平良なかい、じこ一十三ないわらばーが、ありがう一てーるばーてー、とんち上手め。あんさぐとう、うぬ人がとんち調びーが来やーにや、勝連バーマーんあんすかぬとんち上手やくとう。あんさくとう、「お父たーまーんけーが、わらべー」んちやぐとう、

東一中良 現在の那須市首里平良町のこと。もとは西原間切平良村。1906年(明治39年)に首里区に編入され、戦後は那須市に属する。

「私が一や、平良なかいうる十三ないるわらばーさこーねーびらんくどう、あぬ人呼でいちきらしみそーりでい。勝連バーマーどうくる詫びそーたんでい。あんさーにや、うり呼ばつて、あんし決みーんでいさくどうてー、「ムイダシー」んち。昔人よーや、頑丈くぬーんくーんかきえーじしかきて、造てーしや、

「ムンダシーぬぐどう、造らつとーんやー、かきらつとーんやー」でい、うぬ話さりーたさ。

ムンダシー。首里グシクぬ城あんし、造らつとーたんでい。あん、うぬわらばーがちきてーる名やんでい、ムンダシーでいしょー。

〔共通語訳〕

私は、あれは平安名のノボルのおじいから話を聞いたんだけど、勝連バーマーがあれ（知恵比べ）だったんだって。

平良に十三になる子どもが、あれがいたわけなんだね、とんち上手が。すると、その人（勝連バーマー）がどんち上手が調べに来てね、勝連バーマーもけっこうなどんち者だから。そして、

「お父さんたちばかりこだ、ぼうず」と聞くと、

「冬青草、夏ガラガラを刈りにです」とそう言つたので、

「なに、冬青草、夏ガラガラ、なんのことだ。なんだ、それは、そういうものがあるのか」と聞くと、

「ああ、おわかりになりませんか」というので、

「冬には青草、稻刈りにです」。（稻は）冬には青々とした草だが、夏になる頃のものは、あれ（稻）は枯れしているよね。

「稻刈りにです」

「ああ、そうなのか」と、（勝連バーマーは）また去つて。ああ、もう負けているんだよね、この子に。

（子どものところに）また、もう一回来てね、またも来ているわけ、勝連バーマーが。

「お父さんたちはどこにだ」と聞くと、

「夜の目を取りに」と、

「はつ、おまえは、夜の目というものがあるか」といふと、

「おわかりになりませんか」というので、

「トウブシ取りにです」。

トウブシは火をつけたら夜の目になるよね、よく見えるよね、どにもかしこも。松の芯にトウブシ（灯心）といつてね、たちまちバーンと、こう火をつけるとバンバン燃えるのがあるよ。松明はこうして、これやって、にぎらないといけないよね。そうじやない、トウブシといつてね、松の芯つて、あれはこう碎きながら、ちよつとすつ割つてこうして（火を）つけたらね、松明のよう勢いよく燃えるのがあるよ。青くても燃えるんだよ。今持ってきて、松を削つて持つてきてとも、たちまち勢いよく燃える。うん、それだよ。

「トウブシを取りにですよ」と、また（勝連バーマーが）負けたわけ。すると、

「そうなのか」といつて、

ホームンダシー 首里城の建物の名前
もんだぞえ、百浦御百の浦浦を解へる
萬 首里城正殿 唐破風（カラフアーフ）
ともい。王が改修をとり、儀式などを行なつた所。

「復讐取りに。夜の目取りに」。

私はこれは、平安名のノボルのおじいさんから話を聞いたわけさ。終戦當時だもの。

そうやつて、またもう一回、またも（子どものところに）来たわけ、勝連バーマーが。そうしたらね、ヒヨドリを、メジロ、メジロをこう持つてね、「おい、子ども」と声をかけたので、「なんだい」と（答えて）。

「私はひよどりを持つていて、おまえの回答は、（この鳥は）生きているか、死んでいるか」と聞いたらしい。持っているのはね、

「死んでいる」と言えば解き放つんだよね。

「生きている」と言えばひねり殺しができるんだよね。そうしたらね、その子どもはまた、十三歳になる子どもが、そこに敷かれているものを踏んづけて、敷居を踏んで立つて、

「あなたの答えは、私は前に飛びのくのか、後ろに飛びのくのか」同じことになつていてるんだよね。そういうことで（勝連バーマーは）、「ははあ、この子とはもう、私ではこの子にはかなわない」と。

のちには、首里城で家を造られて、それで、

「この建物の名をつけよ」といつて、勝連バーマーは呼ばれたわけ。そうしたらね（勝連バーマーは）、

「私は、平良にいる十三歳になる子どもほどにはできませんので、あの子を呼んで名づけさせてくださいませ」と。勝連バーマーはみずから負けを認めていたつ

て。そうしてね、その子を呼んで、そして決めるということになつたらだよ、「ムイダシ」と。昔の人はね、

頑丈ににもかもかけるものはかけて造つたものには「ムンダシ」のように造られていてるね。しつかり組まれていてるね」と、その話をなさつたよ。ムンダシ。首里城の城はあるのによく造られていたそうだ。そう、この子どもがつけた名前だつて、ムンダシーというの。

(8) かたつむり

① かたつむり

金城真良（明治四十年生）古謝

〔方言原語〕
「まーかいいが、チンナマー」でいちやぐどう、
「南ぬチジ原んじ豆喰っていく」言たんやー。うぬ、
チンナンぬうちゅ喰てい。
〔音訓〕
「まーかいいが、チンナマー」でいちやぐどう、
「南ぬチジ原んじ豆喰っていく」言たんやー。うぬ、
チンナンぬうちゅ喰てい。

とー、うりからー「くれー神どうやる」んち、信じ
とーるばー。

昔はカンブーをよく結っていたんだよ。（勝連バーマーは）これだけの小ささに結っていたんだつてよ。

〈共通語訳〉

泰ガラントー カタカシラともいへ、近世琉球期の成人男性の髪型。沖縄風の髪。

泰ガラントナー かたつむり。勝連バーマーの髪が小さく結われていて見栄えが悪いのを、かたつむりのようだと揶揄した趣口。

「それで皆が見下して、「どこに行くんだ、かたつむり」というと、「南のチジ原で豆を食つてくる」そう言つていたそつだが、その、南のチジ原では、まったく豆は作れなかつたそうだ。(本物の)かたつむりが食つてしまつて。さあ、それからは「この人(バーマー)は神様にちがいない」と信じているわけ。

⑨ 勝連バーマーの死

十一月·腹破裂

金城永保（明治四十二年生）松本

方言原話

首里のイユグムイ、わかいるでしょ。あつち掘るとき、なんだ、あの、につか行じえーぎさるむのー、うれー字書長やーんてー。

「バーマーよ、あんしるするい。ぬーが、うんなげー

なー、ちやーちむやが

「ヒー、ちかく月ぬ上がるえーかしみやびーくどう、くねー

いいみそーりーでいち、十日月や、んじ、あんなー

ゆづくわるまでい上がへしえい、

「勝ち人
ブリ木のへりは」でいらっしゃくどう、

「ぬーが、ペーマー、もーあーあーうーうーうーうー

卷之三

ミラノの政治小説

さーに、うりやていん、あとー、

「くれー、どうく、かんしえー切り者やくとうや、迷惑すん」でいちょー、ウナインかい殺さとーたん
モーアーサー一バーキドサ一に、くつびけーなでい
よー。うり炒ちやーにくいらつてーぎささ。水飲みみぐ
るー、腹チル伸びやーに、ぬちえーちやーに死なちえー
たんでい。兄弟ぬ迷惑かかいかんでいち。でーじな、テー
んたん人やーーん。

（共通語訳）

首里の竜淵池、わかるでしょ。あっち掘るとき、
なんだ、あの遅く行つたらしいんだけど、この人（バー
マーー）は集落の班長であつたんだよ。

「バーマーよ、そんなことをするのか。なんだ、こん
なに遅れて、どういうつもりだ」

「では、月の上がるまで（仕事を）させますので、ご
堪忍ください」といつて、十日月は、ほら、あのよう
に日暮れ前に上がるからね。

「勝連の人夫は休みなさい」と言つたから、

「なんで、バーマー、おまえはこんなことをするのか」

「そりや月が上がつているから。月の上がるまで仕事を
をするということだったじゃないですか。あなたはわ
かりますか」。それですませてしまつて。もう勝連は
闇をくらつてあるということですね。

そういうことがあって、それでも、しまいには、
「バーマーは、度が過ぎて、こうした引っかきまわし
屋だからね、世間に顔向けできない」と言つてね、女

※1モーアーサ
ネンジュヨ。野原に白
生する陸生の藻。アーサーのための材料と
して利用され、乾かしたものをお水に浮けて
して食用にする。水に浸すと倍以上に大き
く膨らむ。



きょうだいに殺されたそうだ。

モーアーサー一筋分を干したら、わずかな量になつてしまつてね。それを炒めてあげたらいいね。水を飲むと、(腹のなかでモーアーサが膨れて)腹の皮がパンパンに伸びて、(その腹を)突いておいて殺したつて。兄弟の恥じらしになるといつて。たいへんな、どうにも手のつけられない人であった。

② 腹破裂

島袋盛保(明治三十七年生)知花

「方言原話」
 あんまりわちやくぬ者なやーに、あんさーに、兄弟やヌールやたんてい言たがやー、とにかくそこははつきりしないんだが、しかつどうわちやくぬ者なやーに、布織どーる機め上びんけ一馬ぬ皮、馬を殺して、馬殺さーに、剥じちゃ一きぬ馬の皮投げやーに、驚かちやるばーんあてーるふーじーやい。
 また、海けー連ていんじやーに、海んじ溺つくわちやいぬーさいし、しかつとう自分ぬ兄弟どうやがなー、わちやくな者やたんてい。

「かんねーる者」なーー人んあらんてーあらん、人ぬうるさく、うりがむるわちやくしーむぬどうやる。これーやな生まりはーくどう、よーみ入りりーんでいやーに、モーアーサ。陸に、これぐらいの、あいさに。私つたーが小さいにしかどう食だんどー。あり洗いてい干ち、あんさーい乾燥しみてい、油んけー掲ぎ

（共通語訳）
 (勝連バーマーは)、あんまりいたずら者で、そうして、きょうだいは神女たたといつたかな、とにかくそこははつきりしないんだが、たしかにいたずら者で、(神女であるきょうだいが)布を織っている機の上に馬の皮、馬を殺して、馬を殺して、剥いだばかりの馬の皮を投げて、驚かしたこともあったようだし。

また、海に連れていくつてしまつて、海で溺れさせたりなんなりして、たしかに自分の兄弟であるのにね、いたずら者だつたつて。
 そして、
 「このようないやつ、もう一人の例外もなく、いるかぎりの人だ、この者がみんなわざをするというのに。こいつはいい生まれをしていないから、懲らしめよう」といつて、モーアーサと言つて、陸に、これぐらいの(藻が)、あるだろう。私たちが小さいときにたくさん食べたよ。あれを洗つて干して、そうやつて乾燥させて、油で揚げて。すると、一斗ぐらい入る市のいっぱいのものが、小舟に八分ぐらいになつたつて。

まーわちやく 他人にいたずらしたり、かつたらすること。悪がさ。

セヌール 沖縄固有の宗教の、いわゆるの。祝祭みど、琉球王宮に任命され、神に奉仕する女性。

セリード 尺貫法で、容積の単位。一升の十倍、約一ハリットル。

それを（勝連バーマーが）みんな食べてしまつてね、すべて。食べたら、すぐに（モーアーサが腹の中）でふくらんで、「もう、死んでしまうよ」と言いながら、たちまちお腹がはち切れて死んだつて。

ああ、それだけ聞いたよ。

③ 津堅の海

宮城次郎（大正二年生）園田

〈方言原語〉

津堅^{つがん}、津堅^{ちがん}。三百斤ある石くんじやーに、くり。勝連バーマーくんじやーに、海んかい沈まぢやくどう、

「くぬ勝連たーが」んち、三回上がとーたんでい。三百斤かかいる石くんちさぎてーしが。なー、したたか有名、これ、勝連バーマーんち。なー、でーじな、でー武士やーるばー!。この話があつたよ。

どうかな、悪いことしたのかな、死刑の話やーたん、あの人は。うぬ話を聞いた覚えある。

〈共通語訳〉

津堅、津堅（の海に）。三百斤はある石をくくりつけ、これ、勝連バーマー（の足に）くくりつけ、海に沈めたら、「この勝連のやつらめが」と、三回浮き上がつてきたつて。三百斤もある石を結びつけてあるんだけど。もう、たいへんに有名、これ、勝連バーマーといつて。もう、

たいそうな、すごい武者であつたわけ。この話があつたよ。

どうかな、悪いことをしたのかな、死刑の話だつた、あの人は。その話を聞いた覚えある。

（10）その他、勝連バーマーにまつわる話

① 勝連バーマーという裏めことば

上原ウン（明治四十二年生）住吉

すぐれで、なにかもみんな上手の人に「勝連バーマー」というさー。すぐれでなにかも上手。話もなにかもみんな上手であるから、「勝連バーマー」、そう言いつた。こつちもシンブンも、するものもなにもかも、またわかつて、人にもあれする。「勝連バーマー」と言つた。以前は。

② 勝連バーマーが造つた渡口の橋

喜屋武政格（大正五年生）久保田

北中、渡口の橋。あれは勝連バーマーが造つたとかなんとか言つて。その後始末をどうするかといて、もんでいたという。あとから争議も出てくるだろう。

この管理は誰がするか」という話はあつたといつては聞いていたんですね。橋架けて、その部族は得しているがね、あとからの管理は誰がいいかと言つて。

半1津堅　沖縄本島中部、東の海に浮かぶ島。ついんじま。方言でチキン。現在のうちの市に属する。沖縄本島と津堅島のあいだの海はチキンドウ（津堅島と呼ばれており、この語りではその海のこと）と指している。

半2三百斤 約一八〇キログラム。一斤は〇・六キログラム。

[4] その他の知患者

① 通堂モーサー

島袋貞栄（明治四十一年生）知花

〔方言原話〕

「通堂モーサー」んでいたんだで、ブーンでいし。
 でいすたんでいしぇーなー、バクタン。博打やぬーす
 たんでい、あれー。あんさー、負けがたーないねーし
 ぐ、あれー、昔えー力カソビ着ちよーくどう、しぐ、
 前ふあやーい、かんホーひんだー見しとーてい、相手
 すぐけーらすたんでいしぇーやー、あれー。
 うぬあたいぬ入やたんでいどー、あれー。通堂モー^シや。

〔共通語訳〕

通堂モーサーという人は、キーヤーは、もう、なん
 でもしたそうだよね、博打は。それで、負けそうにな
 るとすぐ、あの人は、昔は力カソを着てるので、す
 ぐ前をはだけて、こう陰部のあたりをさらけ出して
 見せておいて、相手を負かしたというからね、あの人は。
 そのくらいすごい人であつたつてよ、あの人は、通
 堂モーザーね。

② 三升鹽の罰金

金原真良（明治四十年生）古瀬

〔方言原話〕

昔えー「ブーンでいしがあたんで、ブーンでいし。
 ちよーどう、ブーンでいねーや、
 「まーぬ道造いくどう出じていとうらし」でい言ー^い
 ねー、古謝から何名、まーから何名ちあしぇーや。
 ちよーどう村んかいぬ、

「ぬー造いくどう、古謝ぬ村から何名来」んでいち
 しーね、行ちゅしえーやー。行ちゅし、ちよーどう
 うぬんよーむるブーンかい出じらんやーに、あと一
 費金制度かいないで、罰金制度かいたくどう、行
 かんどーならんしぇーや。

昔えー三ミチャーグヒンでいち、酒三升えん入る鹽ぬ
 あたんよー。うりにかい酒一合入つて、ウ一ぬ葉

やかんし、ティールあんてい蓋ーうすいで、肩にいし
 てい。三升入る鹽一うつびびかーあくどうてー。あん
 サーに、

「私ねーなーブーン出じゆーさびらんくどう、なー
 くつきさーにしまちくいみそーり」ち。三升入る鹽や
 くどう、うつさ入つちよーるさんみんいるいーやー、
 しんかー。

「あんししむん」でいち。あんさーなーブーンします
 んでいる誰撫どうし、

「託拂でいーえーうがまびらーんち、皆御礼しどう
 入るばーてー、村中ぬ入。さーに、

「くれー私が持つちえーしるやいびーくどう、私が

幸一通堂 沖縄本島中頭、那覇市通堂町。
 那覇市西部に位置し、南は那覇港、那
 観音頭に面する。

※2キーヤー 未詳。

※3バクタン バクチャー（博打）と同
 じ意味か。

※4カカソ 腹から下に着ける、女袴用
 の腰袋の着物。

※5アリーハー 人夫、人足を出すこと。役
 (ひやく)、夫連(ぶつれん)、琉球王府
 時代の租税のひとつで、労役のかたらで
 索められてい、また、その勞働に徴用され
 た人夫たちのこと。

※6ミミチャーグヒン 来時、双方の瓶
 のこと。

味えーしつからどううさぎらりーびーる」んち。酒一
升入る壺んかい「合」どう入つちよーくどう、茶碗ぬ
みーどうーぬひつかしーねー、うままでーどうーい
しえー、ねーらんないねー、うふえーうつちんきてー、
うーさんたんでーよーや。うーさんたんでーよーや。
「うつさどうやいびーる」んち。誰がん手出しやしー

（共通語訳）

昔は夫役というのがあつたって、夫役。ちようび、夫役と言えば、

「どこの道を造るので出でくれ」というと、古謝から何名どこから何名つて（割り当てが）あるよね。ちょうど村に、「なににを造るので、古謝の集落から何名来い」とお達しがあれば、（言われたとおり）行くんだよね。行くんだが、ちょうどその人はまったく夫役に出ないと言つていて、のちには罰金制度になつて、罰金制度になつたから、行かないといけないよね。

昔のミミチャーグヒンといつて、酒三升も入る壺があつたよ。それに酒を一合入れて、芭蕉の葉をこう、手籠を編んで蓋をかぶせて、肩にかついで。三升入る壺はこれくらいはあるからね。そうして、

「私はもう夫役も出ることができませんので、もうこれだけでご勘弁ください」と。三升入る壺だから、いっぱい酒が入つて計算でいるわけだね、人々は。「それでかまわない」と。そうしてもう夫役も免除するという証拠として、

「証拠として一杯受けましょ」と、みんなお辞儀をして入るわけ、村中の人の。そして、

「これは私が持つてきたものなので、私が味を見てからでないとさしあげられません」と。酒は三升入る壺に一合しか入つてないので、茶碗いっぱい飲みほすと、そこまではいいが、なくなつてしまつたら、ちよつと傾けて、

「これだけあります」と。誰も手出ししようがなかつたつてよ。

③ 泥棒を負かした娘

金城真良（明治四十年生）古謝

考える者は、女の子。考えが早いものは女の子つて言つてね。それはどこから出たかと言えばね、松山御殿のうみんぐわ（お嬢さん）から。

それ、なにかと言つたらね、泥棒がね、まあ、家の上のほう、下のほう、台所のほうとあるだろ、家庭というものはね。うぬ中のほうにもナカメー、言んねナカメーでい（その中の方にも中前、いわばナカメーで）。今の柱ね、紐をくびつてね、泥棒が入つたらしいんだよね。入つたら、その女の子が、うみんぐわ、女の子が、自分の体にこの紐がついたから、

「あら、この紐」でいちね（といつてね、強く、強く引つ張つて切れない、こうやつてこの、どこにこの紐は入つていくかといつたら、入り口の柱にくびつてあるらしんだよ。その柱にくびつてあるものは、ゆつくり、ゆつくり、紐の、奥の方の柱にくびつたらしんだ

*1 松山御殿　未詳。琉球国最後の王となつた尚泰の子、尚順は、一八八五年に分家して松山王子と称し、松山御殿とも呼ばれた。

*2 うみんぐわ　主人あるいは目上の人に、身分の高い人の子に対する敬称。お子さま。

*3 ナカメー　茶の間、居間。

よ。そうしてから、「泥棒、泥棒」と怒鳴つたら、泥棒は入り口の柱にくびつてある（つもりだ）から、早く出られるといって、奥の隅に入つたわけよ。これが早く考えるのは、女の方という。勘定（がうまい）は、女の方だな。

④ 乃木大将と料理屋

会城真良（明治四十年生）古廟

「金もらうものはみんな来るなさい。私がやるから」と言つて、十円紙幣にかい五十銭うちきてね（十円紙幣に五十銭を置いてね）、みんなにやつたらしいですね。

その乃木大将に、カイセキに遊びも、うんと踊りもやつて、御馳走もうんど、乃木大将にやつてね、カイセキ（お膳）にご馳走を入れてやつたら、その乃木大

将は、風呂敷は持つていたらしいから、そのカイセキと一緒に包んで家に帰ろうとしたらね、そのある人がど一（ある人がどよ）、「下の台はこっちのものです。上だけはあんたのもんです」んでい（と）。
「ああ、そうか。そうなら、私も台をとりましよう」と言つてね（みんなに渡した）十円紙幣みんなかえつてきて、（みんなは）五十銭だけはもらつたらしいです。これが作戦。乃木大将の作戦。

そのね、カイセキ包むんでしょう。それだけ持たせば十円五十銭もうかるんだけど、

「カイセキはこっちのものです」と言つたもんだから、「そしたら、私も台は取りましよう」と言つてね、「返してくれ」と言つて、いつた。十円紙幣みんな集まつてきてね、ただ五十銭だけはもらつたらしいです。だー（ほら）、これが作戦です、作戦。

⑤ 北谷の石川探偵

伊佐安弘（明治四十一年生）山里

いろんな変装してね、よー、犯人の方に近寄つて、やりよつたんだよ。あの人はね。石川。石川探偵といふ人はね。あれは、いろんな、もう、頭も良かつたんでしょう、とにかく、はい。もとを押さえるようにしてね、バンバン、もう、犯人を挙げよつたという。芝居でやりよつたんがね。まあ、うちうが三十の頃だね。

芝居、非常に見たんだがね。
あの、なんという盗賊だつたかね、あれが逃げるのを追跡していくつて、これを捕まえようとしたが、犯人もまたその頭でまた、同じ、頭の（いい）、まあ泥棒だから、非常に捕まえられなくて、どうどう武力をもつて捕まえたという話だつたんだよ。武力はまあ、やっぱり泥棒の方は及ばなかつたと、この石川巡査にはね。という話は、まあ、聞いたんだが。

※1 十円紙幣 明治時代の貨幣の量位で、現在の何円。何十万円どころか、な高額にある。

※2 五十銭 明治時代の貨幣の単位。円の二分の一。現在で言えば半円が、あるいはそれを下回る程度の少額。

※3 乃木大将 乃木希典（のぎ まれすけ）。明治時代の日本の軍人。日露戦争において陸軍大将として元老院を務めた。

※4 カイセキ 会席、あるいは懇意のことを指す。おもわれるが、語りの後半では自慢を載せた頃あるいは器のことを指している。

※5 石川探偵 未詳。明治時代の警察官といわれる。北谷シベーとあだ名された大盗賊との捕獲物語が伝わる。

四 盗賊

〔一〕 運玉義留

(一) 運玉義留の事績 (モチーフ複合)

① 地頭代まで・義賊・黄金枕・最期

宮城ツル (大正十三年生) センター

運玉義留はね、首里のね、大角座といふところの下におつたわけさ、暮らしておつた。ああ、ちがうね、運玉森におつたわけね。運玉森つてね、与那原にも近いし、首里にも近いところがあるわけさ。そして、だからこっちから泥棒ばかりしたんじゃない。

あるね、ちょっと分がある (身分のある) わたしのところにね、下男に入るわけさ。下男に入つてね、そつと昔は贅(じゆ)いのがね、うらやましかつたわけね。そつたらその主人のね、贅を見てからね、自分もこれ押したいわけさ!。そして押したいからね、そして、「これはね、私(わたし)がどんなに偉くなつたら押せますか」と言うたらね、

「あんたなんかがどんなに偉くなつてもね、これは押せない」と言うわけ。それからひねくれるわけ、怒つてね。「どんなでいきやー (出来物) なつてもね、百姓はね、もうこんな贅も押せないから、そつたら自分は、なにか有名のね、人になりたい」と言うてね。そして、世間は皆、同(そん)丈(じよ)なしたい (平等にしたい) わけ。金持ちは

貧乏(ひぼう)、なくなしたいという意味さ。それでね、ひねくれて、この人とね、

「あなたのところにいつか泥棒に入るから、気つけないね」と言うてね、もう、帰るわけさ。そしてそれからこの人はもう縁切るわけだね。

そしたらね、この人 (運玉義留) はね、約束どおりね、この (侍の) 人、

「今日は泥棒に入るから」言うて、(侍は)用心するわけ。たくさん人頬んでね。家をもう番(番)さすわけだね。不裏番立たすわけさ。そしたらね、このね、運玉義留はね、考へてからね、豆をね、投げてね、雨のよう見えしかけてね、「ああ、もう今日は雨が降るからね、運玉義留来ないでしよう」と思つて、皆ね、ひと眠りふーじーするわけさ (ひと眠りした様子である)。そ

したらね、あの、入つて行つて、この人、殿様の金の枕、盗んで行くわけさ。そんなふうな話だよ。
そしてそれからね、いろんな人も助けるわけさ。金持ちから盗んで、そして、あの貧乏者(ひんぱうしゃ)にあげるのも内緒に投げるわけね、

「自分がよ」と言わないで、内緒に。

そして、この、あるいきやー (秀才) のね、侍も

ね、この人がお金も投げてね。昔は一番科(ばんか)あたりのは金がいりよつたらしいよ。着物(きもの)着けたりね、いろんな

だから、頭はでいきやーだけどね、一番科あたりに行けないわけさ。試験受けに行けないわけさ。だからこの人、運玉義留がね、助けてあげるわけ、内緒に。そしてそれで、この人成功するけれど、この人 (運玉

東一運玉義留 伝説的な盗賊 モデルらしき実在人物はみあたらないが、義賊運

玉義留の活躍を描いた沖縄芝居が人気で、大人の物語として語られ、伝説化して

いる。沖縄芝居三青年で御殿奉公していなかる、あるとき主人に「百姓のおまえが身を粉にして働いても、せいぜい寅(とら)頃(ごろ)、地頭代の位までしかれない」と

と言われ、「せなけ頭張つても地頭代程度にしかならないなら、いつぞ盗賊になつて後世に名を残そう」と発奮(はふん)。奉公先を海軍(かいぐん)砲熾(ほうしう)兵(へい)であなただくまーばーじゅー」と呼ばれる頭の切れる少年と組んで大勝(だいぜい)かりな盜みを働くが、得た金品は貧乏(ひんぱう)人にあげるという義賊(ぎざく)になった。西原開拓の運玉森を隠れ家(ひざま)としていたため、運玉義留と呼ばれる。

東二運玉義留 近世琉球では、形態や挿し方に

違いはあるものの、男女とも結婚(けつこん)に簪(くし)を挿す習俗(しこく)だった。身分によって簪(くし)に用いることのできる素材(ざいそく)が異なつてお

り、おおむね、王族(おうしゆ)は金(きん)、士族(ししゆ)は銀(ぎん)、平民(ひんみやう)は真鍮(まきゆう)といったようにわけられていた。

義留を）捕まえる役目なるよ。そして必ずこの人に捕まえられるよ、また、うん。そつて、昔はもう、何實とか盗んだらもう死刑だつたらしいさ。だつて運玉

義留、死刑なつたんじゃないかなあ。そして、その人の子どもは、子孫はいるよ。うん、子孫はいるよ。

玉那禰（よなね）というの、その子孫じやないかな。運玉、いるはずよ。会つたことがあるのに。

② 黄金の枕・義賊

島袋フミ（明治四十一年生）諸見里

〈方言原話〉

運玉義留や、すぐ偉い人（ひいひと）うや。王様ぬ枕（おうさまぬまくら）たんがん取りふあんしがてー、雨降（あおふ）らさーに王様ぬ枕（おうさまぬまくら）取（と）いてひんぎーん。水たらしてさ、寝て（ねむる）王様寝（おうさまねむる）いらっしゃるから、水あれして、持つてつて逃げるさー、金（きん）の枕（まくら）。あれは、あの、あれさー、泥棒（ねぼう）じゃないがよ、金持ちからは取つて、また貧乏（ひんぱう）にあれして。貧乏（ひんぱう）助け（めぐけ）る人さ。

（共通語訳）

運玉義留は、偉い人だよ。王様の枕も、誰も取りきれないけどね、雨を降らして王様の枕も取つて逃げるんだ。水をたらしてさ、寝て、王様は寝ていらつしやるから、水であれして（雨と勘違いさせて注意をそらし）、持つて逃げるんだよ、金の枕。運玉義留は、あの、あれだよ、泥棒じゃないけどね、金持ちからは取つて、また貧乏人にあげて。貧乏助ける人さ。

③ 運玉義留の最期

屋宣カメ（明治四十一年生）安藤田

〈方言原話〉

ありん、でーじな盗人（ぬすびん）やたんでいし、あんしえーわん。人ぬ家（ひとぬいえ）から盗人（ぬすびん）えーんてー、追つたくどうよ、うぬ村中（むらなか）出（で）じやーに、まーいつべー追（おと）一回（いち）一回（いち）回（いち）ちやくどう、かーま運玉森（うみてきやま）んかい登（の）いたんでい。

「誰（だれ）がんとうめーさん。あんざくどうやー、

「誰（だれ）がんとうめー、ふいるましーむんやつさー」ん

でーが、あまんかいまき（まき）グムイぬあんでいどー、うぬ

運玉森（うみてきやま）なかい。私（わたし）たー行（ゆき）えーんーだんしが、あん

でーやー。あんざくどう、うぬクムイ、クムイぬはた

まんまー、かんし、棒（ぼう）しすぐていんなー、まーんか

いが行（ゆき）じやらーわからんばーてー。でーじなぢゅー

ばーやでーんてー、うれー。

んじ、うまんかいクダグー入（い）つていやー、あんしう

まんかい、草（くさ）ぐわーぬみーんかい、クダグーぐわー入

りやーにくぬ、息（いのち）そーたんでい。息（いのち）そーしょーづく

クーぐわーし出（し）じーし、出（し）じーたんでい。うつさ出（し）

とーぐどうなー、出（し）じー、うまんかい立（た）ていらつたん

でーどー。あんざくどうや、上（うへ）がらぬーがな（な）立（た）ていた

くどう、うまんかい当（あ）たてていよ、あんし終（おひ）たるはじ

どー。

あんすべくどう、うまから血（ち）出（し）じたくどう、

「あー、うまなかい（う）ーし、うまなかい（う）んどー、う

んどー」しゃたんでいさぬーんでい、話（はなし）あたんよ、

ホークムイ 自然の、あるいは人間的に
つかれた溝（くわい）
う、そら、ほら、くらの底（そこ）



うん。
人ぬ話しはどう聞くかわらんばーてー。うん
ぐどうやたんでいどー。

共通語訳

あの人（運玉義留）も、たいへんな盗人だったといふのは、それもそのはず。人家から泥棒したといって、追われたのでね、その村中（の人が）出て、どこまでも追い回し、追い回したら、遠く運玉森に登つたって。登つたのでは、もうがやがやとたくさんの人で行っているが、誰も見つけることができない。そしたらね、「誰も見つけられない、めずらしいことだねえ」と言つていたが、あそこに大池があるんだつてよ、その運玉森に。私たちは行つてみたことはないが、あるつてね。それで、その池（のほとり）をすつかり、こうして、棒でたたいて、どこに行つたかわからぬわけだよ。大変なつわものだつたってね、この人は。

ほら、ここに竹の音にして入れてね、そしてそこで、草むらの中で竹の音をくわえてこの、息をしていたつて。息をしたらふくふくと泡が出て、出たんだって。それだけ泡がでたから、出て隠れているところに(刃物を)立てられたんだってよ。そうしたらね、上からなにかを立てたから、ここに当たってね、そうして亡くなつたはずだよ。

だから、刺されたところから血が出たので、「ああ、ここにいるよ、ここにいるぞ、いるぞ」ということだつてよんじうことだと、話があつたよ、この

④ 運玉義留と油喰坊主

津軽ヨシ（大正元年生）室川
あうちから取つてから、盗んできてから、貧乏人に持つてきて取らしてから。運玉吉留やー。金持ちから、どうでも大きな金持ちから取つてきて、貧乏人に助けてよつたって、持つていきよつたって。子分がや、油喰もなんでも。）

⑤ 運玉義留と油喰坊主 —地頭代まで・義賊・

(連玉義留)は泥棒よ。だから、あの侍なきい使つ
い(侍に使われて)、いじめられ、あれするから。
撻(私つた一やぬ一までーないびーが(撻私どもは、どの位まではなれますか)」つて、髪結一ら、侍
の大将の髪結うときには、
「私つた一や、ぬ一までーないびーがやー」でい言
うえーたくどう、沖縄口口つし(私どもは、どの位ま
ではなれますかねえ)ときいたら、沖縄方言で。

「私たっしや、ぬままでないびーがやー」でい言
ちえーたくどう、沖縄口つし（私どもは、どの位ま
ではなれますかねえ）ときいたら、沖縄方言で）。

て眠つてね、貧乏者は。こんなのが見てから、また金満家のところに行つて布団を盗んで、こっちにまたかぶせて。お金がないところはまた、お金を盗んで、またこの貧乏者に取らして。こんなにこんなにしようつて。

だからまた、この「油喰坊主」というのは、ウーマークー（きかん坊）だつたつて、子ども。

「あんた、あんたはなにしているの」といつて話したから、

「冬青草、夏ホロホロし、取りにいく」んでい言たんでい（と言つたつて）。

「なんで、あんたはこの言葉わかるね」んちゃくとう、

「これもわからない人もいるね」と言つて。したら、これは冬青草といつたら、冬には青い葉っぱが出来し、また、夏には実がなつて、実がなつてこんなにするさーねー、ホロホローつし。

冬青草、夏ホロホロー取りにいくんでい言よつたつて、この油喰坊主は。「冬青草、夏ホロホロ」。

あんしそー、あぬ（そうしたら、あの）、「これはできるはず」と思つて、

「だー（どれ）、あんたは私と一緒にいいことがあるから、やらないねー」と言つて、したら、

「うん、兄さんと行つたらできるよ」と言つて、これも一緒にしてね、二人でもう泥棒したりなんかして。

お金がないところはお金を盗んでいつて、着物、寒いときにはまた布団を持つていつてかぶせて、こんなに

こんなにしようつたつて。

だから役人にもう追い回されてね。あの話は、言えばこっちの御主^{おほすけ}加那志前^{かねし}（王様）と言うから、これ、御主^{おほし}加那志前^{かねし}の枕^{まくら}、枕^{まくら}は金の枕だつたらしい、

「これを取つてみせる」

「これはね、私はこれは取らないようをしているから、取らさん、取られないから、やつてござん」と（王が）言つたからさ。

「取つてみせる」と言つて。して、あの、豆^{まめ}をたくさん盗んで、いってね、夜中よ、もう眠つてゐるときに、豆をたくさん盗んで、いって、ホロホロホロホロホローしてすぐ雨の音をして、ほして、

「雨どうやがやー」ち（雨だらうかねえ）と、こうして枕からこんなしたから、このとき枕は取つて逃げたらし。

「あー、これはやられてない」と言つて。

この槍^{やり}槍^{やり}というの昔はあつたらしいね。こんなして突いたからさ、

「はー、もう、やがてされよつた（あやうく殺されるところだった）」つて、

「もう、やがてやられよつたさー」んち（あやうく殺されるところだった）といつて、

「まだですねー」んち、こうしてぬいて、またやろうとしてぬいたから、また、すぐバツミカチ（ばつと）、逃げて。こうしてから、もう追い回されてから、もう逃げるところはない。リングムイ^{（リングムイ）}といふところに落ち

第一冬青草　麦のことをいつている。麦は冬はまだ育成中であるため青く、夏に熟成して枯れる。

第二御主^{おほすけ}加那志前^{かねし}　国王様。琉球国王を指す敬称。加那志前は尊称を示す接尾語で、前は敬称で、「様」ほどの意味。

て、竹ぐわーんでーいがらー、竹さーい、竹さちやー
息つし（竹だからんだか、竹で、竹をくわえて息をして）、竹でどうにかして、水飲まんぐとうしえーん
てーやー（水を飲まないようにならうね）。それ、首里の王わかつてからさ、槍でぬいてから、これ
での後は、あれでされた（槍で殺された）、されたつ
て。うぬ話聞いてある。

油喰坊主の話は聞かなかつたが。この運玉義留の
話。あれ（油喰坊主）は殺されなかつたはずよ。あれ
が話は聞かなかつた。

⑦ 運玉義留と油喰坊主——豆食い・油盃み・鼠の真似・黄金の枕・最期

金城清三郎（明治三十七年生） 東桃原
運玉義留は、あの、と、油喰坊主でしよう。

自分の友だちを探したいといつて歩いておる、運玉
が歩いておるときに、

「私も仲間にしてくれ」（と油喰坊主が）言つて。

「よーし、やる。ためしにですね、どのくらい恵あるかといつて。えー、最初は、種豆を自分の家で焼いて食べよつたそですよ。それをお母さんが見て、

「それは種豆なのに、それ焼いて食べたのか」と怒つたそうです。怒つたら、

「これなくなつたら難儀しないから、焼いて食べたほうがいいですよ、お母さん。みんな焼いて食べたほう

がいいですよ」でいらっしゃく（といつたので）、そして、家から放り出してね、それを運玉が、仲間を探

したいといつて歩いておるとき」、

「私も仲間入りさせてくれ」言つたら、

「よし、やる、させる」。そうして仲間入りさせて、試験があつた。

「できるか、できないか」といつて。

「金を持たないで油一升買つておいで」、よこしたそだ。そうしてよこしたら、その一升びんの下に、「ブクラー」と言つて、あの、吸い込むのがつたそうです。

そこで、

「あんたがたのは漢たないから買わない」といつてこぼして、（フクラーに油を）飲み込ましてからこぼして、買わないといつて、他から買いつて、また、もう一軒でも、

「あんたがたのはもう、満たないから買わない」といつてこぼして、三軒目ではようやく一升、このフクラーをしばつていっぱいなつておつたそですよ。そして、

「買つきましたよ」、兄さんはアフイー、

「買つてきたよ、買ついちえーんどー、買つてきてあるよ」と言つて、したら、

「あー、これ、えらいねえ。よし、仲間に入れてあげて」、仲間に入れて。

今度はまた、着物を泥棒しに入つたそですよ。あの、戸棚入つて、鍵をしめて、沖縄の、昔は戸棚言つてありましたが、それを入らして、外から鍵入れてしまつたそですよ。

「出ることできるかねえ」言つて。

ターや、ばろ布のこと。

表2戸棚 作り付けではない、移動できる収納用。

(油喰坊主は)ちゃんと(そこにあつた着物を)何枚と読んで(数えて)包んでから、戸を力チャカチャカチャカチャヤ、鼠がするように力チャカチャヤーしたから、戸を力チャカチャヤ

「あら、ほくらの戸棚は鼠が入つてゐる」といつて、「大変だ」といつて、鍵、鍵をといて戸を開けたら、

「わー」して、この着物を取つて逃げた。主人がひっくり返つたら、そこから逃げて行つたそうですよ。逃げて行つたら、もう見えないとこで、着物計算、運玉が何枚、何枚言うたら、

「いや、もっとある。もっとある」

「いや、それだけしかない」

「そうしたら読んで(数えて)みなさい」といわれて。ちゃんと(盃みにはいつたときにして)家で読んでおつた(数えていた)そだだから。それも油喰に負けたそうですよ。負けたらね、もう、

〔仲間は十分にできる、大丈夫〕と言つて。

そう、わけて、それからもうあつちこつち歩いて、後は運玉は自分一人歩いておるとき、首里にリングムイと言つて、あの、丸い葉っぱを、浮いておるところに隠れておつたそですよ。池の中に隠れておるのを、槍の名人が見て見らんふりしておつたそですよ。そつて上から槍で頭を突いているが、その槍の先に土をつけて逃げておつたそですよ。今度はもういっぺん刺されて死んだそだ。

ああ、私の話は一つ落ちております。

ある晩ですね、御主加那志、今の県知事かねえ、そこに行つたら、

「あなたの黄金の枕、取りにいきますから、油断しないようにしてください」と言つたら、

「いいよ」って言つて。

番人は、もう、まわりに置いておつたそうです。そうしてクバの葉っぱを屋敷のまんまる(まわり中)に置いて、上から落として、バラバラバラバラ一したら、雨みたようでしょう、雨みたよう降る。

「ああ、雨が降るから来ないねえ」と言つて、槍の名人もたるんでおるそだから、

「雨が降るから来ないね」と言つて、枕取り替えられるのわからないで。わからないで、そう、逃げるところを槍で、この柱に留めてあつた、足を留めてあつたそですよ。

「もう少しであつたねえ。もう少しであつたら、あたりよつたねえ」抜き替えするときに逃げてしまつてね。それからですよ、あの首里のリングムイに逃げて行つて、蓮の葉っぱの下に隠れておるのを、この槍の名人が見て、刺したら、血は、槍の先、血だから、土をつけて出して、二回目にやられたそですよ。二回目にはもう、やられて死んだそですよ。運玉義留です。

⑧ 運玉義留と油喰坊主——油盃み・義賊・最初
〔方言原語〕 我如吉ヨン(大正六年生) 越来

あのね、運玉、油喰、「一人友だちなつてさ、油喰と運玉」と。別から泥棒してきて。この油喰坊主は頭がえらい。

率1 御主加那志 王様。加那志は尊称を示す接尾辞。

率2 ハバ びろう。蒲葵。しゃろ科の植物。長い病に広い葉がつく。

率3 運玉 運玉義留のこと。

率4 油喰 沖縄芝居「運玉義留」に登場する財主の公的存在的で頭が切れる少年。アンダクエーボージャーともいふ。

「油買つておいで」と言つたからさ、綿よ、綿。布団の綿。これあれに詰めて、これに油買つてくるさ。」つぱい、いっぱいこれにしみこめて、持つてきて。
 「あい、ヤツチー、アヒー、油買つていちゃんどー」んでいちて、話ぐわーさくどう。
 「ん、いやー偉い」んでい言やーに、兄さんが。あぬー、だー、油でいんぶら揚きて、二人食でい。
 うつた一盃入しーが行ちゅしえーやー。あんさーにていくーしーぶぬんかい、うぬ、あぬ槍盛たいぬーさつきい持ちんじやーに、あんさーに、うりし。
 なー上上ぬ入ぬわかやーに、運玉義留や、なー忍ばらん。首里ぬリングムイ、うまんかい入やーに、一夜うまつてい過ぐらでー、あぬ竹ブーブーよ、うりから息そーんでい。あんしから、うぬ偉い入ぬ槍投ぎたくどう、当たつて、

「もう少しだつたのにねえーんちやくどう、うれー取つたくどう、しぬじよーるばーてー、うぬ運玉や。うりからぬ由来記。油喰と一けー別りやーに、うにんからぬ由来記うりそーるばーてー。

(共通語訳)

あのね、運玉、油喰、一人友だちになつてね、油喰と運玉。よそから泥棒してきて(いた)。この油喰坊主は頭が良かった。
 「油買つておいで」と(運玉義留が)言つたからね、綿よ、綿。布団の綿。これをあれ(盡)に詰めて、これに油買つてくるんだよね。いっぱい、いっぱい綿に

しみこませて、油をしみこませて、持つてきて。
 「ほら、兄さん、兄貴、油を買つてきたよ」といつてね、話すると、「そうか、おまえは偉い」といつて、兄さんが。あの、ほら、てんぶらを揚げて二人で食べて。
 この人たちが泥棒しに行くよね。そうして、その、あのお金を盗んだりなんなりしたものを持つていつて、そうやつて、あげて。
 もう上方の人々が知つて、運玉義留は、もう隠れられない。首里のリングムイ、その池に入つて、一夜そこで過ごしてね。あの筒筒ね。(口にくわえて)それで息をしたつて。そうしてから、その偉い人が槍を投げたら、当たつて(刺さつたが)、「もう少しだつたのにねえ」と(運玉義留が)言つたら、それ(槍)を抜いたので、やりすごしたわけだよ、この運玉は。

それからの由来記。油喰と運玉とは別れてしまつて、そのときからの由来記になつてゐるわけだよ。

⑨

運玉義留と油喰坊主

—義賊・油盗み・豆食い

照屋カメ(大正十四年生)中の町

(この話を知つたのは)えー、人じやなくて、芝居で。侍は貧乏をいじめてからなにか取つて食べるさーね。運玉義留はいい人だけど、あれはまた、侍から取つてきて、盗んできて、貧乏にあけるつて。あれは芝居よね。芝居で。あれ、運玉義留の芝居てー、この運玉森に、与那原にあるわけよ。あつちに

ヤツチー、アヒー、ヤツチーは平氏についていう話で、兄さん、アヒーは、平民でいう言葉で、同じじく盗さんのこと。
 参考いくーしーぶぬんかい 未詳。

隠れていたつて。だけど、はつきりはわからない。

盗んできて、油取ってきたり、また親が油蔵豆(ビニン)、あられ隠しておいてあるの、盗んてきて焼いて食べたりするわけ。

油は、瓶持つていて、ボロ持つていて、あつちの瓶から入れてからに、あつちに渡して、こんな絞つて、この絞つて、瓶使つていたつて。

⑩ 運玉義留と油喰坊主 — 地頭代まで・義威・
油こぼし

島袋新栄（明治三十二年生）池原

昔、運玉義留(エヌタケヨシ)という人と油喰坊主(オイシマツ)という人がいたそ

うですね。それで、油喰坊主が、

「私は優れたら、なんの勤めまで、なんの職までできるかねえ」というようなことを上司に聞いたら、

「君がいかに優れても、地頭代まで以上にはできないよ」と言つとおるんで、

「まあ、それだけやるぐらになら、まあ、盗賊になつて貧民を助けたばうがいい」

というような意味で、まあ、それで移つたといふような話もあつたわけですが。

それで、最初、人の（家に）盗みに入つたら、運玉義留は取り出しその目をして、また油喰坊主、外に運ぶような仕事をやつたそうで、まあ、帰つてから、

「何枚（盗み）出した」と言えど、「何枚しかなかつたよ」と言うような話で談判したそ

うだが。

それ盗んだところの門に行つて、その油をこぼしてしまつたので、その油を入れた甕も割つてしまつて、泣いたそうですから。その主が出てきて、

「どうして、あんた泣いているか」と言えど、

「わしはもう、この油をこぼしてしまつて泣いておるわけですよ」と言つたら、その家の主は、私たちは、昨日は何枚着物を盗まれたよ」というような話を聞いたんだから、二人の談判もそれで終わつておさまつたといふような話は聞いたわけですよ。

⑪ 運玉義留と油喰坊主 — 黄金の枕・油こぼし
高江洲ヨシ（天正七年生）諸見里

（運玉義留が油喰坊主に）

「あんた、私と一緒にね、ぐーなつて（仲間になつて泥棒しに行こう）と言つたら、

「行かない」といつて、始めはやつたけど、そのまま、「一緒にぐーなして（仲間にして）ちようだい」とて頗んだわけ。そしたら（油喰坊主が）、

「私がね、門に出て、きつちやき（けつまづいて）、足をあれしてね、油こぼしてね、もう大変なつたよ一つし（大変なことになつたよと言つて）、呼んだらね、私が取つてくるから」と言つて、油喰が。運玉義留は泥棒しにいく、また油喰坊主は油かついておつて、転んで油をこぼしたから、

「あきさみよー、私油一ちゃ一すがやー」つし、泣たわけて（「なんのこと、私の油はどうしようかねえ」といつて、泣いたわけだよ）。さくどう、うぬばー

東一与那原 沖縄本島南部東海岸の地域名。よなはる。方言でユナバル。近世では大里間切の一部。近世以降は与那原村、与那原町、古くから那原港を中心とする交易・交通の要衝であった。



に（そして、そのときに運玉義留が）金の枕取つたつて、話聞きよつた。

⑫ 運玉義留と油喰坊主——鼠の真似

喜屋武英正（明治三十年生）久保田

戸棚^{戸棚}入れてから、鍵^鍵入れてから、試すんでい（試すとつて）。鍵入れてから逃げたという話あつたがね。運玉義留、油喰坊主（を）戸棚の中に入れてから、鍵入れてあるそつだ。初めだから教えるためであつたそつだ、泥棒を。

鍵入れてあるから出られんしえー（出られないよね）。（油喰坊主は戸棚のなかで）もうカチヤカチヤカチヤーして（音を立てて）から、主は、「鼠が入つておるな」と思つて、またトントン（足音を立てる）したら黙つておるが、またんやるそつだ。だから鼠が入つておると思つて開けたから、（油喰坊主は）すぐ飛び出ておつた。飛び出て逃げたつて。

他のお家に行つてから、泥棒しに行つてから。他の家に行つてからよ、中に入つてから鍵入れてよ、「どんなして逃げるかな」と思つて、これも教えるため、初めだったそつだからよ。運玉義留がよ、試しにやつたそつだ。まあ、鼠が入つておるさーねー、ど（主が）思つさーね。カチカチカチーしたら、したら、なにかしたら黙つて、またんやる。鼠が入つておるといつて。誰がも、誰がも鼠が入つておると思つさーねー。飛び出して、（主人が戸棚の戸を）開けてから、逃げかた。

⑬ 運玉義留と油喰坊主——貧乏者の布団・天福

地福

金城真良（明治四十年生）古賀

方言原語

運玉義留とう油喰坊主どう、自分ぬ、庭んでい言一

ねー、家ぬ片闇なかい隠れていたらしいんですね、

雨が降つて。そのときには、うまの人ぬなー、盗人ぬうまんかいうんでいしえーわかいで、あぬ、

「打ちウードウ、今日や寒さるむん、打ちウードウかんしりよー。下編みウードウんしーていーかんしりよー」んちやくどう、「うまーなーでーじな編みウードウ、打ちウードウんちまんどーさやー」んち。うぬウードウんでいねー布団ぬんかいどうばーどうやくどう、昔ぬウードウんでいしえー。あんさーにさくどう、入つち探してーるぐどーんよーやー。さくどう、二ーブクンち、萬^まさーにかい編まつとーしゃー編みウードウんでいちょーるばー。打ちウードウんでいしえー、ムスルんかいや打ちウードウでいちょーん。ムスルんニブクンかんてい寝んじやーに。

「あつさみよー、くまーなーぬーんねーらんどー。あんし、私つたーが立つちょーんちわかやーにあんししえーさやー」んち、

「話出じやちえーさやー」んち、あんしやたんでい。あんさーに、うまぬ貧乏人の、言ーねー山羊や、ヒージャー草。ヒージャー草刈いんち山^{さん}かい行じやくどう、山ぬガマ^マぐわーにかい、腰ぐわーぬ満つちやかーに宝物ぬ入つち、さくどう、うぬ宝物の一なー欲

※一二一ブク（ニブク）ニクブク。萬
成することは「うちゅん（打つ）」といふ動詞で言ひ表す。

※二二ムスル 落（むしろ）落や篠を作
成する事は「うちゅん（打つ）」といふ動詞で言ひ表す。

さーあしが、どう一ぬ夫ぬ許き受うけきうんやか一家んか
い持もつちえーくらん。あんざーに夫ぬ仕事から帰か
ていさーくどう。

「あんがんつし宝物たからものいつべー見みちよーしが、取とてー
くーんたんどーやー。行ゆじ取といくーなーでい言ことち。

くぬ油喰坊主あぶらくちぼうしゅが聞きちくで、聞きちくだくどう、うぬ
油喰坊主あぶらくちぼうしゅがうぬマグモーんかい行ゆじやーに聞ききた
くどう、むるハブハブなでい。むるハブハブなたくどう、
私わたくしたーが立たつちよーんちわかやーに、うぬふー
じーつし話はなしえーくどうや、くぬハボー持もつちん
じやーにかい、うつたーうち喰くしるやーんち、あん
さーに、うぬ貧ひん乏ぱ人じんぬ寝ねとーる頭かしらのたんかーんじいっ
けーらちえーるぐーん。うぬ女め、

「私が昨日見みちやる宝物たからものーくまちよーんんでい。
うんにーからエーキなつたつて。やー、運うんぬ悪あくさる
人ひと間まぬ見みじーねー蛇へびないばー。運うんぬ強つよさしが見みじー
ねー宝たからないばー。ヒー、くりやー。くぬ意味いみーや。

(共通語訳)

運玉義留と油喰坊主と、自分の、庭と言えば、(あ
る人の)家の片隅に隠れていたらしいんですね、雨
が降って。そのときに、その家の人々が、盜人がそこに
いるということに気づいて、あの、
「打ちウードウを、今日は寒いんだから、打ちウードウ
をかぶせなさいね。下は編みウードウも一緒にかぶせ
なさい」と言つたので、「この家はたいそうな編み布
団、打ち布団とたくさん(家財が)あるんだな」と。

このウードウというのは布団なんかのことをいうわけ
だから、昔の(方言で)ウードウというのは、それで、
(家に)入つて探したようなんだね。する二ブクと
いつて、薦すすで編まれているのは編み布団というわけ、
打ち布団というのは、延のに打ち布団と言つてゐるわけ
だよ。延のもニブクもかぶつて寝て。
「あきれた、この家には(盗むようなものは)なにも
ないよ。そして、私たちが(家の片隅に隠れて)立つ
ていると気づいてあのようにしてるんだね」と、
(編み布団と打ち布団の)話を出したんだね」と、(運
玉義留と油喰坊主は盗みを諒めた)、そういうふうだつ
たつて。

そうして、その貧乏人が、いわば山羊さんよう、山羊の餌
にする草。山羊の草刈りに山に行つたら、山の洞窟
に、壅おさいづばいに宝物が入つて。そして、その宝物は
もう欲しいけれど、自分の夫の許しを受けないうちは
家に持つてこられない。それで夫が仕事から帰つてき
たら、

「かくかくしかじかで、宝物をたくさん見たんだけど、
取つてはこなかつたんだよね。行つて取つてきてね」
と話して。

この油喰坊主が(宝物についての会話を)聞きつけ
て、聞きつけたので、その油喰坊主がその洞窟に行つ
て開けたら、みんなハブになつて。みんなハブになつ
たので、
「私たちが隠れていることを気づいていたからこそ、
このようにして話をしたのだな、このハブを持つて

ホーピーシャー 山羊。おもに食肉用畜
で飼育される家畜。農村では山羊の糞と
なる草を刈つてするのが女性や子ども
の仕事の一つだった。

ホタルガマ 洞窟。

ホーピーシャー 山羊。おもに食肉用畜
で飼育される家畜。農村では山羊の糞と
なる草を刈つてするのが女性や子ども
の仕事の一つだった。

いつて、あいつらに咬みつかせてやらない」と。そうして、この貧乏人が寝ている頭のすぐ近くで（ハブを）ぶちまけたようなんだ。この女は、「私が昨日見た宝物がここにきてる」と。そのときからお金持ちになつたつてね、運の悪い人間が見たら蛇になるわけ。運の強い者が見たら宝になるわけ。そう、これだよ。この話の意味はね。

[2] 油喰坊主

① 油喰坊主

屋宜カメ（明治四十一年生）安慶田

〔方言原話〕

ウエーキンチユぬ床下ぬみーんけー入つち。床下ぬみーんけー入つちやくとうや、竹ぬ、クダグーんちあらば、山原竹ぬ。山原竹ぬクダグーがあるばーてー。うり床さぬみーんじバチバチさくとうや、バチバチさくとう、うまぬ嫁めぢやーんかい、うぬ姑類ぬ、
「いつたーや豚ぬ足ん使たらやー、夕飯の一」

「うーんちやくとう、

「まーんかいが置ちえー、床さぬみーうていや、犬ぬひやーむる骨喰いぎーんどーんでい言たんてい。あんさくとうや、
「犬ぬ骨喰いぎーるむんぬ」ちやくとう、
「置ぬ上ぬガキシユーんかい下きてーびんどーやーんといい言ちやんとい、あの、あぬ嫁ぬぢやーが。あんさくとう、

「あー、いーばーやつさー」んち、また床さぬみーから這い出でてい。

今ぬぐどうしうまんかいカニラつてーねーん、昔えー。健んちねーらん。昔えーなー、家ん閉みやーに、屋ん開きっぽなしハルからはいくどう。

あんさーなかい、うまからシムんかい道ーていい出でやーに、床さぬみーから上がりやーに、うまぬ豚ぬ足んちゆふあーら食でいや。あんしからよー、うまぬ家から盜人し出でたんでい言たんでい、言たんでいどー

やーんでい、私つたー親ぬぢやーが言みしえーたん。あんさくとうよー、

「盜人ーよー、まーんじぬーやていん食みーねー、ぬー心落ちちゅんでいどー」んでい言みしえーたん。あんしーなー、

「盜人ぬうち喰つてーさやー」でいち。

〔共通語訳〕

（油喰坊主が）金持の家の床下に入つて。床下に入つたらね、竹の、クダグーというのがあるわけ。山原竹の。山原竹の音というのがあるわけだよ。それを床下でぱちぱち鳴らしたからね、ぱちぱち鳴らしたら、その家の嫁たちに、その姑が、

「おまえたちは豚の足も使つたんじやないか、夕飯は」「はい」と答えたので、「どこにだか置いたのか、床下でね、犬めがことごとく骨を喰つてゐるみたいだよ」と言つたつて。そうし

ホークダグー 竹の音機織りの器具で、縄糸を巻きつけて後に入れる小さい管。

表2 山原竹 リュウキュウチクのこと。
桟の高さ二メートル、径一センチメートル。農業用材に利用され
る土壌の浅い石灰岩地では低木化して
桟は細く、葉は著しく狭い。土壌の深い
ところでは桟の高さ四八メートルにな
り、葉幅も大きい。

表3 シム 台所。お勝手。

たらね、

「犬が骨を喰っているのに」といつたら、
「（豚の足は） かまどの上の吊るし鉤に下げてあります

よ」と言つたつて、あの、娘たちが。そうしたら（油
喰坊主が）、

「ああ、ちょうどいいぞ」と、今度は床下から這い出で。

今のようにその家には掛け金（鍵）がかけられては
ない、昔は。鍵というのではない。昔はね、家も（鍵

はなしで戸だけ）閉めて、屋も開けっぱなしにして畠
に行くから。

そうして、（油喰坊主は）床下から台所に這つて出
て、床下から上がって、そこの豚足も腹いっぱい食べ
てね。そうしてから、ここのから盗んで出たつて言つ
たんだつて、そう言つていたんだよと、うちの親たち
がおつしやつていた。

それでね、
「盗人はね、どこでも盗みに入ったところでなにがし
か食べれば、なにか、心落ち着くんだつてよ」とおつ
しやつていた。そうおつしやつていた。

それでね、
「盗人が食つてしまつたね」と。

〔3〕 北谷シベー

① 北谷シベーと石川探偵

島袋吉盛（大正十三年生） 南桃原

北谷シベーはね、この辺（口のあたり）、シベーだつ
たといふんだがね、大盗人よ。もう大変な盗人。も
う、どんなしても、牢屋を破つても出るような盗人
さーね、北谷シベー。これは北谷の野国あたりの人と
言つたが。みづくちで、昔は整形手術もやりきらん
だからね、こう、シベーつていうのは髭で隠していた
んじやないかと思つたが、髭。こつち跳生えいたら
わからんさーねー、髭で覆うから。そういう話がある
が。これもくわしいことわからないんだが、話はある
んだが。

石川探偵。廃藩置県なつて後。これは詳しい話はわ
からんが、一応。おおざっぱな話はね、大まかな話は
知つてゐるんだが。この北谷シベーというのは、たぶ
ん、結局ね、後先どつちでもいいんだが、大まかにす
るとね。

この北谷シベーというのは、結局、大泥棒さーねー。
大変な、世の中を騒がした、石川五右衛門以上の大変
な泥棒で。この人、あんまり泥棒しすぎて。くわしい
話はあつちこつち忘れてしまつていて、牢屋に叩つ
込めたらね。牢屋からはね、昔の牢屋はこう、周囲、
逃げないように、タマの割れ（ガラス割れたもの）さー
ねー、タマビンなんかこう割つて、石垣の上にこう立
てよつたつて。今のバラ線みたいなものさー、役目は。

セイシベー 口辭説、口説説など、西や
東に先天性の亀裂を持つ者を指す言
葉。毛利。

※2 野國 沖縄本島中部、もと北谷村の
字、現在の嘉手納町にあつた集落。のぐ
に方言でメン。近接する野里とあわ
せて、ヌダンヌジャトと併称する。か
つては北谷村。現在はほぼ全城が嘉手納
基地などの軍用地となつていて。

※3 廃藩置県 废藩置県は、一般に
一八七一（明治四年）年、明治政府が藩を
廢止して府県を置いたことをいうが、琉
球国については琉球処分といわれる独自
の経緯をたどった。

※4 石川五右衛門 安土桃山時代の大盗
頭。京都三条河原で盗掘りにされたとい
う。淨瑠璃、歌舞伎などで有名。

※5 タマビン ガラスびん。タマはガラ
スのこと。

※6 バラ線 鉄条網。有刺鉄線。

こう、しようつたといふんだが。で、これからね、逃げる方法は、ぼろぎれの厚いものをね、水に濡らして、これを上に置いて、うえていつたら通つていかんつて、タマの割れから、この着物は、そいでどんな牢屋でも逃げよつたつて、逃げて。

この石川探偵といふのは、廃藩置県なつてからの石川探偵さーね、名前も。これ、明治の始めの話。石川探偵は名前が石川で、野里部落と言つて、今の嘉手納に近い辺にね、野里に、廃藩置県なつてから家借りて、その辺にも住んでいたといふんだが。この石川探偵は、昔のちよんまげしてよ、大和から入つたところの所長さーね。

「あなたはこのちよんまげをね、切つたら、あなたは警部補まであげるよー」と言つて、名探偵だから。

「警部補まであげるんだが、このちよんまげ、髪を切つてくれんか」と言つても、石川探偵切らなかつたつて。

「私は、警部補よりはここのが大事だから」と言つて、石川探偵。

それで、この石川探偵と北谷シベーはね、北谷シベーは、多分野国人の人だから、野国あたりに自分のウナイというて、女の兄弟がいたらしく。

「またあんたに捕まえられて、石川探偵にね、捕まえられて、あなたのー（あなたは）これまで牢屋に叩つ込められたら、また女の兄弟に会うこともできんかう、一応、野国あたりの女の兄弟に会うまでは、石川

探偵に結局逮捕されるようだ、どここの場所で、どこでもう。あなたのこれにあうから」と言つて。して、野国に、あたりに女の兄弟会いに行つて帰つてくるまでね、それか、それぐらゐ石川探偵は猶予を持たしよつたつて、融通。そしてね、野国あたり、地名は書いたら失礼なるかねー。多分、あの辺の人さー。で、また帰つてきて石川探偵に逮捕されるわけさ。して、石川探偵はそれくらい融通。余裕持たしてまた、会いに行かしてからに、また逮捕するわけさーねー。そんないて、やりよつたといふんだが。

この北谷シベーといふのはね、「いずれはいつまでもこんな大泥棒なつて、もう大変だから」と言つて、こういう中頭地帯から八重山あたりに行つてね、もう、

「今後足を洗つて改心してね、心を改めて真人間になつて、今後将来世を過ごそう」と言つて、あの辺で一生懸命農業したりなにしたりして眞面目にしようつたう、

結局、北谷シベーが来ているといふのは、もう結局

率18重山 八重山諸島のこと。やえやま方言でエーマ。琉球列島の南端にあり、石垣島などをはじめとする大小三十一の島々からなる。

くなる、なんにもなくなる」と言う。他の人がやっても、もう、この人は確かに盗人、罪被せるもんだからね、「自分はもう今頃からいいから改心しても、真面目になつてもだめだねえ」と言つて。これからますます大泥棒なつたつて。世間はそういうもんさーねー。一度しくじると、大泥棒がいるから、その辺はなにかがなくなるんだ。

[4] 金城三郎

① 義賊金城三郎

山城清輝（大正十二年生）中の書
「金城三郎が来ゆーんどー（金城三郎が来るぞ）」と

※1 多幸山——朝倉村高名から忍野村山田町にかけて広がる丘陵地帯。山原へと通う國領方西街道における一大難所だった。

② 北名シヘー

米原ヒテ（大正元年生）照屋

北谷シベーと言つてさ、どうでも大盗人だつたつて。だからさ、なー昔ねなーいつべー盗人やてんてー(もう昔の、もうたいへんな盗人だつたつてね)。

んがく」と言いよつた。金網に入れられて、あれやつたとか死んだとかなんとかつて、こんな話もあつたさーね。とつても大盗人だいとうじんであつたつ。

大盗人であつたんだがさ、盗んでさ、自分は大盗人

だから、ある貧乏人にまた持つていって、貧乏人を助けよったとかいう話があつたわけさー。だからこれ、誰かがあれした（捕まえた）ということはあんまりわからんがさー、こんなにどつても、昔の大盗人であつたということは、北谷シベー。

① 多幸山のフェーレー

[5] ハーネスの三種類

僕が小さい頃に

「金城三郎なま来ゆーんどー」でいねー（「金城三郎がいま来るよ」というと）、もう、泣く子もやみよつたよ。

「今日はほんとの部落に金城三郎が入ってきた」とかね。そういうたいへんな人泥棒だつたけど。金持ちのところから金を盗んで、そして、貧乏者にやるとか、そういう話。運玉^{うぶく}義留^{よりゆ}と同じような人でしょ。大泥棒。うん、いた、金城三郎という。

幸山へーレーは、うちらは芝居では見たんですけど、あれほどめることはできませんよ。いろいろありますもの。

山原から、首里、那覇から、あそこに山原旅したり、また、
山原に旅したりするときには、へー、
レーティングの、本当は田舎の、百姓のあれじやな

いですね、士族の、侍のなりさがり、ああいうもんでしようねえ。で、もう食うに食えなくなつて。力はあるでしよう、馬鹿力ね。あれあんなして隠れていて、もう、こう、道行く人は、昔の旅は、たくさんお金は持つて、こう狙いで歩きよつたそつですからね、こんなして。こう呼び止めて殺したり、あんなにして、いつもあれしていたわけですよ。

しまいにはね、女がこのヘーレーは退治したって、うの聞きよつたんですねえ。ずっと上に上がつていた、退治したときには、この女はものすごく力のある人だつて。で、重たい物、こう、持つてからに、これ重たかつたら、上のほうから、あら、どうしたと言つたかねえ。

このヘーライは、女が退治したというでしよう。でものすごくこの女は力持ちで。だけど珍しいね。こう、ぱり上にあがつていったんですねえ、ヘーレーがねぬーなーがやー（どうなつていたのかねえ）。やつね。でないと下に落ちないもんねえ。

（女は）ものすごく重たいのを、これ、あれして（担い）で。ヘーレーは向こうの、崖の上からやりよつたらしいねえ。で、こう引っ掛けようとした重たいもんだから、ずり落とされて退治された。

山原の人があれして行くときもあるし、あるときは、あれも、芝居のときは作りもんですからねえ。

「私つたや持つてあるらけはやるから、命だけ助けてくれ」と言つたら助けられるときもあるし、いろいろあるさ。

あれ、ヘーレー、一人じゃなかつたはず。あつちからも、こちからも出きてよつたつて。あそこは、今もつて、あそこは、多幸山のなにがありますよね、男子禁制のとこもあるんだけど、どういう意味かわからぬですよ、あそこは。入れないところがあるんですよ。多幸山いろいろあるんです。昔はヘーレーたくさんいたそうですからね。

② 多幸山のフェーレー

金城清三郎（明治三十七年生）東横原

猫であったそうですが、猪と思つたと言つて、はねて、はねておると思つたそうです。それぐらい怖い山

であつたそつだ。その一本道路であつたそつですからね、読谷の喜名から山田まで。別に道路はなかつたそ

うだ、そこだけ。そこ通らにやいかんそうです。山原

行つたり、山原から首里（那覇）へ行つたり。その一本道路しか、別にはないから。それだけ通つていてかにや。

女は、沖縄の人はですね、女はこう、頭にこうやつて包みは、こう、のせて歩きよつたそつだ。歩きまし

たよ、最近まで歩きましたよ。その木の上におつて、こう、ガキジヤー（吊るし鉤）言いますよね、こう引っ掛けの。これを引っ掛けで、（頭にのせた持ち物を）

取られるのがたくさんおつたそつです。こう歩いておるときには、片手で（荷物を）つかまえておつたら、引っ

かけて、木の上から取られる、取られたわけなんです。今はすつと拓いて、沖縄村と名前もつけて、あれ。

※1 一本道路であつた 近世琉球において、琉球王府が整備した街道（宿場）のことであらわしたものか。国策へ向かう宿次のうち西宿は、読谷山間切喜名から恩納、名護へと海を経由し、本部や今帰仁間切へとつないでいた多幸山近傍や、恩納村山田には街道の名残の石が残つてゐる。

※2 読谷 沖縄本島中部西海岸の地域名。近世には読谷山間切（ヨンタンンザマジリ）。現在の読谷村。

※3 喜名 沖縄本島中部、読谷村の字。まだ。方言でヤマダ。読谷山間切の番所が有つた。

※4 山田 沖縄本島北部、恩納村の字。まだ。方言でヤマダ。恩納村のものとみなに位置する字。

※5 沖縄村 恩納山田にある網元施設（琉球村「りゅうきゆうむら」）を指すと思われる。

〔6〕 その他、盜賊にまつわる話

① 盗人と貧乏者の布団

星宜カメ（明治四十一年生）安慶田

〈方言原語〉

何百年前がやら一わからんてし、うぬ話や。私つた

頬んぢや一話どうやくどう。

あるよ、夫婦ぬ、子うらんしがうたんでい。あんさくどう、うまかい盗人ぬ来、傍んかい入つちょーしが、うまんかい取いがんちやたるはじやしが、ぬーんねーらん。うまぬ傍んかい隠くいてい聞ちよーたんでい。

あんくどう夕飯煮ちゃくどう、入りて食むしえーねーらん。あんすべくどう、

入り一しえーねーんどー、スーーんぢやくどう、どー、あんしえー、あぬ、入り一しえーねーらん、チンチルぬ御道具取いくわ」でいたんでい。チ

チルぬ御道具。

「チンチルぬ御道具んでいしえーやー、ぬーやが

んぢやくどう、芭蕉ぬみーぬ、芭蕉ぬ葉やたんでい、芭蕉ぬ葉。うぬ芭蕉ぬ葉取ていつち、あぬ芭蕉ぬ葉

三角ぐわーしーねーあまんかい物入らりーるばー、あ

んする三角、ジョーダ、ジョーダぬぐどうし三角ぐわー

しげー、うまんかい入らりーるばーてー。あんし

うぬ芭蕉ぬ葉んかい入つていい食だくどうや、あんし

夫婦なー夕飯の一食まーに、夕飯食だくどうなー、ま

た寝りわるやつさいやー。あんすべくどう夕飯食でい

寝んじゆんちさくどう、またうすいしえーねーん。な

んち。

布団どうかぬーねーんしえーやー。昔スーーウードウんでい言るいっさい、布団ぬんかえー。ウードウんでいりいっさい、ウードウ。

「ウードウ、ウードウ出じやしえー」でいち、

「ウードウ出じやしえー、アンマー」んぢやくどうやー、夫ぬ。あん言ぢやくどう、

「ウードーねーらん」んでい言ぢやんでい。

「あんしブーサキ、ブーサキぬウードウ、あいえーさ

にやー」んでい言たんでい。あんし、「うぬブーサキぬウードウんでいしえーぬーやがやー」んぢ、うぬ

盗人が見ちよーたんでい。

ニクブクやたんでい、ニクブク。ニクブクんで、

萬さーによー、萬さーにうんぐどうし編まーにや、か

んし下るちえーまた編でー、下るちえー織いしえー

しえー、うりニクブクやたるばー。てーげー三疊ぐら

いあたんやー、うれー。

ニクブク、ニクブクかんていよ、ブーサキぬウードウ

んでー、ニクブクやたんでい。うれーニクブクかんてい

よ、寝んじゆし見じやーにや、うぬ盗人ー貧乏者助け

やーやーてーるばーてー。うりや親んぢやー話どうや

る、私がーわからんろー。あんすべくどう、うぬー三

日ゆくさくどうやー、うぬ盗人ぬエーキンチユぬ家

からウードウ盗でいよ、マカイーち、マカイーちにウー

ドウ盗どうしち、うまぬ家んじ置かつとーたんでい。

あんしうまぬ家やあらん、

「あい、貧乏者助けみしえーしんめんしえーさやー」

東一ワードウ 布団のこと。貴族は掛布団両方を用い、夜着も使つたら一般は掛布団のみでは敷筵を用いた。

「かみて寝んたんでいどーやー」んでいいみしえー
たん。あんしや、

「うんぐどうしそーどうくまあたんでいどーやー」ん
でいみしえーたん。あとー、
「大昔スーうんねーるんあてーさやー」んでい思ひる
ばーてー。

わかいんなやー、盜人、盜人んでいちえーむん、
名前わかいんなやー、盜人、盜人ぬ持つちよーしでー
るむんぬ。

〈共通語訳〉

何百年前だかはわからないよ、この話は。うちの親
たちが話していたことだから。
あるね、夫婦が、子どもがいない夫婦がいたつて。
すると、その家に盜人が来て、(家の)そばに隠れて
いたけど、その家から盗もうと思つてははずだけ
ど、なにもない。その家のそばに隠れて聞いていたつ
て。そうして夕飯を炊いたら(ご飯)入れて食べる
器というものがいる。それで、
「入れものがないよ、お父さん」と(妻が)いうと、

「さあ、それなら入れものがないなら、チンチルの御
道具を取つてこいよ」と言つたつて。チンチルの御道
具。

『チンチルの御道具』といふものは、なんだ』と(盜
人が)思つたら、芭蕉が植えられているところの、芭
蕉の葉だつたそうだ、芭蕉の葉、その芭蕉の葉を取つ
てきて、あの芭蕉の葉を三角形にしたらそこに物を入

れられるわけ、そうやって三角、漏斗、漏斗のよう
にして三角にしたら、そこに入れられるわけだよ。そ
して、その芭蕉の葉に入れて食べたのでは、そうやつ
て夫婦で夕飯を食べて、夕飯を食べたら、今度は寝な
いといけないんだよね。それで夕飯を食べて寝ようと
したら、今度はかぶるものがない。もう、布団とかな
にもないからね。昔はウードウと言つたかね、布団に
は。ウードウとか言つたか、ウードウ。

「布団、布団を出しなさい」と言つて、

「布団を出しなさい、お母さん」といつたらね、夫が。
そう言つたら、

「布団はない」と答えたつて。

「それならブーサキ、ブーサキの布団、あるだろうが」と
言つたつて。そして、「そのブーサキの布団」という
のはなんだろうなあと、その盜人が見ていたつて。
ニクブクだつたそうだ、ニクブク。ニクブクとい
うのは、藁でね、藁でこんなふうに編んでね、こうして
下ろしてはまた編んで、下ろしては織りしたりして(作
るもので)、それがニクブクだつたわけ。だいたい三
疊ぐらいあつたね、これは。

ニクブク、ニクブクをかぶつてよ、ブーサキの布団
といつたら、ニクブクだつたそうだ。盜人はニクブク
をかぶつて寝るのを見てさ、この盜人は貧乏者を助け
る盜人であつたわけね。これは親たちからの話であつ
て、私では(確かなことは)わからないよ。そうした
ら、それから二、三日あまりしたらね、この盜人が金
持ちの家から布団を盗んでね、お碗二つ、お碗二つに

布団を盗んできて、貧乏な夫婦の家に置かれていたんだって。そしてその家じゃない（別の家では）、「なんと、貧乏者を助けてくださる方もいらっしゃるんだねえ」と。

「ありがたくいただいて寝たんだってよ」と（話者の親が）おっしゃっていた。そして、「そのようなことがあつたところがあつたんだってよ」とおっしゃっていた。あとあと「大昔にはそういうこともあつたんだねえ」と思うわけだよ。

（盗人の名前は）わかるもんかね。盗人、盗人とだけ言っているのに、名前がわかるもんか。盗人は盗人がわかっているものなのに。

五 名工・名人

【一】田場大工

(一) 淋れない櫻・クスケー

① 淋れない櫻・クスケー

金城真良(明治四十年生)古語

方言原話

「鼻ふいっちやい、鼻ひつちやいねー」「クスタッ
クエー」でいさうんでしょ、ね、そうよね。それをね、
田場大工と言つてね、言えば、内地のヒダリグンジロー
というのと同じよね。大工さんの大将。
首里ダスクあたり、あの、三日間、それ研いだらね、
むこうの係はあきれて、

「あんたは仕事はさないで自分の道具ばつかり研ぐか
らね、まあ、別に大工頼むから」と言つてね。

「そうか」と言つて、自分の割つた、うれしくつけ
てね、綱で縛つて水中に入れて、

「今から来る大工のね、「これ開けて見てから仕事をや
りなさい」と言つてごらん、言いなさい」と言つてね。
したら、それ開けて見たらね、
「これ水の中に入れた大工はね、どんでもない大工だ
から、私たちはこっちの仕事はできません」と言つた
らしいんだよ。

「うぬ人にかい、この護佐丸の家は造らしえー」と言つ

てね、言つたらしい。

それがね、それから家に帰るときに、便所いきたくなつて、道のそばのキビ畑のそばに座ついたらね、その、シチニンヨーテーというものが、化け物がね、

来て。シチニンヨーテーと言つてね、うんと歩く化け物がいたらしいね。それが、

「田場大工の魂取つてきよう」と言つたら、その化け物の言つたことが、

「あー、あれがね、クスクックエーと言つたら取れな
いよー」と、うりからまた、

「うんんねー、また渴きらさーによ、水欲さぬーし
みりんち。

「うりがまだそーふいちしーねー取らんんどー」んち。
化け物ぬうれー話すせー聞ちくまーに、家んかい帰
ていんじやーに、

「私がいっべー鼻ふいーねー、クスウチユクエーん
でい音よー」でいち家ぐなーんかいかきて。さー

に、だー、うんんねー化け物ぬんかい習らいてるう
くどう。あんざー渴きつい水欲さぬーしーねーや、

「フイツ、フイツ」くぬ、口鳴らするばーーー。

「フーイみかちわらばーんかい飲まちやいねーさい
しーねー、うんぐどうーしーるんしぇー取らん
ろー」んち。どうとう田場大工や化け物の一取いーさ
んたんで。魂や取いーさんたんで。あんざーに
かい、田場大工、ヒダリグンジロー、ちようど内地ぬ
ヒダリグンジローでしとー大工ぬ話。

東北ビタリグンジロー 左喜五郎(ひだり
じいじぶろう)のことと思われる。江戸時代初期に活躍したといわれる伝説的な名工。柄木真日光真照宮の影刻「眠り猫」などが彼の作と伝わる。

後記

前田城 第一泊地 第二泊地

氏の王族において琉球国王が居住する城
であり、琉球国の行政と文化の中心でも
あった。一九二九(明治十五)年、日本

政府による琉球処分に伴つて前田城が明
け渡されて以降、王の住居と行政政務とし
ての両方の機能を失い、一九四五(昭和
二十)年、沖繩戦での被災を受け、
数々の国宝を含む多くの建物が破
壊された。戦後、琉球大学のキャンパス
が置かれ、一九七七(昭和五十二)年、
琉球大学が西原町にキャンパスの移設を
はじめたのちは跡跡の復元が図られ、現
在は国際平和公園として県内外の人氣

の観光地のひとつとなつてゐる。

東北護佐丸 中城波利種佐丸盛君(?)

一四五五年。山田城、唐善城の城主を

経て、一四四〇年頃に中城波を築城して

移り住んだ。娘は尚氏に與入れ、護佐

丸にとつて孫にあたる王女、百一賀播を

生す。王家の親族として勢威を誇るが、

貿易有利に謀叛の罪をさせられて自殺す
るお隣の周村なるによより取り上げられ

忠臣として名高い。

〔共通語訳〕

くしやみをしたらね、くしやみをしたときに「クス タックエー」と言うでしょう、ね、そうよね。それをね、田場大工といつてね、言わば、内地の左甚五郎というのと同じよね。大工さん。大工さんの大将。

首里城あたり（で田場大工が仕事をしていたときのこと）、あの、三日間それ（大工の道具）研いでいたら、むこうの係はあきれて、

「あんたは仕事はしないで自分の道具ばかり研ぐから」別で大工を頼むから」と言ってね。（田場大工は）「どうか」と言って、自分が割つた、それ（材木）をくつつけたね。繩で縛って水の中に入れて、「今から来る大工にね、「これを開けて見てから仕事やりなさい」と言つてごらん、そう言いなさい」と言つてね。すると、（代わりの大工が来て）、その材木を縛つたものを開けて見たらね、「これを水の中に入れた大工はね、とんでもない大工だから、私ではこっちの仕事はできません」と言つたらしいんだよ。

「その人に、この護佐丸の家を造らせなさい」と言つたらしい。

田場大工がね、それから家に帰るときに、用を足し

なくなつて、道のそばのさとうきび畑のそばに座つて、いたらね、その、シチニンヨーテーというものが、化け物がね、来て。シチニンヨーテーと言つてね、うんと暴れまわっている化け物がいたらしいね。それが、「田場大工の魂を取つてこよう」と言つたら、その化

け物の言つたことが、

「ああ、あいつがね、クスクックエーと言つたら（魂は）取れないよ」と。それからまた、「

そのときには、今度は喉を渴かせてね、水を欲しがるようにしろ」と。

「そいつがまた口笛を吹いたら（魂を）取れないよ」と。化け物らがそのことを話するのを聞きこんで、家に帰つて、

「私がすごくくしやみをしたら、クスウチユクエーと言つてよ」と家族中に話して。そうして、ほら、そのときには（魂を取られない方法は）化け物から習つているから。それで喉が渴いて水が欲しくなつたときにはね、

「フイツ、フイツ」この、口笛を鳴らすわけだよ。

「フイツと鳴らして水に息をふきかけて子どもに水を飲ませたりなんなりすれば、そのようにしさえすれば（魂を）取られないよ」と。とうとう、田場大工（の魂）を化け物は取ることができなかつたそうだ。魂を取ることはできなかつたそうだ。そんなことで田場大工、左甚五郎、内地の左甚五郎と同じような大工の話。

② 溝れない櫻

伊佐安弘（明治四十一年生）山里

雇つてきた大工さん（田場大工）を、仕事も全然しないで、もう、研ぎとおしだつたんだ、道具ばかり。それであの、

「ぬーんちうれー、あんし道具んちやー研じ、仕事ー」

※1 田場大工 脱利きの大工。軽じて、下まな大工、素人大工を皮肉る場合にも使う。具志川闇切の田場出身の名工に由来する。

さんがやー（どうして）この人は、あんなに道具ばかり研いで、仕事はしないのかな」と、後は考えたらしいんだ。

「いったーぬーんち仕事さん、むる道具びけー研じゅが（んちやくどう）（おまえたちはどうして仕事はないで、いつも道具ばかり研いでいるのか）と言ったら、

「えー、くんぐどうやいびーさー（ああ、このようなことでござりますよ）と言つて）、木、木ね、木取やーい（木切れをとつて）、自分の膝にこう置いて、やって、この離れた木をこうくつけて、水の中に入れたらしいんだよ。で、

「どー（さあ）、出してごらんなさい」って、この木を出して、

「どー、開きてごらんなさい」と言つた。ただこんなに削つた木が、中に水が入つてなかつたという話を聞かされたんだよ。

この大工の名前は、田場大工（たばだいこう）だつただろうと思う。とにかく、こういう偉い大工もいたらしいんだよ、やっぱりね。

③ 溢れない楔

桑江明盛（明治四十五年生）中の町

荒い、なんにもできないような大工なんですが、これがきみつのところを非常に心に込めて、いざという時はもうこうこうやるという。木を削つて二つ付けてくびつてね。水の中につけても水が通つてなかつたくびつてね。水の中につけても水が通つてなかつた

と。こういうものはね、ようするに理屈はね、ガラスをね、水ぬつてテーブルの上についたら、動かんでしょ。これと同じ理屈です。こう付いたらね、空気が密着してしまつてさ、水も入らんという。立派にもう、どつから見てももう囁みもないで、立派にやつておるという。これが大工のなんという。

そうつて、昔人の大工の棟梁さんが言うもんはですね、その話が出たもんですが、大工は道具を立派にしらして持つておるもんが、いい大工であつて、その棟梁が見たら、

「これはどのくらいの大工の力がある」といつて、よう、こう話しそつた、道具見て。で、

「あんたたちもね、いついつは仕事に行くという時は、四、五日前から道具は、すぐいつでもすぐできるようにな。仕事言いつけられてからね、この道具取り出したらね、これは、大工はでない」という言い伝えがありますよ。非常にやられてしまふ、叱られましたよ。

田場大工（たばだいこう）で、うちたちもね、大工習いに行つて三年間はね、三年間は一緒にお茶も飲まんだつたですよ、飲まない。棟梁の前にはみんなと一緒にお茶は飲まない。いつも、販賣する時は仕方ないから食べんだけど、お茶は飲まないでね、棟梁たちのみんなが、年上の人達の道具を研ぐんだよ。砥石（ひじいし）前にやつてね、道具研ぎ。そして、もう、自分たちで棟梁とみんなと一緒にソーリつてお茶飲みよつたらね、「懸（けん）を持つてこい」といつてね、ハンマーで割つてから、「これ研ぎなさい」といつて、なんとも言わない。これは聞さ。

お茶飲むといつての間。なにも欠けてない聲をね、

「持つてきなさい」と言つて、

「君のもの持つてきなさい」と言つて、持つてきいたらハンマーで先を折るから、もう使えんでしょう。研ぎに行かんといかん。その意味ですね。もう、そうだね、もうしようちゅう。そのくらいせんと、大工はできな

いという意味ですね。

④ 濡れない櫻

島袋盛保(明治二十七年生)知花

それ、ちょっとしか知らないですよ。あの人(田場大工)は、家を建てるときに櫻といいうものを入れるでしょ。あれ、鉛で削つて、たばつて(しばつて)池に入れたら、真ん中に一滴の水も入つていなかつたらいいですよ。

(2) その他、田場大工にまつわる話

① 田場大工と名護親方

金城五郎(明治三十五年生)松本

名護の程順則つていらつしやるでしょ。昔の政治家、えー、文学者どうやがやー。うぬ人ぬ別荘造りくみそーちよー。まじえーでやんどー、うぬ田場大工んでいしぇー。うれー田場んでいる名どうやら、貝志川

田場ん人よーあらんよー。

あんさーになー、うりやたんだい。むるふざみーらんでいやー、うぬ家や。あんさくどうなー、行じ。

「くぬ田場大工こー、くれーでいきらん」でいちそーみしえーたんでいー。昔えー七日に一回なーや行じ、大工ぬちやー呼でいでーらりーたんでいりよー。

「なー、ふぎみーらん」でいち、うぬまぎーや、うま

ぬ程順則さのー、

「なー、くれー、田場や、かんしえーあらん」でいち。あんさぐどう、なーうぬ家ぬトウジュマイスピぬ日や、うぬ木ぬ組みやーなー酒ぐわーうさがやーによ手踊いたつちんじとうらしえーくどう、あんしんしよー、だー、床口んたつくでーさー、うぬ木ん、床口。あんさー、くぬうでーよー、なー名護ぬ親方さまや、

「したい、田場。とーなー、ふぎみーたん。とーなー、いつたーでーでーやらりーんやー、止みてーてーやー、くりうてーむるさんみんしとうらすぐどうやー。なー、ふぎみーたん。なー、ありがとう」んちよー、うぬ人ぬけーぬ御礼しみしえーしぇー、うんにんびかーんでい、大工ぬけー。

ちゅーー大工でいどうやたんでいどうよー。やな

しーるばーあらんでいんどー。ふぎねーらんなやーに、しかどう、名護ぬ親方やうりやんでい、じこー、これに「かんしえーあらん」んち、うりそーみしえー

*1名護 沖縄本島北部の地名。な。

方言でナグ。現在の名護市の一部で旧名

瀬村の範囲。近世には名護町。

*2程順則 (一六六三—一七三四) 三司官を勤めた琉球國の士庶。名護親方、名護家人とも呼ばれる久米村朝氏七世に渡り、歴代につづめる。慶賀役として江戸上りし、滞在中に新井白石と会見する一七三八年に名護間の統治領となる。

その学才は伝説化され、數々の俗話が伝えられる。

*3真志川 沖縄本島中部の地域名。間切名。田原志川用、現在のうるま市の一部。ぐしかわ。方言でタシチャヤ。

*4田場 沖縄本島中部、うるま市の字。たば。方言でターバ。田原志川市域。

*5ウジヨマイスピ トウジマユンは完成すること。スピも完成、零を表す語(首尾)。ここでは、完成度を指している。

*6床口 床框(ところがまち)。床の間の床板や床柵の総称。

坐すだい よくやつたの意。

坐ゆふき 穴のこと。

「ふぎぬねーらん。人んちんでー、家やていんふぎぬねーらん。家でいえーねーんぐどうや、くりうてーふぎぬみーたん」ちょー。うにうてい大工ぬぢやー、むるうえーきすかていでーらつとーたんでー、錢くでい、くいみそーたんでー。

あんしる、うりやんでいんどー、田場大工んでい言ーんでいんでいどー。どうく上手なでー。うぬ踊り立つちやーに、うりがしぐ酒ぐわーうさがやーにたつくでーんてー、床口。なー、うつさぬ錢ぬん取いふあんぢやー、さんんーえーやあてーるばーあらんがやー、根性出じとーるばー。たつくだくどうどうなー、ふーぎぬみーでー。

「したい、田場」んち、うりうでーしかどうふみらりやーに。

えー、しーくていんじやんでいーんでいんどー。ういーたるふーなーつし。実際やいーでーねーんてー、大工んでいしん。

うつさぬや、うつさぬ大工ぬぢやーや、一週間に一回なーやぐさんちんちよー、うぬ、ついでーむぬあたんでーが、うれー三ヶ月分ひつどうみらつたくと、皆なーくさくさそーしまーしょー、くぬぢやー。あんやひがなー、うぬ、大工こーたらん、んちや、なー皆くじらりーくどう、あとー酒ぐわーうさがどーるふーなーさー、しーくどーるふーなーさーによー、うぬ木なんつくだくどうよー、うにうているうりやんでいんどー、田場大工んでい。うぬ由来記ぬあるばー。

名護の程順則つていらつしやるでしょ、昔の政治家、いや、文学者などのかなあ。その方が別荘をお造りになつてね。たとえばの話だよ、この田場大工というのは。この人は田場という名前なんだよ、具志川田場の人ではないよ。

そうしてね、こうだつたつてまつたくあらがなかつたそだ。その(田場大工が造つた)家は、すると(程順則が)行つて、

「この田場大工は、これはなつてない」とおっしゃつていたんだつてね。昔は七日ごとに一回行つて、大工たちを呼んでご馳走していただつてね。

「もう、あらがまつたくない」と、その偉い方は、そ

の家の程順則さんは、

「もう、こいつは、田場は、こうではない」と。そうしたら、この家の落成祝いの日は、(田場大工が)その木を抱きながらお酒を召しあがつてね、手踊りさせたら、そうやつてね、ほら、床がまちに叩きこんでいるわけ、その木も、床がまちに。それで、その時に、もう名護の親方さまはね、

「でかした、田場。さあ、穴があいた。よし、おまえたちへのご馳走なんかもね、しないでおいたものはこれですべて算出して払うからね。もう、穴があいた。もう、ありがとう」と言って、この人(田場大工)にむかってお辞儀をなされたのは、このときだけであつたそだ。(名護親方ほどの人が)大工に。

筆一ぐさんちん 未詳。国立国語研究所『沖縄語辞典』(一九八三年)によれば、「サンチー」は園主が神社へ参詣する時の語として掲載があり、ここでは名護親方が一連番に「西都主の建築現場に来た」ということを書いたもの

やつたわけではないんだつてよ。あらがなくて、きち

んと（していたので）、名護の親方はそろなんだつて、たいへん、田場大工に「こうではない」と、そうお思になつて、いたそだ。もう、穴が開いたのでね、「欠点のない人間なんてものは（いないとうに）、家であつても欠点のない家というものはないでね、これで穴が開いた」といつてね。そのときで大工の人たち、みんな金持ちになるくらいもてなされて、いたそだ。お金もくれて、くさつて、いたそだ。

それで、そういうことだつたつてよ、田場大工と言うんだつていうことだよ。あまりにも上手で、この、踊りに立つて、田場が酒をお飲みになつて、叩きこんだんだと、床がまちに。もう、たくさんのお金も取り損ねてね、痴癡の一つもあつたわけじゃないかねえ、腹が立つて、いたわけ。（木を）叩きこんだもんだから、穴が開いて、

「でかした、田場」と、このこととしつかりほめられて、ああ、よろけてみたといふことなんだよ。酔つたふりして、実際は酔つてないんだよ、大工といふものも、たくさんね、たくさんの大工の人たちは、一週間に一回おもてなしといつて、ご馳走があつたそだが、それを三ヶ月分止められたので、皆もうくさくさしたりしているからね、この人たちは。そうだけど、田場は立場がなく、もう皆に不平を言われるので、しまいには酒を飲んだふりをして、よろけているふりをして、その木を叩きこんだので、そのときからなんだつてよ（名工や、逆に下手な大工のことを）田場大工というの。その由来記があるわけ。

(2) 田場大工

島袋シズ（明治四十一年生）池原
だい、どんな大工さんであるかわからないけれど
なんでもやるときと、あんまりできない、
「田場大工やさ（田場大工だね）」といふでしょ。大
工があんまり（できない人に）、田場大工、簡単に言つ
たけんど。

その田場大工（たばむぎ）といふのは、なんでもよくできる人が田場大工（たばむぎ）。なんでもよくできていたつて。その田場大工（たばむぎ）といふのは、なんでもよくできる人があつたつて。田場大工（たばむぎ）といふのは一番えらい大工さんだつたつて。

私、なんにもわからないで「田場大工」と言われていたね」と思つて、いたわけ。そうじやないつて。やっぱしその、田場大工（たばむぎ）といふのは、なんでもよくできる人であつたつて。田場大工（たばむぎ）といふのは一番えらい大工さんだつたつて。

いやーねーんなならん。田場大工（たばむぎ）どうやる（おまえはなにもできない、まつたく田場大工だねえ）と言つたら、おじいが、

「田場大工（たばむぎ）つて、一番上手（たばむぎ）に田場大工（たばむぎ）といふのに、あんた対戦だよ」と言うさーねー。だから、これやっぱし田場大工（たばむぎ）と云うのは（大工仕事が上手な人）。

[2] その他の名工・名人

① 大城チヨーバーと妻の知恵

吉里清秀（明治三十八年生）照屋

方言原話

大城チヨーバーな。うれしめがんでいれ
る、かんなど一るばー。
男ぬ考一とうな、女ぬ考一やろー、この、と一や
ぬ考一や、ちゅーちゃんなかが物考一すしょーな、
あんしおーな、今度一ありよー、くぬ、女ぬ考一
や上やんでいしが、うぬ大城チヨーバーの一ありやみ
しえーてーるばー。
家かいめんそーちでーからーなー、ちやー手かみ
てー寝んじ寝んじしみしえーたんでい。あんさく
とー、さくとー、妻ぬな、
「ぬーが、うんじょー、先頃んしえー、むるいーあん
べーあらんねーし、くぬ手かみてー寝んじ寝んじー
しーが、ぬーぐどうやがーんちな、言ちさくとー、
今度ーうりやんでいるばー。

石昔えー石さーにな、ぬーんくいーん作いてーる
ばーてー。あぬー、トー二ふーじーなむぬん。今ー七
メントつし簡単やしがな、昔えー離さてーるばー。あ
んさーにな、水ん漏らんぐし作りんりくるとんかい
なーなたくどうな、なー、石んかいん鉛使かりーみん
でい言ーるあたいな、立派に仕事ーすが、水えーか
からんでいるばー。水えーかからんどうな、

「くれーちゃーはれーしむがやー」んちさくとー、妻
ぬるー、

「うれーどうーやしーぐわーどうやる。あんすかばー
きなーまでい立派に仕事しえーらーな、うぬ石とー石
とーな、しり合ーちーねーなー、水えー止までい瀬
らんるー」んでいち、うり、妻ぬ言ちやくどうな、

「あはー、今ねーわかたん」でいやーに、翌日しぐ、
うぬ仕事場んかいめんそーやーにな、うぬ立派造てー
るうぬ石よ、うれー、立派石、しり合ーちさくとー
なー、水えー瀬らんなどーんでいるばー。あんさく
とー、「くれーいーあんべー」んでいやーに。なー、
うんにんからーゆつくりしょー、くぬ家んかい帰てい
めんそーちんなー、ありし。なー、酒ぐわーんで一飲
だいし、いつべーゆつくりそーみしえーるばーてー。
あんさくとー、

「ぬーが、うんじょー、うれー、仕事ーちゃぬふーじー
やがーんちやくとーな、妻えーくぬパンジヨーガニ取
てー、ちーかじみてーたんでいるばー。あんさくとー
なー、今度ーありやんでい。

「パンジヨーガネー仕事んかい、ぬー、たいした、入用
なむのーあらんなー。イチヌフリさいあれーちゃんと
しん仕事ーしーるする」んち言みそーちさくとーな
「あはあ、くれー見込みーねーらぬーやさやー」でい
ち、パンジヨーガネー知らんふーなーさーにけー出
じやち、うりそーるばーてー。

あんさーさくとー、仕事んかいめんしえーねー
なー、パンジヨーガネどー入用やくどう、

案ーとーやぬ考一や 天詳。後続の
「せゅーちゃんなかが物考一すしょーな
う」とつさに物を考えるのは」と同様の意
味だ。

案2 大城チヨーバー 未詳。大里村にい
た大工た。

案3 瀬ー瀬の鉢入れ。丸木や石を多く
りぬいて作る細長い桶のいれもの。

案4 木工。

案5 パンジヨーガニ 曲尺（かねじや
竹を割って墨をつけて使うものと説者は
説明している。手製の竹尺のようなもの

案6 日チヌフリ 未詳。フリは筆（筆）か。
竹を割って墨をつけて使うものと説者は
説明している。手製の竹尺のようなもの

「イチヌフラさい、フリさい、うりあれー仕事ーどうー」

やつさんーでい言みそーちやくどーなー、

「イチヌフリンでいしえーぬーやがーんでい。竹切

やーに、うりふいじやーに、くま割いぐわーつし墨ち

きてい、うりすしやるばーてー、イチヌフリンでい

しえー。あんさーい、

「うりさいあれー不自由ねーん」でいやーに、パン

ジョーガニン取みそーやーに、あんさーに仕事かい

ちやーめんしえーたんでい。

あんさくどうなー、男ぬ考ーやか、女ぬ考ーや上ーや

んちょーるばー。うぬ言葉ーうりからる出じとーん

どー。

〔共通語訳〕

大城チヨーバーね。それはなにかというだよ、こ
うなつていてるわけ。

男の考えとね、女の考えはだよ、この、とつさに物
を考えるのは、女が上なんだつて。

それでは、今度はあればよ、この、女の考えは上だ
ということだけ、その大城チヨーバーの話はこんな
ふうであられたわけ。

家に帰つてからとくもの、いつも手を頭
の上にさげて寝ておられたつて。そういう様子なの
で、それで、妻がね、

「なあに、あなた、近頃といえば、いつも調子が悪い
ようすで、この手をあげて頭抱えて寝たりしているけ
ど、どういうことなの」といつてね、尋ねたら、今度

はこういうことなわけ。

石、昔は石でね、なんでも作つてたわけだよ。あ
のう、豚の餌入れのようなものも。今はセメントで簡
単だけだね、昔はむずかしかったわけ。それで、水
も漏らないように作りなさいということになつたので
ね、もう、石にも鉢を使えるのかといふくらいに、立
派に仕事はするんだが、水がたまらないわけ。水をた
められないでのね。

「これはどうしたらしいのかなあ」と困っていたら、
妻がだよ。

「それは簡単なことじやないの。あれほどまで立派に
仕事をしてたらね、その石と石とをね、すり合わせ
すれば、水は止まつて漏らないよ」といつて、それ
妻が言つたのでね、

「ははあ、今わかつた」といつて、翌日すぐ、その仕
事場にいらつしゃつてね、その立派に作つてあるその
石をね、それをちゃんとすり合わせたら、水は漏らな
くなつたというわけ。そうしたら、『これはいいあん
ぱい』といつて。もう、そのときからゆきりなさつ
てね、この家に帰つてこられてもね、悩まなくなつて。
もう、酒などを飲んだりして、たいそうゆつたりなさつ
ておられたそうだ。そうしたら、

「なんです、あなた、これは、仕事はどんな具合な」
と言つて、妻はこの曲尺を取つて、大事にしまつてい
たというわけ。そうしたら、今度はこういうことだつ
て。

「曲尺は仕事には、なにも、たいして必要なものでは



ないよ。イチヌフリさえあればどのようにして仕事はできるものだ」とおしゃったので、「あーあ、これは見込みのない人だねえ」と、曲尺を知らんふりして出してきて、そうしていただそうだ。

そうやついたら、仕事に行かれるときには曲尺が必要だから、

「イチヌフリさえ、フリさえ、それがあれば仕事はたやすい」とおしゃったのでね、

「イチヌフリというのはなんなの」と、竹を切ってそれを削いで、こまかく削つて墨をつけて、そのように用いるものであるわけだよ、イチヌフリというものは。

それで、「これさえあれば不自由ない」といつて、バンジョーが二もお取りになつて、そして仕事へいつも行かれたそうだ。

だからね、男の考え方より、女の考えは上だといわれているわけ。その言葉はそれから出ているんだよ。

② そろばん名人ハンタイチバルー

島袋貞栄（明治四十一年生）知花

〔方言原話〕

父祖ぬ兄弟でいるやる。またぶーじーがやがやー。ファンタイチバルーでい。ファンタイチバルーでーさ。ハントナム。とにかく、うぬ、なー、そろばん上手。

わしたそろばんぬ

鳴い音ぬ聞かば

驚ぬ飛び鳥ぬ 飛び立ちゆるぐどうさみ

歌がありますよ。ハンタイチバルーといつて。
わたしのスルバンぬ 嘴の音ぬ聞かば

ワシぬ飛び鳥ぬ 飛び立ちゆるぐどうさに
バタバタ鳴いんてい。

〔共通語訳〕

御先祖の兄弟なんだという。あるいはそんなようなものだったかな。ファンタイチバルーという。ファン

タイチバルーといふんだよ。ハンタの。とにかく、そのもう、算盤上手だ。

私の算盤が 嘴の音を聞けば

鶯が、飛ぶ鳥が 飛び立つがごとくじやないか

と歌ありますよ。ハンタイチバルーといつて。

私の算盤が

鳴る音を聞けば

（算盤のはじく音が）ばたばた鳴るつて。

③ 伊集のガマクぐわーと奥間安里

金城貞良（明治四十年生）古瀬

〔方言原話〕

中城伊集ぐわーといって、中城伊集ぬガマクぐわーんでいし、ありてー、親や魚がらちよてい 奥間通つい

※4 沖縄県 琉球列島開拓局出身。遠藤庄治「中城村の民話」（一九九九年、中城村教育委員会発行）によれば、登力の武芸者だったという伝説が複数伝わるが、伊集のガマクぐわーと聞かる伝承は見ら

せーハンタ 崖、崖のかい。こじで崖壁
同名か。

率の中城伊集ぐわー 中城村伊集出身の伝説的な美女。本名は与儀ナビーだが、あまりにもガマク（腹）が細かつたため、ガマクウカ（とじめながついた）達藤庄治「中城村の民話」（一九九九年、中城村教育委員会発行）によると、踊りの名人で、幽霊の大人として愛い仲になつたといふ説が伝わつてしまふ。

「めんそーちー」
 「来えーさーやー」、挨拶おーするばーやしえーや。う
 り、どうしないるばーやしえーや、あんそーし。あん
 さーなかい、くぬ伊集ぬガマクぐわーが
 「だー、うんじゅなーはたー地頭代ぬ祝儀えーちゃー
 ししみしそーたがー」でい言ちやくどう、男んかいろー、
 「私つたーはたー地頭代ぬ祝儀えーかんしすんどー
 やー、踊えーかんしすんどーやー」ち習ち、
 「私つたー、また、はたー、かんしるさびーる」んち、
 ハルぬ側うとーい二人踊てーるぐーとーん。踊たく
 とー、ある厭い者のー、
 「ぐーなーい舞ーいたん」でい。かんし評判く
 くどう、今度ー王様ぬ耳んかい入やーに、二人罰金す
 るくどうんかんち調びたくどう、調びたくどう、
 「私つたーやぐーなーいで舞ーたるばーやあらん。地頭
 ぬ初儀ねーかんし踊いやすんどー、また、私つたーは
 たーまたかんしすんどーんちや、かんし手合しそーる
 ばーどうやる。ぬー、ぐーなーいで舞ーたるばーやあら
 ん」でい。うにーから、
 「えー、あんどうやていー」んち、今度ー政府から
 補美ぬあたんでい。

(共通語訳)

中城伊集ぐわーといつて、中城伊集ぐわーのガマク
 ぐわーというのは、あれだよ、

親を心配させて 奥間に通つて

という歌もあるよね。だけど、ちょうど奥間の、奥間

安里の畠とその伊集のガマクーぐわーの家の畠とは畠
 が隣に並んでいて。もう、畠、畠が並びなものだから、
 「いらっしゃいましたか」
 「来たんだよ」と、挨拶はするわけだよね。そう、友
 達になるわけだからね そうやつて。そうするうちに、
 この伊集のガマクぐわーが、

「ねえ、みんなのところは地頭代のお祝いはどのよ
 うになさったんですか」と聞いたたら、男にだよ、
 「私たちのところは地頭代のお祝いはこうやつてする
 んだよ、踊りはこうやつてするんだよ」と教えて、

「私たちのところは、また、こうやるんです」と、畠
 のそばで二人踊っていたようなんだね。踊つたら、あ
 る(「一人を)嫌つている人が、

「一緒になつて踊つていた」と(告げ口をした)。こう
 して噂が立つたので、今度は王様の耳に入つて、二人
 に罰金を課すからと調べたら、

「私たちとは一緒になつて踊つたわけではない。地頭の
 お祝いにはこうやつて踊りはするよ、また、私たちの
 ところはまたこのようにするよと、こうして手合わせ
 をしていたにすぎない。なに、一緒になつて踊つたわ
 けではない」と。それから、

「ああ、そうだったのか」と、今度は政府から褒美が
 あつたんだつて。

(4) 踊り名人アザマカナ一

喜屋武ヨシ（大正十年生）久保田

あんまり歌上手なもんだから、またこつちの、比嘉の人に三味線上手がいて、モーアシビ歌をしたもんだから、この女人は歌の上手で遊びが好きなもんだから、久場のほうから通つてきて、こつちで、比嘉のとところで遊んで。部落じやないから、山端で遊んでいるんだから。そんで嫁いできたという話もあるけど。比嘉の人と結婚している。今でも元気である、おばあちゃんは。

このひとは、メーアザマぬ、あれは、名前はなにかね、カナー。あの話はきいた。歌上手で、踊り上手である。（この人の苗字は）アジャマ。

率1比嘉 沖縄本島中部、北中城村の字。
ひが。方言でヒジャ。

※2モーアシビ 若い男女が夜、野原に出で、歌や三味線、踊りなどを楽しむこと。

※3久場 沖縄本島中部、中城村の字。
くば。方言でクバ。※4メーアザマ 出身の家が、嫁ぎ先の
屋号と思われる。

[凡例]

| | | | |
|----------|---------|---------|-----|
| ① 話型タイトル | 話者名(地域) | 〈ページ番号〉 | ページ |
|----------|---------|---------|-----|

一 僧

[T] 北谷長老

(1) 北谷長老の事績(モチーフ複合)

- ① 繁踏ます・不思議な力・姉細攻め・赤犬子との出会い

島袋次郎(知花) 〈T034A04〉 9

- ② 十五夜の餅・繩踏ます・豆腐の禁・春暮り方・唐の寺の火消

島袋吉盛(南端源) 〈T220A01〉 13

(2) 唐の寺の火消し

- ① 唐の寺の火消し

山内盛福(南端源) 〈T129A05〉 15

(3) 十五夜のまんじゅう

- ① 十五夜のまんじゅう

山内盛福(南端源) 〈T245A10〉 15

(4) 肉を食べる知恵

- ① 肉を食べる知恵

比嘉弘(三内) 〈T25A11〉 16

(5) 北谷長老と黒金座主

- ① 黒金座主退治

島袋吉盛(南端源) 〈T003A09〉 16

(6) その他、北谷長老にまつわる話

- ① 鳥羽祭

島袋次郎(知花) 〈T129A04-02〉 18

[N] 僧 補遺

- ① 良井和箇

島袋次郎(知花) 〈T033A13〉 18

[T] 木田大時

| | | | |
|---------|-----------|-----------|----------|
| ① 箱の中の鼠 | 西平マツ(久保田) | 〈T248A04〉 | 20 |
|---------|-----------|-----------|----------|

[N] その他の博識・学者

| | | | |
|--------------|----------|-----------|----------|
| ① ヤアムジウ医者 | 新垣安平(室川) | 〈T231B01〉 | 21 |
| ② 伊波文季子と三十六姓 | 島袋次郎(知花) | 〈T047B14〉 | 22 |

[N] 博識・学者 捷道

| | | | |
|-------|----------|-----------|----------|
| ① 墓碑口 | 島袋次郎(知花) | 〈T033B10〉 | 23 |
|-------|----------|-----------|----------|

[T] モーイ親方

| | | | |
|--------------------|-----------|-----------|----------|
| ① モーイ親方の事績(モチーフ複合) | 西平マツ(久保田) | 〈T217A06〉 | 24 |
| ② 床下勉強・墓の恩・難題・一日殿様 | 島袋吉シ(北端) | 〈T004B13〉 | 32 |

| | | | |
|-----------------|------------|-----------|----------|
| ③ 書き損じ・夜勉強・難題 | 佐渡山口セイ(城前) | 〈T190A07〉 | 36 |
| ④ 下駄と草履・床下勉強・難題 | 久場カメ(廣田) | 〈T119A04〉 | 39 |

| | | | |
|--------------------|-----------|-----------|----------|
| ⑤ 一吹き煙草・床下勉強・難題 | 屋宣ハル(安藤田) | 〈T238A12〉 | 40 |
| ⑥ 立小便・難題・一日殿様・立ち合ひ | 瑞應院好子(城前) | 〈T192A14〉 | 42 |

| | | | |
|------------------------|----------|-----------|----------|
| ⑦ 掛けた縁・龜と門・手の中の鳥・チニーカー | 金澤貞良(古瀬) | 〈T078B01〉 | 46 |
|------------------------|----------|-----------|----------|

| | | | | | | | |
|--|---------------|------------|----|----------------|---------------|-------------|----|
| (8) 床下勉強・一吹き煙草・マチシのH・許嫁と鷦・掛けた縁・難題・一田殿様 | 島袋吉盛(南端庭) | T246A04 | 49 | (8) 床下勉強 | 町田宗勇(中の町) | T214A15(01) | 68 |
| (9) 難題・床下勉強・マチシのH | 稻嶺シズ(山里) | T168A16 | 52 | (5) 借りた本 | 普久原幸(泡瀬) | T071A20 | 68 |
| (10) 下駄と草履・難題・一田殿様・根はいじか・一吹き煙草 | 新藤カヤム(丘の坂) | T095A16 | 54 | (1) 借りた本 | 屋宜ハル(安慶田) | T238A14 | 69 |
| (11) 下駄と草履・床下勉強・難題・一田殿様 | 新屋川ヒコ(越米) | T174A15-02 | 56 | (6) 書き損じ | 伊佐努弘(三郎) | T241A23 | 71 |
| (12) 下駄と草履・難題・一田殿様・立い合ひ | 新藤カヤム(丘の坂) | T212A04 | 58 | (1) 書き損じ・夜勉強 | 湧田トマ(セッターラ) | T135A06(02) | 70 |
| (13) 床下勉強・絵文破り・立い合ひ | 高江原宗保(セッターラ) | T133A06-01 | 59 | (2) 書き損じ | 吉田(高砂) タケ(知花) | T029A20 | 71 |
| (2) メチシのH | 久場政三(園田) | T026B13 | 59 | (3) 書き損じ | 吉田(高砂) タケ(知花) | T071A19 | 71 |
| (1) 夜勉強・メチシのH | 神里マカト(安慶田) | T239A07 | 59 | (4) 下駄と草履 | 普久原幸(泡瀬) | T135A06(01) | 73 |
| (2) メチシのH | 普久原ウシ(嘉間良) | T236A05 | 61 | (5) 下駄と草履 | 屋宜ハル(安慶田) | T238A15 | 73 |
| (3) 優れもの | 普久原カヤム(安慶田) | T144A05 | 63 | (6) 下駄と草履 | 湧田トマ(セッターラ) | T110A28 | 74 |
| (1) 優れもの | 宮城次郎(園田) | T232A09 | 63 | (7) 下駄と草履 | 佐久平代(室) | T169A18 | 74 |
| (2) 優れもの | 下駄と草履・夜勉強・一番科 | T170A20 | 63 | (8) 下駄と草履 | 神里マカト(安慶田) | T110A29 | 74 |
| (3) 草履と下駄・床下勉強・一番科 | 高橋シヅ(胡屋) | T170A20 | 63 | (9) 爰と門 | 如花ツル(嘉間良) | T199A11-03 | 75 |
| (4) 草履と下駄・床下勉強・一番科 | 佐久本トミ(泡瀬) | T081A14 | 64 | (1) 爰と門・母の御願好き | 町田宗勇(中の町) | T214A15(02) | 75 |
| (5) 優れもの | 与那瀬松栄(光透) | T1003A10 | 65 | (2) 爰と門・母の御願好き | 西平マツ(久保田) | T248B21 | 76 |
| (4) 床下勉強 | 新崎カヤム(中川辰) | T212A02 | 67 | (3) 母の御願好き | 稻嶺シズ(山里) | T168A18 | 76 |
| (1) 床下勉強 | 当真つる(泡瀬) | T110A25 | 67 | (4) 母の御願好き | 久場政三(園田) | T026B14 | 76 |
| (2) 床下勉強 | 鳥袋スマ(越米) | T243A13 | 67 | (5) 母の御願好き | 伊佐努弘(三郎) | T241A25 | 79 |
| (3) 床下勉強 | 太田俊雄(与儀) | T085A09 | 68 | (6) 母の御願好き | 安次彌ツル(嘉間良) | T199A10-01 | 79 |
| (4) 床下勉強 | 知念真章(胡屋) | T116A01-03 | 68 | (7) 母の御願好き | 知念善助(古瀬) | T076B01 | 80 |
| (5) 床下勉強 | 喜友名静(園田) | T127A12 | 68 | (8) 母の御願好き | 屋宜ハル(安慶田) | T238A13 | 81 |
| (6) 床下勉強 | 一吹き煙草 | 普久原幸(泡瀬) | 82 | (9) 母の御願好き | 神里マカト(安慶田) | T239A06 | 81 |
| (7) 床下勉強 | 一吹き煙草 | 普久原幸(泡瀬) | 82 | (10) 一吹き煙草 | 比嘉よしこ(諸見里) | T122A09 | 82 |

| | | | | | | | | | | | |
|---|-----------------|------------------|--------------|-------|----|------|------------|-------------------|--------------|-------|-----|
| ⑥ | 一吹き煙草・下駄と草履 | 金城初子 (セントアーティスト) | 『T249A07』 | | 82 | ③ | 立ち小便 | 伊佐安弘 (三里) | 『T241A21』 | | 101 |
| ⑦ | 一吹き煙草 | 知花ツル (嘉間良) | 『T199A11-02』 | | 83 | ④ | 立ち小便 | 知花ツル (嘉間良) | 『T199A12』 | | 102 |
| ⑧ | 夜勉強・一吹き煙草 | 佐久田千代 (園三) | 『T230A02-01』 | | 83 | ⑤ | 立ち小便 | 神里マカト (安慶田) | 『T239A08』 | | 103 |
| ⑨ | 一吹き煙草 | 知念真章 (胡蝶) | 『T116A01-02』 | | 84 | ⑥ | 立ち小便 | 屋宣ハル (安慶田) | 『T238A16』 | | 104 |
| ⑩ | 一吹き煙草 | 桑江朝盛 (中の町) | 『T213B03』 | | 84 | ⑦ | 立ち小便 | 普久原幸 (泡瀬) | 『T071A15』 | | 105 |
| ⑪ | 一吹き煙草 | 伊佐安弘 (三里) | 『T241A24』 | | 84 | ⑧ | 立ち小便 | 萬江源吉保 (セントアーティスト) | 『T133A06-02』 | | 106 |
| ⑫ | 根はいりか | 伊佐安弘 (三里) | | 84 | ⑨ | 立ち小便 | 山本雅賀 (中川町) | 『T211A03』 | | 105 | |
| ⑬ | 根はいりか | 又吉松八 (油蔴) | 『T003A12』 | | 84 | ⑩ | 立ち小便 | 山口栄順 (泡瀬) | 『T070A11』 | | 105 |
| ⑭ | 根はいりか | 喜屋武舞子 (泡瀬) | 『T070A10』 | | 85 | ⑪ | 立ち小便 | 立石小便 | 立石小便 | | 105 |
| ⑮ | 根はいりか | 山口栄順 (泡瀬) | 『T070A11』 | | 86 | ⑫ | 立ち小便 | 立石小便 | 立石小便 | | 105 |
| ⑯ | 許嫁と鶏 | 喜屋武舞子 (泡瀬) | 『T008A16』 | | 87 | ⑬ | 難題 | 久場裕二 (園田) | 『T026B16』 | | 107 |
| ⑰ | 許嫁と鶏 | 渕田レミ (セントアーティスト) | 『T135A05』 | | 87 | ⑭ | 難題 | 桑江幸子 (泡瀬) | 『T079B07』 | | 109 |
| ⑱ | 許嫁と鶏 | 伊佐安弘 (三里) | 『T241A22』 | | 87 | ⑮ | 難題 | 渕田レミ (セントアーティスト) | 『T135A06-03』 | | 110 |
| ⑲ | 掛けた縁 | 島袋サタ (高麗) | 『T111A08-02』 | | 88 | ⑯ | 難題 | 鳥居ハリ (難民里) | 『T122A07』 | | 112 |
| ⑳ | 下駄と草履・許嫁と鶏・掛けた縁 | 佐久田千代 (宮三) | 『T109A20』 | | 90 | ⑰ | 難題 | 伊佐安弘 (三里) | 『T241A20』 | | 113 |
| ㉑ | 許嫁と鶏・掛けた縁 | 吉田 (高麗) タケ (足袋) | 『T029A21』 | | 92 | ⑱ | 難題 | 島袋新菜 (泡瀬) | 『T004A18』 | | 114 |
| ㉒ | 掛けた縁 | 普久原幸 (泡瀬) | 『T110A27』 | | 93 | ⑲ | 難題 | 普久原幸 (泡瀬) | 『T144A06』 | | 115 |
| ㉓ | 掛けた縁 | 神里マカト (安慶田) | 『T143A09』 | | 94 | ⑳ | 難題 | 吉田 (高麗) ミホ (足袋) | 『T029A19』 | | 116 |
| ㉔ | 掛けた縁 | 星宣ハル (安慶田) | 『T238A17』 | | 95 | ㉑ | 難題 | 神里マカト (安慶田) | 『T199A10-02』 | | 117 |
| ㉕ | 掛けた縁 | 知花ツル (嘉間良) | 『T199A11-01』 | | 95 | ㉒ | 難題 | 高畠次郎 (園田) | 『T232A10』 | | 118 |
| ㉖ | 掛けた縁 | 高畠ツル (セントアーティスト) | 『T132A03-02』 | | 96 | ㉓ | 難題 | 島袋ヤス (三里) | 『T168A17』 | | 119 |
| ㉗ | 掛けた縁 | 知念真章 (胡蝶) | 『T116A01-04』 | | 96 | ㉔ | 難題 | 松下栄市 (泡瀬) | 『T005B08』 | | 120 |
| ㉘ | 掛けた縁 | 渕田レミ (セントアーティスト) | 『T135A07-01』 | | 97 | ㉕ | 難題 | 大庭博 (泡瀬) | 『T005B07』 | | 121 |
| ㉙ | 立ち小便・掛けた縁 | 金城初子 (セントアーティスト) | 『T249A08』 | | 97 | ㉖ | 難題 | 高畠次郎 (泡瀬) | 『T005B09』 | | 122 |
| ㉚ | 立ち小便 | 伊佐安弘 (三里) | | 97 | ㉗ | 難題 | 桑江朝盛 (泡瀬) | 『T079B06』 | | 123 | |
| ㉛ | 立ち小便・親からの御咎儀 | 久川栄作 (泡瀬) | 『T005B06』 | | 98 | ㉘ | 難題 | 知念真章 (胡蝶) | 『T116A01-01』 | | 124 |
| ㉜ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | 『T017A18』 | | 98 | ㉙ | 難題 | 桑江朝盛 (泡瀬) | 『T017A18』 | | 125 |
| ㉝ | 立ち小便 | 当山平治 (佐助) | 『T255A06』 | | 98 | ㉚ | 難題 | 當山平治 (佐助) | 『T247A07』 | | 126 |
| ㉞ | 立ち小便 | 知念喜助 (古都) | | 98 | ㉛ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 127 | 127 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉜ | 難題 | 桑江朝盛 (泡瀬) | | 128 | 128 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉝ | 難題 | 知念喜助 (古都) | | 129 | 129 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉗ | 難題 | 桑江朝盛 (泡瀬) | | 130 | 130 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉘ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉙ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉚ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉛ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉜ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉝ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉗ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉘ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉙ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉚ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉛ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉜ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉝ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉗ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉘ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉙ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉚ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉛ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉜ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉝ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉗ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉘ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉙ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉚ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉛ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉜ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉝ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉗ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉘ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉙ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉚ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉛ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉜ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉝ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉗ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉘ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉙ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉚ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉛ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉜ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉝ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉗ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉘ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉙ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉚ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉛ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉜ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉝ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉗ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉘ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉙ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉚ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉛ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉜ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉝ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉗ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉘ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉙ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉚ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉛ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉜ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉝ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉗ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉘ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉙ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉚ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉛ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉜ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉝ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉗ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉘ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉙ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉚ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉛ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉜ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉝ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉗ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉘ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉙ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉚ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉛ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉜ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉝ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉗ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉘ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉙ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉚ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉛ | 難題 | 當山平治 (佐助) | | 131 | 131 | |
| ㉟ | 立ち小便 | 久川栄作 (泡瀬) | | 98 | ㉜ | 難題 | 當山平治 (佐助) |</td | | | |

| | | | | |
|----------------------------|---------------|--------------|-------|-----------------------------|
| (16) 難題 | 桑江朝盛 (中の町) | 《T213A06》 | | 132 |
| ① 一曰殿様 | 平田シゲ (登三) | 《T014A07》 | | |
| ② 難題・一曰殿様 | 又吉松八 (泡原) | 《T003A11》 | | 140 134 |
| ③ 下駄と草履・難題・一曰殿様 | 藤原ひろ (越米) | 《T243A20》 | | |
| ④ 一曰殿様 | 安藤田 (T238A18) | | | |
| ⑤ 一曰殿様 | 安藤田 (T239A05) | | | |
| ⑥ 難題・一曰殿様 | 佐久田千代 (室三) | 《T239A02-04》 | | |
| ⑦ 難題・一曰殿様 | 金城初子 (セントア) | 《T249A09》 | | |
| ⑧ 難題・一曰殿様 | 宮城ツル (セントア) | 《T132A03-01》 | | |
| ⑨ 一曰殿様 | 稀輪和子 (セントア) | 《T135A06-04》 | | 149 147 146 145 145 144 142 |
| (17) 藩政武士との立ち合ひ | 高江虎藏 (足利) | 《T067A08》 | | |
| ① 難題・一曰殿様・古川ゆか | 島袋ナタ (高庭) | 《T111A08-01》 | | 149 |
| ② 難題・立ち合ひ | 山口栄順 (泡瀬) | 《T070A09》 | | 154 152 152 149 |
| ③ 難題・立ち合ひ | 立川ゆか | | | |
| ④ 難題・一曰殿様・立ち合ひ | 宮里信栄 (古川) | 《T077A18》 | | |
| ⑤ 難題・立ち合ひ | 町田宗勇 (中の町) | 《T214A16》 | | |
| ⑥ 立川ゆか | 亀島忠貞 (室三) | 《T183A15-01》 | | 158 157 157 156 |
| (18) 鶴の噂話 | 普入原幸 (泡瀬) | 《T110A04》 | | 159 |
| ① 鶴の噂話 | 久澤政二 (廣田) | 《T026B05》 | | |
| (19) とんち比べ | 伊佐安弘 (山里) | 《T241A07》 | | |
| ① 難題・鳴った手は無い | 嘉瀬田朝雲 (胡瀬) | 《T115A04》 | | |
| (20) その他、モーイ親方にまつわる話 | 桑江朝盛 (中の町) | 《T213A07》 | | |
| ① 家系・下駄と草履・布巻物 | 伊佐安弘 (山里) | 《T189A15》 | | |
| 諸見里マツ (古川) | 鳥袋貞松 (城前) | 《T025B01》 | | |
| 知名たか (越米) | 山内盛福 (南柳原) | 《T245A09》 | | |
| 山内盛福 (南柳原) | 亀島忠貞 (室三) | 《T183A06》 | | |
| ② 試験の失敗・難題 | 鳥袋貞松 (知花) | | | |
| ③ 歌会・難題 | 山内盛福 (南柳原) | | | |
| ④ 親の字 | 玉城カメ (美里) | 《T100A14》 | | |
| ⑤ 二丁四四せん | 町田宗第 (中の町) | 《T214A15-03》 | | 163 163 |
| (21) 渡嘉敷ベーケーの事績 (モチーフ複合) | 島袋吉盛 (南柳原) | 《T246A03》 | | |
| ① 能書・布団着物・表美の片荷・露汁・幕打ち・低頭門 | 渡嘉敷直龜 (泡瀬) | 《T105A13》 | | 164 |
| 根はいか | 島袋吉盛 (南柳原) | 《T246A03》 | | |
| ② 幕打ち・一人問答・表美の片荷 | 金城永保 (松本) | 《T039A08》 | | |
| 渡嘉敷直龜 (泡瀬) | 当山全栄 (泡瀬) | 《T071A22》 | | 172 170 |
| ③ 低頭門・馬勝負・根はいか・難題・表美の片荷 | 高江虎藏 (足利) | 《T015A08》 | | |
| 根はいか | 平田盛永 (登三) | 《T078A22》 | | |
| ④ 低頭門 | 金城真良 (古川) | 《T076B04》 | | |
| 低頭門 | 知念善助 (古川) | 《T056A11》 | | |
| ⑤ 低頭門 | 富山茂 (美里) | 《T243A14》 | | |
| 低頭門 | 島袋ひろ (越米) | 《T105B02》 | | |
| 低頭門 | 渡嘉敷直龜 (泡瀬) | 《T115A04》 | | |
| 低頭門 | 桑江朝盛 (中の町) | 《T213A07》 | | |
| 低頭門 | 伊佐安弘 (山里) | 《T241A11》 | | |
| 低頭門 | 稻葉盛英 (三郎) | 《T180B04》 | | |
| ⑥ 基打ち | 稻葉盛英 (三郎) | 《T174A15-01》 | | 159 |
| ① 基打ち | 久澤政二 (廣田) | 《T026B05》 | | |
| ② 基打ち | 伊佐安弘 (山里) | 《T241A07》 | | |
| ③ 基打ち | 嘉瀬田朝雲 (胡瀬) | 《T115A04》 | | |
| ④ 基打ち | 伊佐安弘 (山里) | 《T241A11》 | | |
| ⑤ 基打ち・能書 | 鳥袋貞松 (城前) | 《T189A15》 | | |
| 基打ち | 山内盛福 (南柳原) | 《T025B01》 | | |
| 基打ち | 亀島忠貞 (室三) | 《T183A06》 | | |

| | | | | | | | | | |
|--------------|------------|--------------|-------|-----|------------------------|-------------|-----------|-------|-----|
| (5) 塙の汁 | 伊佐安弘 (三里) | 《T241A10》 | | 182 | (16) 下馬せや | 喜友名朝啓 (南桜原) | 《T129A09》 | | 195 |
| (6) 月影の吸物 | 伊佐安弘 (三里) | 《T241A10》 | | 182 | (17) 一頭の馬に鞍一具 | 久場政三 (園田) | 《T245A08》 | | 182 |
| ① 月影の吸物・低頭門 | 山内盛堯 (南桜原) | 《T245A08》 | | 182 | ① シーケ竹・一頭の馬に鞍一具 | 金城真良 (古瀬) | 《T078A23》 | | 197 |
| (7) 味噌と花鉢 | 久場政三 (園田) | 《T026B07》 | | 184 | ② 一頭の馬に鞍一具 | 山内盛堯 (南桜原) | 《T245A04》 | | 196 |
| ① 味噌と花鉢 | 久島忠賀 (室川) | 《T183A09》 | | 184 | ② とんち比べ | 冬は青草 (足腰) | 《T005B05》 | | 198 |
| (8) 尻吸い | 伊佐安弘 (三里) | 《T241A09》 | | 185 | ① 冬は青草 | 松井栄吉 (足腰) | 《T005B05》 | | 198 |
| ① 尻吸い | 伊佐安弘 (三里) | 《T241A09》 | | 185 | ② とんち比べ | 新屋平盛 (越米) | 《T219A05》 | | 200 |
| (9) 壱美の片荷 | 久場政三 (園田) | 《T026B06》 | | 186 | ③ 不吉な祝いの書 | 新屋平盛 (越米) | 《T219A05》 | | 200 |
| ① 壱美の片荷 | 久場政三 (園田) | 《T219A06》 | | 187 | ④ 能書家の隠語 | 嘉陽田朝賀 (胡屋) | 《T115A03》 | | 202 |
| ② 低頭門・壹美の片荷 | 新屋平盛 (越米) | 《T258A02》 | | 187 | ⑤ 能書家の隠語 | 喜友名朝啓 (南桜原) | 《T129A06》 | | 202 |
| ③ 壱美の片荷 | 新屋平盛 (越米) | 《T245A05》 | | 188 | ⑥ 痴呆敷べークーにまつわる話 | 山内盛堯 (山里) | 《T141A08》 | | 202 |
| ④ 壱美の片荷 | 伊佐安弘 (三里) | 《T241A08》 | | 188 | ⑦ キーワイモキーワイ | 新崎大ヤマ (中の町) | 《T229B06》 | | 203 |
| ⑤ 壱美の片荷 | 伊佐安弘 (三里) | 《T183A08》 | | 189 | ⑧ 八重山在番 | 島袋盛保 (知花) | 《T022A07》 | | 204 |
| ⑥ 壱美の片荷 | 亀島忠賀 (室川) | 《T241A08》 | | 189 | ⑨ 溶まれた魔四散 | 山内盛堯 (山里) | 《T165A01》 | | 206 |
| (10) 布団着物 | 金城真良 (古瀬) | 《T078A24》 | | 189 | ⑩ 立ち合ひ | 西田守兼 (足腰) | 《T141A02》 | | 208 |
| ① 壱美の片荷・布団着物 | 金城真良 (古瀬) | 《T078A24》 | | 189 | ⑪ 神への供物 | 仲宗根カズ (登川) | 《T026B03》 | | 208 |
| (11) 木の名前 | 内田清栄 (山内) | 《T251A08》 | | 191 | ⑫ 十日月・これがね持ち | 知念善助 (古瀬) | 《T001B19》 | | 208 |
| ① 木の名前 | 内田清栄 (山内) | 《T251A08》 | | 191 | ⑬ 勝運ハーメー | 久場政三 (園田) | 《T076B03》 | | 208 |
| (12) 木釜 | 照屋寛博 (山里) | 《T180B02》 | | 191 | (1) 勝連バーマーの事績 (モチーフ複合) | 久場政三 (園田) | 《T026B08》 | | 211 |
| ① 木釜 | 照屋寛博 (山里) | 《T180B02》 | | 191 | ① 十日月・かね持ち・豆腐のただ食い | 久場政三 (園田) | 《T026B08》 | | 211 |
| (13) 後生の年 | 山内盛堯 (南桜原) | 《T129A08》 | | 192 | ② 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| ① 後生の年 | 山内盛堯 (南桜原) | 《T129A08》 | | 192 | ③ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| (14) 根はいのじか | 川上盛友 (美里) | 《T060B15》 | | 193 | ④ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| ① 根はいのじか | 川上盛友 (美里) | 《T060B15》 | | 193 | ⑤ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| ② 根はいのじか | 桑江朝盛 (牛の町) | 《T213A08》 | | 194 | ⑥ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| (15) 馬勝負 | 当山平治 (住吉) | 《T255A07》 | | 194 | ⑦ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| ① 馬勝負 | 当山平治 (住吉) | 《T255A07》 | | 194 | ⑧ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| ② 馬勝負 | 龜島忠賀 (室川) | 《T183A15-02》 | | 195 | ⑨ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ⑩ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ⑪ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ⑫ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ⑬ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ⑭ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ⑮ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ⑯ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ⑰ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ⑱ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ⑲ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ⑳ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉑ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉒ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉓ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉔ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉕ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉖ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉗ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉘ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉙ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉚ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉛ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉜ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉝ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉞ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉟ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉛ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉜ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉝ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉞ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉟ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉛ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉜ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉝ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉞ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉟ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉛ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉜ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉝ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉞ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉟ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉛ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉜ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉝ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉞ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉟ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉛ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉜ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉝ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉞ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉟ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉛ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉜ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉝ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉞ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉟ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉛ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉜ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉝ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉞ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉟ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉛ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉜ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉝ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉞ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉟ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉛ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉜ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉝ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉞ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉟ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉛ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉜ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉝ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉞ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉟ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉛ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉜ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉝ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉞ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉟ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉛ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉜ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉝ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉞ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉟ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉛ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉜ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉝ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉞ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉟ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉛ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉜ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉝ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉞ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉟ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉛ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉜ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉝ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |
| | | | | 194 | ㉞ 木釜・十日月・かね持ち | 喜屋武英正 (久保田) | 《T196A07》 | | 213 |

| | | | | |
|-----------|------------------|------------|-------------|----------|
| (5) | 十月 | 金城五郎 (金城) | 川上亜 (美加) | TC03BA14 |
| (6) | 十月 | 金城真良 (古瀬) | TC036A13 | |
| (7) | 十月 | 金城真良 (古瀬) | TC078A26-02 | |
| (8) | 十月 | 宇良芳子 (中の町) | T1225A13 | |
| (9) | 十月 | 屋宣カズ (安藤田) | T1237A18 | |
| (10) | 十月 | 金城ナギ (松本) | TC038A13 | |
| (11) | 十月 | 喜納兼優 (東) | TC095M04 | |
| (12) | 十月 | 山内盛裕 (深澤原) | T1245A07 | |
| (13) | 十月 | 島田秀夫 (日大) | T1155A02 | |
| (3) | かね持ち | かね持ち・褒美の上荷 | | |
| (1) | かね持ち | 平田盛水 (登三) | TO15A09 | |
| (2) | かね持ち | 金城真良 (古瀬) | TO78A26-01 | |
| (4) | 山の魚 | 金城五郎 (松本) | TO38A12 | |
| (1) | 山の魚 | 金城真良 (古瀬) | TO78A27-02 | |
| (2) | 山の魚 | 金城真良 (古瀬) | TO78A27-01 | |
| (5) | 松の植え時 | 金城真良 (古瀬) | TO78A27-01 | |
| (1) | 松の植え時 | 金城真良 (古瀬) | TO78A27-01 | |
| (6) | 長雨と薪 | 松山米吉 (堺原) | TO05B03 | |
| (1) | 長雨と薪 | 島袋次郎 (知花) | TO03B15 | |
| (7) | とんち比べ | 島袋次郎 (知花) | TO113B04-02 | |
| (1) | とんち比べ | 金城真良 (古瀬) | TO113B04-02 | |
| (8) | かたつむり | 金城真良 (古瀬) | TO113B04-02 | |
| (1) | かたつむり | 金城水保 (松本) | TO39A09 | |
| (9) | 勝連バーマーの死 | 島袋徳保 (知花) | TO1224B06 | |
| (1) | 勝連バーマーの死 | 宮城次郎 (風田) | T1232A11 | |
| (2) | 腹巻歌 | | | |
| (3) | 津堅の海 | | | |
| (10) | その他、勝連バーマーにまつわる話 | | | |
| (1) | 勝連バーマーといふ變ひい話 | | | |
| 上原かみ (注印) | | | TO193A09 | |

四 盜賊

[4]

その他の知恵者

② 勝連バーマーが造つた渡口の橋

喜屋武政
た渡口の橋

278

- | (1) | 運玉義留の事績（モチーフ複合） | | | | | | | |
|-----|-------------------------------------|--------------------------|-----------|-------|-------|-------|-------|-------|
| ① | 地頭代まで・義賊・黄金杖・最期 | 宮城ツル（セヒターレ） | 〔T132402〕 | | | | | |
| ② | 黄金の杖・義賊 | 島袋フミ（諸国里） | 〔T122410〕 | | | | | |
| ③ | 運玉義留の最期 | 屋忍カメ（久慈田） | 〔T237402〕 | | | | | |
| ④ | 運玉義留と油喰坊主 | 一義賊 | | | | | | |
| ⑤ | 運玉義留と油喰坊主 | 津湖ヨシ（笠置） | 〔T170A19〕 | | | | | |
| ⑥ | 一地頭代まで・義賊・最期 | 嘉陽よし子（比原根） | 〔T089A14〕 | | | | | |
| ⑦ | 運玉義留と油喰坊主 | 島袋ツル（諸国里） | 〔T12A14〕 | | | | | |
| ⑧ | 一豆食」・油喰み・頭の真似・黄金の杖・最期 金城清三郎（東横院） | | | | | | | |
| ⑨ | 運玉義留と油喰坊主 | 一油喰み・義賊・最期 我如古ヨシ（越米） | 〔T177A12〕 | | | | | |
| ⑩ | 運玉義留と油喰坊主 | 一義賊・油喰み・豆食」 照原カメ（中の町） | 〔T215A19〕 | | | | | |

| | | | | | |
|-------------------|--|-------------|--------------|---------|---------|
| [10] 運王義留と油爐坊主 | 一地頭代 ^{サテ} ・義留・油 ^{レバ} | 島袋新栄 (池原) | 《T004A17》 | | 250 |
| ① 運王義留と油爐坊主 | 一黄金の杖・油 ^{レバ} | 高江清三 (諸葛軍) | 《T121A15》 | | 250 |
| ② 運王義留と油爐坊主 | 一鼠の眞理 | 喜屋武英正 (久保田) | 《T234A19》 | | 251 |
| ③ 運王義留と油爐坊主 | 一貧乏者の布団・天幕地団 | 喜屋武英正 (久保田) | 《T078B06》 | | 251 |
| [11] 油爐坊主 | 屋宣カメ (安慶田) | 屋宣カメ (安慶田) | 《T237A03》 | | 253 |
| ① 油爐坊主 | 屋宣カメ (安慶田) | 屋宣カメ (安慶田) | 《T237A03》 | | 253 |
| [12] 北谷シイー | 北谷シイーと石川探偵 | 山城清輝 (中町) | 《T246A06》 | | 256 |
| ② 北谷シイー | 島袋吉盛 (南越路) | 米原シテ (照屋) | 《T148A09-01》 | | 256 254 |
| [13] 金城三郎 | 義誠金城三郎 | 山城清輝 (中町) | 《T211B02》 | | 256 |
| ① 金城三郎ハーネー | 知花ツル (嘉間郡) | 《T185A05》 | | 256 | 256 |
| ② 金城三郎ハーネー | 金城清三郎 (東茶園) | 《T109A03》 | | 257 256 | 256 |
| [14] その他、盗賊にまつわる話 | その他、盗賊にまつわる話 | 喜屋武ヨシ (久保田) | 《T147A15》 | | 271 |
| ① 盗人と貧乏者の布団 | 屋宣カメ (安慶田) | 屋宣カメ (安慶田) | 《T237A01》 | | 258 |

五 名工・名人

- [1] 田場大工
- (1) 溝れない櫻
- ① 溝れない櫻・クスケー
金城真良 (古郡)
- ② 溝れない櫻
伊佐麻弘 (山里)
- ③ 溝れない櫻
桑江胡鑑 (中の郷)
- ④ 溝れない櫻
島袋篤保 (知花)

(2) その他、田場大工にまつわる話

① 田場大工と名護親方 金城五郎 (松本)
島袋シズ (池原)

② 田場大工
島袋シズ (池原)

③ その他の中人・名人

① 大城子ヨーバーと妻の知恵
吉里清秀 (照屋)

② そらばん名人ハンタイチバナル
島袋吉栄 (知花)

③ 伊集のガマタグワードと奥間安里
金城真良 (古郡)

④ 繰り名人アザマカナ
喜屋武ヨシ (久保田)

調査日誌と調査協力者

2 沖縄市民話調査

調査年月日 一九八五（昭和六十）年～一九八七（昭和六十二）年

調査地域 池原、登川、知花、松本、美里、園田

調査員 沖縄市民話集編集事務局

城茂雄、宮里純子

主要な民話調査の実施概要

1 沖縄国際大学□承文芸学術調査団による沖縄市字池原・登川の調査

調査年月日 一九八〇（昭和五十五）年五月十八日

調査地域 池原、登川

調査員 沖縄国際大学□承文芸学術調査団

調査団編成

遠藤庄治（沖縄国際大学文学部教授）

大城直樹、花城洋子、小橋川生枝、喜納弘子、岡田浩、新城悦子、
島袋美奈子、大熊亨、西銘千恵美、大本敬子、西江美智、池

原弘子、玉城弘美、仲宗根フキエ、松浦庸尚、安里和子、渡

慶次、仲宗根悦子、与那原早苗、佐渡山美智子、椿晴一郎、
浦川紀子、比嘉和男、崎原有美恵、辺士名美智代、富村朝夫、
仲原敦子、山岸信浩、川上（以上、□承文芸研究会）

調査員 団長、調査員、調査団編成

遠藤庄治（沖縄国際大学文学部教授）

平賀美恵子（遠藤研究室）

遠藤ゼミナール受講生、日本文学作品研究受講者有志、沖縄

国際大学日本語表現法演習受講者、沖縄民話の会

金城あつ子、上江洲りか、緑間直美、安田啓子、幸喜愛（以上、
美里中学校）

調査期間 一九九〇（平成二）年七月六日

調査地域 宮里、古謝、東桃原、泡瀬、高原、比屋根、与儀

調査員 沖縄市□承文芸調査団

宮城昭美、宮里信勇（沖縄市立郷土博物館）
遠藤研究室、遠藤ゼミナール受講生

5 沖縄市旧コザ地区民話調査 第一次調査

垣孝幸、石川小百合、福嶺悦子、大川清子、香村夏子、照屋京子、通事美香、仲宗根弘恵、与那瀬昭郎、謝敷勝美（以上、

一九九〇（平成二）年八月十九日—二十三日

越來、城前、嘉間良、住吉、室川、安慶田、照屋、セントラ、

胡屋、中の町、園田、久保田、諸見里、山内、南桃原、山里

沖縄市口承文芸調査団

調査年月日

調査地域

幹事

宮城昭美（沖縄市立郷土博物館）

上門博之、宜保勝、山城綾子（沖縄国際大学）

調査員

遠藤庄治（沖縄国際大学文学部教授）

幹事

現法演習受講者

6 沖縄市旧コザ地区民話調査 第二次調査・補足調査

調査年月日

一九九〇（平成二）年十二月十四日—十六日、二十一日

調査地域

越來、城前、嘉間良、住吉、室川、安慶田、胡屋、中の町、園田、

久保田、南桃原、山里

沖縄市口承文芸調査団

調査年月日

遠藤庄治（沖縄国際大学文学部教授）

幹事

宮城昭美（沖縄市立郷土博物館）

石川小百合、大川清子、香村夏子、照屋京子（沖縄国際大学）

沖縄市口承文芸調査団

調査年月日

一九九〇（平成二）年十二月十四日—十六日、二十一日

調査員

幹事

以上の調査が民話資料の聴取を目的として実施された主な調査である。これららの調査で得られた資料及び録音テープは沖縄市立郷土博物館が所蔵管理し、コンピュータ上でデータベースを構築して資料の整理、報告書発刊を進めている。

（一九八八年—一九九一年実施）や、他の業務として実施された各種調査の際に聴取された民話や世間話等もあり、その資料及び録音テープも民話資料と

して沖縄市立郷土博物館が所蔵管理し、データベースにまとめている。

7 沖縄市旧コザ地区民話調査 第三次調査・補足調査

垣孝幸、石川小百合、福嶺悦子、大川清子、香村夏子、照屋京子、通事美香、仲宗根弘恵、与那瀬昭郎、謝敷勝美（以上、

一九九一（平成三）年八月十七日

遠藤ゼミナール受講生

沖縄国際大学国文科学生有志

沖縄市口承文芸調査団

調査年月日

調査地域

幹事

宮城昭美（沖縄市立郷土博物館）

武嶋昭子、仲尾由美（遠藤研究室）

調査員

石川小百合、大川清子、香村夏子、照屋京子（沖縄国際大学）

小百合、大川清子、謝敷勝美、照屋京子、新垣良子、新垣純子、池原健、福嶺留美子、犬養憲子、小橋川一、桃原笑美子、

友利幸子、仲地香織（以上、遠藤ゼミナール受講生）

沖縄市口承文芸調査団

調査年月日

調査地域

幹事

宮城昭美（沖縄市立郷土博物館）

遠藤庄治（沖縄国際大学文学部教授）

調査員

石川小百合、大川清子、香村夏子、照屋京子（沖縄国際大学）

沖縄市口承文芸調査団

調査年月日

調査地域

幹事

宮城昭美（沖縄国際大学文学部教授）

沖縄市口承文芸調査団

調査年月日

調査員

幹事

本報告書に記載されている民話の話者と調査者

豊川

一九八〇年
五月十八日

仲宗根カメ [明42]

遠藤庄治、大城直樹、幸喜愛

(凡例)

話者名 [生年] 調査員名

池原

一九八〇年

五月十八日

大瀬樽 [明27]

渡慶次勲、仲宗根悦子、与那原早苗、佐渡山美

智子

島袋ウシ [明42]
島袋シズ [明41]

仲松庸尚、安里和子

池村弘子、玉城弘美、仲宗根フキ工

花城洋子、小橋川生枝

渡慶次勲、仲宗根悦子、与那原早苗、佐渡山美

智子

又吉松八 [明38]
松下榮吉 [明35]

喜納弘子、岡田清、新城悦子、島袋美奈子

渡慶次勲、仲宗根悦子、与那原早苗、佐渡山美

智子

与那嶺松栄 [明37]

喜納弘子、岡田清、新城悦子、島袋美奈子

一九八五年
八月九日

松下盛一 [明45]

辺士名初美

知花

一九八五年
九月九日

鳥袋盛保

[明37]

仲松庸尚

十月十三日

鳥袋盛保

[明37]

仲松庸尚

一九八六年
七月九日

島袋貞栄

[明41]

比嘉久、山本康八

八月六日

島袋次郎

[明34]

宮城昭美

八月七日

島袋次郎

[明34]

宮城昭美、高江洲裕美

一九八七年
九月十日

島袋次郎 [明34]

宮城昭美

松本

一九八七年

六月二十九日

金城五郎 [明35]

金城ナヘ [明36]

金城永保 [明42]

宮里純子、宮城昭美
宮里純子、宮城昭美

宮里純子、宮城昭美
宮里純子、宮城昭美

美里

一九八七年

六月二十一日

川上亜 [明29]

一九九〇年

三月十一日

川上盛友 [大04]

富山茂 [明38]

三月十四日

嘉陽宗喜 [大02]

玉城カメ [大10]

平良恵子
平良恵子

遠藤庄治
仲松庸尚、興座範秋

越栄

一九九〇年

八月二十一日

我如古ヨシ [大06]

新屋ヨシ子 [大08]

新垣登季子、新垣孝幸、謝敷勝美、喜瀬智美、知
念美佳子
石川小百合、大田刊

城前

一九九〇年

八月二十一日

佐渡山ゴセイ [大03]

瑞慶賀好子 [大10]

比嘉真松 [大02]

平良恵子、金城奈緒子

喜間良

一九九〇年

八月二十一日

安次彌ツル [大06]

知花ツル [大05]

普久原ウシ [大02]

豊岡早苗、諸喜田綾子、稻嶺悦子

住吉

一九九〇年

八月二十一日

知名タケ [明41]

仲宗根初子 [大07]

新垣登季子、新垣孝幸、謝敷勝美、喜瀬智美、知

新屋宇盛 [明40]

島袋スミ [大07]

屋宣ヨシ [大10]

大川清子、上門博之

大川清子、上門博之

崎山用彰、仲里香
大川清子、上門博之

大川清子、上門博之

念美佳子

上原ウシ [明42]

上門千賀子、瑞慶賀優子

十一月十六日

渡名喜トシ [大04]

平良真也、加島三史、香村夏子

一九九一年

八月十七日

当山平治 [大05]

稻福留美子、石川小百合

室川

一九九〇年

亀島忠賢 [明35]

大川清子、宮城正美

佐久田千代 [大07]

上門千賀子、瑞鷹覽優子

津嶺ヨシ [大01]

宮里英樹、金城奈緒子

十二月十四日

佐久田千代 [大07]

上門千賀子、新垣孝幸、石川小百合

新城安平 [大02]

通事美香、武鶴昭子

安慶田

一九九〇年

八月二十日

神里マカト [大01]

照屋京子、有銘和江、岸本かおり

普久原力マド [明43]

栗園実、稻嶺道子

十一月十五日

神里マカト [大01]

崎山用彰、諸喜田綾子、宮城昭美

屋宣ハル [大03]

上門博之、瀬底正祥

山城綾子、平良真也

東

一九九〇年

三月十四日

喜納兼優 [大07]

崎山用彰、宮城昭美

照屋

一九九〇年

八月二十日

米原ヒデ [大01]

上門千賀子、玉城直子

一九九一年

八月十七日

吉里清秀 [明38]

友利幸子、照屋京子、武鶴昭子、香村夏子

古跡

一九九〇年

三月十一日

金城真良 [明40]

與座範秋

知念善助 [大07]

宮城昭美

宮里信栄 [明41]

村山友江

諸見里マツ [大01]

謝敷勝美

七月六日

金城真良 [明40]

與座範秋、仲宗根広恵、宮里英樹、稀嶺悦子

東桃原

一九九〇年

七月六日

金城清三郎 [明37]

加島三史、香村夏子

一九九〇年

三月十二日

喜屋武輝子〔大1〕

桑江幸子〔明4〕

佐久本トヨ〔明39〕

高江洲義穂〔明28〕

当山全栄〔明40〕

渡辺敷直亀〔大08〕

普久原幸〔大05〕

山口栄順〔明44〕

当真つる〔大15〕

山城綾子、崎山用彰、通事美香、粟国実

普久原幸〔大05〕

山城綾子、崎山用彰、通事美香、粟国実

七月六日

高原

一九九〇年

島袋サダ〔明36〕

那嶺昭郎

平良真也、大川清子、富平恵智子、豊岡早苗、与

一九九〇年

三月十三日

嘉陽よし子〔大05〕

七月六日

宮里勇緒〔明4〕

与儀

一九九〇年

三月十三日

太田俊雄〔大07〕

センター

一九九〇年

八月十九日

稻嶺和子〔天06〕

高江洲昌保〔大02〕

宮城ツル〔天13〕

湧田トミ〔大05〕

一九九一年

五月二十三日

金城初子〔天05〕

一九九〇年

胡屋

八月十九日

嘉陽田朝興〔大02〕

知念真章〔明42〕

西平守兼〔大02〕

宮里ツル〔明43〕

諸喜田綾子、仲宗根広恵

比屋根

一九九〇年

諸喜田綾子、新垣孝幸

宮城昭美、香村夏子、謝敷勝美、石川小百合、照

屋京子、大川清子

遺藤庄治、上田和子、比嘉玲子

諸喜田綾子、嘉陽田尚行

大川清子、比嘉和男、宮城幸子、宮城正美

平良真也、儀間薫

比屋根

一九九〇年

諸喜田綾子、新垣孝幸

中の町

一九九〇年

八月二十三日

新崎カマド [明42]

宇良芳子 [大13]

国吉千日 [大01]

桑江朝盛 [明45]

照屋カメ [大14]

町田宗勇 [大06]

山城清輝 [大12]

新崎カマド [明42]

園田

一九八五年

八月十九日

久場政三 [明43]

八月十九日

喜友名静 [大06]

久場カメ [大02]

一九九〇年

宮城次郎 [大03]

平良真也、上門博之

島田秀夫 [大10]

興座範秋、宮城加代子、知念美千代

一九九一年

八月十七日

内田清榮 [大10]

久保田

一九九〇年

八月二十日

喜屋武政格 [大05]

喜屋武ヨシ [大10]

通事美香、宮里英樹

平譲美恵子、新城真恵

通事美香、宮里英樹

平譲美恵子、新城真恵

通事美香、宮里英樹

喜屋武英正 [明30]

十二月十四日

喜屋武英正 [明30]

十二月二十一日

西平マツ [明34]

十二月二十一日

比嘉喜代吉〔大4〕

比嘉弘〔大1〕

池原健、宮城昭美、宣保勝

仲地香織、加島三史、山城綾子

一九九一年

八月十七日

稻嶺盛英〔明43〕

新垣良子、与那瀬昭郎

南桃原

一九九〇年

八月十九日

喜友名朝啓〔大14〕

島袋吉盛〔大13〕

山内盛福〔大02〕

八月二十三日

島袋吉盛〔大13〕

十一月十六日

島袋吉盛〔大13〕

豊岡早苗、當真篤、新垣登季子
豊岡早苗、當真篤、新垣登季子
豊岡早苗、當真篤、新垣登季子
豊岡早苗、當真篤、新垣登季子

新垣孝幸、與座範秋

通事美香、山城綾子、稻嶺悦子
上門千賀子、森章吏、諸喜田綾子

山内盛福〔大02〕

八月二十一日

山里
一九九〇年

八月二十一日

稻嶺シズ〔明43〕

稻嶺盛英〔明43〕

稻嶺盛康〔明39〕

島袋ヤス〔明42〕

照屋寛博〔大03〕

香村夏子、大城博充
仲宗根弘恵、高吉直紀

栗園実、富平恵智子、宮城昭美

香村夏子、大城博充

仲宗根弘恵、高吉直紀

十二月十六日

伊佐安弘〔明41〕

平誠美恵子、与那瀬昭郎、仲尾由美

○編集協力者

(表紙イラスト作成) 八田夕香
(挿絵作成) 長浜益美、八田夕香

○翻字

上門博之・宜保勝・香村夏子・石川小百合・大川清子・照屋京子・山内智子・宮城昭美・山城綾子・八田夕香

○資料整理

上門博之・宜保勝・香村夏子・石川小百合・大川清子・照屋京子・比嘉ゆり子・辻士名初美・山城綾子・屋良奈那子

○原稿作成及び編集

繩田雅重・八田夕香・宮城昭美

○参考文献及び資料

- 【沖縄語辞典】 国立国語研究所編集、大蔵省印刷局発行、一九八〇年
- 【沖縄大百科事典刊行事業局編集】 沖縄タイムス社発行、一九八三年
- 【官野座村の民話】 下巻(伝説編) 官野座村教育委員会編集、官野座村教育委員会発行、一九八七年
- 【「よなぐすくの民話」与那城村教育委員会編集、与那城村教育委員会発行、一九八九年
- 【「かつれんの民話】 上巻 糸島編】 遠藤庄治編集、勝連町教育委員会発行、一九九〇年
- 【西原町市別巻】 西原の民話 西原市史編纂委員会・遠藤庄治編集、西原町役場発行、一九九一年
- 【北中城村の民話】 遠藤庄治編集、北中城村教育委員会発行、一九九三年
- 【「簡刷版」 日本昔話事典】 稲田浩一・大島建彦・川端豊彦・福田晃・三原幸久編集、弘文堂発行、一九九四年
- 【沖縄言語研究センター研究報告5】 那覇の方言 那覇市方言記録保存調査報告書 Ⅲ
- 【沖縄言語研究センター編集】 沖縄言語研究センター発行、一九九四年
- 【鳥に魅せられて】 仲宗根寛、仲宗根寛発行、一九九九年
- 【中城の民話】 遠藤庄治編集、中城村教育委員会発行、一九九九年
- 【具志川市史 第三巻 民話編上・伝説】 具志川市史編さん委員会編集、具志川市教育委員会発行、二〇〇〇年
- 【琉球列島民俗語彙】 酒井卯作編著、第一書房発行、二〇一二年
- 【池原の伝承をたずねて】 沖縄市立郷土博物館編集、沖縄市教育委員会発行、一〇〇五年
- 【沖縄語辞典】 那覇方言を中心としたもの 内間直仁・野原三儀編著、研究社発行、一〇〇六年
- 【沖縄市の伝承をたずねて(中北部編)】 沖縄市立郷土博物館編集、沖縄市教育委員会発行、一〇〇七年
- 【沖縄市の伝承をたずねて(東西部編)】 沖縄市立郷土博物館編集、沖縄市教育委員会発行、一〇〇八年
- 【沖縄市の伝承をたずねて(本部昔話編)】 沖縄市立郷土博物館編集、沖縄市教育委員会発行、一〇〇〇年
- 【沖縄市の伝承をたずねて(笑い話編)】 沖縄市立郷土博物館編集、沖縄市教育委員会発行、一〇一二年
- 【沖縄市史 第三巻 資料編】 C.D.編 沖縄市総務部総務課市史編集担当編集、沖縄市役所発行、一〇一五年

沖縄市の伝承をたずねて 広城伝説編 I

沖縄市文化財調査報告書第41集

平成26年3月31日 発行

発 行 沖縄市教育委員会
編 集 沖縄市立郷土博物館
〒904-0031 沖縄県沖縄市上地2-19-6
TEL (098) 932-6882
印 刷 コザ印刷所
沖縄県沖縄市東1-4-18
TEL (098) 937-5015

